

梨木塚

遺跡発掘調査報告書

1979・3

増田町教育委員会

目 次

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置	1
III. 調査の方法と経過	3
IV. 発掘調査	6
1. 発見遺構及び伴出遺物	6
(1) I-A区	6
(2) I-B区	6
(3) II-A区	14
(4) II-B区	37
(5) III区	46
(6) その他の埋甕と網代痕を持つ底部	53
2. 出土遺物	56
(1) 土器及び土製品	56
(2) 石器及び石製品	80
V. まとめ	81

例 言

1. 本書は、秋田県平鹿郡増田町吉野字梨ノ木塚21～25番地に所在する縄文時代の遺跡の調査報告である。

2. 発掘調査は畠山憲司、橋本高史が調査員として作業・調査の進行にあたり、栗沢光男がこれを補佐した。

3. 本書作成にあたり以下のように分担して執筆し、錦織亮子、平野芳昭がこれに協力した。

目次のII, III, IVの1, V……………畠山憲司

I, IVの2の(1)……………橋本高史

IVの2の(2)……………栗沢光男

4. 遺構及び遺物の写真撮影は畠山が行った。

5. 本書中の出土遺物の実測図は原則として $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{3}$, $\frac{1}{4}$ に縮尺した。遺物の写真の縮尺は全て $\frac{1}{2}$ に統一した。全体図や遺構の縮尺は全て任意でありスケールを付した。方向は全て磁北である。各遺構については発見の順序に従って遺構番号を付したが、欠番もある。

6. 発掘調査あるいは遺物の実測・トレースについては、早稲田大学学生小林克、岡田昌己、佐伯弘晃、太田貴、北川敬一、京久夫の諸氏の協力を得た。

7. 発掘調査、整理及び報告書作成にあたっては下記の機関、所属職員及び各位の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

秋田県農地整備課、平鹿農林事務所土地改良課、増田町役場、増田町教育委員会、増田町公民館、秋田県南高等学校考古学研究協議会、平鹿町 山田貞吉氏、秋田県払田柵跡調査事務所、現場作業員内藤伊一郎氏他32名、整理作業員成田レイ子氏他11名。

8. 題字は小泉泰氏にお願いした。

9. 埋甕埋土中の燐分析は秋田県果樹試験場 佐々木高氏にお願いした。

10. 本書は、秋田県教育委員会の御厚意によって、増田町教育委員会が一般、研究者のために増刷したものである。同教育委員会に対し、深く感謝したい。

I. 調査に至る経過

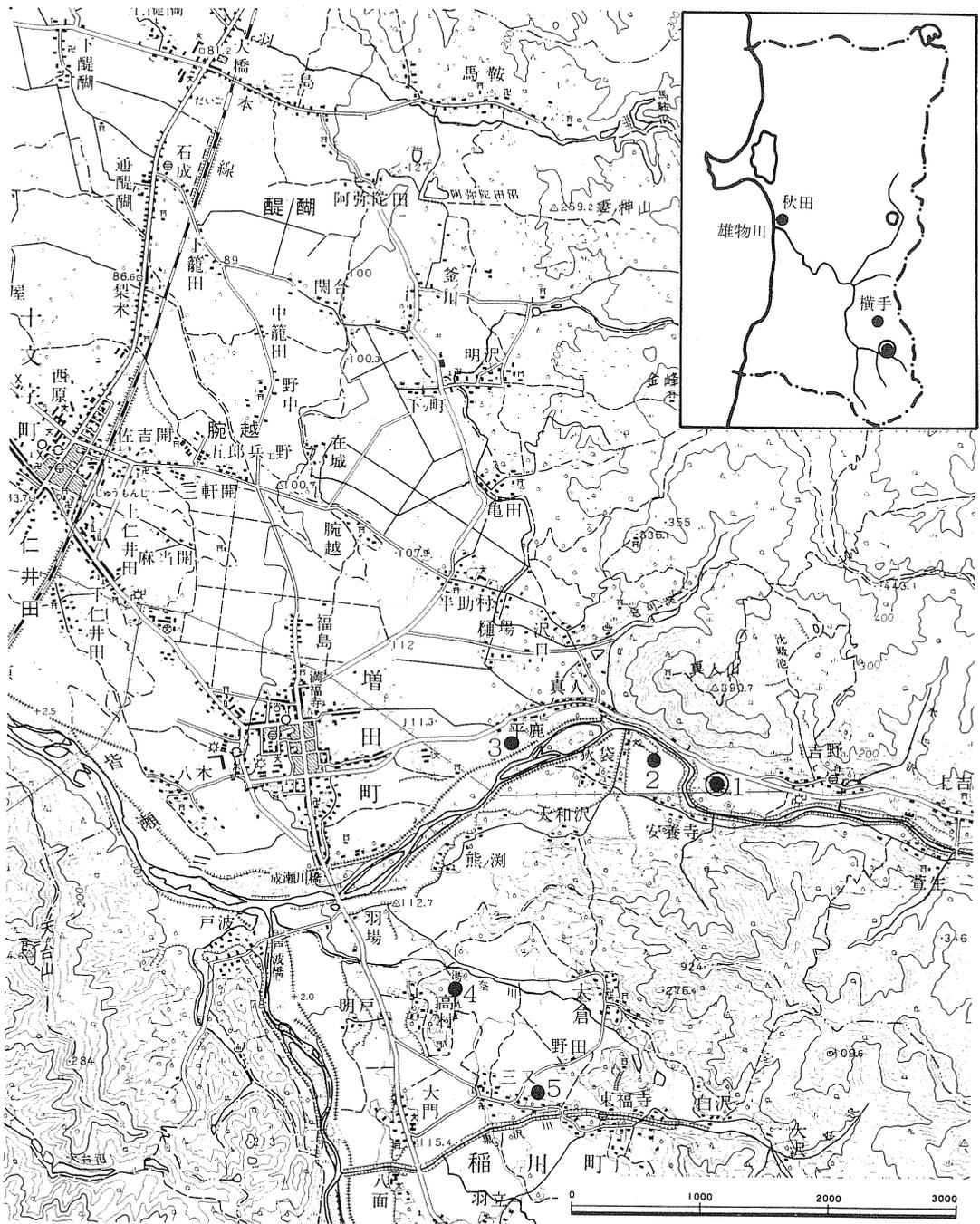
平鹿郡増田町に所在する梨ノ木塚遺跡は、昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際発見された、いわゆる周知の遺跡である。(秋田県遺跡地図に県登録番号729番として載っている。)この遺跡の北北西1.5kmに、享保5年から昭和32年まで約250年間稼働していた吉野鉱山がある。この吉野鉱山の沈澱池が過去4回にわたり決壊し、水田にズリが直接流入し、また数回の洪水により、ズリ浸透水が用水を経て水田に流入した。このため、吉野近辺の水田一帯が鉱毒に汚染され、そこからとれる汚染米に対して何らかの対策を構せざるを得なくなった。そこで、秋田県土壌汚染対策室が、昭和53～54年度に汚染土壌に関する公害防除特別土地改良事業として、土壌を改良するため客土工法による工事を実施することとなった。

計画どおり工事が行われると、水田下の遺跡の一部が破壊される恐れが生じた。このため、秋田県土壌汚染対策室と文化課が協議して、工事着工前に発掘調査を実施し、記録保存をはかり、今後の資料とするものとした。こうして、梨ノ木塚遺跡は増田地域(吉野地区)農用地土壌汚染対策関係遺跡(梨ノ木塚)発掘調査として、昭和53年5月8日から調査が開始された。調査対象面積は、15,562㎡、発掘予定面積は6,500㎡である。

II. 遺跡の位置

梨ノ木塚遺跡は、秋田県平鹿郡増田町吉野字梨ノ木塚21～25番地に所在する縄文時代の遺跡である。

奥羽山脈中、秋田・宮城・岩手の3県にまたがる栗駒山(須川岳1,628m)に水源を発する成瀬川は、数段の河岸段丘を形成しながら西流し雄物川にそそぐ。遺跡はこの成瀬川が山間を抜け県南の穀倉地帯横手盆地に出ようとする開口部に位置し、国鉄奥羽本線十文字駅の南東約5.4km、国道342号線の南側にある。遺跡のある段丘は、この周辺では下位から2番目のもので、現在は水田と一部畑地になっており、現河水面との比高は6～10mほどである。土器及び石器等の遺物は、東西約400m、南北約100mの広い範囲に認められ、中央部南側の畑地に特に集中する傾向にある。また、遺跡の西方には、縄文時代晩期～弥生時代の遺物を出土する真当遺跡や、平鹿遺跡(縄文晩期大洞C₂式)があり、当遺跡との関連が考えられる。(第1図 図版1)



第1図 遺跡の位置

- 1 梨ノ木塚遺跡
- 2 真当遺跡
- 3 平鹿遺跡
- 4 森遺跡
- 5 清水遺跡

III. 調査の方法と経過

昭和53年5月8日、発掘器材の搬入、遺跡の現況撮影。同9日、遺跡中央付近に任意の基準杭を打ち、これを原点に任意の磁北を求め東西南北の基線を決定した。この原点をMA50とし、これから4mごとに東西はアルファベット2文字の組み合わせ、南北は2桁の数の組み合わせ(00~99)を用い、東西は4グリッド32mでアルファベット2文字の先の方を変え(東にMA, MB……MG, MH, NA, NB……NH, OA……),各グリッドの名称は南東隅の交点の文字と数字を用いることにした。

10日から発掘作業を開始したが、遺跡の範囲があまりにも広いため、任意のグリッドを掘り、遺構・遺物の集中した地点を広げることが最初の方針とした。5月15日、遺跡東端部から2個の壺形土器が直立して発見され、一方には鉢形土器が倒立してかぶせられていた。6月1日、II区西部で3個の埋甕が発見された。いずれも晩期深鉢形土器が直立しており、この付近に墓域の存在することが考えられた。

6月5日から、遺跡中央部をI区、東側をII区、西側をIII区とする区域設定を行い、II区の拡張を進めた。同30日までに、II区からは計30基の埋甕を検出し、さらに不明瞭ながら土塚もその周辺に存在することを知った。7月3日、土地改良課側から調査対象外になっていた遺跡中央部分に道路を取りつけるため早急にこの部分を調査して欲しい旨連絡があり、同4日よりこの部分の調査を行った。(このためI区を二分し東側をI-A区、この部分をI-B区とした)。同20日、埋甕・土塚墓・土塚等を発見してI-B区の調査を終えた。

7月21日からI-A区・II区を平行して調査したが、II区も遺構の分布状況から西側をII-A区、東側をII-B区とした。II-A区の埋甕を実測・写真撮影し取り上げ、さらにその下を黄橙色地山土上面まで掘り下げて土塚のプランを確認した。土塚は小判形のプランが多く、中に配石のあるもの、埋土中に自然石を直立させたものがあり土塚墓と判断した。この間、あまりの猛暑のため地山に亀裂が入り、散水しながら調査する毎日であったが、8月27日までにI-A・II-A・II-B各区の全調査を終えた。

8月29日から遺跡西端部(III区)の調査に入ったが、任意の調査の際、遺構・遺物の分布が極めて薄く、範囲が広いため、バックホーンを入れて機械によって表土を剥いだ。調査の結果、段丘縁辺部に遺構・遺物がやや集中し、中央部に行くほど少なくなることがわかった。9月20日までに、土塚・竪穴住居跡・埋甕などを実測・写真撮影した。(第2図)

9月21, 22日, III区の補足調査, 器材の搬出をし, 全ての発掘調査作業を終了した。この間8月19日には、一般町民を対象に現地説明会を行い、埋蔵文化財保護の意識の普及のため努めた。



第2図 地形及び発掘地域図

IV. 発掘調査

調査範囲が広いので、調査区を設けて作業を進めた。すなわち、I-A（遺跡中央、水田）・I-B（遺跡中央南部、畑地）・II-A（遺跡中央東部、水田）・II-B（遺跡東端部、水田）・III（遺跡西端部、水田及び畑地）の5区である。このうち、I-A区については国庫補助金対象の報告書に載せたため、本書では割愛し概略のみを述べ、他はI-B・II-A・II-B・III区の順で報告したい。

1. 発見遺構及び伴出遺物

(1) I-A区

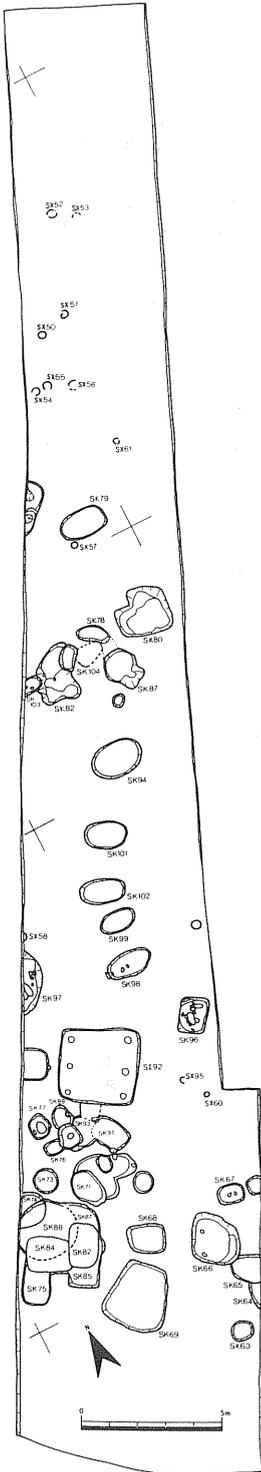
発見した遺構は前期の竪穴状遺構1、土坑1、晩期のフラスコ状ピット1である。このうち、竪穴状遺構は壁が一部しか明確でなく、床面も凹凸があり、中央部に焼土が2か所あった遺構である。前期中葉を中心とする土器が出土している。出土遺物は土器・石器が大量に出土したが、土器は前期前葉～後葉までのものと晩期前葉～中葉までのものがあり、石器は前期のものと思われる石鏃・搔器・石槍の他、晩期の打製石斧も多い。

(2) I-B区（第3図）

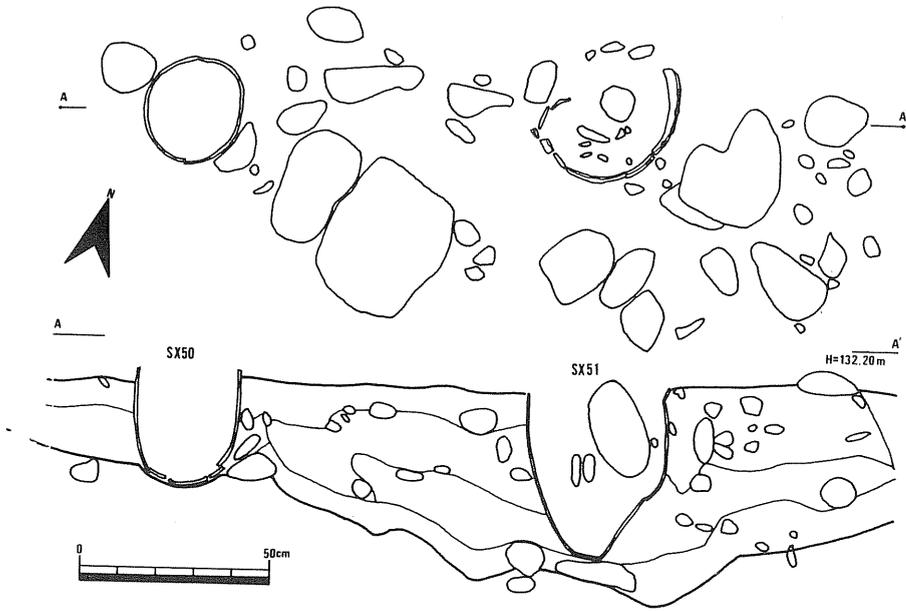
I-B区は、遺跡中央南部畑地中であり、当初発掘調査を予定していなかった地域であるが、圃場整備の都合上農道を敷設することになり、急拠調査したものである。地形は中央部を横切る道路から北側は水平に近いが、南側はなだらかに下降する。調査面積は約380㎡である。この地域は長い間畑地あるいは水田として使用されていたため、南側ほど遺構の破壊が進められ、北側では段丘礫層に近いような自然石が集散していた。

S X 50・51 埋葬（第4図 図版2）

S X 50・51はS X 52～56等と共に道路より北側で発見された。遺構周辺には自然石が多く、2個の深鉢形土器はその中に埋め込まれるという形であった。S X 50は地山段丘礫層を



第3図 I-B区遺構配置図

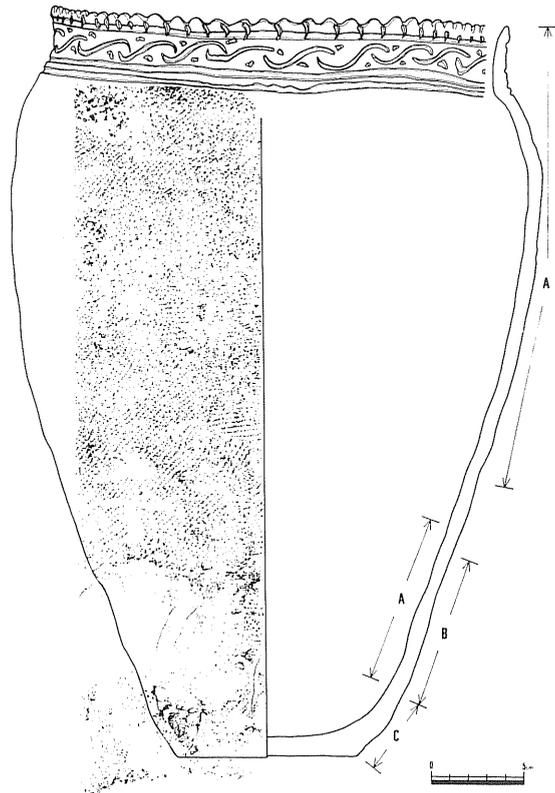


第4図 SX50, SX51埋葬

若干掘り込んでいたが、SX51は黒色土中であり、相方とも土器を埋設するための穴（以下埋設穴という）は確認できなかった。SX50・51とも埋葬内埋土は黒褐色土で礫の入るものであったが、特にSX51のそれには蓋にして中に落ち込んだような自然石が上部に入っていた。

SX50土器（第5図 図版6）

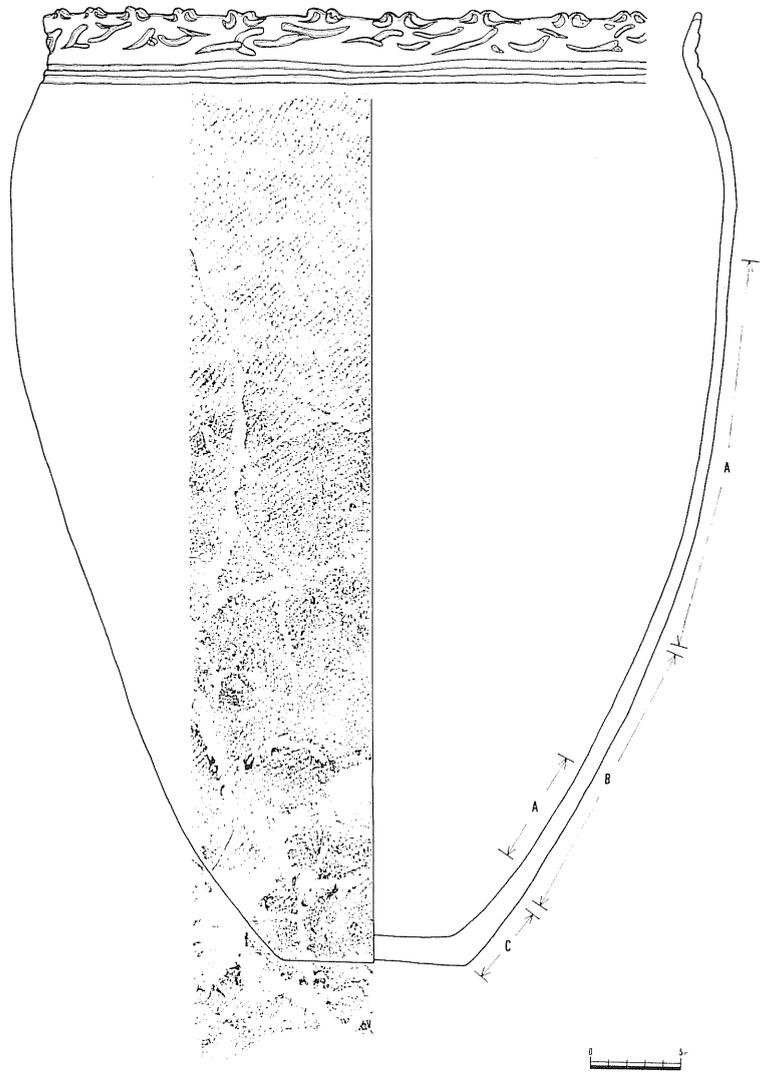
I-B区の中では比較的小型の深鉢形土器で頸部に文様帯を持つ。口縁は小波状をなし、その下に軽く沈線を入れたあと波状の谷部下に刻目風の刺突を縦位に加える。さらにはその下にはややくずれたS字状沈線を羊歯状文風に入れ、その下頸部下端に浅くシャープさに欠ける2条の沈



第5図 SX50土器

+

線を加えている。体部には底部を除いてLR単節斜縄文が施される。口縁部から器外面体部中位下まで厚く煤状炭化物が付着し（実測図中Aの範囲、以下A・B等という）、体部下半は火熱によりもろくなり、赤変している（B）。外面体部から5cmまではヘラ状工具によるケズリが横位に施され縄文はない（C）。胎土は細砂粒を含み、良質粘土を用い焼成良好。色調外面黒褐色、内面褐～灰黄褐色を呈する。



第6図 SX51土器

SX51土器（第6図 図版7）口縁部には2～3cm間隔

にB突起が付され、突起の下に八の字状の沈線、その下に三叉文風の短い沈線が施される。頸部文様帯下端には浅く薄い2条の沈線が施され、その下は縄文にかわる。体部には下端を除いてLR単節斜縄文が原体いっぱいを用いてくまなく施文される。胎土には白い繊維状の物が多く含まれ、よくしまっている。焼成は良好で、色調黄灰褐色。

SX52 埋甕（第7図 図版3）

SX50・51の北3.5mで同様なあり方で発見された。SX53と近いが、SX53は破損が著しく、やや高いレベルで存在した可能性が高い。埋設穴は底面で一部段丘礫層を掘り込んでいる。埋土は小礫混じりの黒褐色土であるが、土器上面から10cmの深さに鉢形土器を倒立させた蓋があった。蓋は口縁部が本体深鉢形土器の西側に接し、やや同方向に傾いていた。

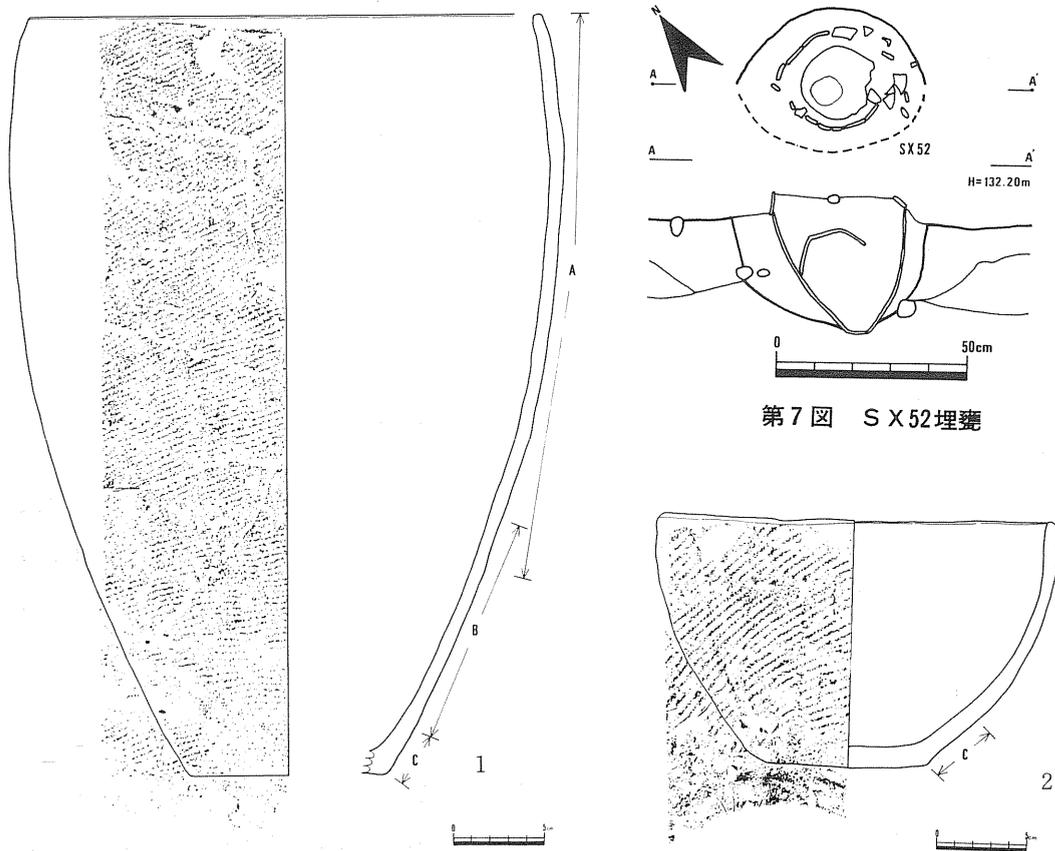
S X52土器（第8図1 図版8） 底面を丸く欠損しているが穿孔したものは不明である。口縁部から底部までL R単節斜縄文を横位に回転施文している。

第8図2（図版8）は蓋に使用されていた鉢形土器。底部を除き全面に原体R Lの縄文が縦位に回転施文される。器内面口縁部から体部中位にかけ、ていねいな横位のミガキによって黒色化され光っている。色調はにぶい暗褐色。胎土には若干の細砂粒が含まれ、焼成は良好。

S X 95 埋甕（第9図 図版9）

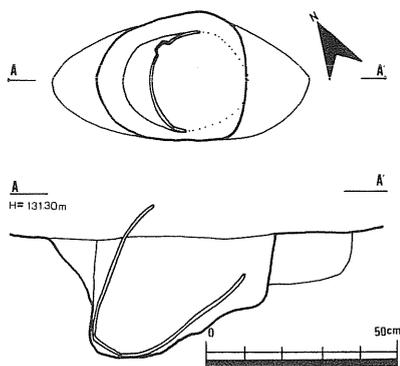
調査区南部地山上面で確認した。埋設穴は西側では垂直，東側からは斜めに掘り込まれている。深鉢形土器はこの中に口縁部を東に傾けて埋設されている。土器には若干の割れヒビはあったが、土圧等によって押し曲げられたような形跡はなく、最初から斜めが意識されて埋設されたように観察された。S X95の南東側0.7 mにS X60埋甕がある。埋設穴埋土中から前期の土器も出土している。

S X95土器（第10図 図版9） 底部付近を除き体部全面に斜行縄文が施文される。縄文原体は

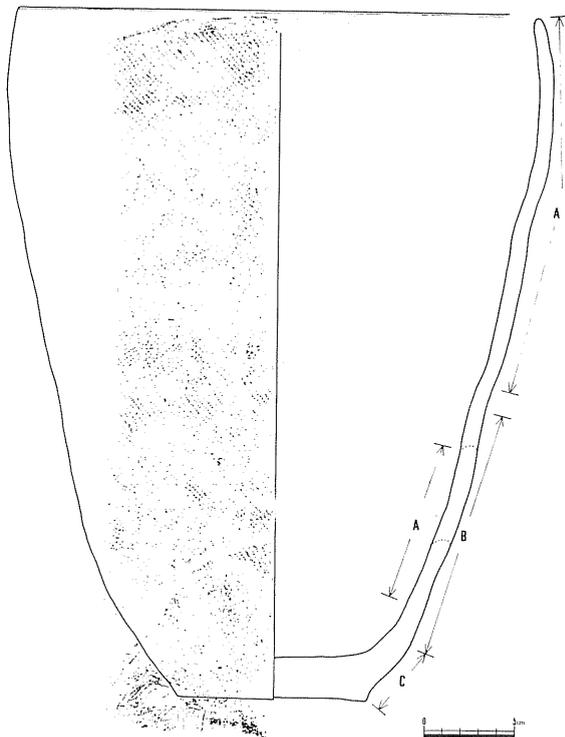


第8図 S X52土器と蓋

LR・RLの2種類で、後者の方が撚りが細く緻密である。この2種類の原体を上から順に交互に横位回転し、羽状縄文にしている。縄文帯は全部で6段。色調は外面黄灰褐～赤褐色、内面赤褐色を呈する。胎土には細砂粒を若干含む



第9図 SX95埋甕



第10図 SX95土器

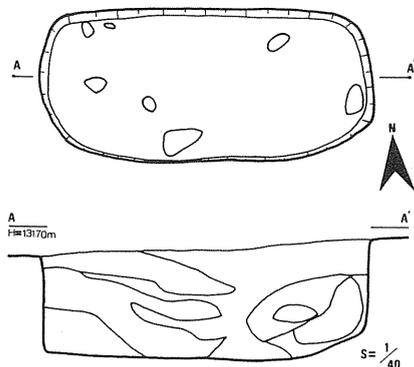
が良質の粘土を用いてあり、特に内面はツルツルしている。焼成はきわめて良好である。

SK79 土塚墓 (第11図)

塚口部で長径1.74m×短径0.79m、深さ0.60mを計る土塚墓である。壁はほぼ垂直で塚底面は砂利層であった。埋土は黒褐色土主体で、こぶし大～径20cm前後の礫を含んでいた。塚底面西側から第48図1に示した石製品が出土している。本土塚南西隣りにSX57埋甕があった。

SK88 土塚 (第12図 図版4)

調査区南端部で発見された円形の土塚である。この地点は長芋の栽培等により深く耕作され遺構上面が削り取られている上、土塚が集中しており相互の切り合いも激しい。この中であってSK88は最も古いもので、他の土塚から上面を切り取られている。推定塚底径は2.0mである。SK88を切る土塚SK



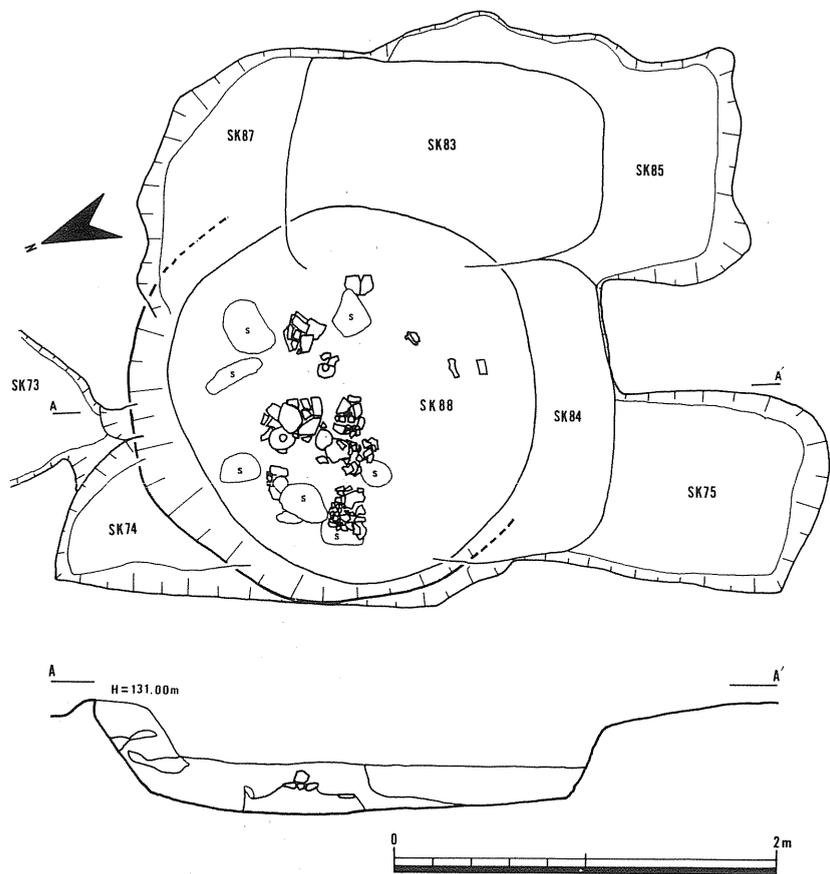
第11図 SK79土塚墓

83・84等の埋土はS I 92のそれに近似しており、縄文時代以降のものである可能性が強い。SK88埋土中には遺物が捨てられたという状況で集中していた(図版4)。

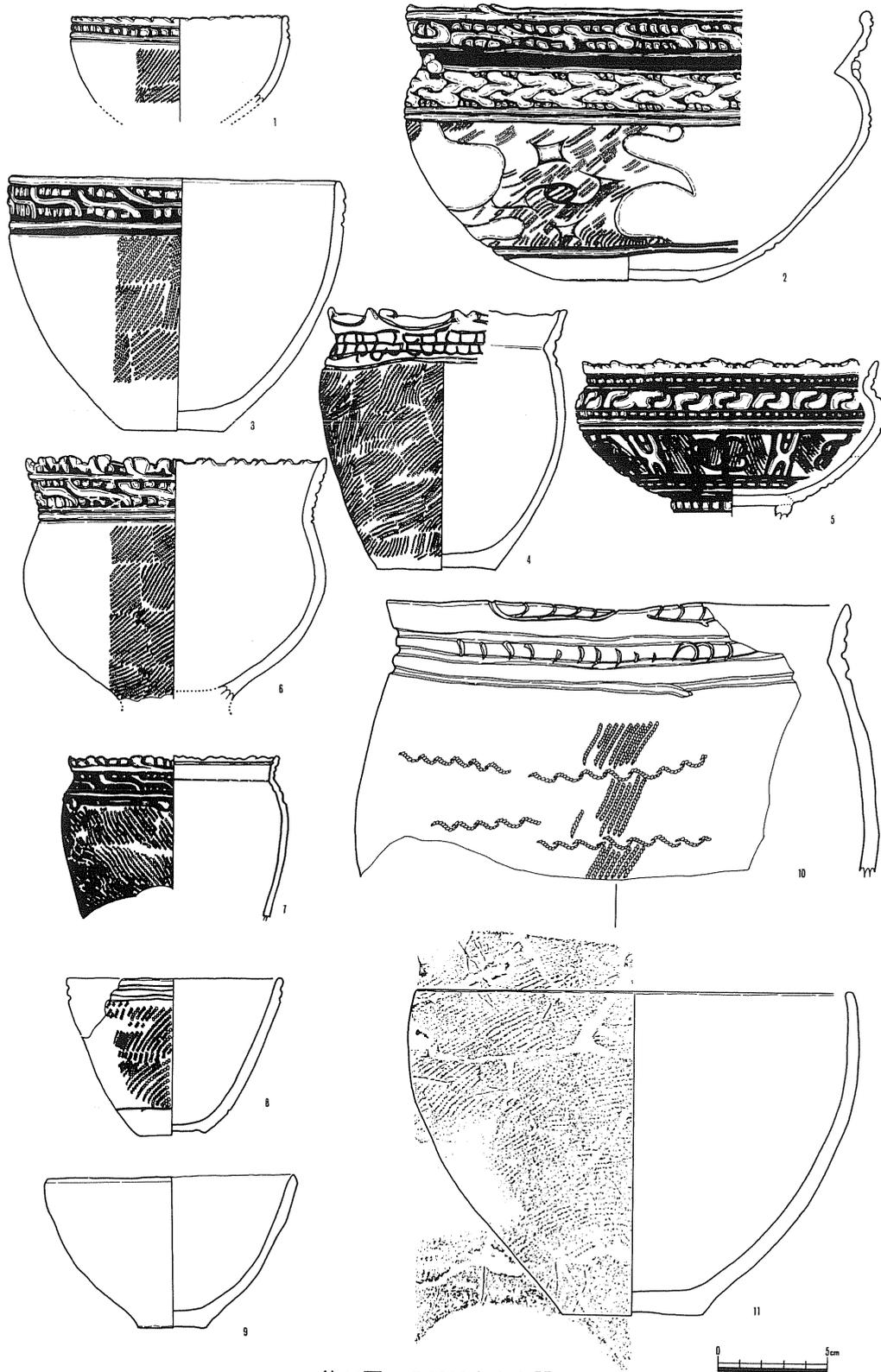
SK88 出土遺物 (第13図1~11 図版11)

1. 口縁部以下ゆるやかに弧を描いて下降する小型の鉢形土器である。
2. 口唇上に加えられた1条の沈線が突起に伸びる。頸部文様帯には左傾する羊歯状文が施され、文様帯下には幅8mm程度に削り取られた無文帯がある。屈曲部には縦位に2個一対の粘土瘤が貼り付けられ、肩部文様帯には三叉文と載痕列の連続によるK字状文が施される。肩部文様帯下には2条の平行沈線がひかれ、体部文様帯との境を画している。体部文様帯には彫刻的な磨消縄文手法による文様が4単位繰り返される。それぞれの単位文様帯内にはLR縄文が横位回転施文され、いわゆる玉抱き三叉文を挟んで上下に4叉文を配す。体部文様帯の下限は2条の平行沈線によって画される。
3. 平縁の鉢形土器である。頸部文様帯には左傾する羊歯状文が施される。

4. 口縁部がやや外側に開き、頸部でくの字に屈曲し体部上半が膨らむ鉢形土器である。口唇上には8個のB突起が付され、突起間は口唇部に加えられた沈線によって連絡される。頸部文様帯には3条の平行沈線と、沈線間を縦位に切る短沈線によって粗雑な載痕列が施され、文様帯下限は1条の沈線によって画される。体部はLRの縄文を、横位及び左上~右下の方向で回転施



第12図 SK88土坑



第13图 S K 88出土土器

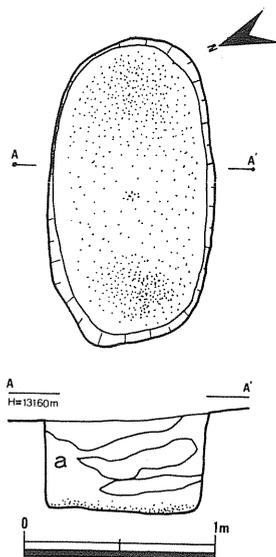
- 文する。底部近くは縄文施文後横方向の調整がなされる。内側にも横方向の調整がなされている。
5. 口縁がやや外側に開き、肩部が強く張る台付浅鉢形土器である。口唇上には16個の突起が作り出される。突起上は2か所で截られて三分され、突起間は2個ずつ載痕が施される。口縁裏側には1条の沈線がめぐる。頸部文様帯には截痕列が施される。肩部文様帯にはL字形に彫られた文様が上下にかみ合う形で配され、その下に截痕列が施される。肩部文様帯下には2条の平行沈線がひかれ体部文様帯との境を画している。体部文様帯はX字状に彫られた文様と、四弁花状の文様が描かれた方形の区画文とによって構成される。方形の区画文内において、四弁花状の文様の内側ではLR縄文を横方向に、外側では縦方向に回転させて施文する。台部はその大半が欠損しているが、台上部には比較的大きな截痕列を施す。体部下半及び台部は二次加熱を受け明褐色を呈する。口縁内外面には煤状炭化物の付着がみられる。
 6. 口縁が外側に開き、体部が球形に近い台付鉢形土器である。口唇上には24個のB突起が作出される。
 7. 口縁がやや外側に開き、頸部でくの字形に屈曲する鉢形土器。
 8. 口縁部から体部下位まで直線的に降り、以下底部までゆるやかな曲線を描く鉢形土器。
 9. 口縁以下底部までゆるやかな曲線を描く無文の鉢形土器である。口縁は断面が三角形に尖がる。体部中位、土器内外面に赤褐色～黒色を呈する膠着物が認められる。
 10. 口縁部がやや外側に開き体部上半が膨らみながら降りる深鉢形土器と思われる。S K 217 出土の深鉢形土器（第41図 図版31）に器形・文様・胎土ともに類似する。
 11. 口縁以下ゆるやかな弧を描いて降りる鉢形土器である。

S K 101 土塚墓（第14図 図版5）

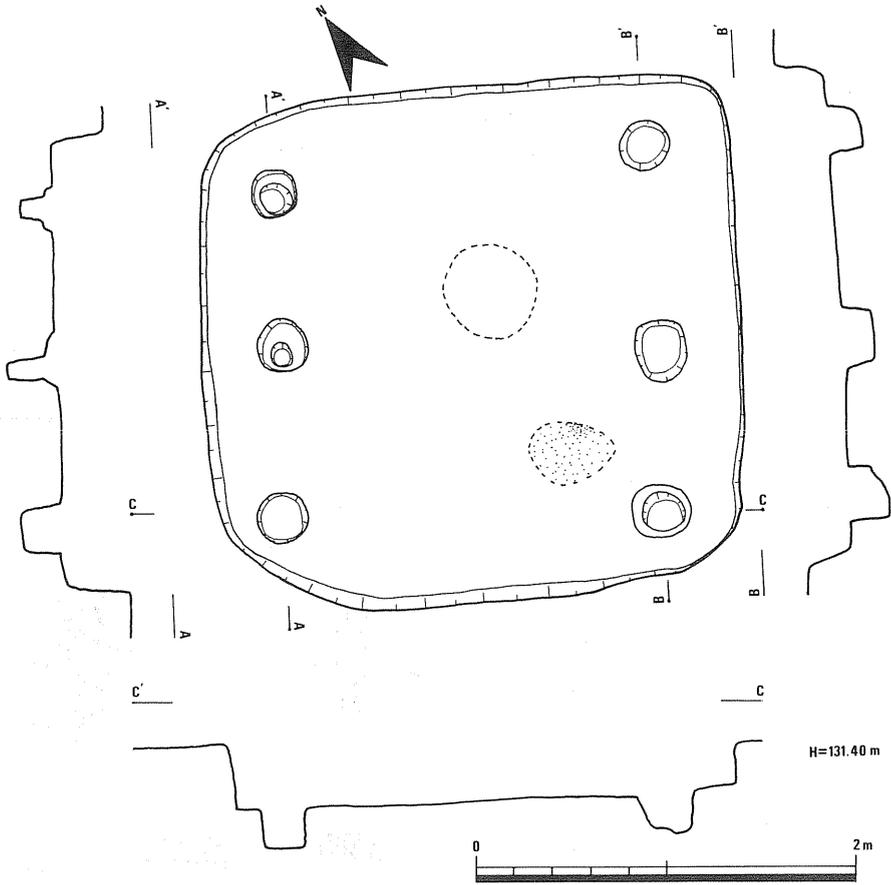
調査区中央部で、黄褐色地山段丘礫層を掘り込んで作られた土塚墓で、長径1.40m×短径0.85m、深さ0.50mを計る。平面形はきれいな小判形を呈する。埋土は軟かい黒褐色土(a)に小礫混じりの黄褐色土が交互に入っているが、塚底面にはベニガラがほぼ全面に散布していた。S K 94・99・102 とほぼ同間隔・同方向に並ぶ。

S I 92 竪穴住居跡（第15図 図版6）

地山上面で確認した一辺2.7m～2.8mの小さな隅丸方形の竪穴住居跡である。埋土は黄褐色土に黒褐色土が少量混じったシモフリ状のもので、埋土中からは小さな縄文土器片が若干出たにすぎない。柱穴は東辺と西辺に3本ずつあり、壁から約0.3m離れてあった。これらの柱穴の深さ



第14図 S K 101土塚墓



第15図 S I 92 竖穴住居跡

は0.15~0.25mと浅いが、6本を結ぶと2.0m×1.8mのほぼ方形になる。埋土及び遺物の出土状況・柱穴等からして、後世の新しい竖穴住居跡と考えられる。

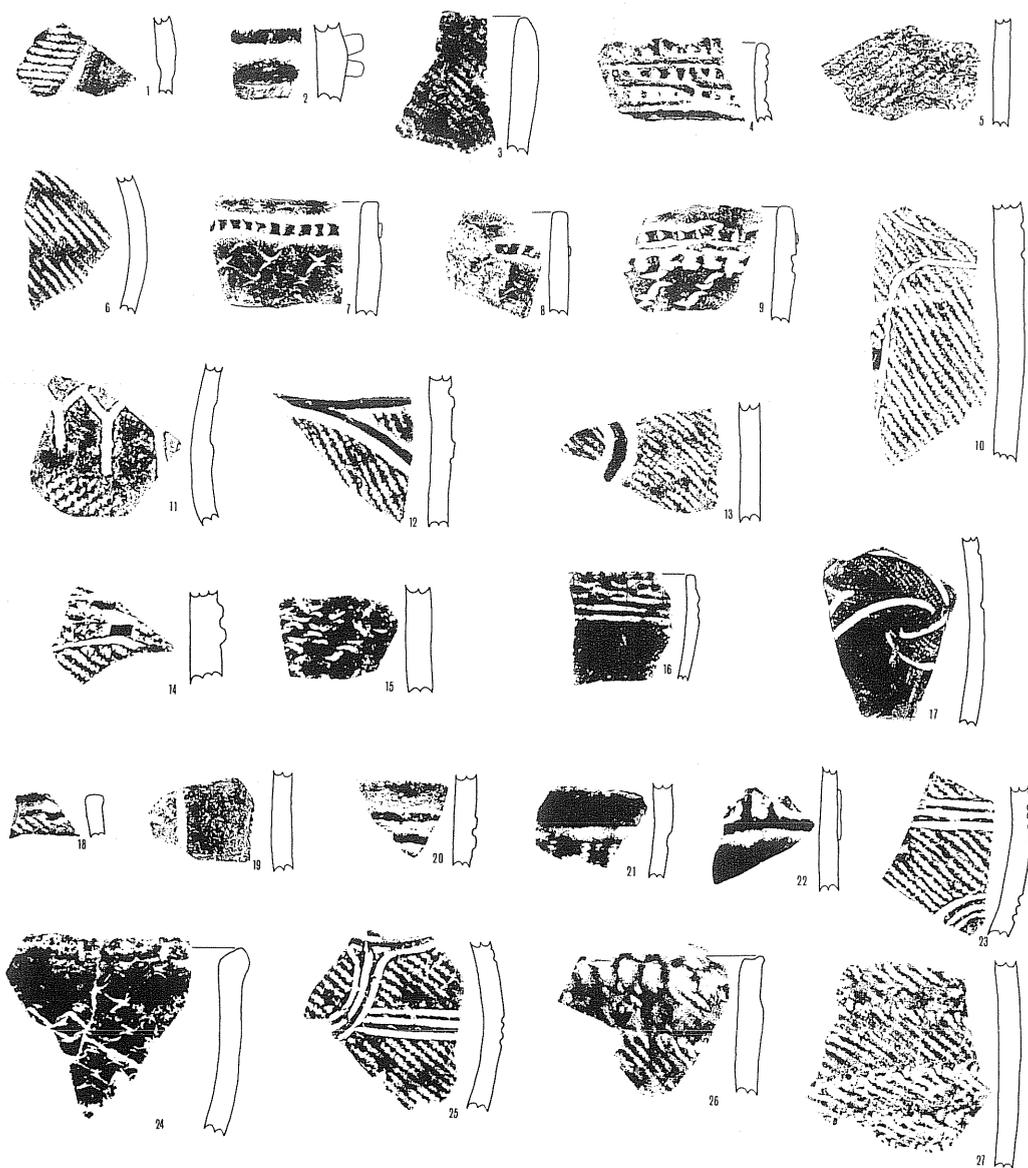
第16図21~25は、埋土中から完全に浮いた状態で出土したものである。24は前期前葉末、他は中期前葉末の土器で、本住居跡の年代を決定できるような遺物はなかった。

その他の遺構内出土遺物 (第16図 図版12)

S K 88 (第16図16・17)を除き前期及び中期の土器であるが、全て土城内埋土中から浮いた状態での出土で、土城の時期を決定するに至らなかった。

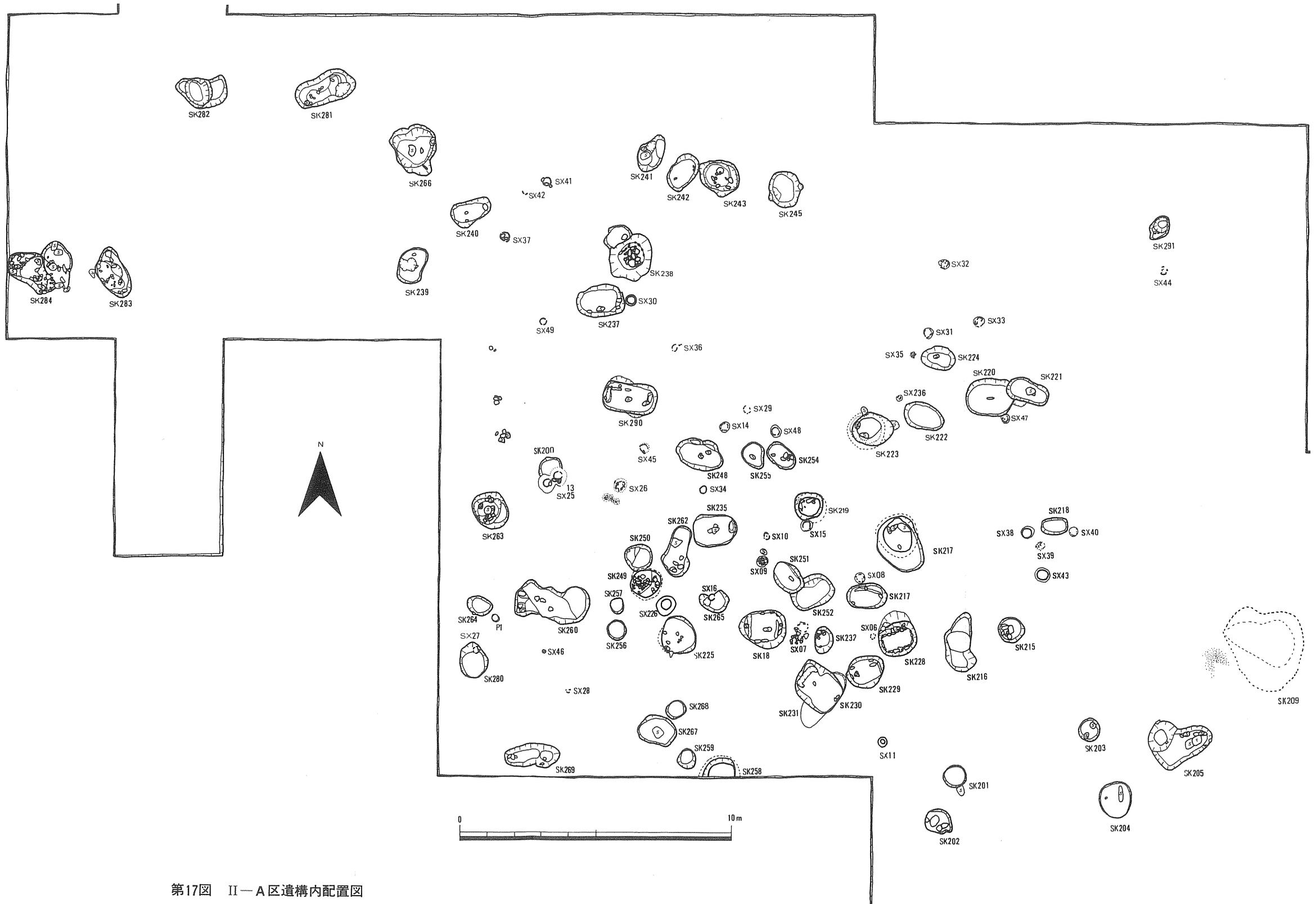
(3) II-A区

II-A区では1,460㎡を調査し、乳幼児骨を埋葬するための棺の一種と考えられる埋設深鉢形土器(いわゆる埋甕)34基・土塚墓30基・フラスコ状ピット6基・その他の土塚26基を発見した。



- | | | | |
|-------------|--------|-------|--------|
| 1, 2 | S K 69 | 12~15 | S K 80 |
| 3~5, 16, 17 | S K 88 | 18~20 | S K 89 |
| 6 | S K 77 | 21~25 | S X 95 |
| 7~10 | S K 78 | | |

第16图 I—B区遺構内出土土器

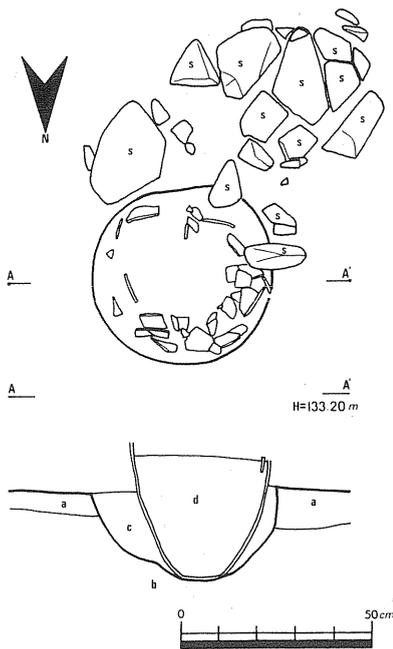


第17图 II-A区遺構内配置図

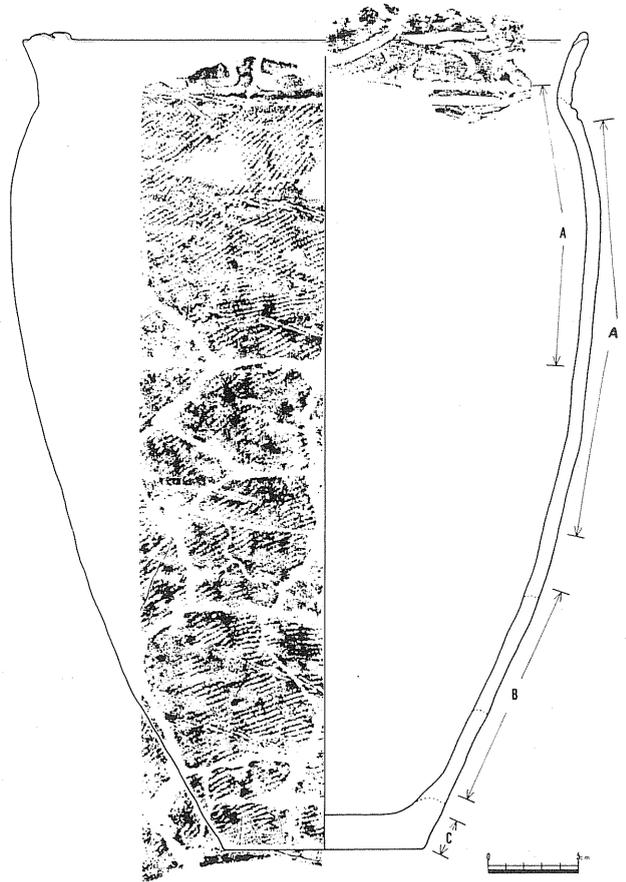
本区における層序は第Ⅰ層暗褐色水田耕作土15cm、第Ⅱ層黒褐色土（水田面下の肥料等の堆積か？）5cm、第Ⅲ層暗褐色土10～20cm、第Ⅳ層褐色土10cm、第Ⅴ層黄橙色地山土となっており、現水田面から地山までの深さは平均して40～50cmである。これらの層序のうち遺物は主に第Ⅲ・Ⅳ層に集中する。埋甕は第Ⅲ層上面でほとんど確認され、中には後世の耕作等で上部を破損されているものもあり、埋甕が埋設された当時の生活面が失われている箇所も多い。土塚墓についても埋甕を検出できるレベルでおぼろげながらその存在を知ることができるものもあるが、大部分の正確な平面プランは地山上面まで掘り下げないと無理であった。このため、この後の土塚墓の深さは地山上面からのものであり、本来は計測値よりも10～20cm程深かったものと考えられる。以下、個々の遺構について述べるが同じような形状・形態のものも多いため、それらの中から特に代表的なものについて述べ、その他のものについては後に表でまとめた。出土した遺物は特別の場合を除き、全て遺構埋土中からのものである。

S X 07 埋甕（第18図 図版24）

第Ⅲ層上面でS X 07の存在を知ったが、すでに口縁部から頸部にかけては失われるか周囲に散らばり、南側にはかなり大きな自然石が打ち砕かれた状態で



第18図 S X 07埋甕



第19図 S X 07土器

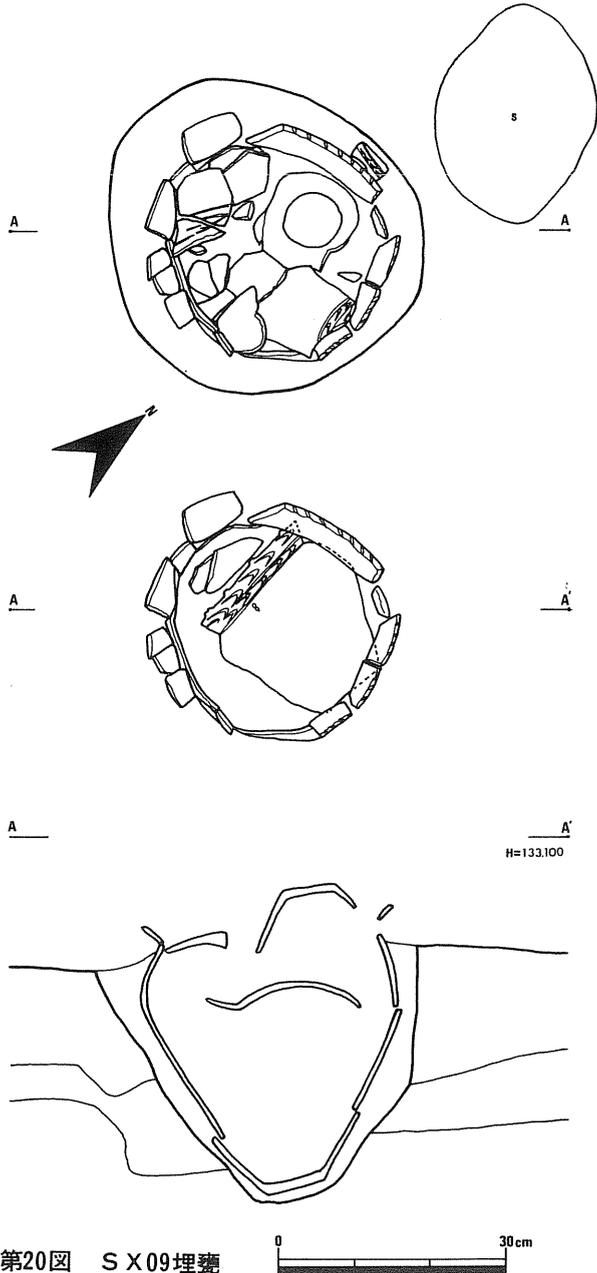
散在していた。埋葬埋土は軟かい黒褐色土で埋設穴埋土の粘性のある暗褐色土とは明らかな違いがあった。

第19図(図版24) 口縁部は数か所出土しているがわずかしか接合しない。口縁部は平縁であり、これに斜めの刻目を持つB突起が付く。頸部は無文の上に先端の鈍いへら状工具で三叉文風の沈線文が描かれる。体部には綾絡文を持つLRの縄文が底部いっぱいまで施され、底部の調整痕は0.5~1cmしか見られない(C)。色調は黄灰褐色で体部内外面に煤状炭化物が付着する(A)。体部下半から底部にかけては火熱により赤変している(B)が、他の埋葬に比しそれほどもろくなっていない。

S X 09 埋葬 (第20図 図版15)

確認面は第III層上面である。埋設穴は径0.42m、深さ0.42mで、これに深鉢形土器を直立させていた。埋葬の口部には中型の深鉢形土器を倒立させて蓋とし、その下10cmには蓋に使用した土器の体部が程が横位に二重の蓋になるよう置かれていた。上位の蓋はバラバラになり埋葬の口部全面をおおっていた。埋設穴埋土中から第48図2の打製石斧1点が出土した。

S X 09土器(第21図 図版25) 埋葬本体である。口唇上には粗雑に作られた11個のB突起が付されその谷部と突起間に右→左方向の刻目が入る。外反する口縁部から頸部にかけては無文で肩部との境には沈線状に明確な段差を有する。肩部以下体部にはLR縄文を左上~右下または横位に回転施文し、条は横走もしくは斜行する。色調は外面暗褐色、内面明~灰褐色。胎土



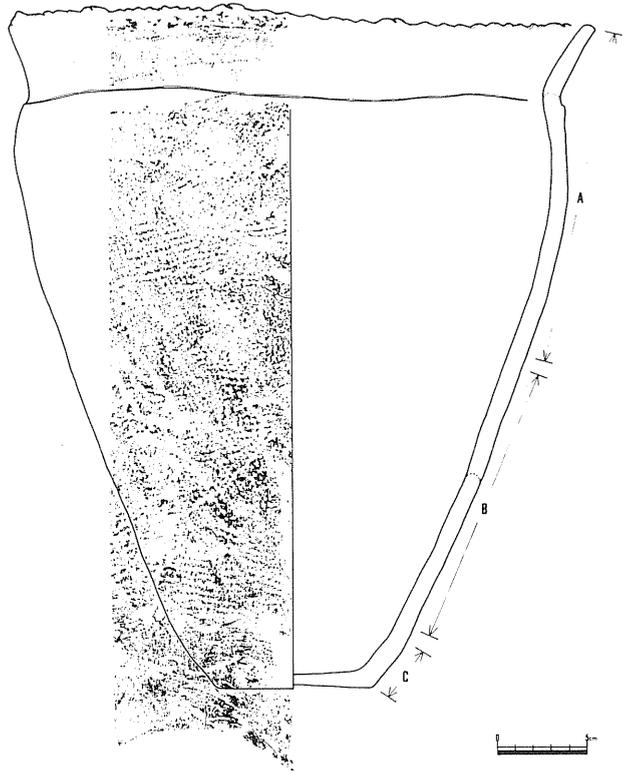
第20図 S X 09埋葬

には0.5 mm前後の細砂粒を含み良質土で、焼成は極めて良好である。

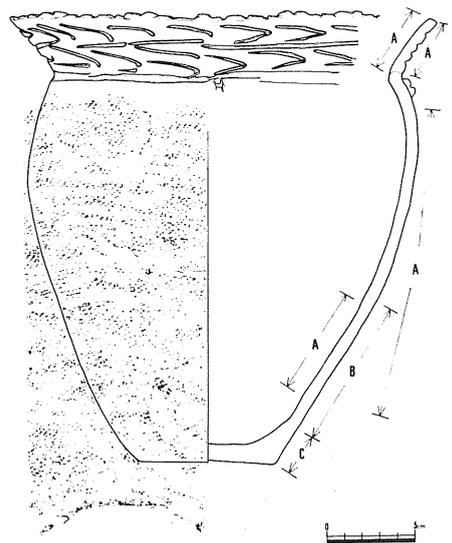
第22図（図版25） 蓋として使用された土器で、口縁部が強く外反し肩部から胴部が膨らみ下半で急激にすばまり平らな底部に至る。口唇上には12～13個のB突起が付され、突起間には刻目が入る。頸部には左方の開くいわゆる矢羽根状沈線文が粗雑に2段配される。頸部文様帯下端と肩部との境目には太い沈線があり、両者間に段を形成する。肩部上端には1個だけ縦に長く横位に刻目のはいる貼付による突起が付される。体部全面にはLR縄文が横位に回転施文され、内面は横方向にいていねいな調整が加えられている。

S X 11 埋甕（第23図 図版15）

調査区内埋甕の中では最南端で発見された。遺構確認面は第Ⅲ層上面で体部上半は耕作等により失われていた。埋設穴は埋甕最大径よりわずかに大きく径0.43m、深さ0.40mである。埋甕内埋土中に副葬遺物的なものは何もなく、下部に近く、底部を埋甕底部にくっつけた小型鉢形土器が口縁部を埋甕東壁に接して発見された。埋甕内上位～中位の埋土は暗褐色土であったが、この小型鉢形土器内の埋土は黒～黒褐色で非常に軟質だった。



第21図 S X 09(1)



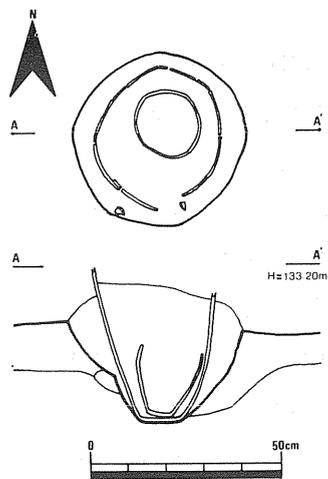
第22図 S X 09土器(2)

第24図1 (図版26) 底部をわずかに除き体部全面にL R単節縄文が横位回転によって施文される。原体の長さは3.3 cm前後。色調は外面暗灰褐～明褐色、内面明褐色を呈する。胎土には細砂粒を含み、しまりそのものは悪い。

第24図2 (図版26) S X 11埋甕中に埋置された小型深鉢形土器である。口縁部が内湾し文様帯を持つ。口唇上には13個のB突起が配され突起間には2～3か所の刻目が付される。突起谷部から出た沈線はその右側B突起の左の山下まで伸びこの下には太い沈線が1条めぐり、その下体部全面にはL R縄文が横位回転施文される。片側だけ体部下半と底部を欠損するが、底部穿孔とは思われない。

S X 13・25 埋甕 (第25図 図版16)

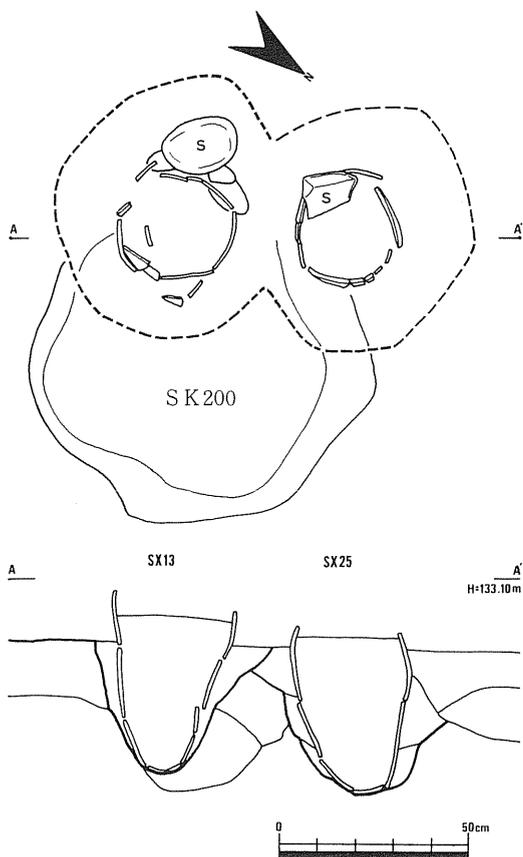
S X 13・25の埋甕が隣り合って発見された。遺構の確認は第Ⅲ層中位である。埋設穴はS K 200 を切っており、か



第23図 S X 11埋甕



第24図 S X 11土器



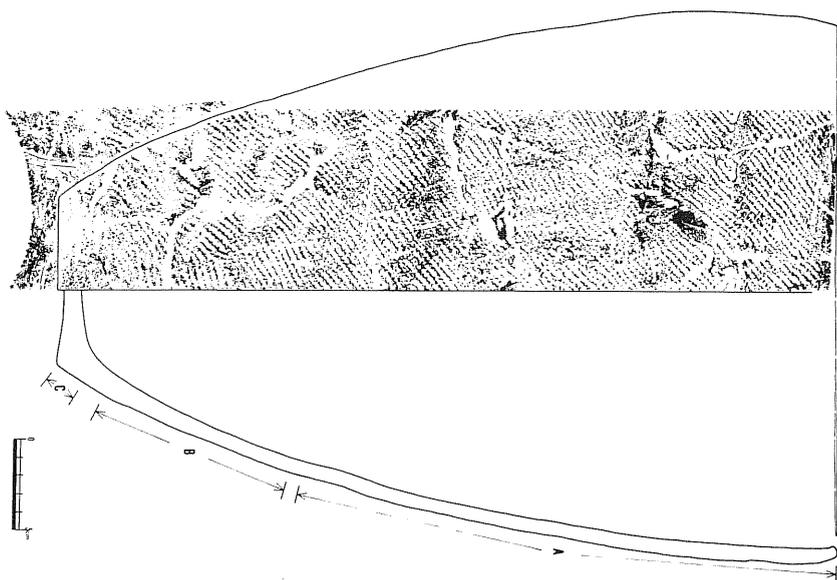
第25図 S X 13, S X 25埋甕

つて土塚墓のあったところに土器を埋設していた。S X 13と25の前後関係は断面観察によりS X 13が新しいと判断したが、あるいは同時期かもしれない。

S X 13 (第26図 図版27) 全面LR単節斜縄文が横位回転で施され、底面から約3cmだけヘラ状工具による横位のケズリがある(C)。

S X 25 (第27図 図版27) やや細かいLR・普通のRLの2種類の縄文を用いている。口縁部から底部にかけて8段に分けて原体を横位回転させ、上から第1段目はLR・RLの各縄文を半周ずつ施すが両者の接する2か所の部位では縦位の羽状縄文となっている。2段目は1段目と同様半周ずつ回転させているが、両者の縄文の接する部位が1段目と一致しないため、1段目との間に羽状縄文化

第26図 S X 13土器



している部位が10cm程ある。

3段目はLR縄文を全周施している。このため半周ほどは2段目と羽状縄文となっている。4段目以降は1段目と同様である。色調は外面暗～明褐色、内面明褐色を呈する。胎土は非常に良く、焼成も良好である。

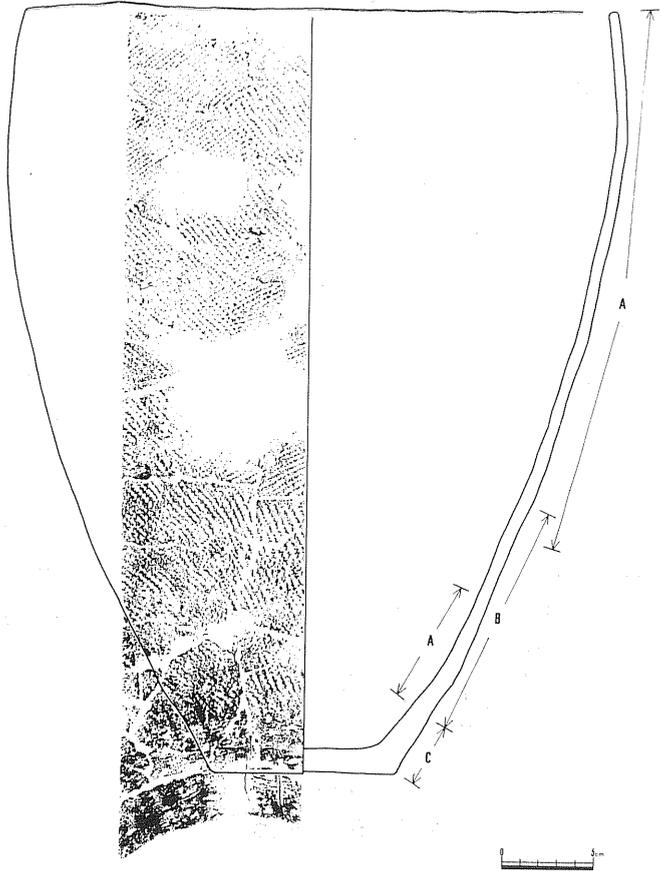
S X 41 埋甕 (第28図 図版16)

II-A区埋甕中では北西端で発見された埋甕で、第III層上面で存在を確認した。径15cm前後の自然石2個を蓋のような形で埋甕口部にのせている。

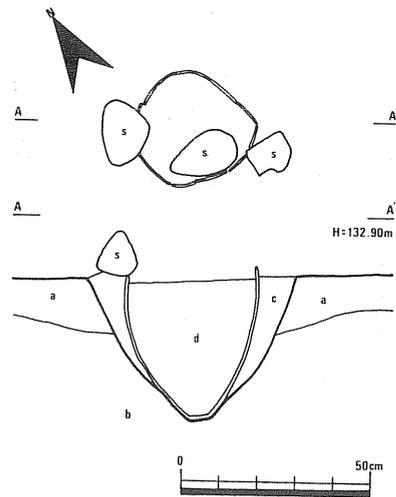
第29図(図版28) 口縁部から体部下半にかけてはLR縄文を横位回転施文している。胎土にはやや大きめの砂粒を含み、他と比し焼成とともにあまり良くない。

S X 43 埋甕 (第30図 図版17)

S X 43はS X 40・41・42などとグループをなすように発見された埋甕で、本遺跡埋甕中では最大のもので整った深鉢形土器を使用している。遺構の確認面は第III層上面で、北東15cmには埋甕口部と同じレベルで20cm×30cmの扁平な自然石があった。埋設穴は確認面では径0.55mと口径よりわずかに大きい。下にいく程狭くなり埋甕外面から5cmしか広くなく、断面深鉢形土器の形状を呈している。埋甕埋土は黒褐色土であったが、下部程



第27図 S X 25土器



第28図 S X 41埋甕

黒味を増し軟質であった。

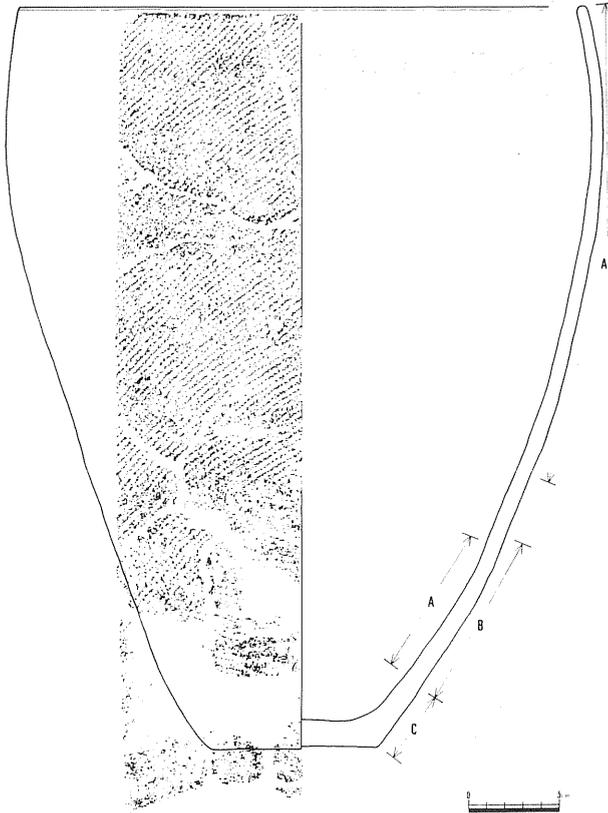
第31図(図版29) 口径40 cm・底径9.8 cm・器高52.5 cmの深鉢形土器で口縁部に文様帯を有する。口唇上にB突起を32~33個貼付している。突起間では中心部と中心部が1条の沈線で結ばれ、沈線上2~3か所から口唇上に刺突状の肢沈線が伸びている。文様帯下限は3条の平行沈線をめぐらせて画しているが、口唇とそれら平行沈線との間には沈線及び刺突列によって、粗雑な羊歯状文が描かれる。口縁部の一部を欠くため明確でないが、羊歯状文の文様単位は21単位と思われる。体部にはLR縄文が横位回転施文され、内面には横方向の調整がていねいになされ、口縁部近

くに輪積痕が残る。粘土帯の幅は約4 cmである。色調は外面暗灰~明褐色、内面明褐色を呈し、胎土は精選された粘土を用い径0.2~0.3 mmの白色微砂粒を混入させている。焼成は極めて良好である。

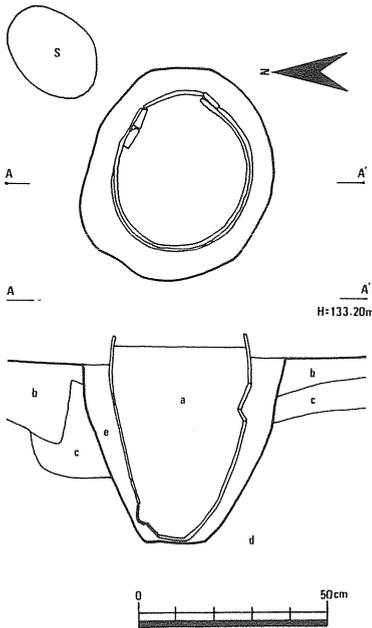
S X 226 埋甕 (第32図 図版18)

本遺跡埋甕中一つだけ地山土上面でも確認されなかったもので、やや大きい円形に掘り込まれたピットの中から発見された。底部は失われており底面には何もなかった。埋甕内の埋土は暗褐色で軟かく炭化物を少量含むのに対して、埋設穴のそれは褐色でややしまりがある。

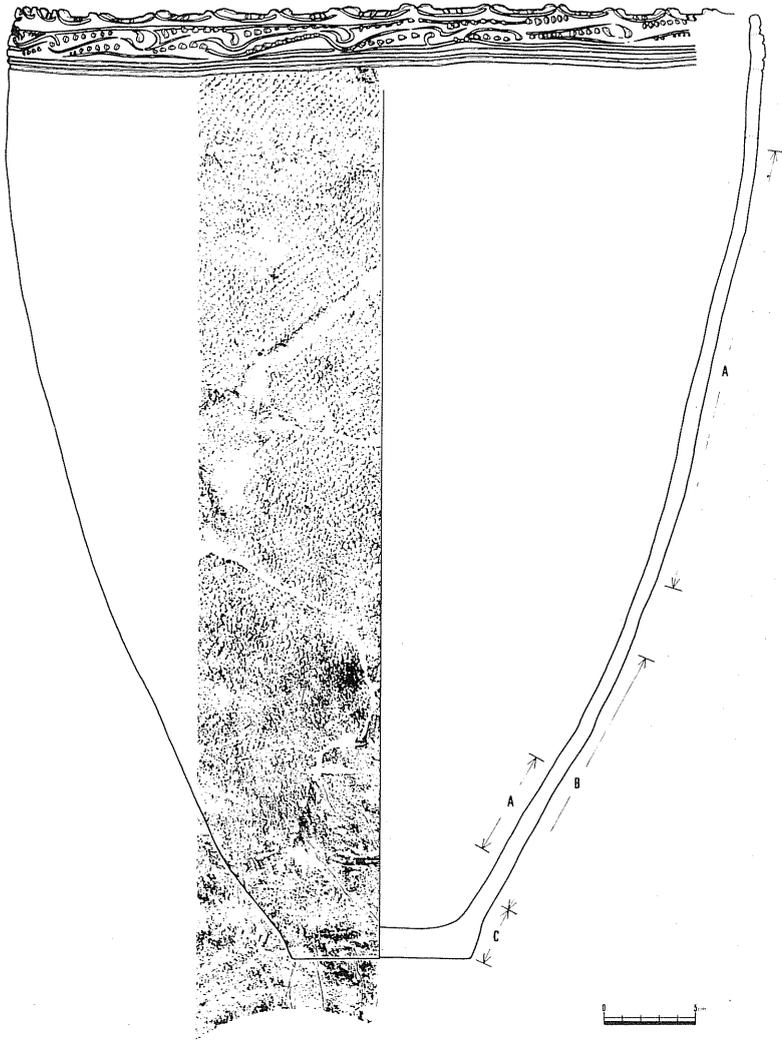
第33図(図版30) 底部を欠損しているが、外面体部全体にLRの縄文をていねいに施文している。原体長は2 cm



第29図 S X 41土器



第30図 S X 43埋甕



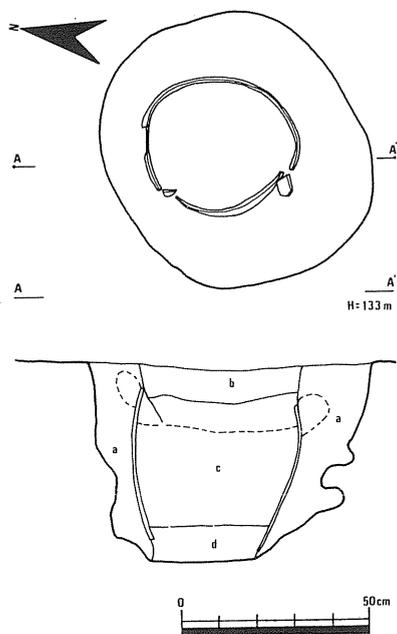
第31図 S X 43土器

前後である。色調は外面明～暗褐色，内面明黄褐色を呈する。胎土には径1mm前後の細砂粒を多く含むが、キメの細かい良質の粘土を用いており、焼成は良好である。器外面には粘土輪積痕を部分的に残し、内面にははていねいな横位ヘラミガキ状の器面調整痕がある。

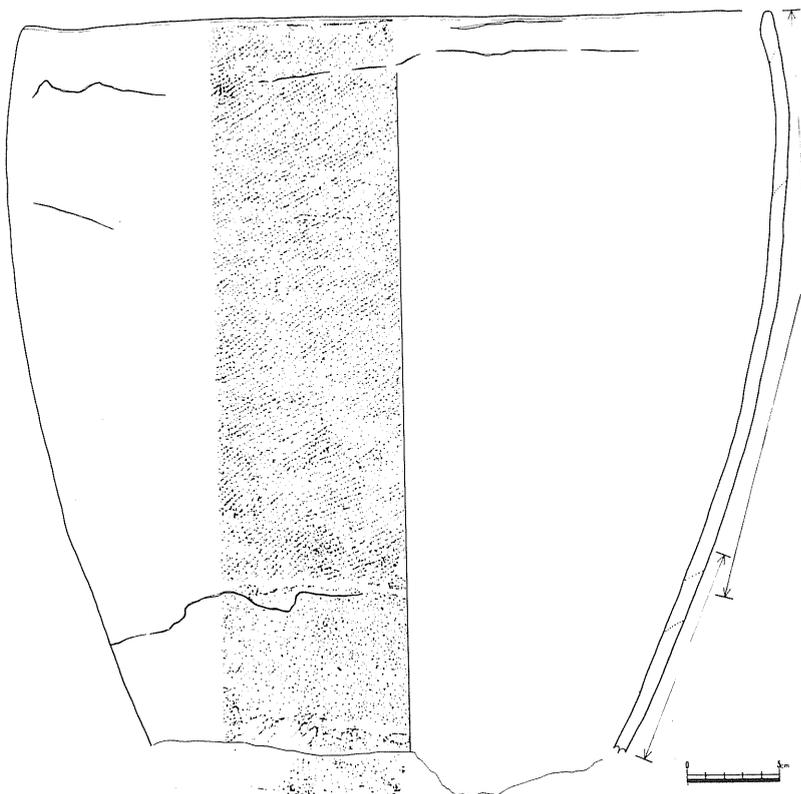
S K 18 土壇墓（第34図 図版19）

S K 18の存在を知ったのは第Ⅲ層上面で、図版19のとおり変形したC字状に黄褐色土（地山土）があり、黒褐色土が楕円形にそのまわりを取り囲んでいた。平面プランは壇口部で1.73m×1.35m

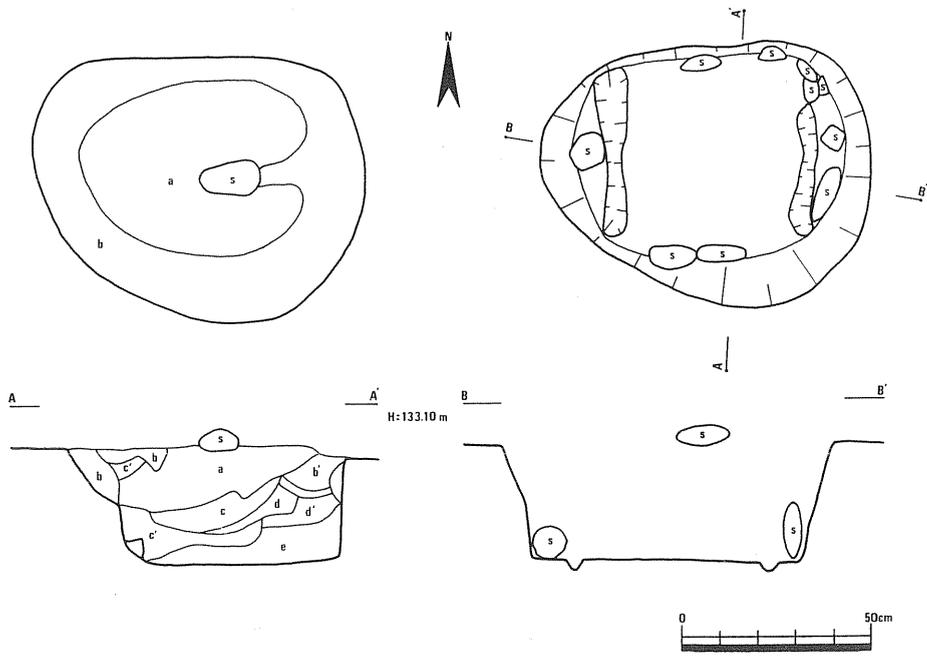
の楕円形もしくは卵形で、坩底面では1.42m×1.05mの小判形を呈する。深さは0.62m。壁は急角度で立ち上がり坩底になるほど垂直に近い。埋土は人為的な堆積を示しているが、かなり特徴的である。つまり土を埋める場合、土坩墓を掘る際は初めの方で掘り上げたと思われる黒～暗褐色土(b～e)を先に埋め、後に掘ったと思われる黄褐色地山土(a)を最後に中央部にまとめて入れるという手順をとっている。そしてこのa層のほぼ中央部に偏平な自然石を平らかに置いている。坩底面は平坦で水平に近いが東側が3cm程低くなっており、東西両端に浅い溝状の掘り込みがある。東側のそれは長さ0.7m・幅6～10cm・深さ5cm、西側のそれは長さ0.9m・幅7～17cm・深さ5cmである。また坩底面の周壁に沿っ



第32図 S X 226埋壙



第33図 S X 226土器



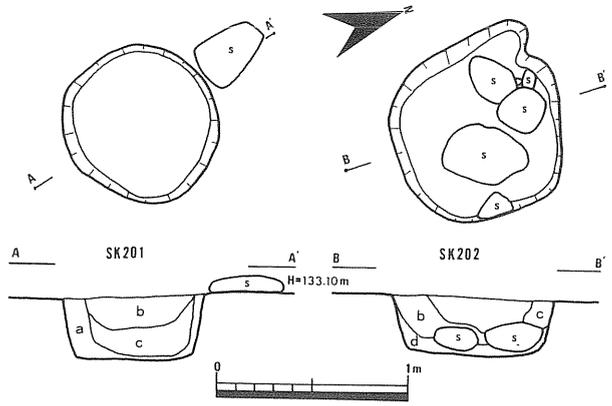
第34図 SK18土塚墓

て10個の自然石が少しの間隔をとって並べられ、この自然石の内側を結んでいくと長辺1.1 m、短辺0.9 mのきれいな長方形になる。長軸方向はN93°Wである。出土遺物で図示できるのは第44図1～4で晩期前葉末の土器である。

SK201 土塚墓 (第35図 図版18)

今回発見したII-A区墓域中ではSK202とともに南端に位置する土塚墓で、地山上面でプランを確認した。平面形は円形、

塚口部で径0.75m・深さ0.34 mを計る。壁はほぼ垂直、塚底部は平坦である。埋土は中央部に軟かい黒褐色土 (b・c)、そのまわりにやや固めの暗褐色土(a)が入る。土塚墓南側に扁平な自然石が1個あった。



第35図 SK201, SK202土塚墓

SK202 土塚墓 (第35図 図版18)

S K 201 と同様な形状を呈し
 同じ地山上面でプランを知った。
 塚口部で径0.90m・深さ0.32m。
 塚底近くに 5 個の大小の自然石
 があった。埋土も S K 201 と同
 様に中央部が黒く軟かい。出土
 遺物は少量で第44図 6・7。S
 K 201 と同時期であろう。

S K 220 土塚墓 (第36図
 図版20)

墓域北東部で S K 221 と隣り
 合わせに発見された。本土塚墓
 の存在を知ったのは S K 18同様
 第Ⅲ層中で、地山黄橙色土に近
 い黄褐色土 (b・c) が変形し

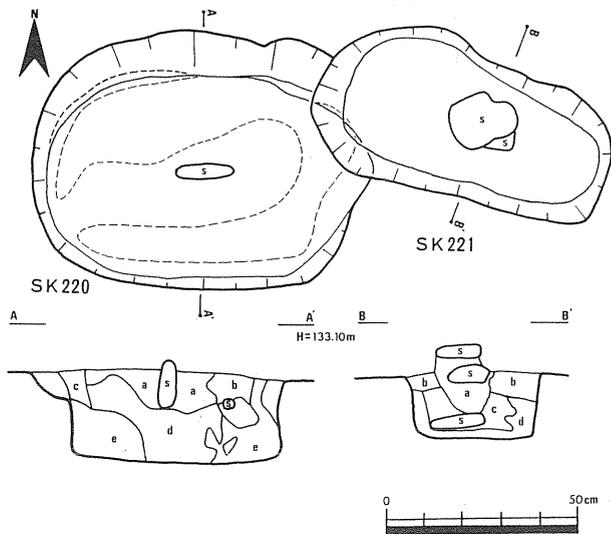
た c 字状にあり、そのまわりを黒褐色土が囲んでいたためである。しかし正確な平面プランの確認は地山上面であった。平面形は塚口部で長径1.80m×短径1.35m、塚底部で長径1.70m×短径1.05mの小判形、深さ0.50m。北東隅を S K 221 によって切られている。塚底面は平坦で壁も塚底から中位までは垂直、中位から塚口部にかけてわずかに広がる。埋土は人為的な堆積を示し塚底に近づく程粘性を増す。塚口中央部に縦31cm×横26cm×厚さ 8 cmの扁平な自然石を縦が土塚墓長軸中央線上になるよう垂直に立てている(図版20)。長軸方向は N 85°W。遺物は第44図 5・8~10で晩期前葉末のものである。

S K 221 土塚墓 (第36図 図版20)

S K 220 の北東隅を切ってすぐ隣にある土塚墓で、第Ⅳ層上面に地山土に近い土が薄く楕円形に分布していた。平面形は塚口部で長径1.57m×短径0.70mの楕円形、深さは0.40mであった。塚底面は平坦で壁は長辺ほど垂直に近い。径30cm前後の扁平な自然石 3 個が土塚墓中央部に 3 段重なるように置かれていた。長軸方向は N 65°W。遺物で図示できたのは、第44図11のみで晩期中葉のものと思われる。

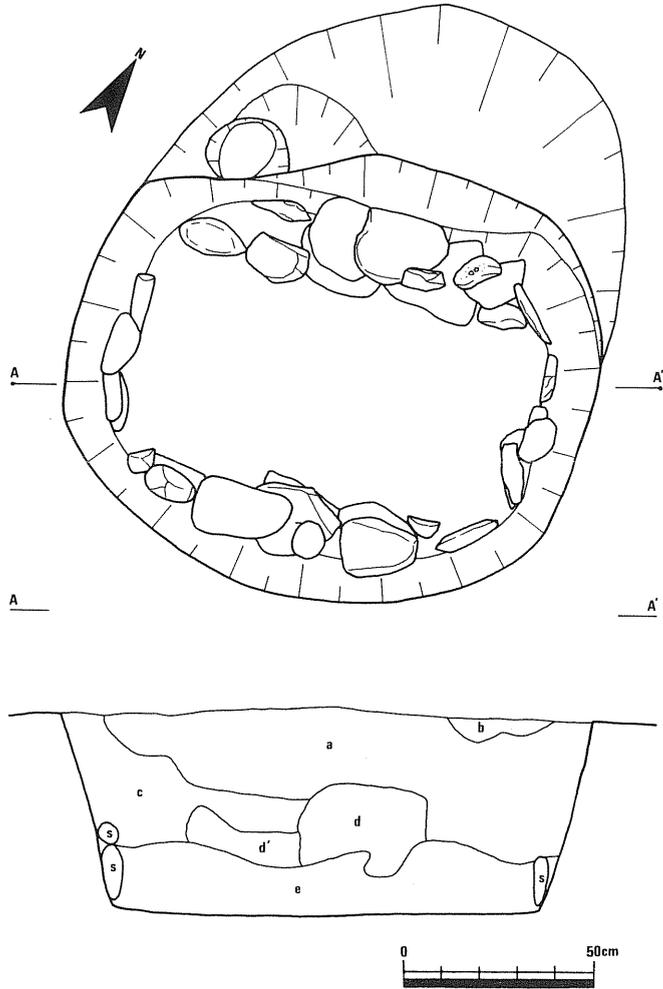
S K 228 土塚墓 (第37図 図版21)

S K 229・230 等と隣接して発見された土塚墓で遺構の確認は地山上面である。平面形は塚口部で長径1.35m×短径1.20mの小判形を呈する。深さは0.55m。塚底面は水平でしっかりしている。埋土は a 層：炭化物を含む褐色土, b 層：ローム粒子をわずかに含む黒褐色土, c 層：粘性が強く炭化物を含む黒褐色土, d 層：ややパサパサした黄褐色土, e 層：ロームブロック炭化物を含みや



第36図 S K 220, S K 221 土塚墓

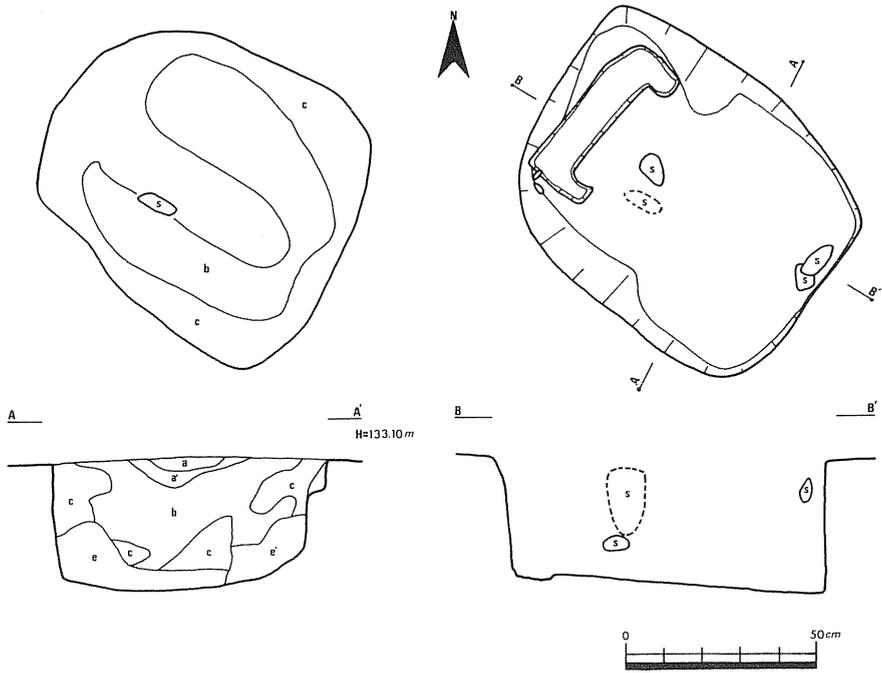
わらかい黒褐色土。坩底面周壁に沿い約30個の自然石をほとんどすき間なく1～3段に並べ積み重ねてある。この石の高さは坩底面から15～25cmで、埋土の状況もこれに呼応してその上下で明確な差異を示していた。この自然石の大きさはこぶし大～人頭大まで5～25cm前後のものであるが、大きいものは概して扁平で、この種の石で最下段のものを垂直に立て、2～3段目のものは横に置いてある。自然石によって囲まれた内側は長辺1.0m×短辺0.5mの長方形を呈する。長軸方向はN122°W。これらの使用された石の中に第48図3に示した凹石が1個あった。出土土器片で図示できるものはなかった。



第37図 SK 228 土坩墓

SK 230 土坩墓 (第38
 図 図版22)

第Ⅲ層上面で黒色土の中に黄橙色地山土に近い土が楕円形にあったことからSK 230の存在は知っていたが、正確なプランの確認はやはり第Ⅴ層地山土上面であった。平面形は隅丸の長方形を呈し、坩口部で長径1.72m×短径1.43m、深さ0.60mである。埋土はb層黄褐色土を黒～暗褐色土(a・c・d)が取り囲むような形であり、b層はほんのわずか炭化物を含んでいたがほとんど地山土と変わらないものであった。壁は垂直に近く、坩底面は平坦で東から西へ向かいわずかにのぼりになる。西辺に沿いSK 18で見られたような溝状の落ち込みがあり、この場合は東へ開く鋸状を呈している。溝は長さ87cm・幅21cm・深さ5cmで、中に黒色土がはいつていた。埋土黄褐色土(b)中に30cm×20cm×7cmの自然石が長辺を垂直にして立っていたが、その上面は遺構確認面から5cm

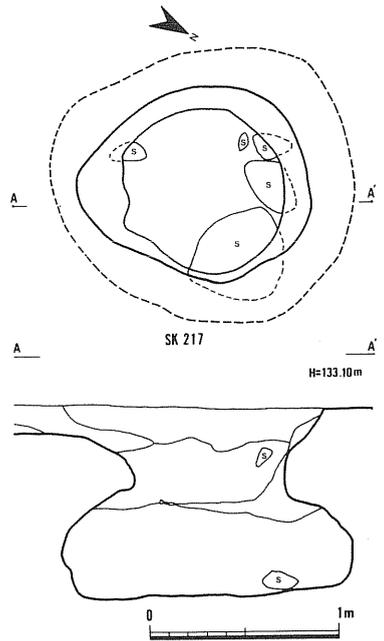


第38図 S K230土坑墓

程下であり完全に埋土に覆れていた。長軸方向はN49° W。出土遺物で図示できるものは全くなかった。

SK 217 フラスコ状ピット (第39図 図版23)

地山上面で長楕円形の土坑墓として確認された遺構であるが、北側部分で下方へ行くほど広がりはじめ、断面はいわゆるフラスコ状ピットになった。平面形は円形で口径0.80m・底径1.35m・深さ0.97mを計り、最大径は底面から0.2m上ったところで1.52mある。埋土は黒～暗褐色土を主体とし軟かい。埋土中に土器片や大きな自然石を多く含む。出土した遺物は第41図と第44図12～20であるが、ほとんど晩期前葉末のものである。第41図は坑底埋土中からバラバラになって出土した。



第39図 S K217フラスコ状ピット

S K 219 フラスコ状

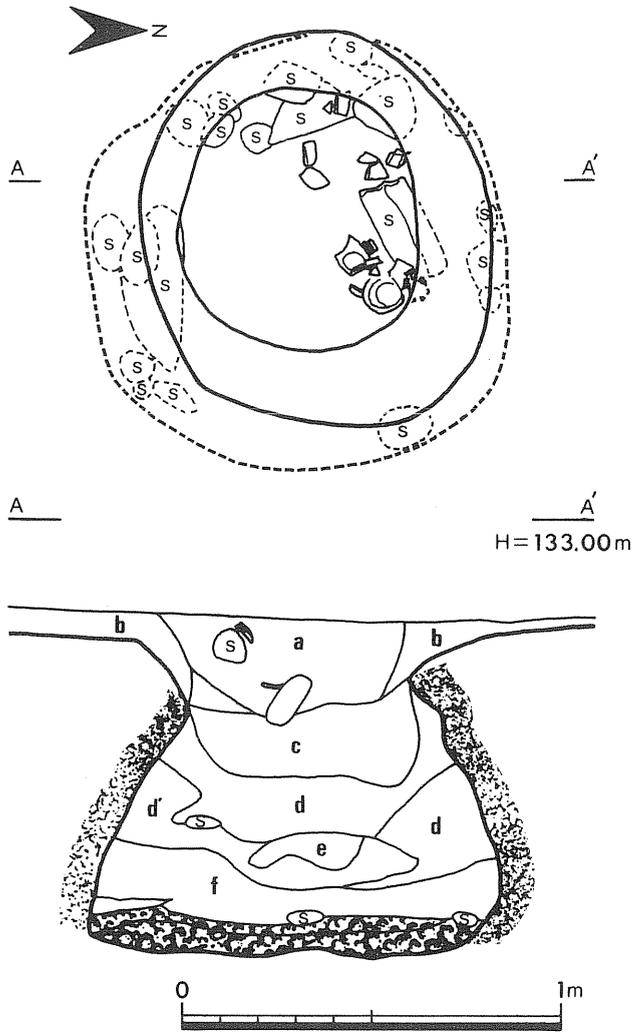
ピット (第40図 図版
23)

墓域中央部で埋葬・土
塚墓群に混じって発見さ
れたもので、遺構確認面
は地山上面である。平面
形は円形であるが底径が
口径より大きく、断面は
いわゆるフラスコ状を呈
する。口径0.57m・底径
1.00m・深さ0.90mを計
る。埋土は黒～暗褐色土
を主体に軟かく、下方に
は焼土を含むものもある。
(e～g)。底面直上には
焼土・大きな自然石と伴
に炭化した粟が敷きつめ
られたように厚さ10cm程
あった。図に示したとお
り壁全体が火熱を受けて
赤く焼けており、底面近
くと肩部にそれが特に著
しく、肩部では焼土の厚
さが5cm以上のところも
あった。出土した遺物は

炭化粟の他土器少量である。第44図23・24がそれで、23は後期中葉、24は晩期中葉の土器である。

その他の遺構内出土遺物 (第42～48図 図版22～24)

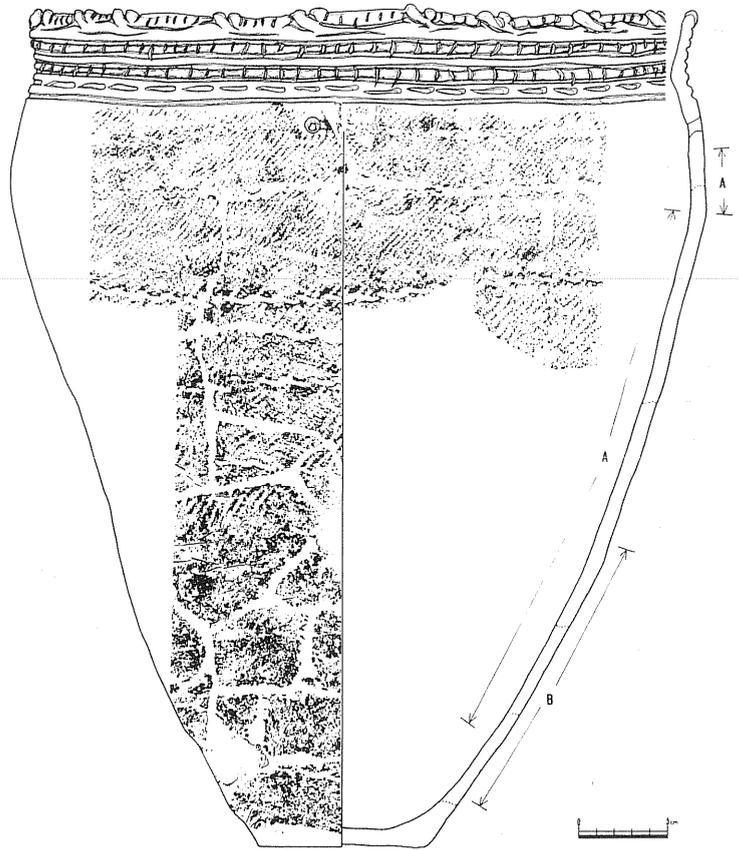
第43図1は口縁がやや内傾する鉢形土器である。口唇上には刻目が施され、頸部文様帯は3段に施された刺突列によって構成される。7は体部が球形を呈する小型の台付深鉢形土器である。体部にはLR縄文を施した後に4条の平行沈線が施されるが、これらの平行沈線は6か所でS字状沈線によって連絡される。色調は明褐色を呈する。8は口縁からほぼ直線的に降りる鉢形土器である。口縁直下には向きの異なる爪形文が深く施される。体部はLR縄文を左上～右下の方向で回転施文



第40図 S K 219フラスコ状ピット

する。前期前葉。

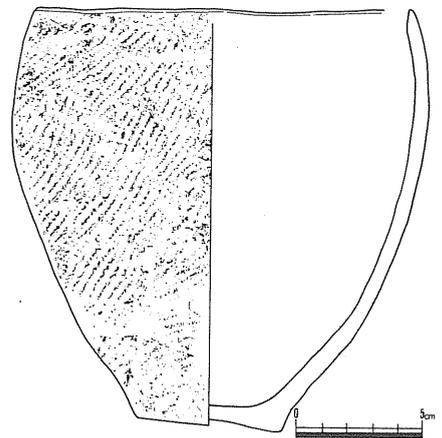
45図7は体部に組紐が回転押捺される。5・6・8・11・31とともに前期前葉に位置する。13は壺形土器の口頸部破片であるが、沈線間には結節部が設けられる。14・18・19とともに晩期後葉。17・21・25・26・30は頸部文様帯に羊齒状文が施される。24・30・34は体部文様帯に彫刻的手法によって磨消縄文が描かれ、晩期前～中葉に位置する。



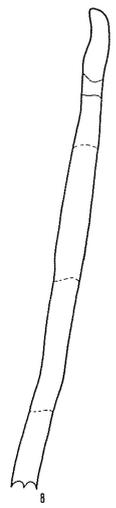
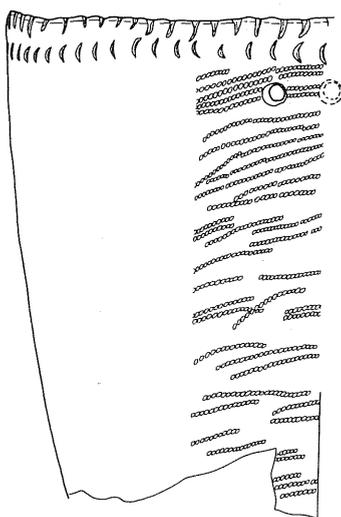
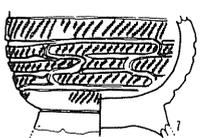
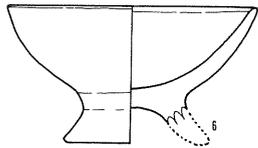
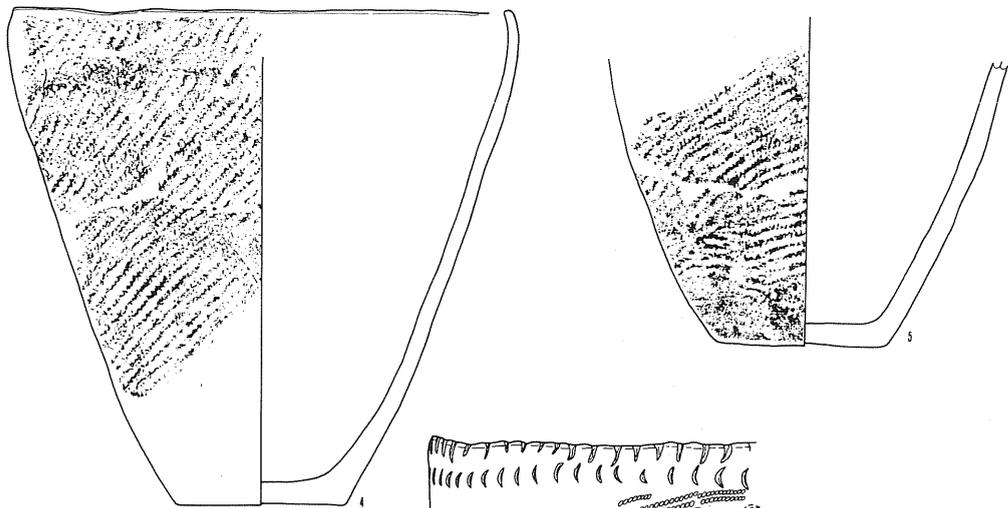
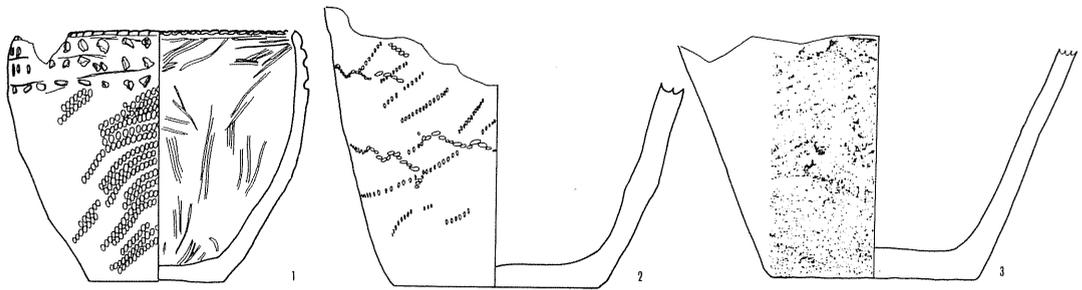
第41図 SK 217出土土器

第46図1は体部に異条斜縄文の施された土器で5・7・9とともに前期前葉に位置する。26・28は磨消縄文と刺突文が施された土器であり、18・19・21・22・27・31・34とともに、後期後葉に位置する。

第47図12は頸部文様帯に2段に截痕列が施される。11・13とともに晩期中葉に位置し、1～4・9はほぼ同時期の土器と思われる。

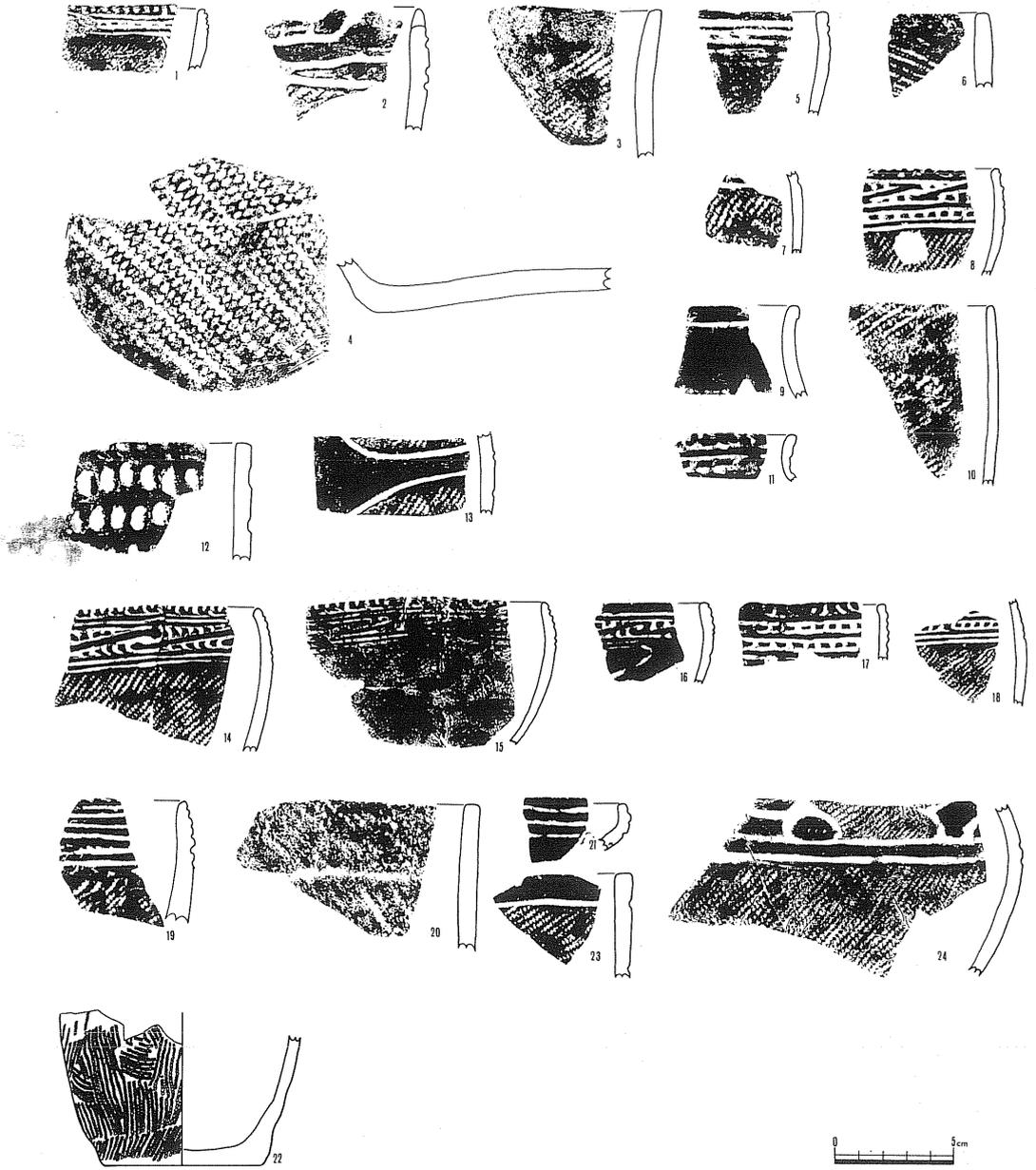


第42図 遺構内出土土器(1)
S K 225



- | | | | |
|-------|---------|---|---------|
| 1 | S K 207 | 6 | S K 282 |
| 2, 7 | S K 225 | 8 | S K 284 |
| 3 ~ 5 | S K 249 | | |

第43図 遺構内出土遺物(2)



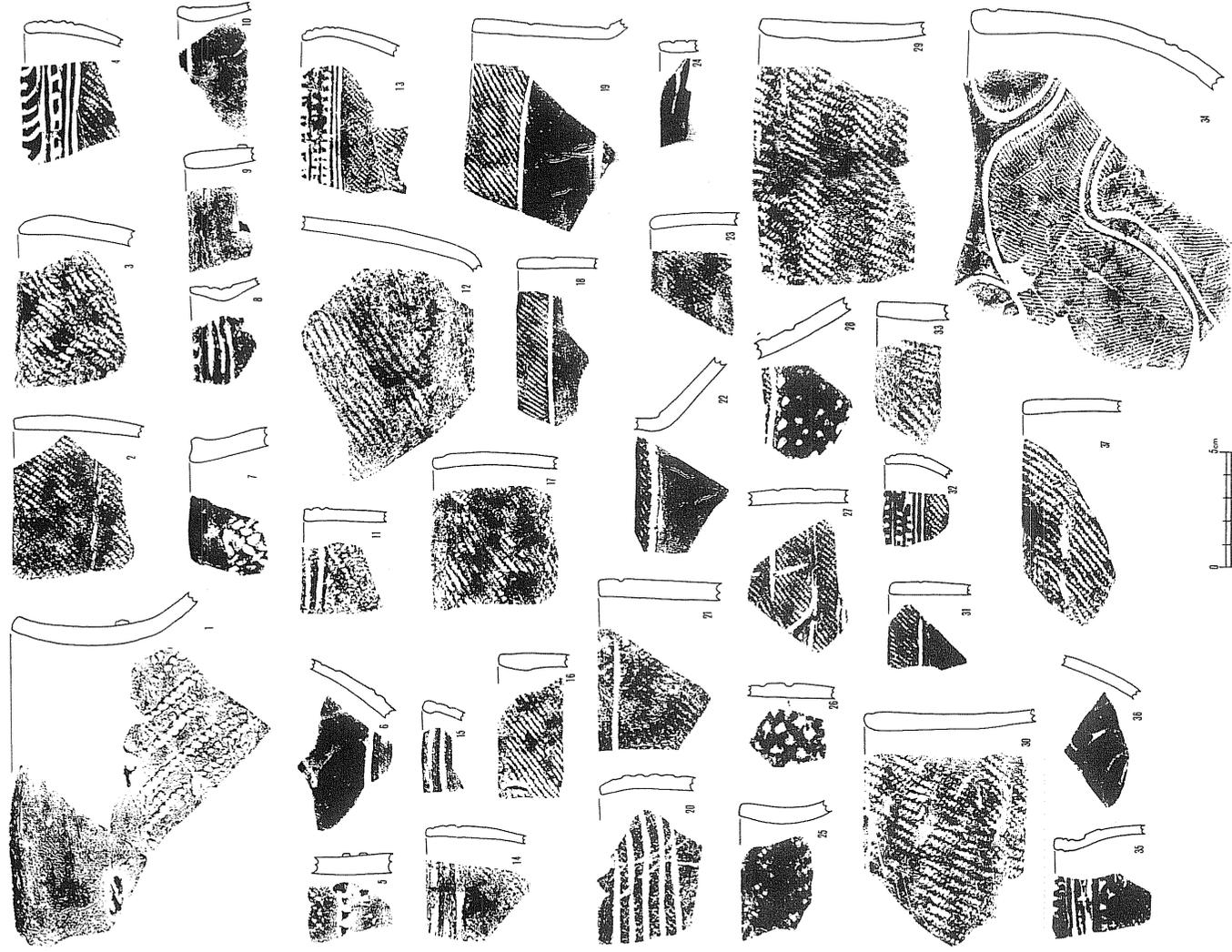
- | | | | |
|--------|---------|---------|---------|
| 1 ~ 4 | S K 18 | 11 | S K 221 |
| 5 | S K 220 | 12 ~ 22 | S K 217 |
| 6, 7 | S K 202 | 23, 24 | S K 219 |
| 8 ~ 10 | S K 220 | | |

第44図 遺構内出土遺物(3)



- | | | | |
|------|---------|--------|---------|
| 1, 2 | S K 200 | 12~16 | S K 223 |
| 3, 4 | S K 201 | 17~27 | S K 225 |
| 5, 6 | S K 205 | 28, 29 | S K 232 |
| 7~10 | S K 208 | 30~33 | S K 235 |
| 11 | S K 209 | 34, 35 | S K 237 |

第45図 遺構内出土遺物(4)



1 ~ 10
11, 12
13 ~ 15
16 ~ 17

S K 238
S K 242
S K 243
S K 248

18 ~ 22
23, 24
25, 26
27, 28

S K 249
S K 250
S K 251
S K 259

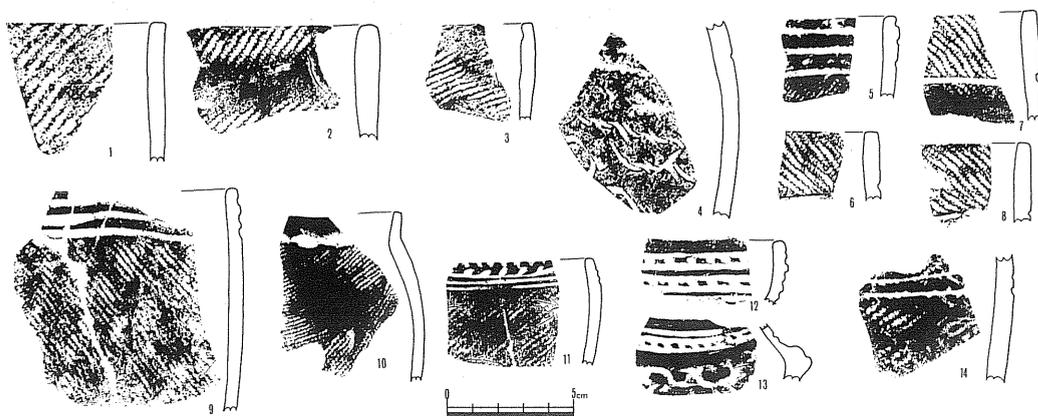
29, 30
31, 32
33, 34
35, 36

S K 260
S K 262
S K 264
S K 266

37

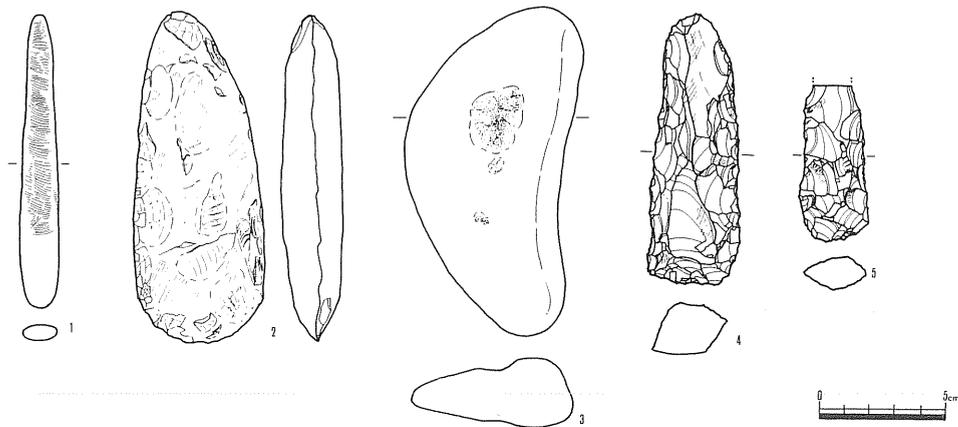
S K 268

第46図 遺構内出土遺物



第47図 遺構内出土遺物(6)

- | | |
|--------|---------|
| 1 ~ 4 | S K 268 |
| 5 | S K 269 |
| 6 ~ 8 | S K 280 |
| 9 ~ 14 | S K 284 |

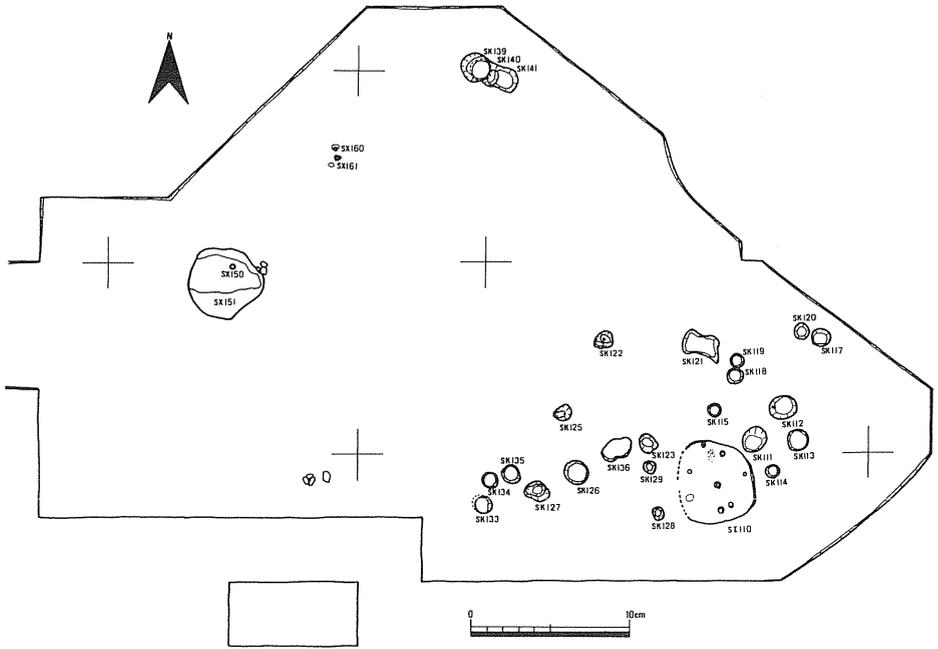


第48図 遺構内出土遺物(7)

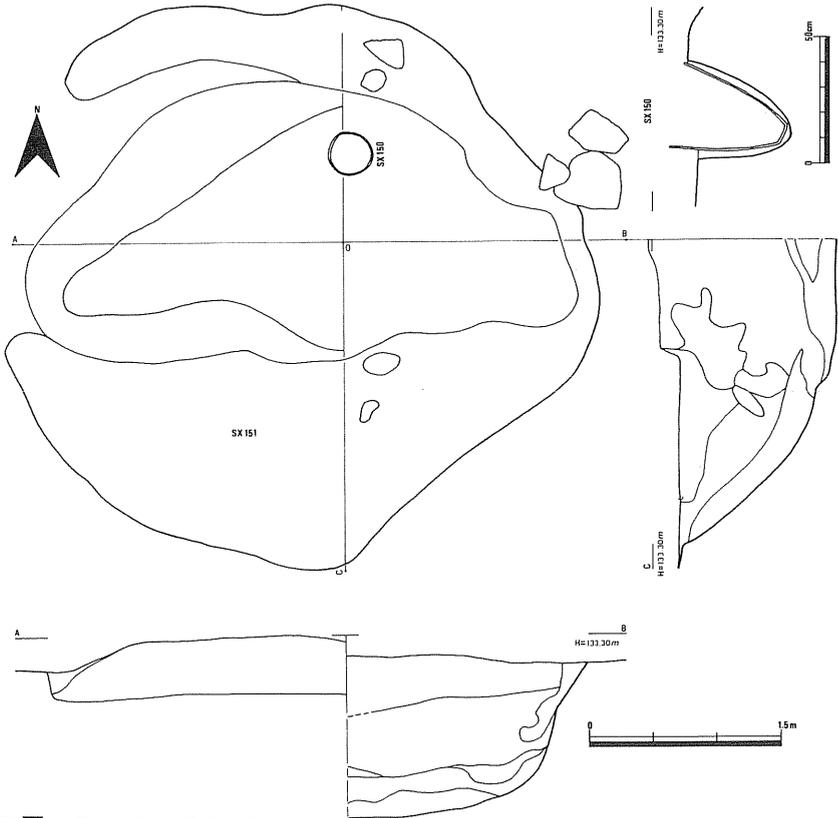
- | | |
|---|---------|
| 1 | S K 79 |
| 2 | S X 09 |
| 3 | S K 228 |
| 4 | S K 111 |
| 5 | S I 110 |

(4) II-B区

II-B区は遺跡東端部である。田圃であったため南側半分は整理され、黒色土層は完全に取り除かれ耕作土下すぐに地山黄橙色土であった。調査面積は1,440 m²で、竪穴住居跡1・埋甕1・埋設壺2・土塚墓11・土塚11基を発見した。調査区内ではさらにS I 110・S K 112等を中心とする南東遺構群と、S X 160・161を中心とする北西遺構群とに分かれる。



第49图 II-B区遺構配置図



第50图 SX150, SX151

S X 150 埋甕 (第50図 図版40)

S X 151 風倒木痕上面にある埋甕で、口縁部をやや北に倒しながら正立していた。埋設穴はそれほど明確ではなかったが、埋甕より6~7cm径が大きかったにすぎず底面の余裕はない。埋甕中の埋土は褐色でやや軟質であった。

第51図(図版43) 口唇上に2個一組のB突起が6か所に付され、突起間は10か所前後の刻目によって小波状を呈する。口縁には3条の沈線がめぐるが上から1条目の沈線は隣り合う突起の谷部と谷部を連絡する沈線になっている。体部はLRの斜行縄文であるが、縦に4cm幅で綾絡文がはいる。色調は外面暗〜明褐色、内面明褐色を呈する。胎土は硬質で、焼成も良好である。

S X 151 風倒木痕 (第50図 図版40)

風倒木痕と思われる地山土の高まりとそれを取り囲む黒色土の形のは、I-A : 2, I-B : I, II-A : 1,

II-B : 1, III : 1,

それぞれあったが、

このS X 151で概略を述べ他は省略した。

S X 151の場合4m

×2mの地山土状の

高まりがあり、その

まわりを幅0.2m~

0.8mの黒色土が取り

囲むように存在す

る。地山土状の土は

地山土とほとんど変

りないが、地点によ

り若干汚れがある程

度でしまっている。

断面を見ると、黒色

土は地山土状土の下

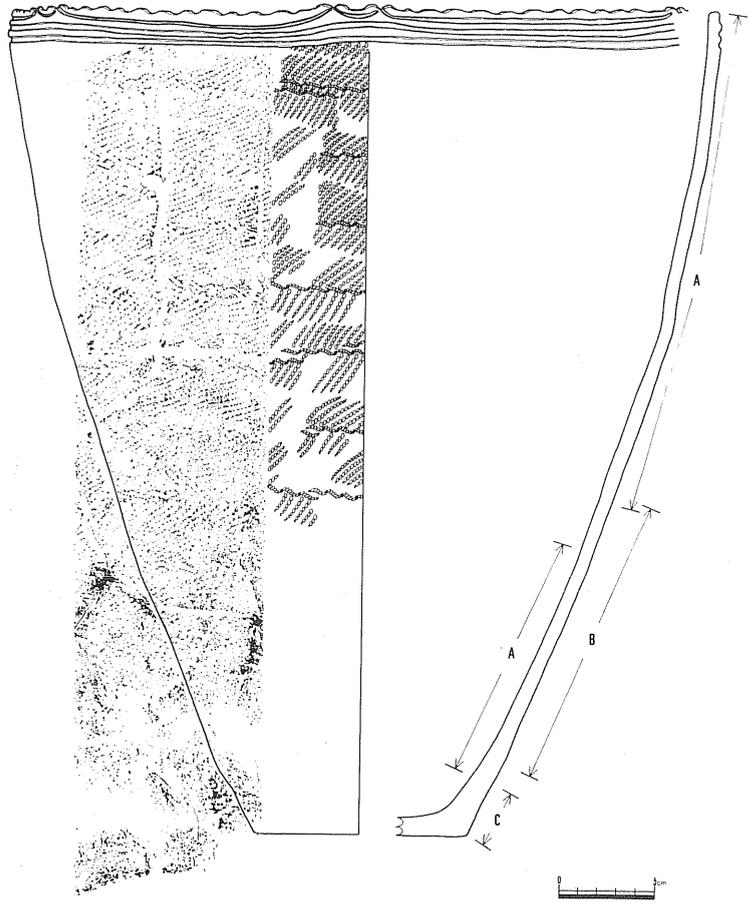
にわずかにはいるこ

ともあるが、中央部

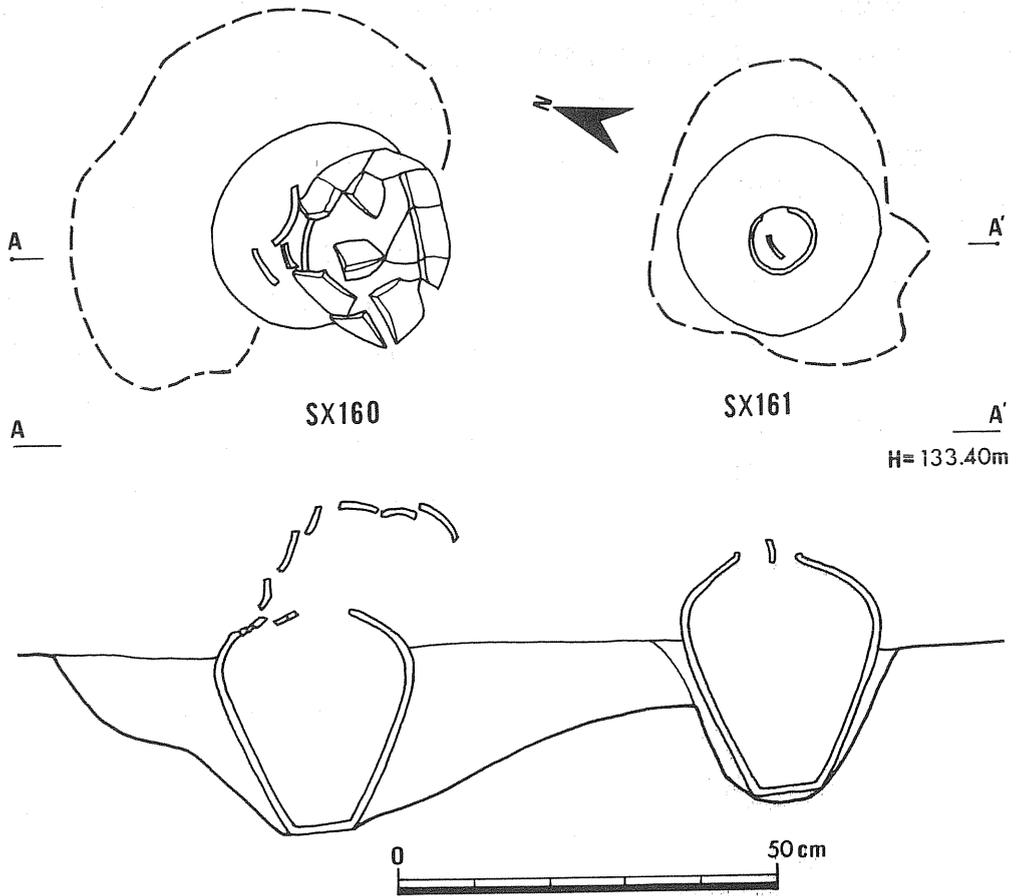
底面までは達せず両

側からつながってい

ることはない。



第51図 S X 151土器



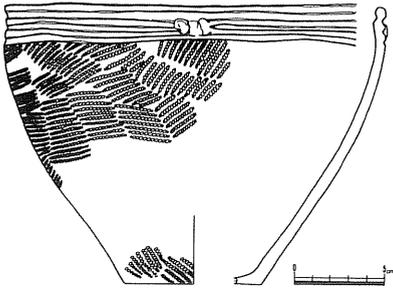
第52図 S X 160, S X 161埋設壺

S X 160・161 埋設壺 (第52図 図版41)

II-B区北隅, 第三層中位で第54図の壺形土器(S X 160)が北側に, 第55図の壺形土器(S X 161)がそれより南に0.5m離れて発見された。S X 160には第53図の鉢形土器が底部を上にしてかぶせられていた。この2個の壺形土器の埋設穴は断面観察によればそれほど大きなものではなく, 特にS X 161では土器の径より10cm前後しか広くなく深さも土器底面いっぱいである。これらの壺形土器はほとんど傾きを持たず直立しており, とともに口縁部から頸部にかけ破損していた。

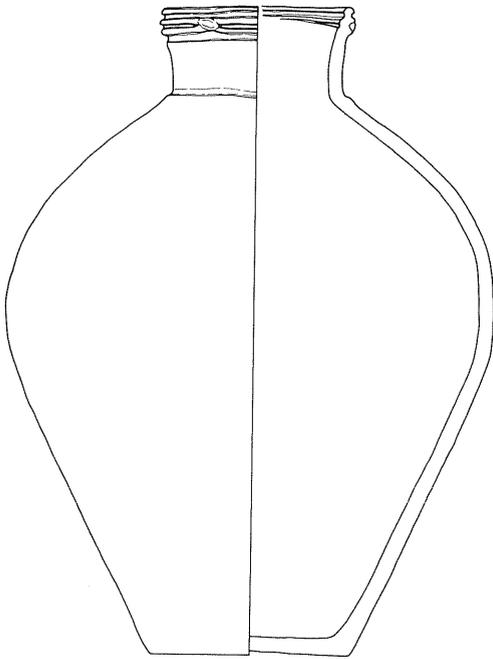
S X 160 土器(第54図 図版44) 口縁部外面には3条の平行沈線, 内面には1条の沈線がめぐる。外面3条の沈線間に作出された2条の隆線は3か所で上下から押され連結する。頸部外面はケズリのあとのナデ調整によって薄くされ肩部との明瞭な段を有する。器外面体部下半は横方向へのヘラケズリのあと同方向のナデ, 胴部から口縁部にはいねいな横位のナデ調整が施されている。

器内面には下半程ケズリを伴うナデ、肩部から口縁部にかけてははいねいな横方向のナデ調整を行う。底部には笹葉状の圧痕が角度を変えた形で認められる。おそらく製作時に下に敷き土器を回転させたものと思われる。色調は内外面とも黄橙色～明黄褐色を呈するが大小の黒斑が数か所にある。胎土には0.5mm前後の白色砂粒を含む粘土を用いる。焼成は極めて良好である。

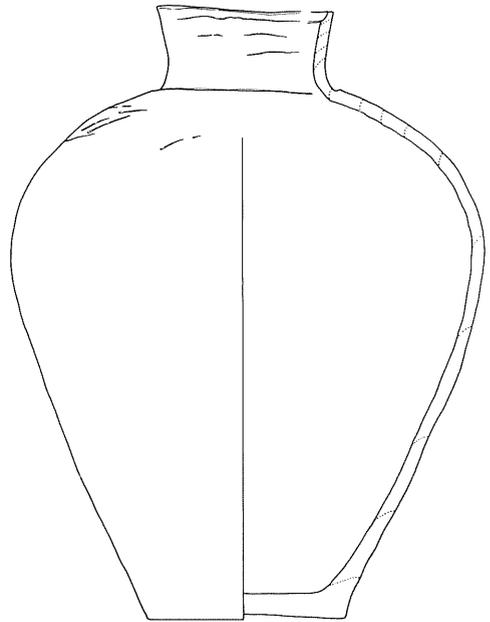


第53図 S X 160蓋

S X 160 蓋 (第53図 図版43) 上記壺形土器の蓋として使用されていた鉢形土器である。口縁は直立し体部がやや膨らみながら下降する。頸部文様帯は3条の平行沈線及び沈線の結節部によって構成される。結節部では第1条と第3条の沈線が縦位に施された短沈線によって連結され、その両側では沈線によって掻き寄せられた粘土の高まりが2条の隆



第54図 S X 160土器



第55図 S X 161土器



線を結ぶ。文様単位は3単位となる。体部はLR縄文を左上～右下、または縦方向に回転施文する。口縁部内側には1条の沈線がめぐり、内面は横方向の調整がなされる。内面には若干の煤状炭化物の付着が認められる。色調は黄灰色を呈し、かなり大きな黒斑部分も認められる。胎土には1mm程の砂粒が混入されており、焼成は良好。また、このS X 160の近くからは第58図7の晩期後葉の台付土器台部が出土している。

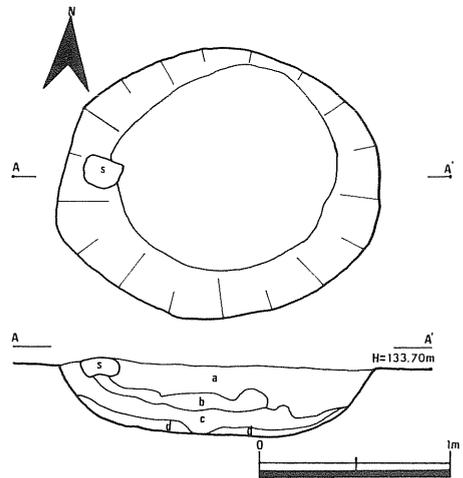
S X 161 土器 (第55図 図版44) 口頸部がやや外反し体部上半 $\frac{1}{3}$ 程に最大径を持ち、以下直線的に下降する壺形土器である。S X 160の壺形土器と比して土器最大径部分である肩の張りが強い。器面は無文であるが、口縁裏側及び頸部と体部の境の屈曲部には調整によって作られた凹線がめぐり、口頸部及び体部上半では横方向の調整がなされ、体部下半では横及び縦方向の調整が併用される。口頸外面では4本の粘土帯を貼り合わせた輪積痕が認められた。底部には第54図壺形土器と同様の笹葉状の圧痕が認められる。色調は全体に明黄褐色を呈するが、体部にはかなり広い黒斑部分がある。胎土はキメの細かい精選された粘土を用いるが、径0.5mm程の細砂粒をわずかに含む。焼成は極めて良好である。

S K 112 土坟墓 (第56図 図版41)

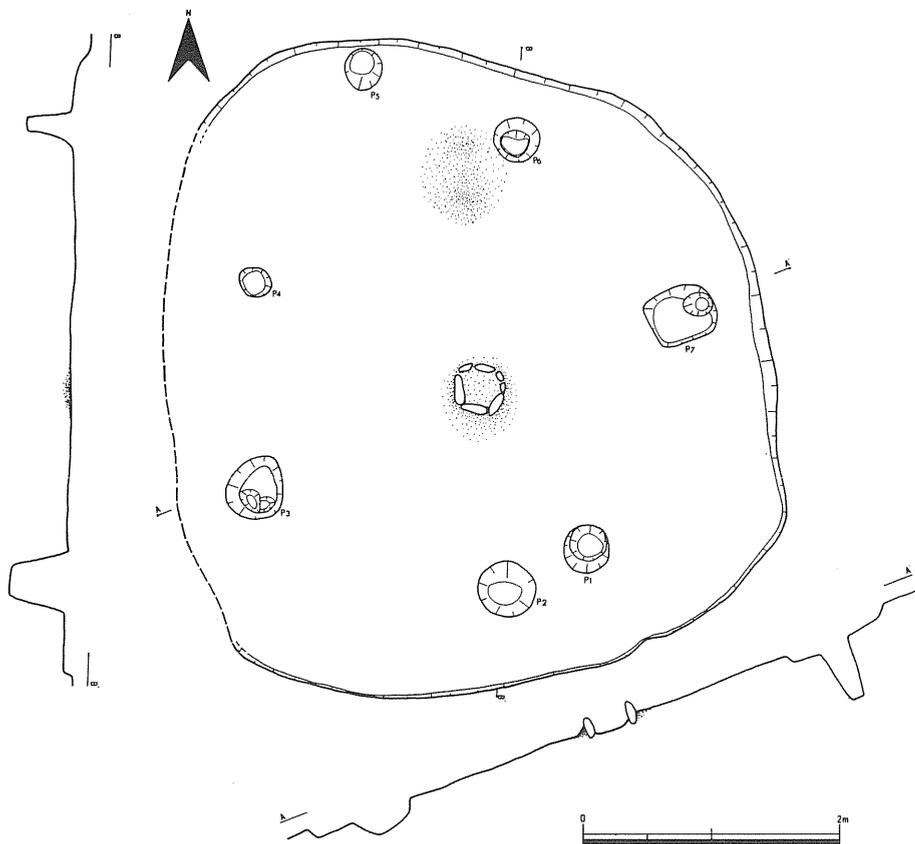
埋土は上面から中央部は黒褐色土で軟かく、底面に近づくとつれ明黄褐色化ししまりもよくなる。上面西壁近くに径20cmの丸い自然石が1個ある。第58図2・4・5は本土塚出土土器で、3片とも晩期後葉に位置づけられる。5は体部上半に粘土瘤の貼り付けによる結節部を持った変形工字文が施され、S K 119出土のものと接合する。

S I 110 竪穴住居跡 (第57図 図版42)

遺跡東端部で発見された竪穴住居跡であるが上部はほとんど削平されていた。平面形は径約5mの不整形円形を呈し、壁はほとんど残っていない。床面はほぼ平坦で良好な地点も多かった。中央部に石囲い炉があり、その周囲及び炉と北辺の中間に焼土があった。柱穴は全部で7本あり、このうち形も整い深さもあるP₁(深さ床面から45cm)・P₅(50cm)・P₆(37cm)・P₇(47cm)などが主柱穴となるであろうが、どのような組み合わせになるのかは不明である。床面及びP₂内から炭化した栗や胡桃が若干出土した。第59図1～8は本住居跡床面ないし若干浮いた状態で出土した土器で、大部分中期前葉に位置する。1は小波状口縁の鉢形土器片であり、頸部には2条の平行沈



第56図 S K 112土坟墓

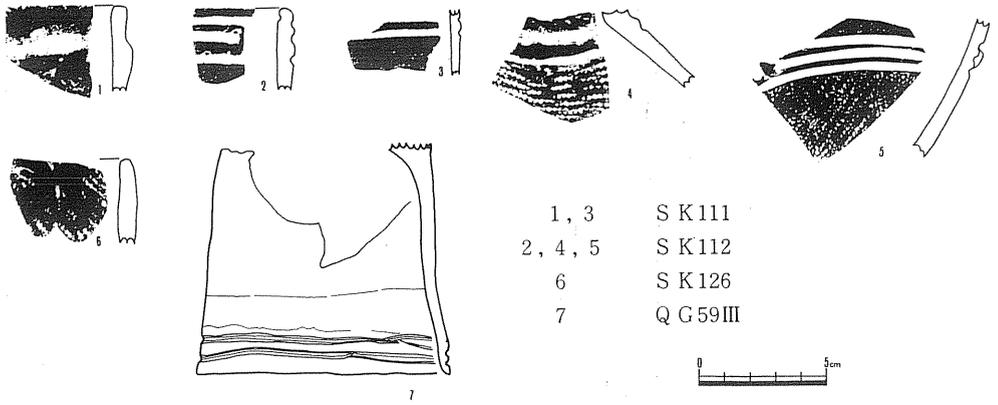


第57図 S 1110 竪穴住居跡

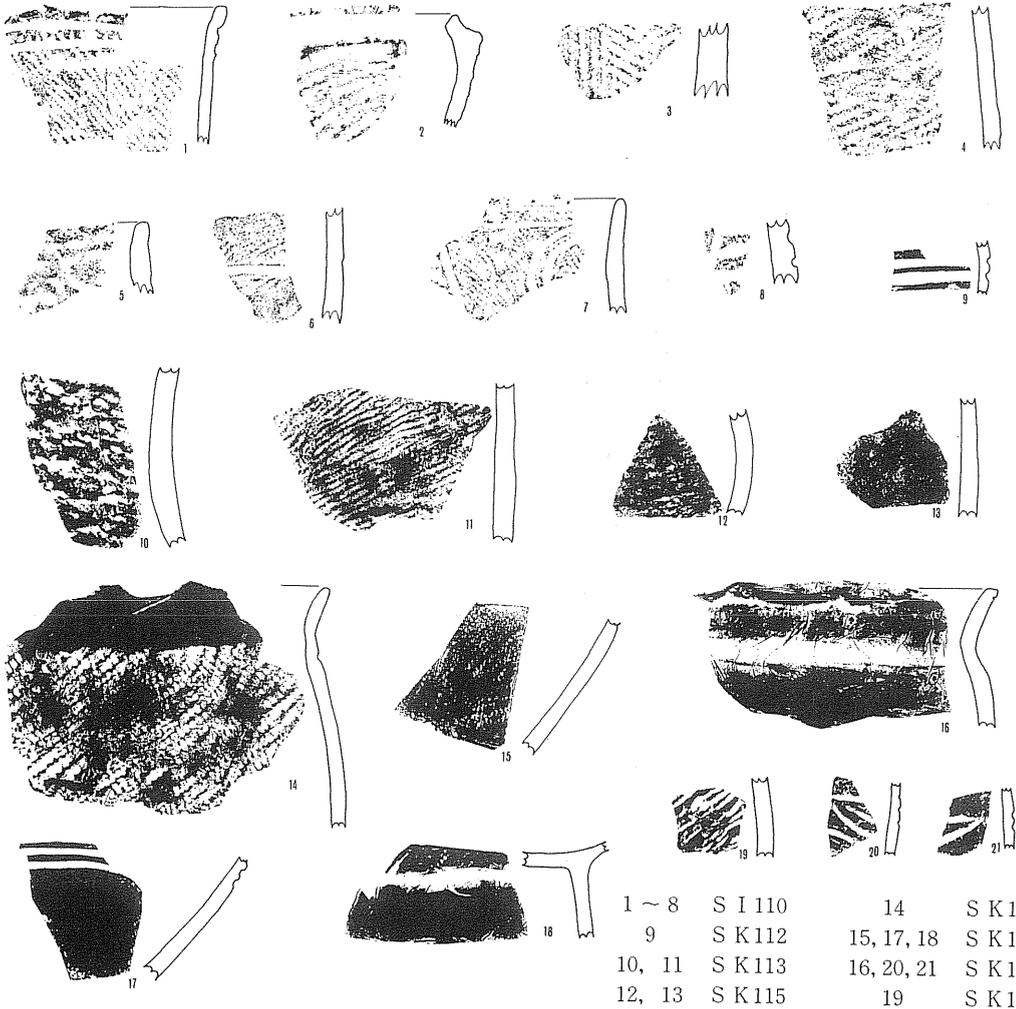
線が施され、沈線間には点列が加えられる。2は口縁が内屈する鉢形土器破片であり体部にはL R Lの複節の縄文が横位回転施文される。5は口縁部がわずかに開く鉢形土器の破片であるが、口縁直下に右から左方向への刺突文が施される。7は地文としてL R縄文を縦位に回転施文したあと、沈線によって文様を描いている。また、細い竹管状の施文具による刺突列も見られる。焼成は大部分良好である。

遺構内出土土器（第58・59図 図版45）

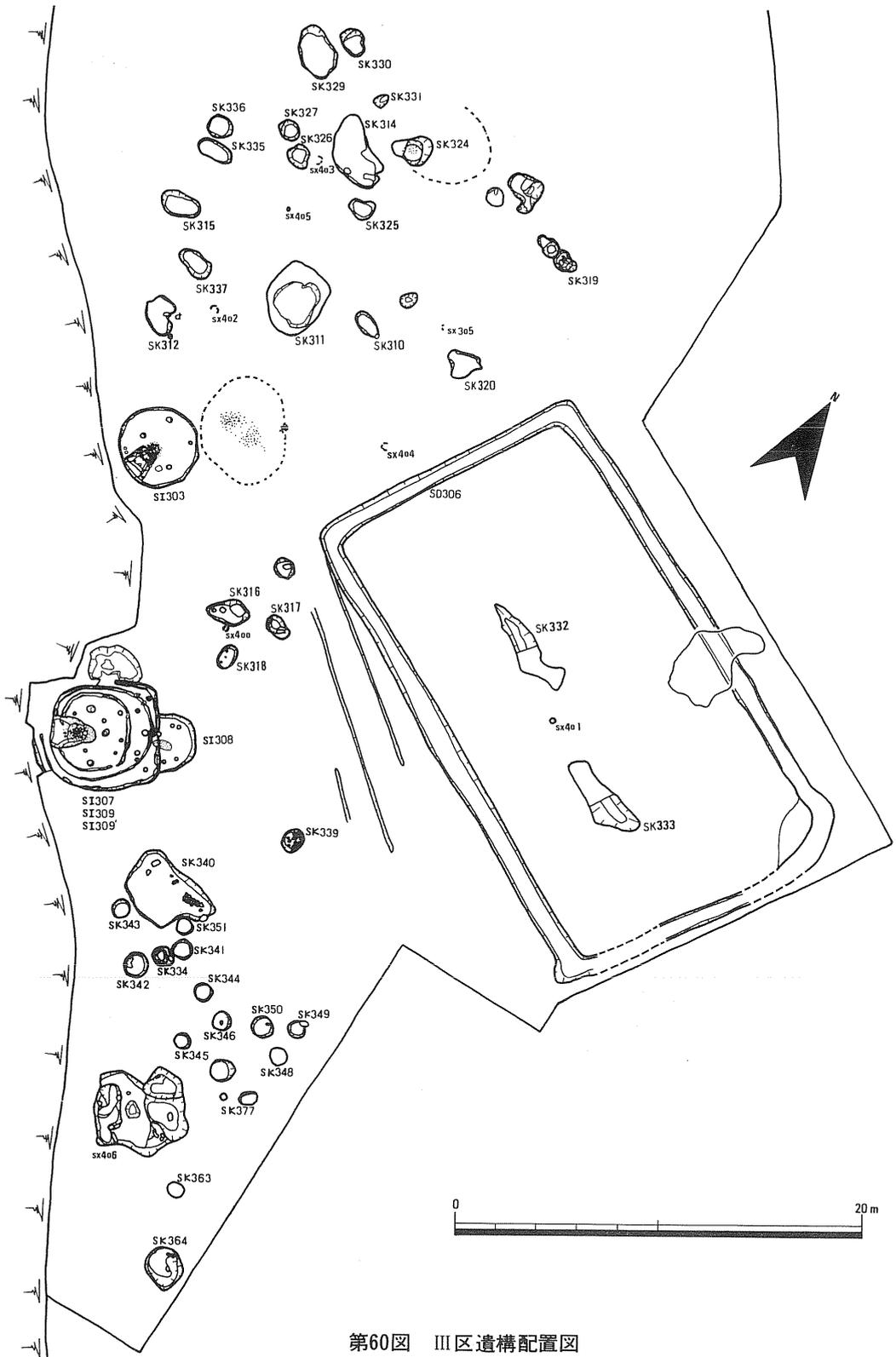
第59図10～21はII-B区の上記外の遺構から出土した遺物である。10は縄文時代前期のものであるが、11～21は晩期後葉に位置づけられるものである。14・16は無文の口縁部が外反する深鉢形土器であり、晩期後葉にみられる粗製土器である。



第58図 遺構内出土遺物(1)



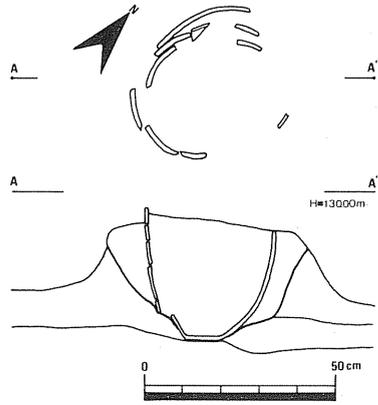
第59図 遺構内出土遺物(2)



第60图 III区遺構配置図

(5) III区

III区は遺跡西端部にあたり、南側一部が畑地、他大部分水田で東側ほど段丘礫層が高くなっている。発見遺構は竪穴住居跡5・埋甕6・土塚48・溝状遺構2である。このうち2つの溝状遺構(S D 301・306)は調査区北西隅と東部にあり、S D 301は8.5m×8mの方形、S D 306は26m×14mの長方形を呈する。溝の幅はS D 301・306ともに約0.9m、深さは0.3～0.4mで断面はゆるい鍋底状を呈する。溝埋土は相方とも軟かい黒～黒褐色土で自然堆積を示す。埋土からは縄文土器小破片が若干出土するが、



第61図 S X 403埋甕

溝に囲まれた中からは他と変わった特別の遺構もなく、掘込面が耕作土によって攪乱されるくらい浅いことからして後世の何らかの遺構と考えられる。土塚は小型の整円のものも多く、S K 324のように明らかに土塚墓と思われるものも多いが、不整形のものも多い。

S X 403 埋甕
(第62図)

本調査区中央西部で確認された埋甕で、後述するS



第62図 S X 403土器

K 324 土塚の4 m程南西に位置する。遺構確認面は暗褐色土上面でありほぼ正立した形で発見された。埋襲中の埋土は黒色のボソボソした土である。

S X 403 土器 (第62図 図版48) 地文としてLR縄文を横位回転施文する。原体は長さ1.5 cm程で非常に短い。色調は外面黄褐色, 内面やや赤褐色。精選された粘土を用いており0.5 mm程の細砂を若干含む。焼成は良好。

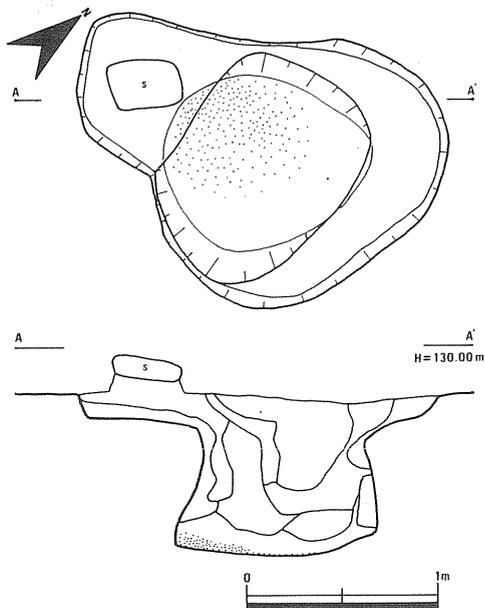
S K 324 土塚墓 (第63図)

S I 303 竪穴住居跡の北約17mで発見された土塚墓。塚口部は東西に浅く広く, 中央部で一度すぼまり西側底面側で一部広がる。塚底面西側を中心としてベニガラ散布があった。埋土は上層程炭化物を含む黒色に近いもので,

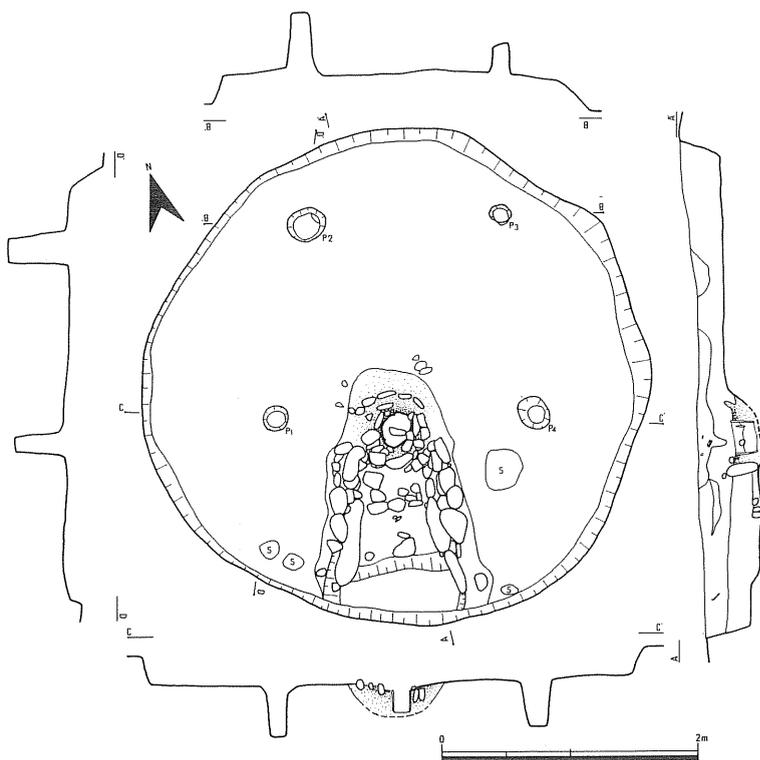
下層では褐色がかった。

S I 303 竪穴住居跡 (第64図 図版49)

調査区中央西端部で発見された遺構で, 地山土上面の黒褐色土中で存在を知ったが正確なプランの確認は地山上面であった。平面形は径3.9 mの円形で内部に4つの柱穴と複式炉を有する。壁は明



第63図 S K 324土塚墓



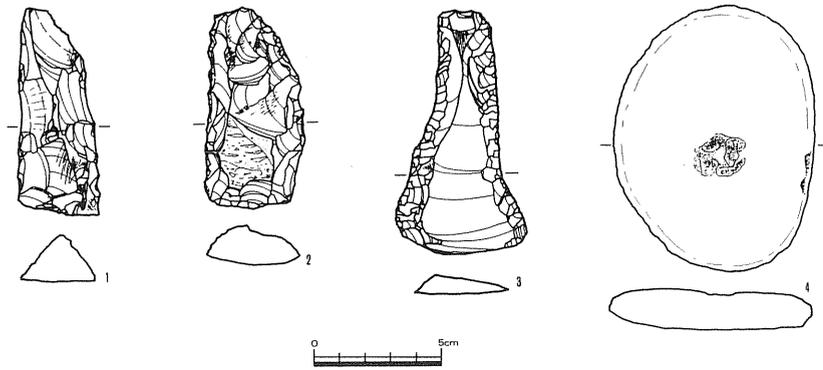
第64図 S I 303竪穴住居跡

確で地山土を10~25cm程掘り込んでおり垂直に近い。主柱穴は4本で、床面からの深さはP₁:40cm, P₂:45cm, P₃:25cm, P₄:38cmである。床面はほぼ平坦で中央部やや南寄りから南辺にかけ炉が造られている。炉は住居跡床面を台形状に0.2~0.3m程掘り込みその中の北側に底部を欠く深鉢形土器を埋設し、南壁には大小の自然石約60個を貼り付けるように立てて並べた複式炉である。石囲い炉の底面は、北側に偏平な石が敷かれ、南側にはそれがなく約10cmの段がつけられ南端部は一段高い。北側に敷かれた石は火熱のため割れてボロボロしたものが多い。石囲い炉に使用された自然石のうち最大のものは70×35×10cmという巨大なものであった。

出土遺物として、第65図1は炉に使用されていた深鉢形土器の体上半である。縄文帯が横位のS字状文を繰り返すが無文部分が縄文帯より若干高まっている。縄文帯の中はRL縄文を横位または左上~右下の方向で回転施文。下部は二次火熱を受けて赤褐色に変化しもろくなっている。2は鉢形土器体下半部であり撚りのゆるいLR縄文が左上~右下の方向で回転施文される。3は蓋形土器



第65図 S1303出土遺物



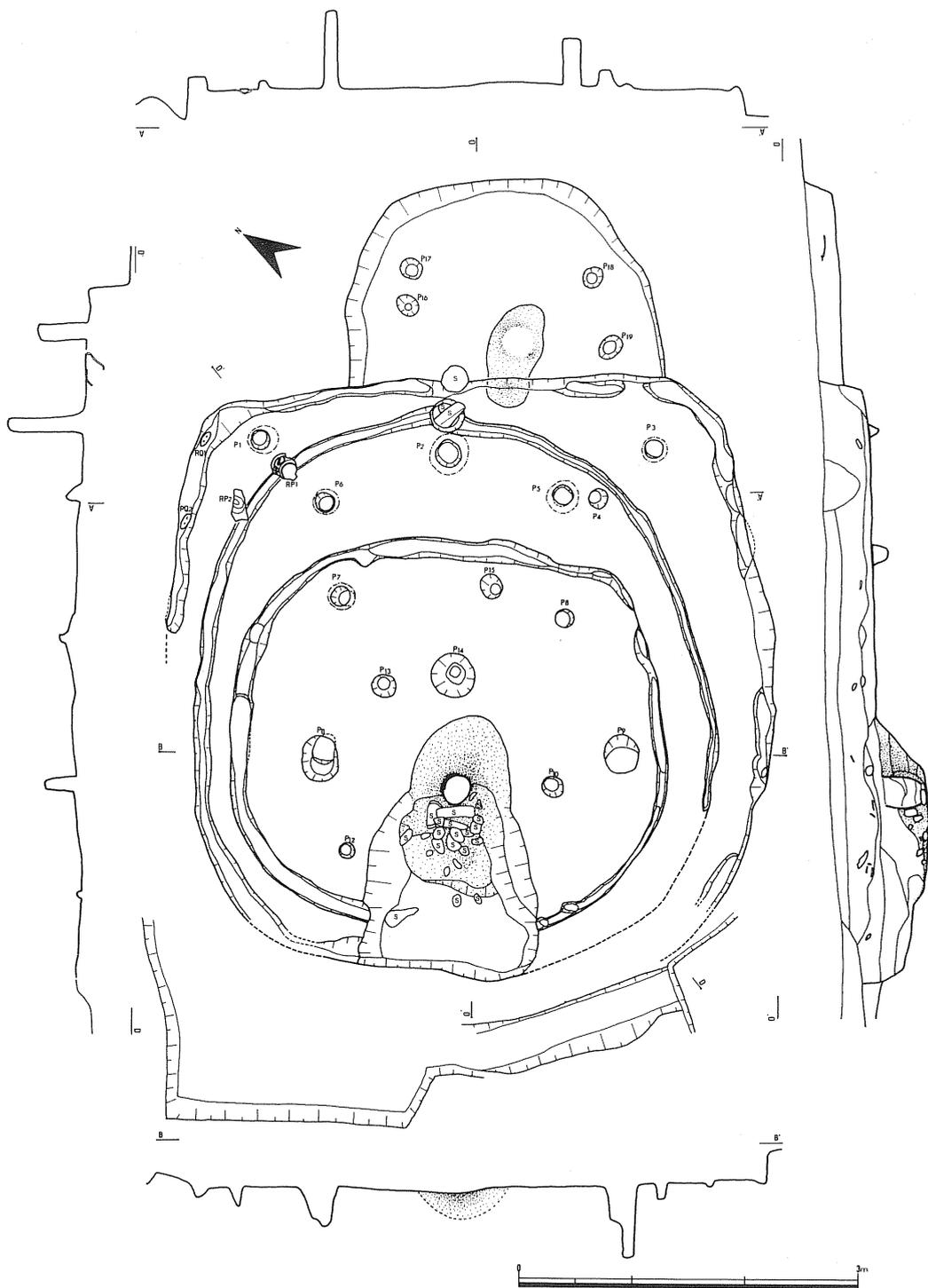
第66図 S I 303出土遺物

である。上部は円筒形に垂直に立ち上がり縁辺部に向って直線的に降りる。円筒形の上部を除いてL R 縄文が左上～右下の方向で回転施文される。色調は黒褐色を呈し、縁辺部内外面には煤状炭化物の付着を認める。4・5・6は注口部分で、4は器面に付された隆带上から突き出た注口部が外側に開く。注口部内面には厚さ1mm程に煤状炭化物の付着がみられる。5は強く上方にそり返る注口部である。7はR L 縄文を横位回転施文し、その上部には竹管による刺突列が並ぶ。8は土器底部を利用して作った土製円盤である。S I 303出土土器は65図2・3を除き中期後半に位置づけられる。また第66図1～4はS' I 303出土の石器類であり、石筥・搔器・凹石である。

S I 307・308・309・309' 竪穴住居跡 (第67図 図版50・51)

S I 303の南南東10mに切り合いのある4つの住居跡がある。黒褐色土層に遺物が集中していたことからその存在を知ったが、正確なプランの確認は地山上面である。

S I 307 この4つの住居跡の中では一番新しいもので西側が傾斜しているため正確なプランは把握できなかったが、平面形は長辺5.7m×短辺5.2mの隅丸方形を呈する。床面はわずかにさがっているが全般に平坦で堅く踏みしめられている。壁は垂直で、北東隅で約35cmの高さを持つ。壁に沿い周溝が途切れながらめぐり、深さ5cm程と浅い。主柱穴は4～5本で P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_9 ・ P_{11} がそれにあたる。いずれも45cm以上の深さを持つ。柱穴のうち P_1 ～ P_3 は柱掘方と柱穴が明確にわかる。径25～35cmの掘方に径10～15cmの柱を立てたものであろう。炉は中央部やや西にあり、底部を欠く深鉢形土器(第68図1)を埋設したものの。この埋設された土器の下には数個の自然石が敷かれ西側には2段に積み敷かれていた(図版52)。また東辺中央には径30cm・深さ23cmの円形ピットがあり、中に径15cmの丸い石と長さ40cmの細長い自然石が詰め込まれ、細長い石は頭部が南側に傾いていた(図版52)。床面に接して出土した遺物は少ないがR P 1 (68図3)・R P 2 (同5)がS I 309'



第67图 S 1307·308·309·309' 竖穴住居跡

の周溝におおいかぶさるようにして発見され、北東隅近くの周溝から凹石2個(RQ1・2)が出土した。

S I 309 壁は全く残存しないが周溝が残っており長径5.0m・短径4.6mのほぼ円をなすものと考えられる。支柱穴はP₅(40cm)・P₆(68cm)・P₉・P₁₁の4本で、炉の位置は307と同じであろう。周溝は幅10cm・深さ10cmで、断面U字形をなす。

S I 309' 残存している周溝から径3.5～3.9mのほぼ円形をなすものと思われる。周溝は幅15cm・深さ10～25cm、南西部で上面を削平されたため幅も狭く浅くなっている。支柱穴はP₇(39cm)・P₈(38cm)・P₁₀(30cm)・P₁₂(40cm)の4本と思われ、炉も307とほぼ同位置。

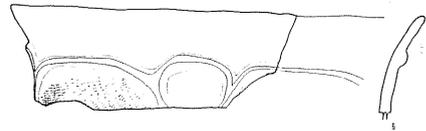
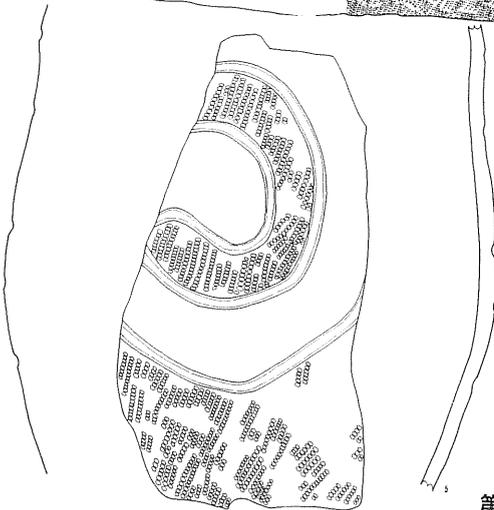
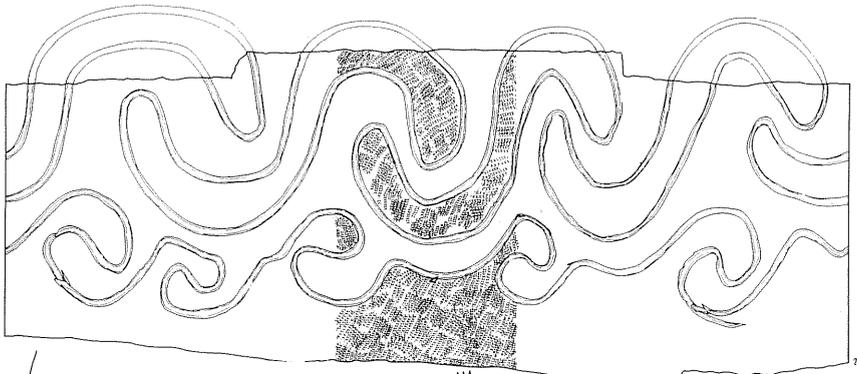
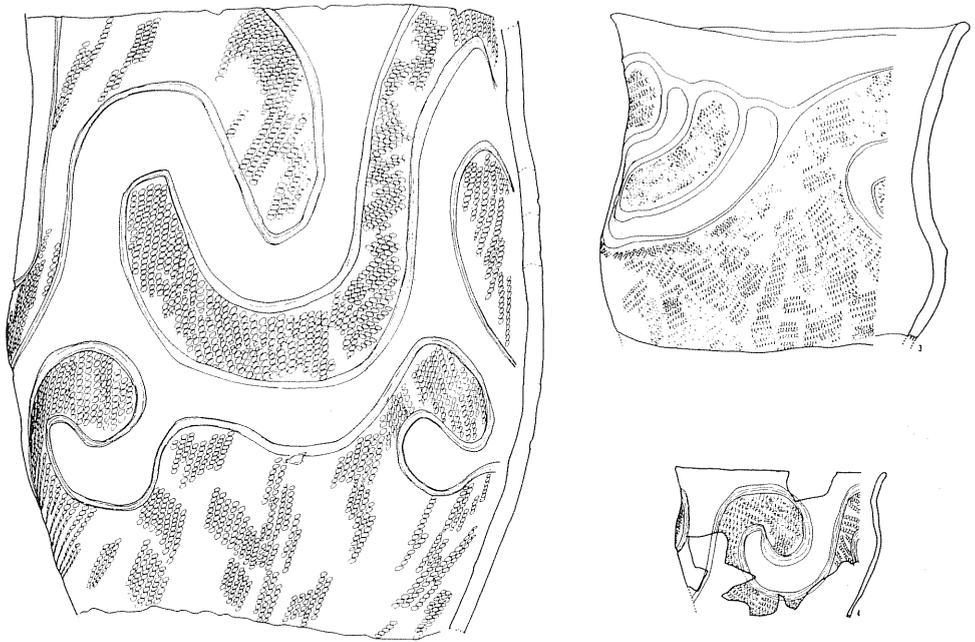
S I 308 307において西半分を切られているが、径約2.8mの円形プランの住居跡と思われる。周溝はなく床面は平坦で固い。壁高は25cmでやや角度を持って直線的に立ち上がっている。ピットは小さく浅いものが4個(P₁₆～P₁₉)あるが、柱穴とは断定しにくく、むしろP₅そばのP₄がその1つではないかと思われる。中央部に焼土が広がりこれが炉と思われる。焼土の中央部には丸く黒色土があり、そのまわりが特に加熱をうけていた。

307・309・309'・308の前後関係であるが、309と309'の周溝が307の床面として埋っていたことや、309周溝状にあったRP1・2の土器のあり方からして307は309より新しい。さらに307・309・309'の炉の位置がかわらず西側は傾斜して下降することから、309'があり、これが順に309・307として東側に拡張されたものと考えられる。また308の西側は307により切られているため、309・309'の位置関係などからしても、308が最も古いものと言える。したがって、古い方からS I 308→309'→309→307の順になるものと思われる。

第68図1は最大径が体部中位にある深鉢形土器体部である。体部の文様は縄文帯が横位のS字状文を作り、その末端の入り組み部分へ向って下位の波状の区画を持つ縄文帯の波頭部がのびる。縄文帯中の縄文は沈線による区画を施した後に加えられたRLの充填縄文である。文様単位は4単位。炉に使用されていたためか二次加熱をうけてもろい。2は1の展開図である。3は口縁外反するが向い合う2か所に波頂部をもつゆるやかな波状口縁を呈する。頸部には無文帯を持ち、体部では粘土紐の貼り付けによる微隆起と磨消縄文手法による文様が3単位描かれる。4は小型の鉢形土器である。体部は口縁の無文帯と体下部の縄文帯が渦巻状に入り組む。5も沈線の区画によって無文帯と縄文帯が渦巻状に入り組む。6は口縁下が無文化され体部文様は粘土紐貼付による微隆起と磨消縄文手法による文様とによって構成される。第69図1は口縁の内傾する深鉢形土器の破片である。文様は磨消縄文手法による。2は文様が微隆起と磨消縄文手法によって描かれる。3は口径部が内湾するキャリパー形の深鉢形土器口頸部破片で、微隆起と磨消縄文手法による文様が描かれる。

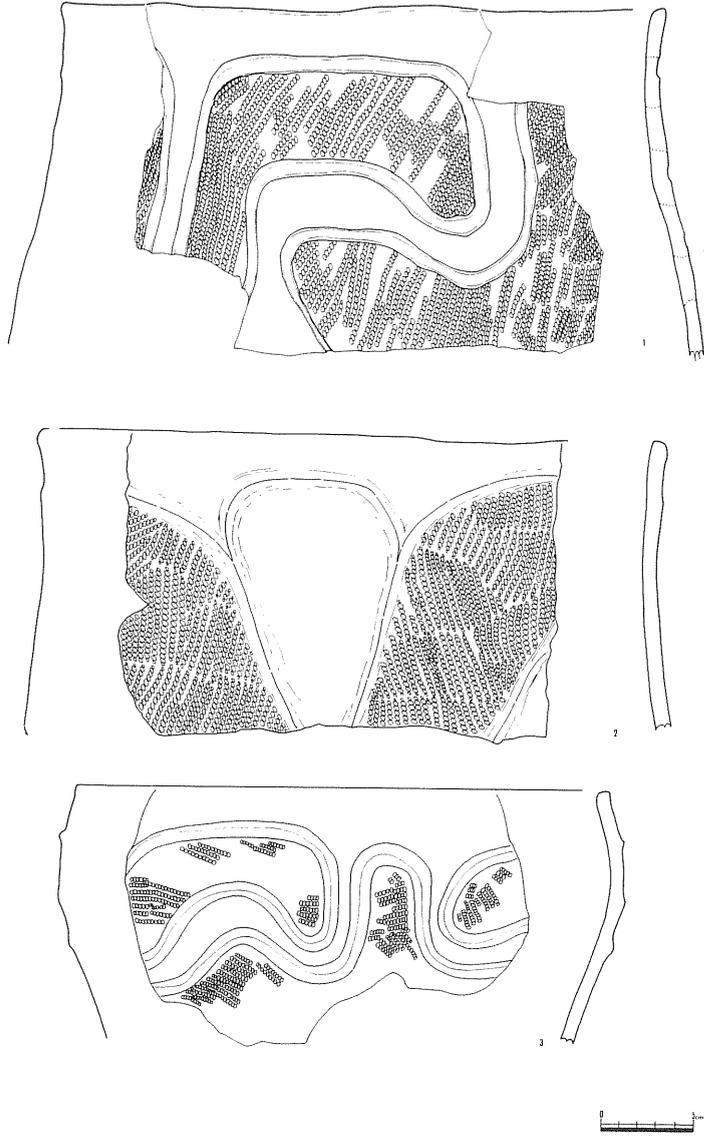
その他の遺構内出土土器 (第70図 図版56・57)

1は頸部に2段の鋸歯状沈線がめぐる。上段では7、下段では5か所2本の短沈線が下方に切れ込む。2は口縁部から体部にかけて円筒形を呈する深鉢形土器。口唇上には2個の小突起が付され



第68图 S 1307出土遺物(1)

る。頸部の無文帯部分には2条の平行沈線がめぐり、その下には末端に方形の小区画文を持つ沈線がひかれる。体部はLR縄文横位回転施文。色調は外面暗褐色、内面黄灰色を呈する。外面には少量煤状炭化物がみられる。3は頸部に1本の粘土紐が貼り付けられ刻目が施される。体部には綾絡文をもったRL縄文が施され、口縁部内外面には一対の補修孔を穿孔しようとした跡がある。色調は外面黒褐色、内面黄灰色を呈する。



第69図 S I 307出土遺物(2)

(6) その他の埋甕と網代痕のある底部 (第71・72図)

これまで詳述してきた埋甕とは異なるものも出ている。ここでは代表的なものを記述する。

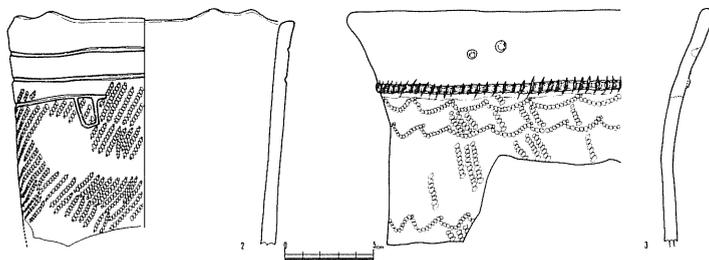
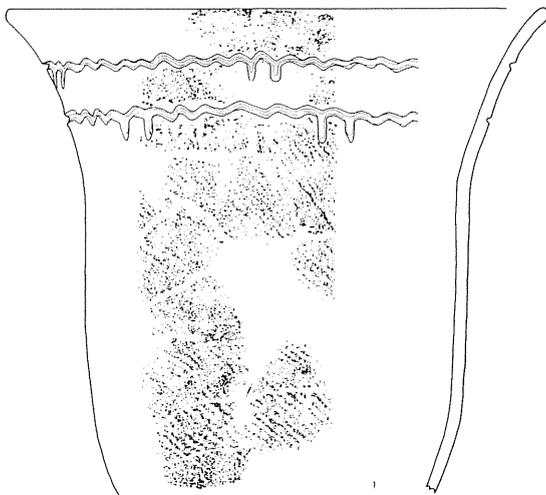
S X 49 (第71図 図版28) 埋甕の中では最も小さい。器面にはLR縄文が横位回転施文されるが、施文後調整をうけているらしく縄文は判然としない。底部にはかすかに木葉痕を認めるが、調整をうけていて判然としない。焼成は良好で、数か所に黒斑部を認める。

S X 400 (第71図)

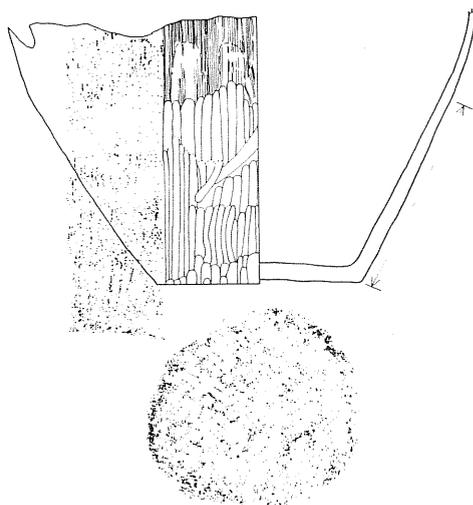
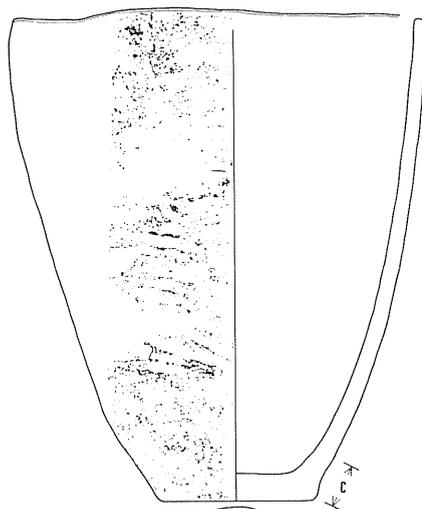
体部には櫛目文が縦位に施され、底部から14cmまでは縦方向の調整痕が認められ一部櫛目文との際では横方向の調整もなされる。底部にはやや太い原体による網代痕。胎土は堅緻。

網代痕 (第72図)

本遺跡からは縄文前～晩期にわたって網代痕を持った土器底部が出土している。ここではその一部を図示したい。



第70図 遺構内出土遺物

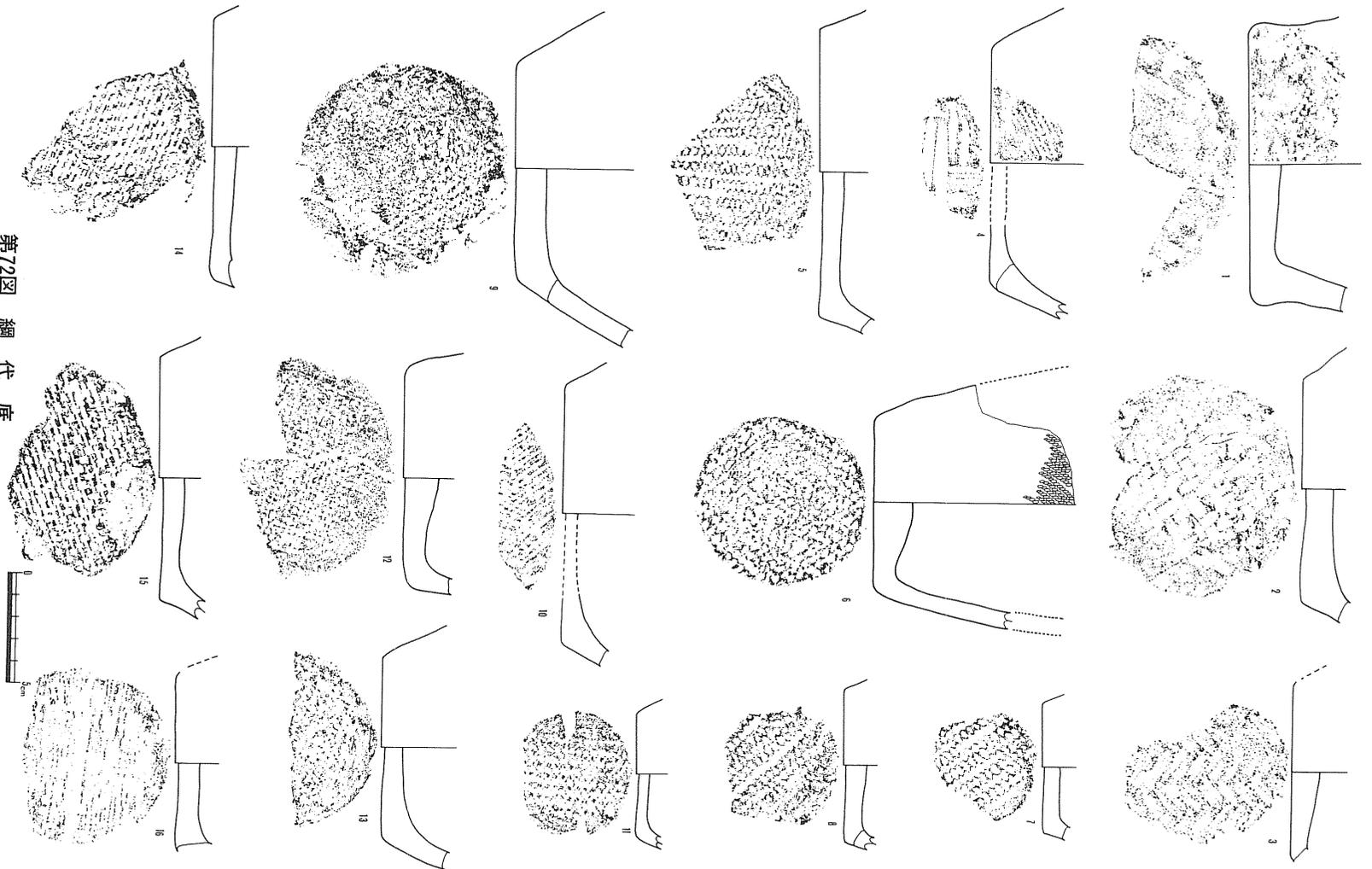


S X 49

S X 400



第71図 S X 49, 400土器



第72図 網代底

2. 出土遺物

(1) 土器及び土製品

ここでは遺構外出土の土器及び土製品について述べる。本遺跡の各調査区毎の土器片出土総数は多い方からⅡ-A・Ⅲ・Ⅰ-A・Ⅱ-B・Ⅰ-Bとなっており、第1～21類まで分ける事ができる。以下、これらについて各類毎に述べる。

第1類土器 (第86図435～437 図版59) 本遺跡中最も時期が古いと思われる土器で前期初頭のものと思われる。表には羽状縄文、裏には貝殻条痕文を施す尖底土器である。Ⅲ区のみで出土した。

第2類土器 (第76図257・258, 第81図401・402, 第82図404・405, 第85図434, 第86図438～440 図版35・46・57・59) Ⅱ-A・Ⅱ-B・Ⅲの各区で出土した。器形は頸部がすぼまり口縁部が外反する深鉢形土器。体部に捺糸文によって網目状に文様を施すものもある。401・402は口唇部に連続刺突文を施し、体部には綾絡文を施す。焼成は不良。

第3類土器 (第74図217～226, 第76図271～273 図版13・35) Ⅰ-B・Ⅱ-Aの各区で出土した。器形は頸部がくびれ口縁がやや外反する深鉢形土器。綾絡文が大きく波打ち、連続波状沈文またはS字状連鎖沈文が施される。竹管凹文を伴うもの(222), 類爪形文を伴うもの(223・224), 口縁部に3段の連続刺突文を施すもの(225・226), 斜め右方から刻目を入れた粘土紐貼付文を施すもの(220～224・271)などがある。

第4類土器 (第76図259～270・274, 第82図406～408, 第86図441～454 図版35・46・59) Ⅰ-Bを除く各区で出土した。器形は口縁が直上するかやや外反する深鉢形土器。竹管凹文・竹管押引文・刺突文を中心に沈線によって鋸歯状や8の字状などに施文される。449～454は細めの刻目付粘土紐貼付文を有する。

第5類土器 (第73図215, 第76図275～279, 第82図409～412 図版10・35・46) Ⅲ区を除く各区から出土した。器形は口縁がやや内湾するか頸部がくびれ外反する深鉢形土器。細めの粘土紐を小波状にして口縁部をめぐらせるのがこの類の特徴である。215は体部に異条のLR原体を横位回転施文する。

第6類土器 (第74図227～229, 第77図280～285, 第82図413～415, 第86図455・455 図版13・36・46・59) 全ての区から出土した。器形は口縁が外反する朝顔花形か、やや内湾させる深鉢形土器。やや太めの粘土紐を口縁に対して斜位に貼り付け、その上に太めの粘土紐を口縁に対して平行に貼り付け文様帯を構成する。下の粘土紐が右傾のもの(228)と左傾のもの(229)があり、前者が圧倒的に多い。280・413・445は細めの粘土紐を格子状に貼り付けたもので、この類の前半のものと思われる。281～285・414・415・456は鋸歯状沈線文を全周にめぐらしたもので、後半のものと思われる。

第7類土器 (第74図 230～232, 第77図 286～288 図版13・36) I—A・I—B・II—Aの各区で出土した。器形は口縁がほぼ直上する深鉢形土器。230～232は体部に半截竹管による押引手法でX字状、鋸齒状に施文する。286・287は非常に撚りのゆるい縄文を不整に施した、非常に薄い土器である。

第8類土器 (第74図 233, 第81図 403, 第82図 416～418 図版13・47) I—B・II—Bの各区から出土したが、II—B区が圧倒的に多い。403はS I 110の西側部分から出土しており、体部にはR L原体の縄文が施される。円筒系の影響を受けている。417・418は口縁部を内湾させた鉢形土器。地文として縄文が施された上に隆起線文で文様帯を構成し、所々に撚糸圧痕文を施す。色調は内面黄～黒褐色、外面暗～黒褐色。胎土は緻密で、焼成も良好である。

第9類土器 (第74図 234～236, 第77図 289・290, 第85図 429～431 図版13・36・59) I—B・II—A・IIIの各区から出土した。器形は口縁がゆるやかに外反、もしくは内湾する深鉢形土器。隆起線文が非常に発達しているのがこの種の特徴で、地文として縄文を施し、その上に隆起線文で幾可学的文様が描かれる。アーチ状の取手をもつものもある。

第10類土器 (第86図 457～461, 第87図 462・463 図版57) III区でのみ出土した。器形は口縁が外反もしくは内湾する鉢形土器。隆起線文で区画された文様帯に縄文を施す。

第11類土器 (第87図 464～474 図版59) III区でのみ出土した。器形は口縁が内湾するか外反し腹部に張りのある深鉢形土器。渦巻文が典型性を失い円や孤状に隆起線文を描くものもある。口縁部は平縁と波状のものがあり、後者は波状の部分に渦巻状隆起線文を施す。

第12類土器 (第74図 237～241, 第77図 292, 第87図 475～483, 第88図 484～488 図版13・36・58・59) I—B・II—A・IIIの各区で出土したが、III区ではかなり大量にある。器形は口縁が内湾するかゆるやかに外反する深鉢形土器。隆起線文に変わって磨消縄文の手法が多用化される。磨消縄文手法によって描かれる中心的意匠文としての渦巻文は円や弧に変化したものもある。292は口縁部が異常に発達して二重になっている。

第13類土器 (第88図 489・490 図版58) III区のみで出土した。器形は口縁が外反し胴部に張りのある鉢形土器。口縁部から体部にかけて左傾のループ文を施し、その間に連続刻目文を配している。

第14類土器 (第88図 491～495 図版58) III区のみで出土した。491～493は口縁がほぼ直上する円筒形の土器である。2本の縦位の沈線で区画された文様帯に木の葉状に沈線を施文する。494・495は口縁が直上もしくはやや外反する鉢形土器。口縁部から体部にかけて、渦巻同心円状に太い沈線を施す。

第15類土器 (第75図 243～245, 第77図 291・293～307, 第78図 308～316, 第82図 419・420 図版35・36・46) II—A・II—Bの各区で出土したがほとんどII—A区である。器形は口縁が直上もしくはゆるやかに外反する深鉢形土器。体部には曲線に富んだ磨消縄文が施文される。

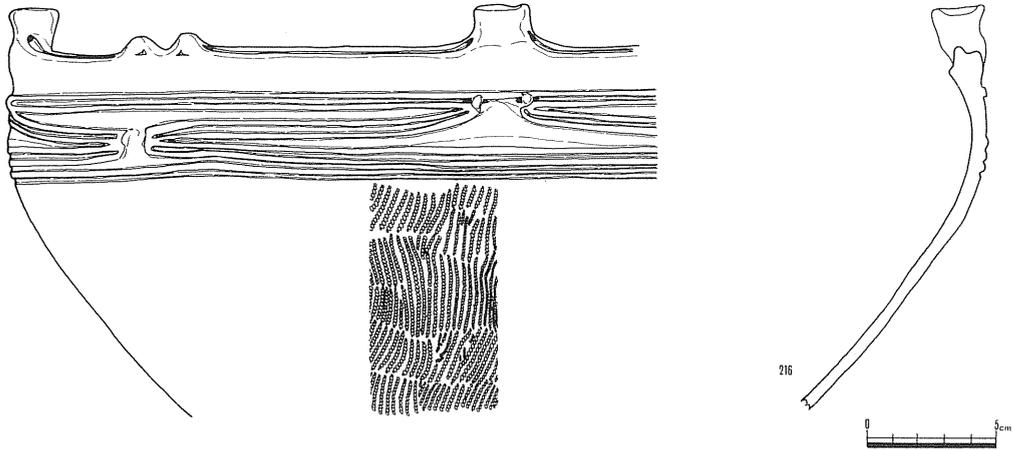
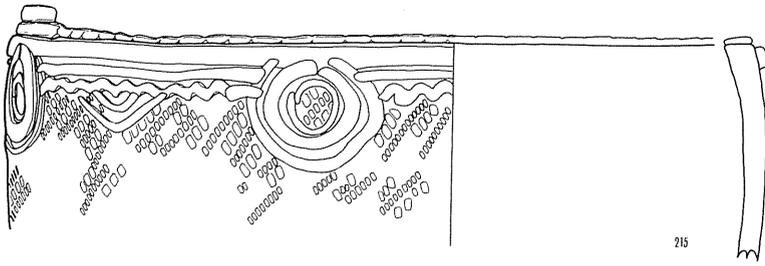
短めの撚りのきついLR原体を横位・斜位に回転施文する。243～245・308～316は大波状口縁で、いろいろな形の突起を持つものが多い。馬の耳のようなもの(243・244・312)、テーブル状のもの(314)、渦巻状のもの(316)、一見土偶の足のようなもの(245)などがある。308～314は体部には曲線に富む磨消縄文を施し、区画された沈線文に沿って1条の連続刺突文をほとんど真上から施している。

第16類土器 I—A区で少量出土した程度だが、I—B区の埋甕の中にこの類のものがある。

第17類土器 (第75図249・253～256, 第78図317～341, 第79図342～348, 第82図421 図版35・36・46) I—A・II—A・II—Bの各区から出土したが、II—A区でかなり大量に出土した。器形は小波状口縁、あるいは2個単位のB突起を持つ口縁がやや内湾する鉢形土器で、注口土器(342～347)、台付土器(249・253～256・341)もある。いわゆる羊歯状文を中心に文様が展開されるが、左傾で末端のからみ合わないもの(317～323)と右傾で末端のからみ合うもの(324～330)がほとんどで、前者の方がやや多く出土する。単節のLR原体を横位に回転施文したものがほとんどであるが、一部RLのもの(321・322・328～330)、羽状縄文のもの(323)もある。ほとんどに煤状炭化物が認められる。

第18類土器 (第75図247・250～252, 第79図349～378, 第80図379～383, 第82図422, 第85図433, 第88図496 図版35・37・46・58・59) I—B区を除く各区で出土したがII—A区の出土数が圧倒的に多い。器形は小波状口縁あるいは2個単位のB突起を持つ口縁が内湾する鉢形土器、平縁あるいは小波状口縁の浅鉢形土器で、383のようなすかし彫りの香炉形土器もある。349～362・422・433は2～5条の沈線文で画された口縁部文様帯に連続刻目を施す鉢形土器。体部にはLRの横位回転施文が多いが、RLのもの(355～357)や羽状縄文のもの(358)もある。365～381は浅鉢形土器で、体部には磨消縄文手法によるX字状文・変形X字状文を施す。縄文は撚りのきついLRの原体を横位・斜位に回転施文したものが多い。247は小波状の口縁を持つ台付土器で口縁部に3条の平行沈線がめぐり、肩部には6個のB突起を持つ。体部は上半と下半を3条の平行沈線で画し、上半部には磨消縄文手法によるX字状文等が施され、下半はRL縄文を横位回転施文している。外面全体と内面口縁部分に煤状炭化物が著しい。色調は内面黄褐色、外面黄～暗褐色を呈する。

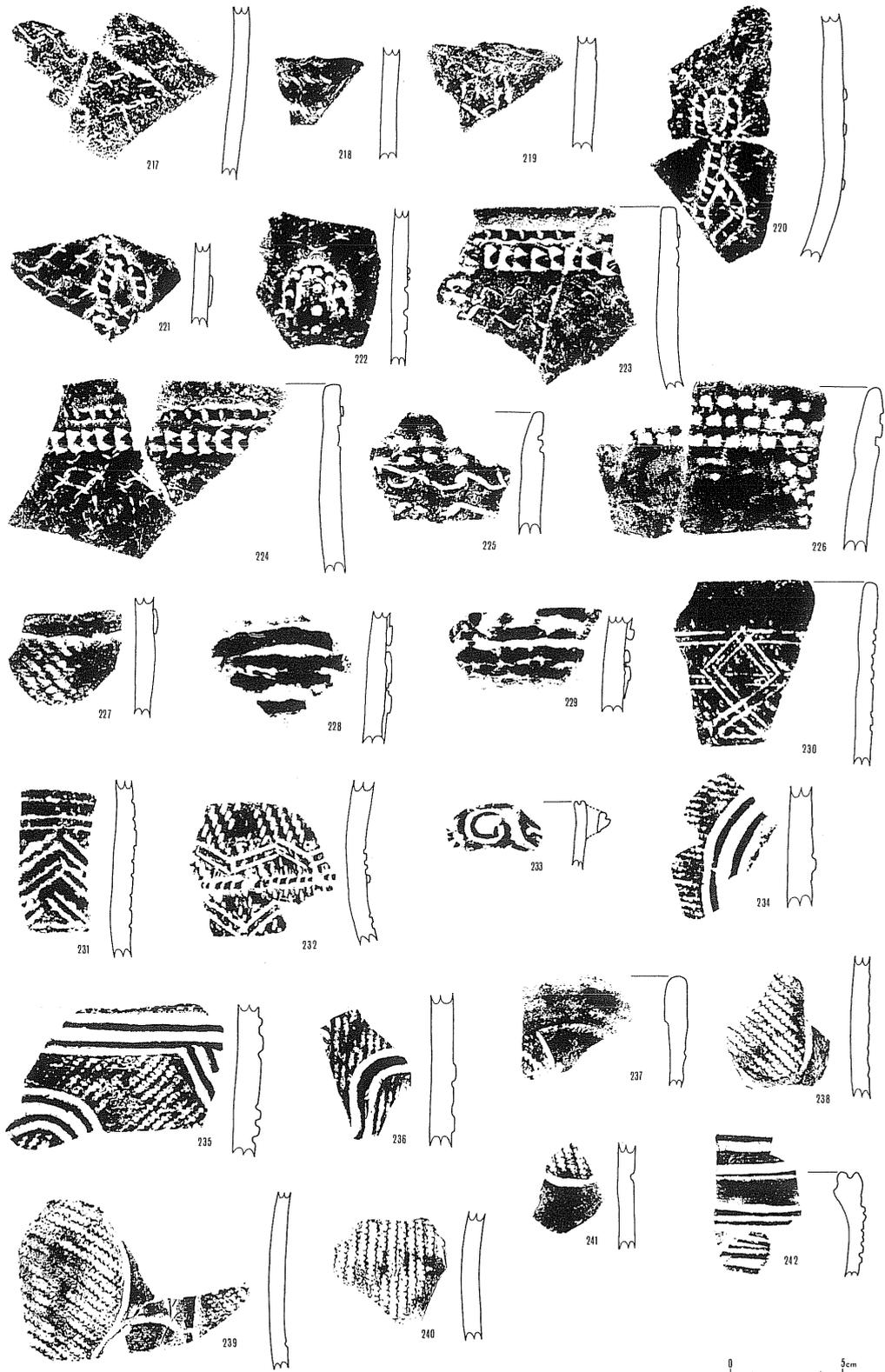
第19類土器 (第75図248, 第80図384～399, 第83図423～425, 第88図497～499 図版35・37・47・58) I—B区を除く各区から出土しているがII—A区が圧倒的に多い。器形は小波状がB突起を持つか平縁の鉢形土器、小波状か平縁の浅鉢形土器、平縁が開いた壺形土器等がある。平行沈線文を主体に口縁部文様帯が形成される。394～397・423・424・497～499は口縁部に2～5条の平行沈線がめぐり、体部は単節LR縄文横位回転施文がほとんどであるが一部RLのもの(397・498)もある。398・399は浅鉢形土器で、第18類土器でみられたX字状文がさらに左右に著しく伸びて単位文様の表現が流れた形をとる。胎土は緻密で焼成も良好なものが多い。425



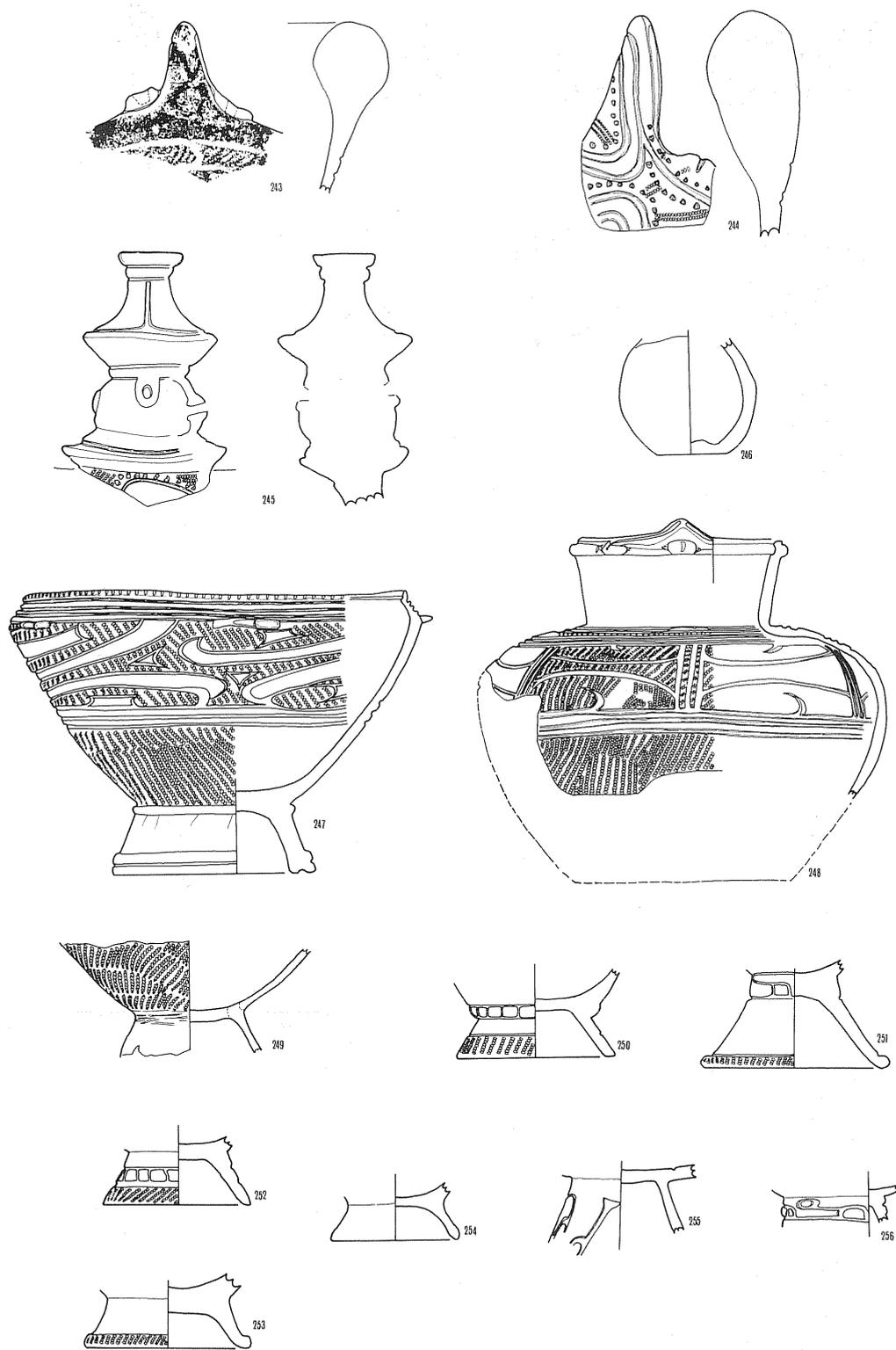
第73図 I—B区出土土器(1)

は台付土器の台部。248は口縁がやや開く壺形土器。口縁部の波頂部下に突起を持ち、その両側にやや小さめの突起を配する。頸部は無文でその下に2条の平行沈線をめぐらし、口縁部の突起に対応してB突起が付される。肩部には3条の平行沈線をめぐらし頸部下の2条平行沈線との区画内にL R原体を横位回転施文する。さらに胴中央部にも3条の平行沈線をめぐらし肩部の平行沈線帯との間に3条の平行沈線を垂直に配し、その区画内の上下に2本の孤状沈線を施す。縄文は撚りのきついL R横位回転施文。色調は外面明黄～暗赤褐色、内面赤褐色を呈する。胎土は緻密で焼成も良好である。

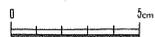
第20類土器 (第83図 426, 第85図 432 図版47・59) II—B・Ⅲの各区で出土したが数は少ない。426は器形は台付鉢形土器であり、口縁下部で張り出し、その下はほぼ一定の角度で台部に至る。口縁部には平行沈線及び沈線の結節部によって工字文が施される。体部には撚りのきついL R原体を横位・斜位に回転施文する。432は口縁部がほぼ直上する円柱状の土器で、口縁部には3条の平行沈線及び沈線の結節部によって工字文が施される。色調は内外面ともやや白っぽい暗褐色

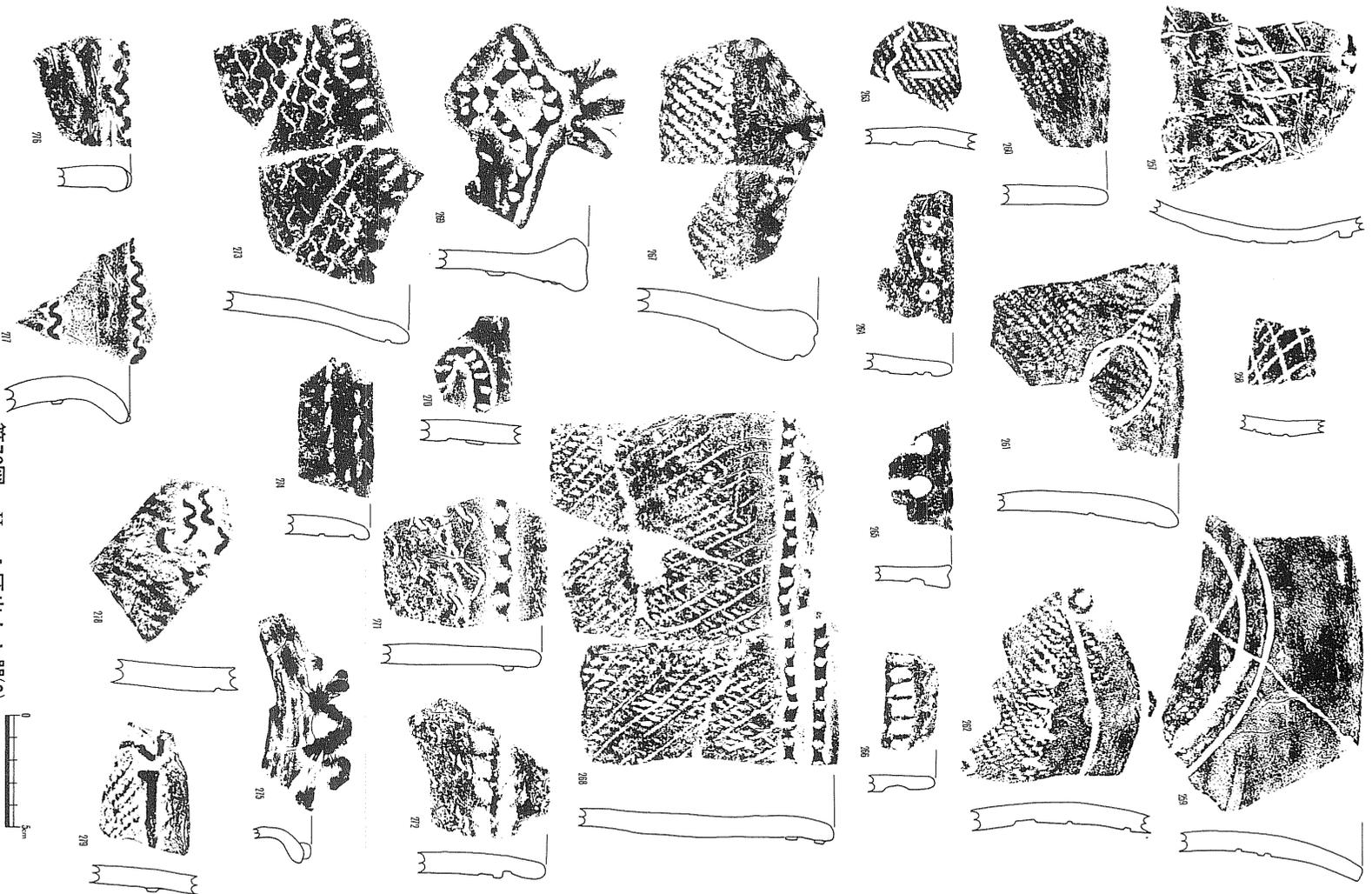


第74图 I—B区出土土器(2)

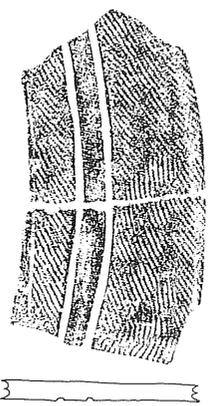
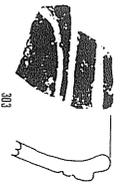
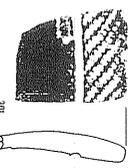
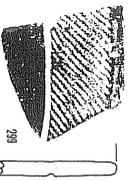
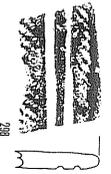
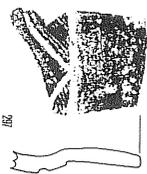
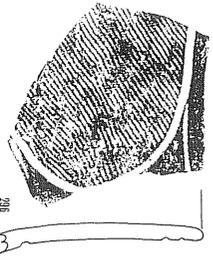
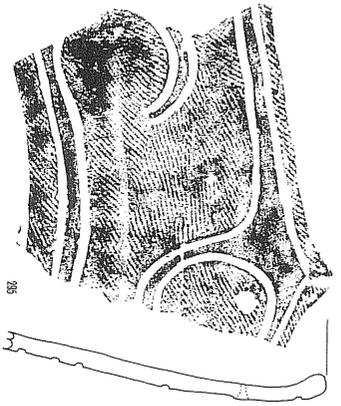
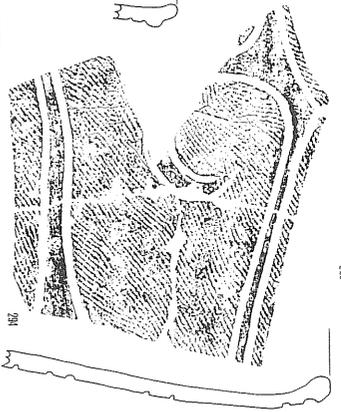
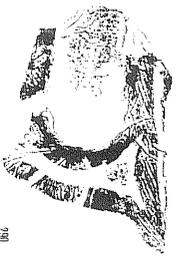
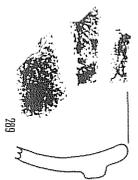
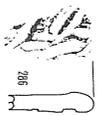
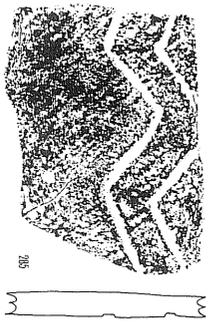
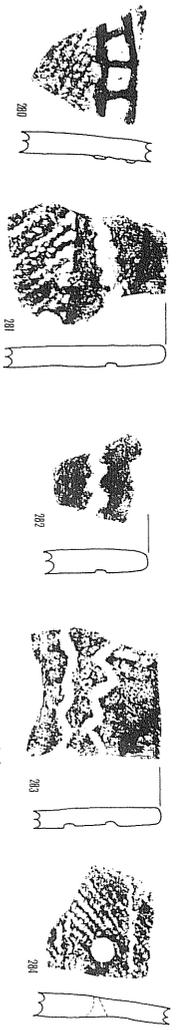


第75图 II—A区出土土器(1)

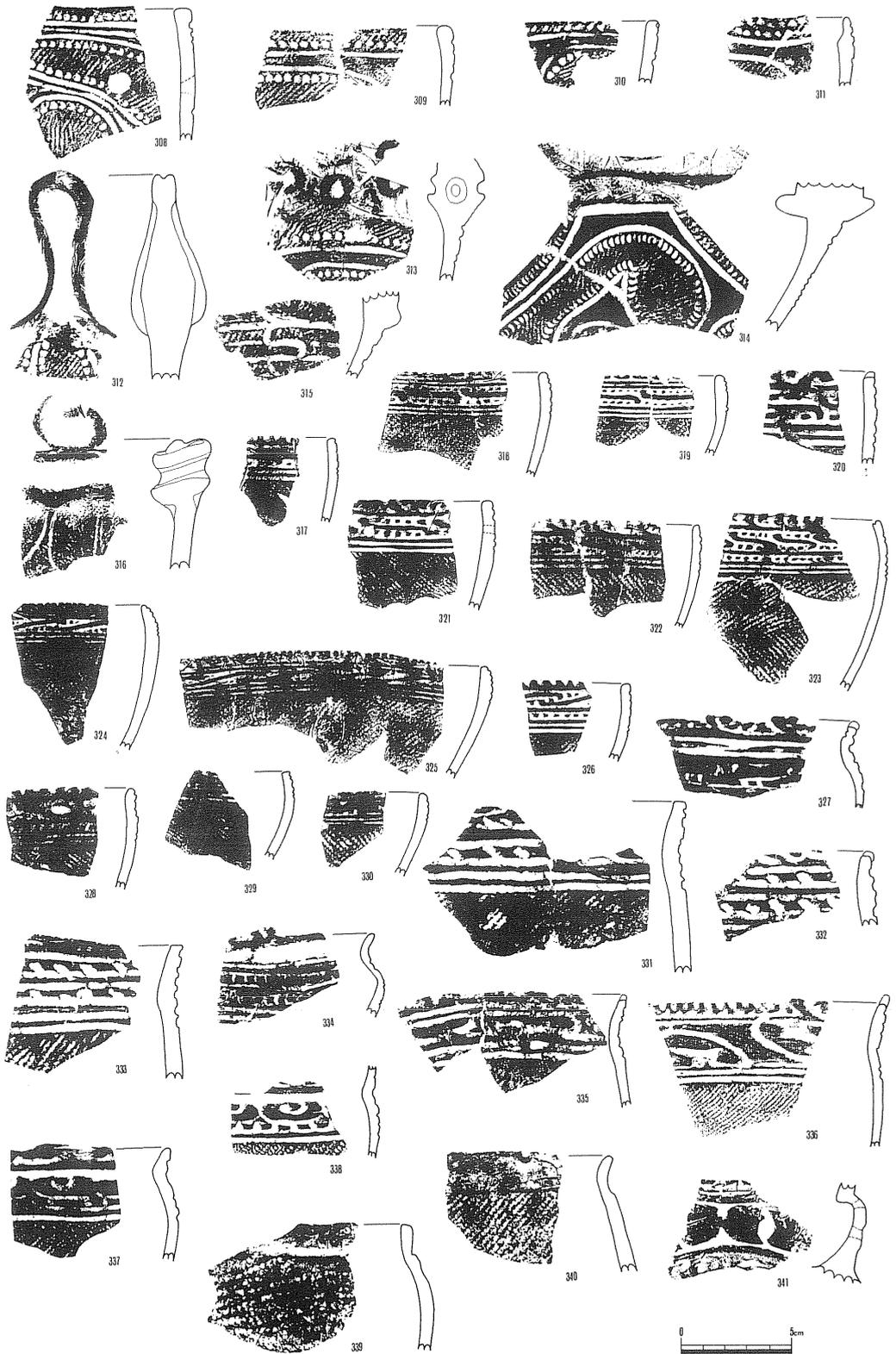




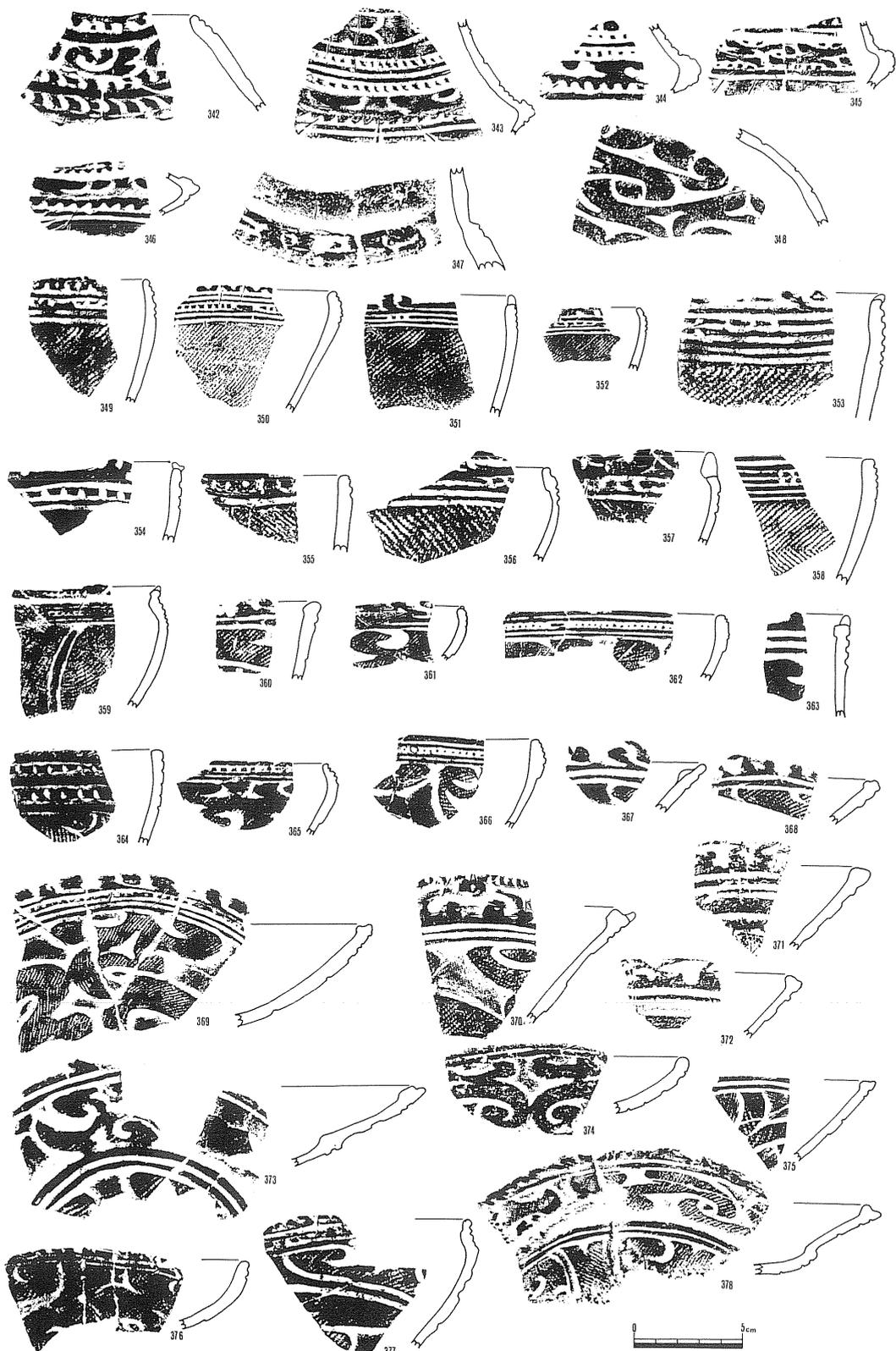
第76图 II—A区出土器(2)



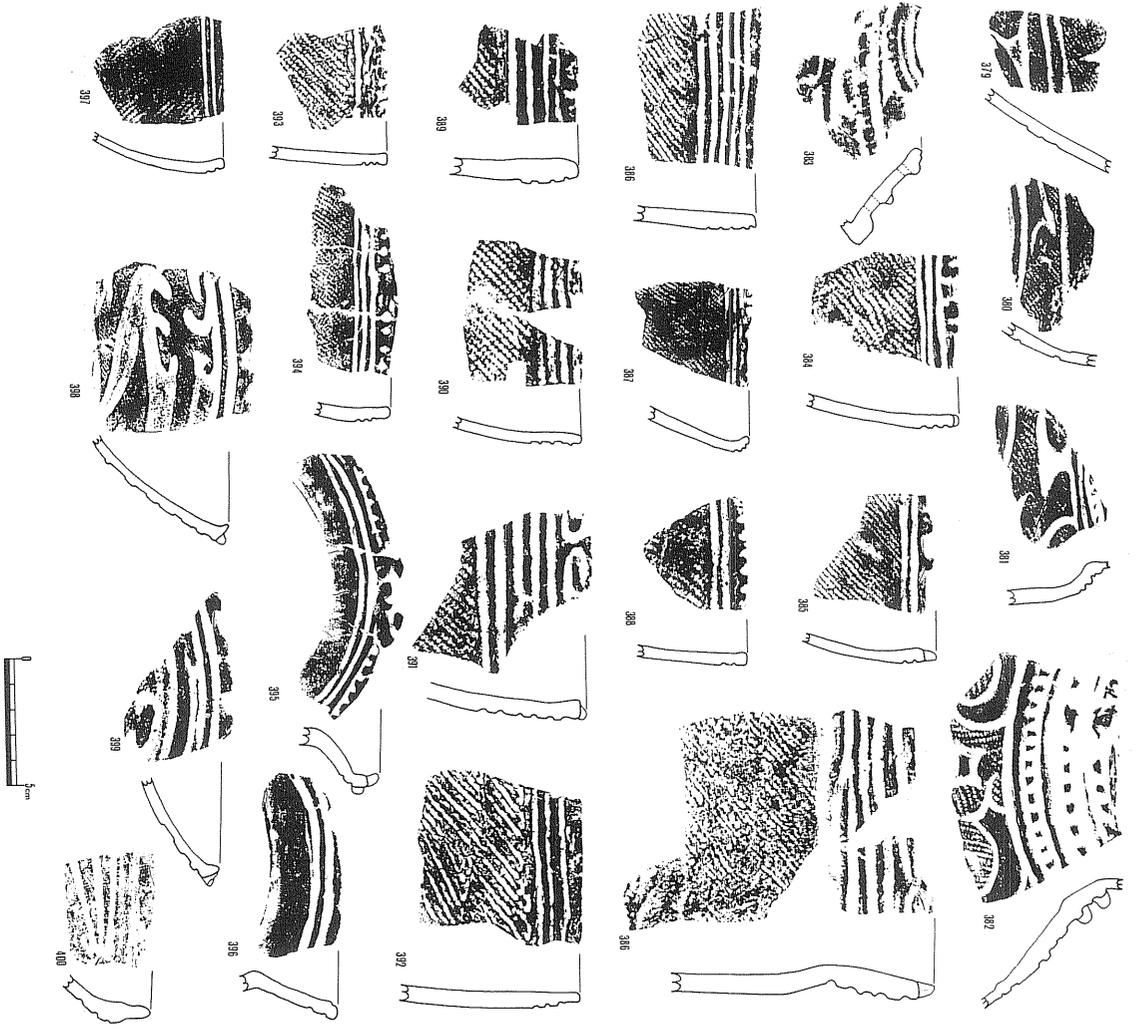
第77图 II-A区出土器(3)



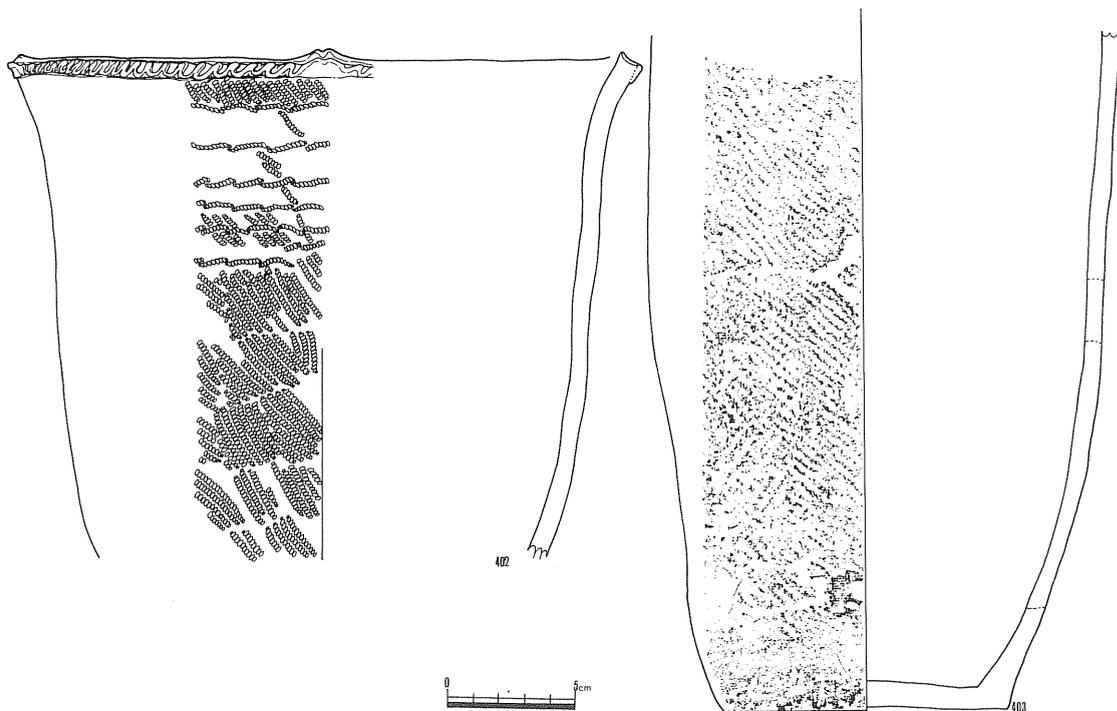
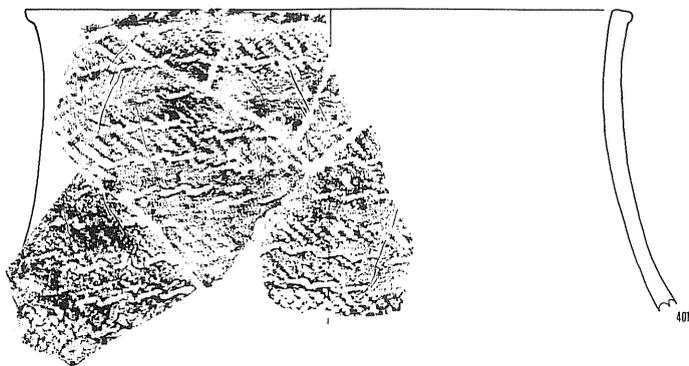
第78图 II—A区出土土器(4)



第79图 II—A区出土土器(5)



第80图 II—A区出土土器(6)

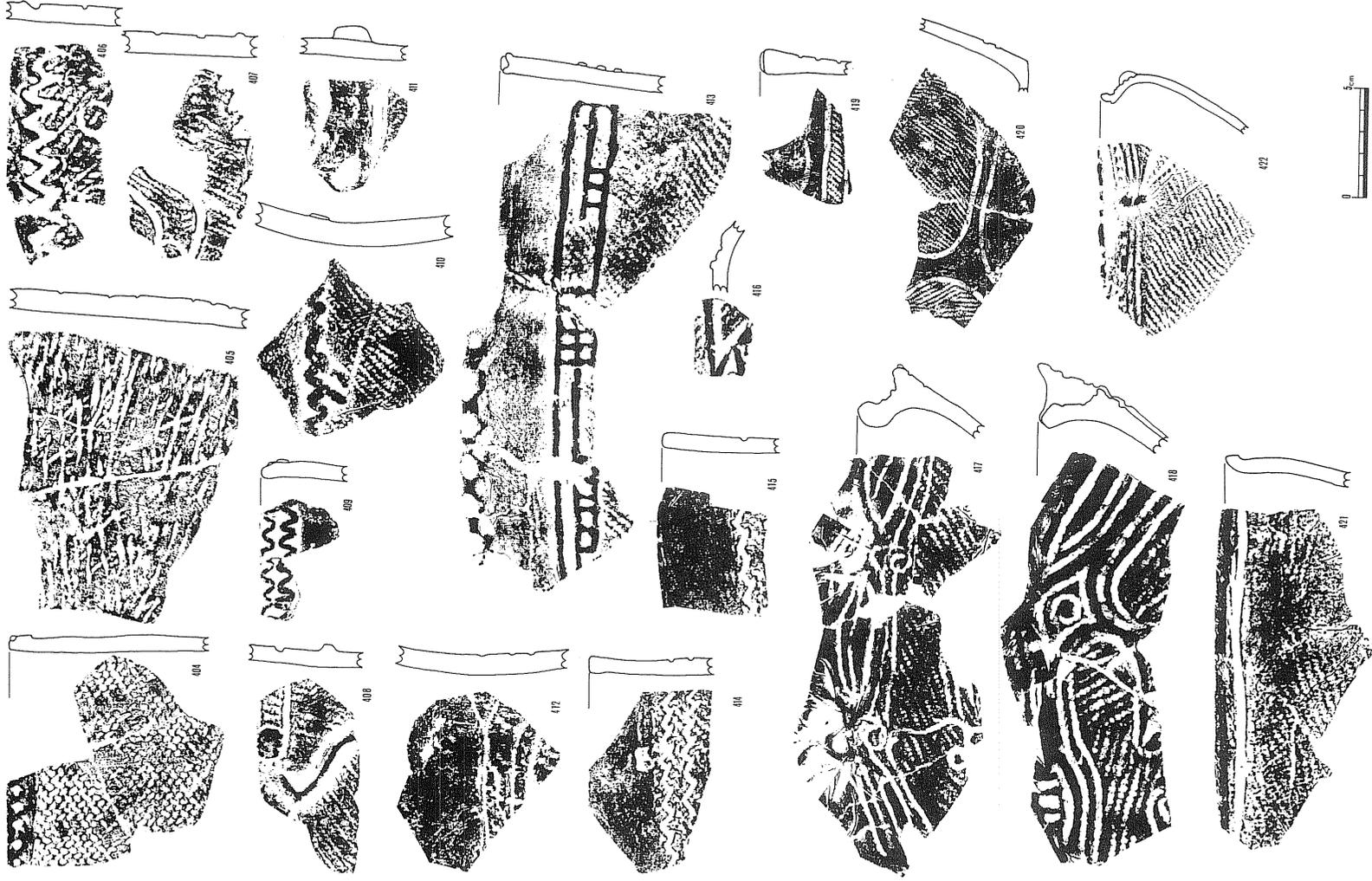


第81図 II-B区出土土器(1)

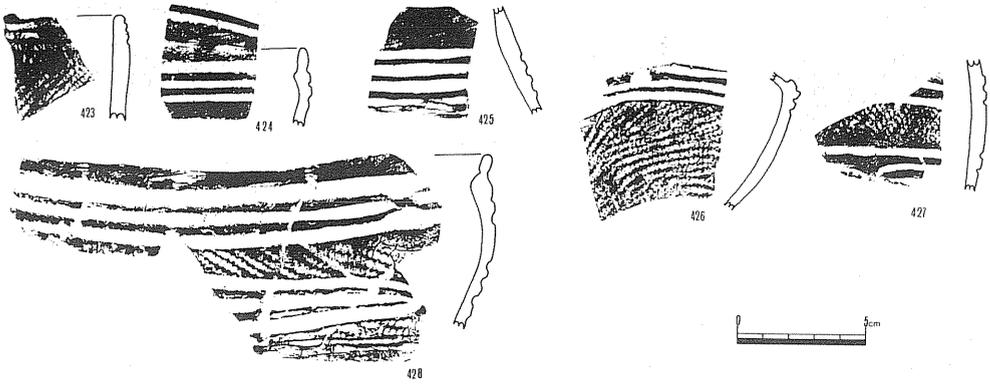
で、焼成は良好。

第21類土器 (第73図 216, 第74図 242, 第80図 400, 第83図 427・428 図版10・13・37・47)

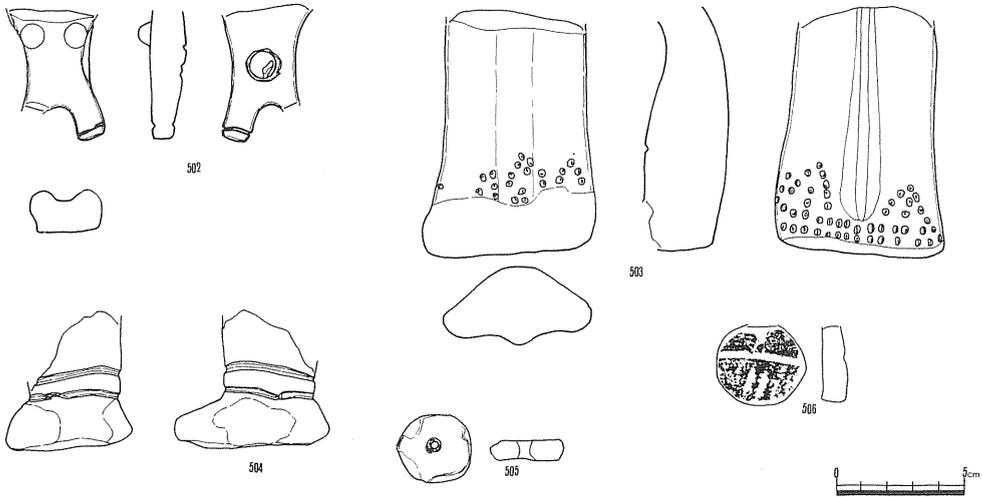
器形は口縁が直上もしくはやや開いた口縁を有する鉢形土器。216は体部以下が急激に下降する鉢形土器。口唇は肥厚し、4個の大突起と同数で2個一対の小突起が付される。大突起上は丸く削り取られる。突起間の口唇上には1条の沈線が施され、口縁裏側に1条の沈線がめぐる。頸部文様帯には、沈線及び沈線の結節部によって、口唇部の突起と対応して、変形工字文が描かれる。結節部は大突起下では上段、小突起下では下段に2個ずつの粘土瘤を貼り付けて作る。沈線間は調整を



第82图 II—B区出土土器(2)



第83図 II-B区出土土器(3)

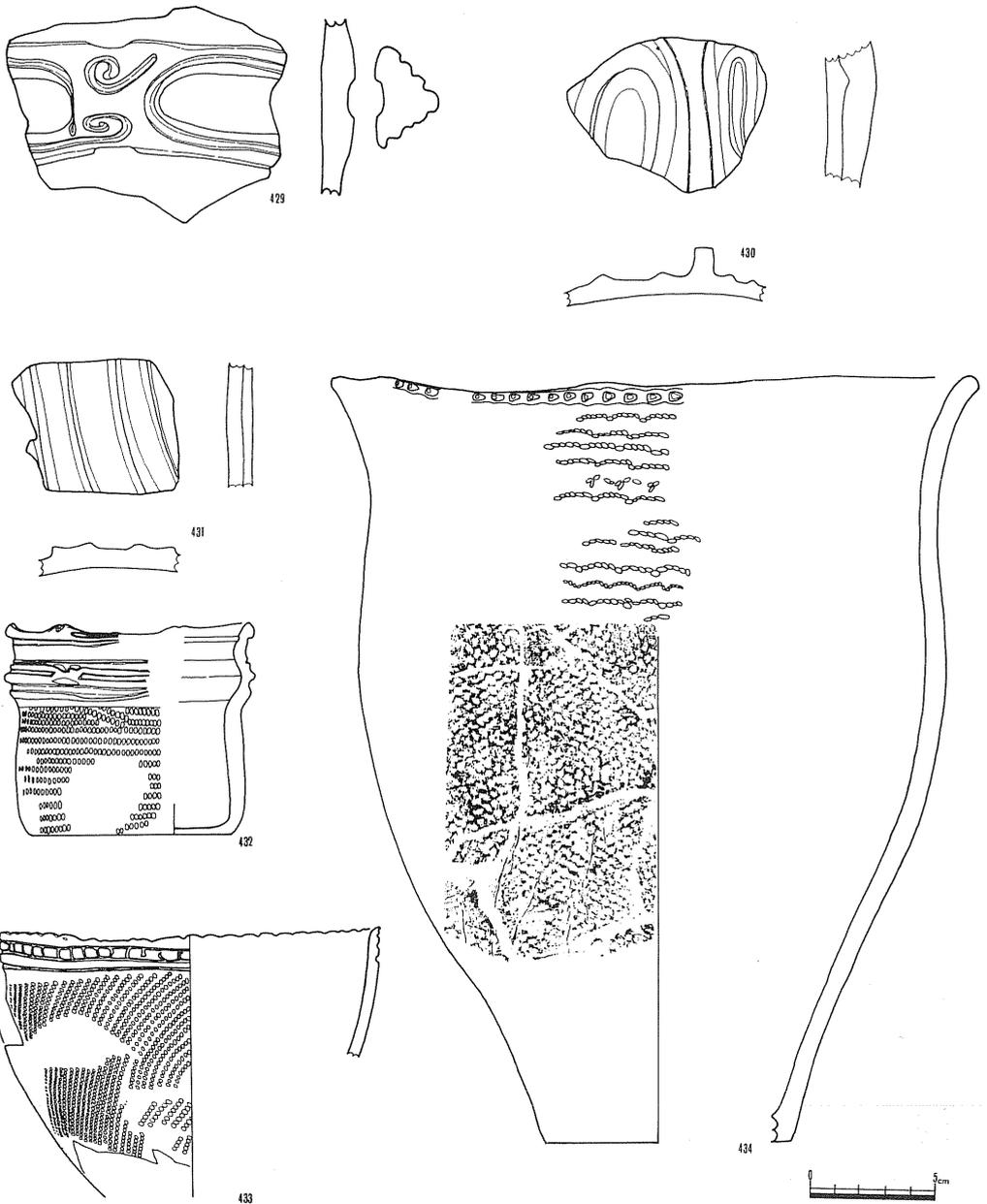


第84図 出土土製品

うけて隆線化し、結節部からは特に広く三角形に削り取られる。文様単位は4単位で文様帯下限は1条の沈線をめぐらして画し、体部にはL R縄文を右上～左下の方向で回転施文している。色調は外面黄褐色、円面赤褐色を呈する。胎土は堅緻で焼成も良好である。428は平縁の鉢形土器である。体部には3条の平行沈線と沈線の結節部によって2段に変形工字文が描かれ、その間にR L原体の縄文が施される。色調は円外面とも明褐色。

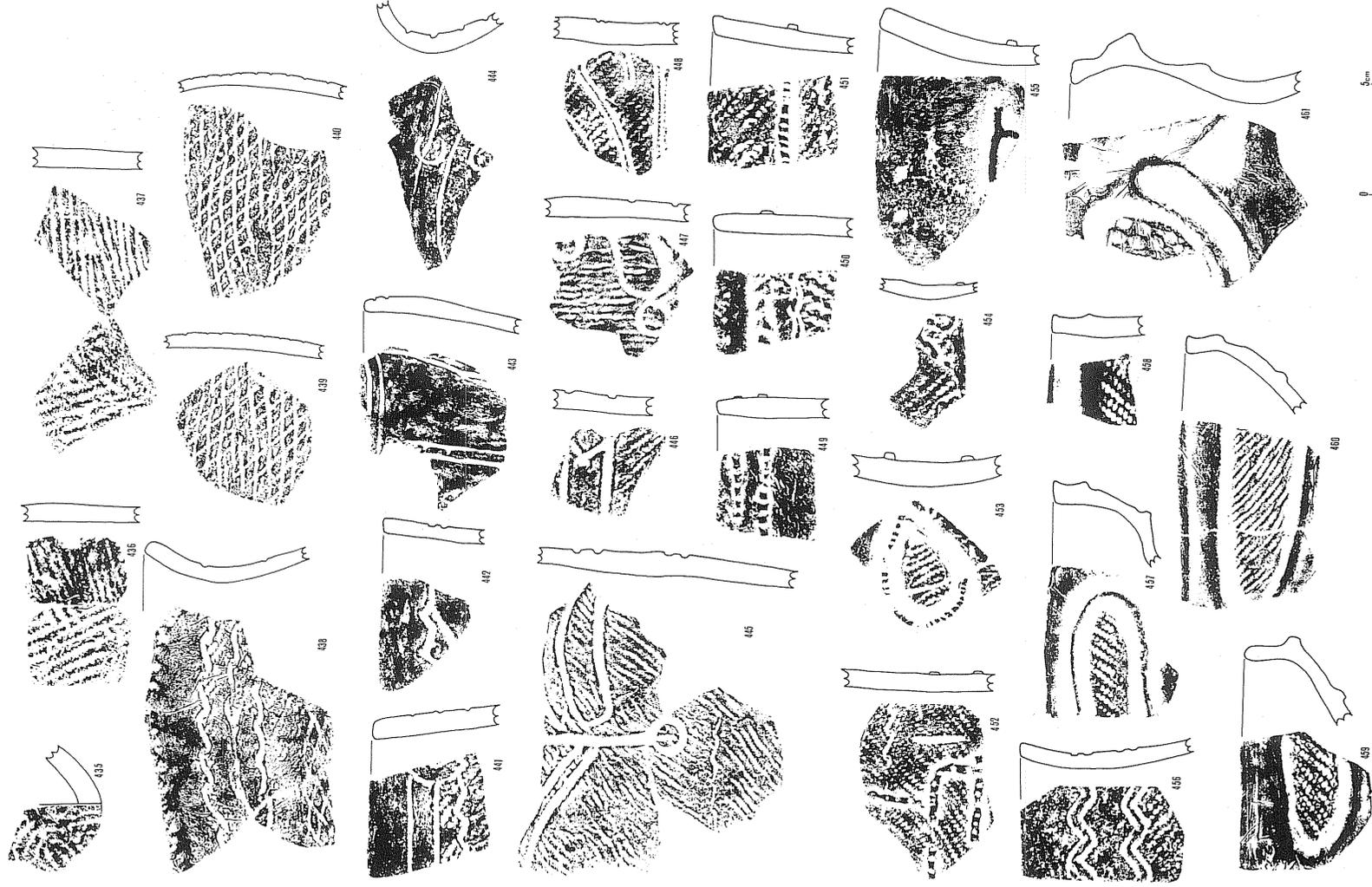
その他の土器 (第88図 500～501 図版58) 中期の土器片と思われるものでⅢ区から出土した。単節のR L原体を直交して施文する。

出土土製品 (第84図 502～506 図版34)

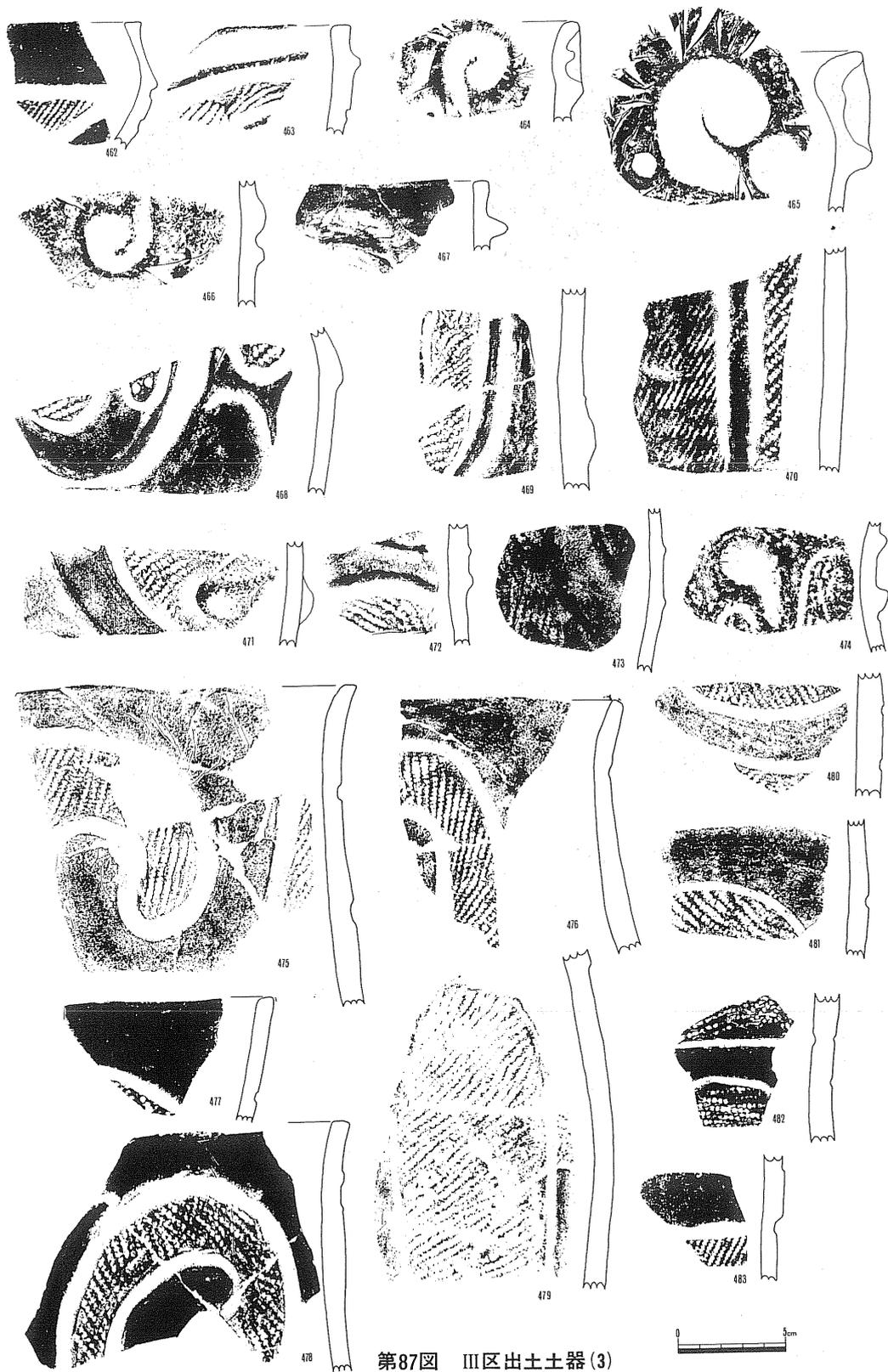


第85図 III区出土土器(1)

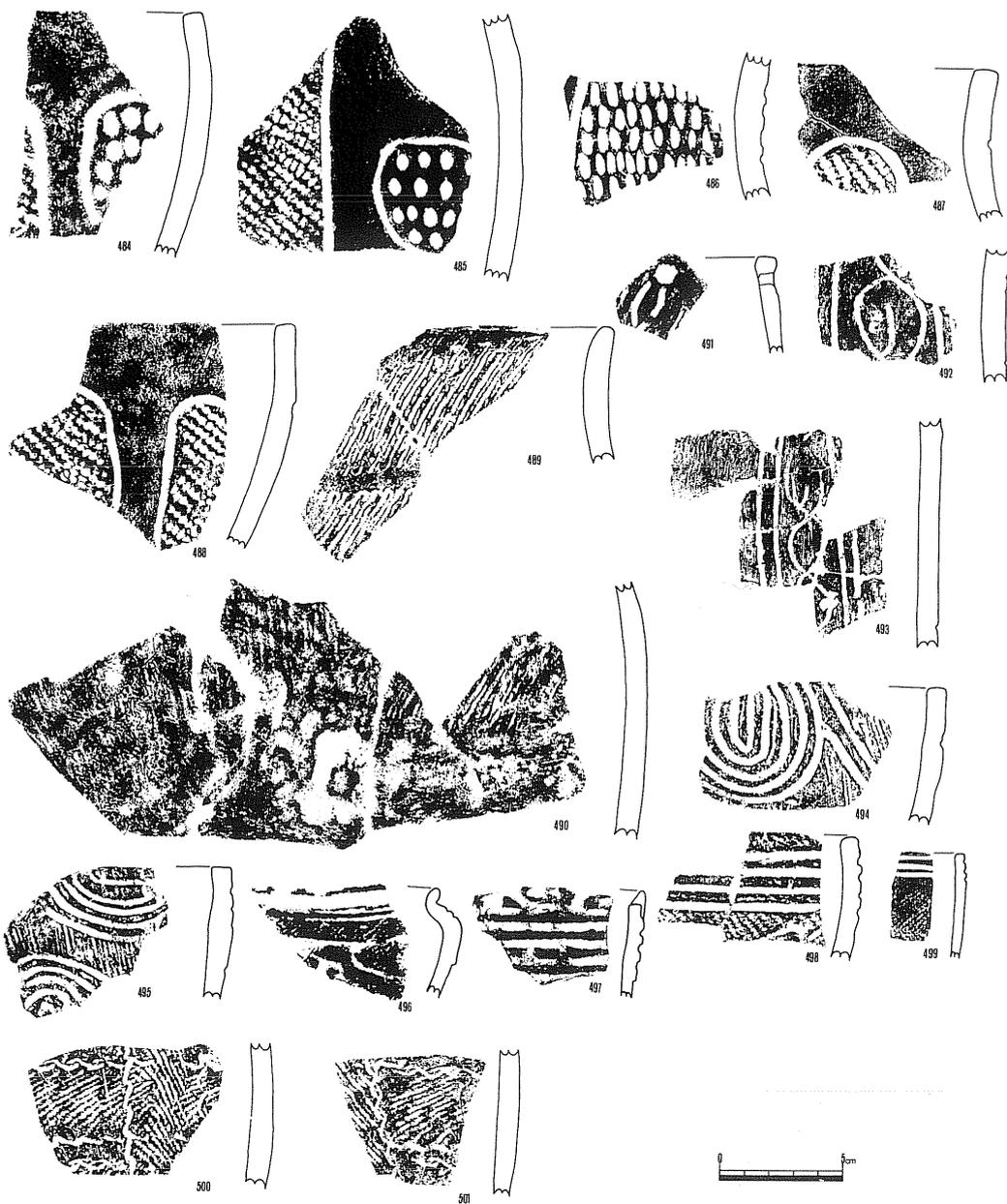
502は中期の土偶である。脚部には1条の沈線がめぐり、背部に径1cmの円形沈線文が施される。色調は暗黄褐色。503は後期の土偶である。脚部表現は欠損して不明だが、下に行くにつれ厚く盛り上がっていたものと思われる。脚部には表裏とも鋭い工具でほぼ真上から刺突した刺突痕があり、不明確ながらも左右両側に山形の範囲で施される。裏面には背骨の盛り上がり表現される。色調暗褐色。504は後期土偶の脚部である。かかとの部分に2条の沈線を施す。色調は暗褐色。505



第86图 Ⅲ区出土土器(2)

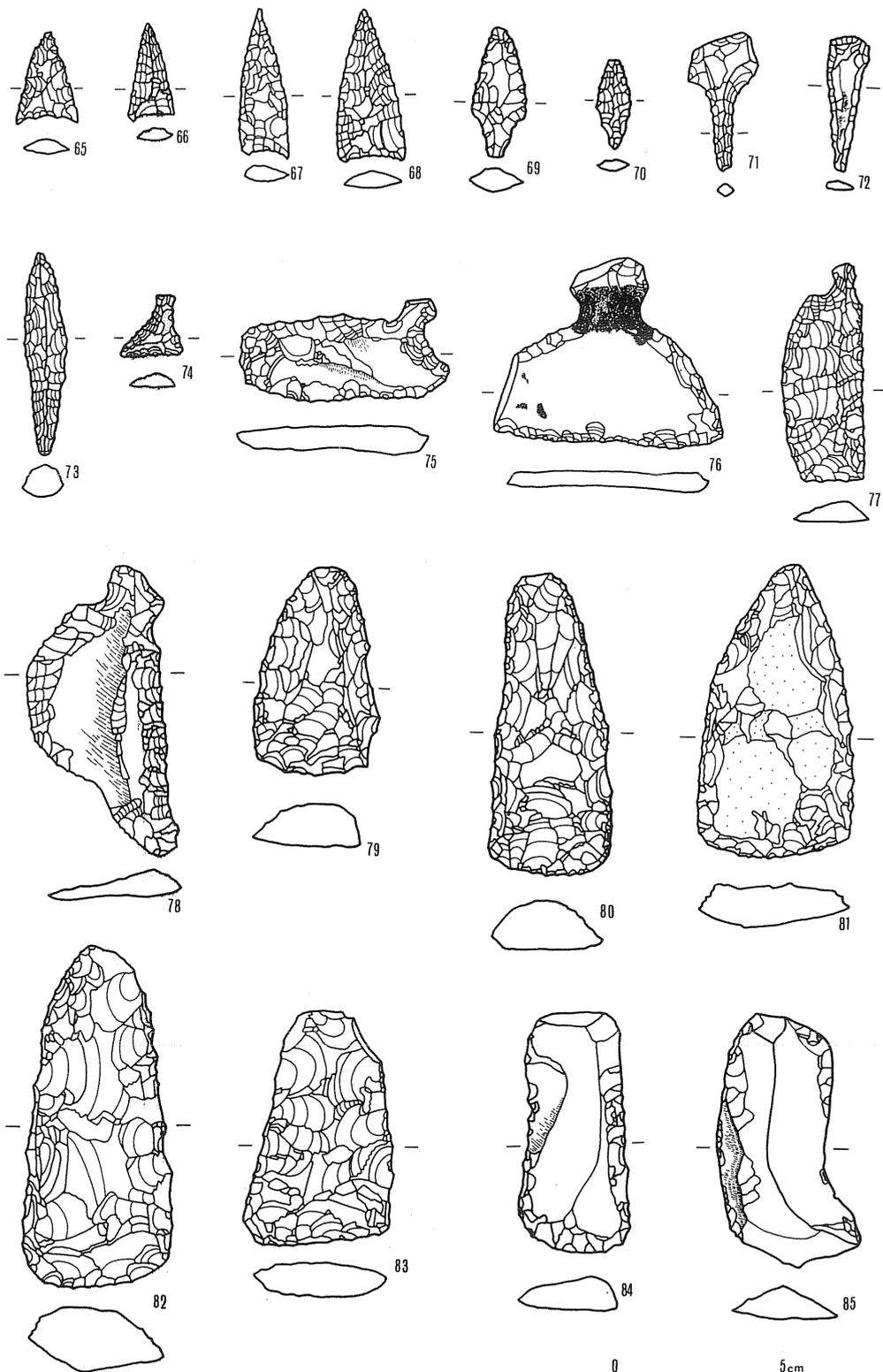


第87图 III区出土土器(3)



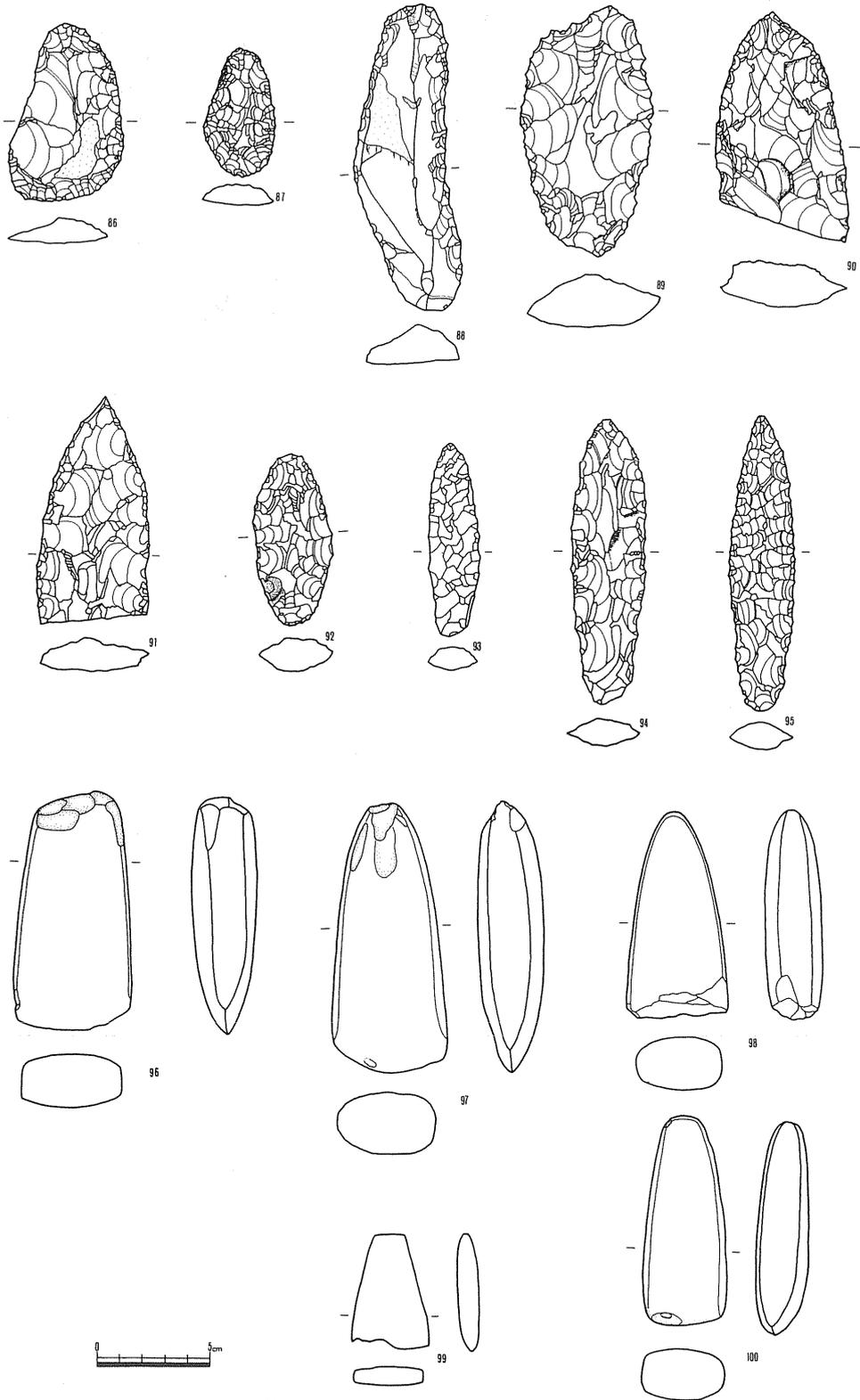
第88図 III区出土土器(4)

は有孔円盤である。穿孔は両側から加えられ、色調は暗黄褐色。以上はII-A区で506のみIII区で出土した。506は中期の円盤状土製品である。既製の土器の破損したものなどから転用したものであろう。色調は黄褐色を呈する。

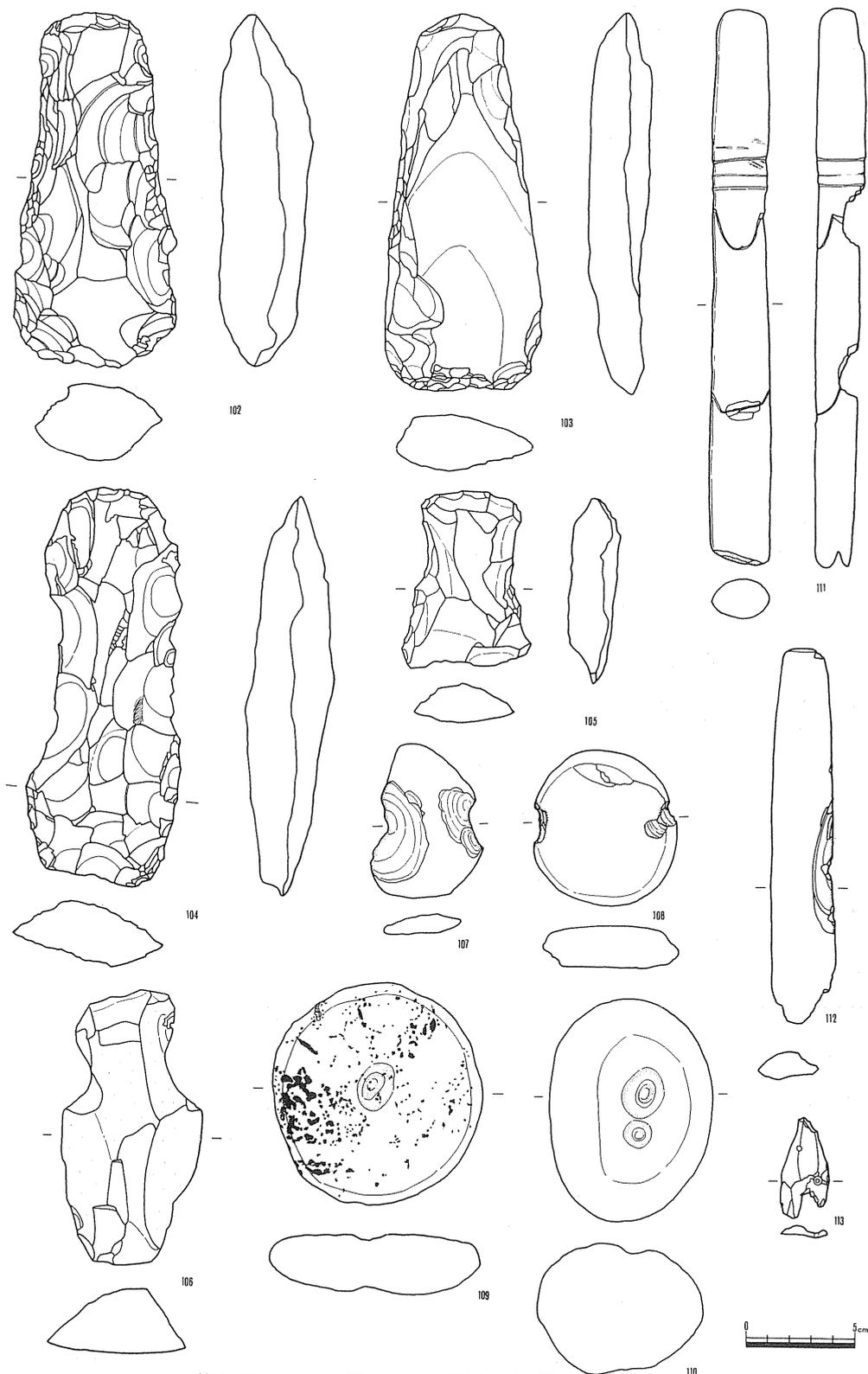


第89图 I—B区, II—A区出土石器(1)

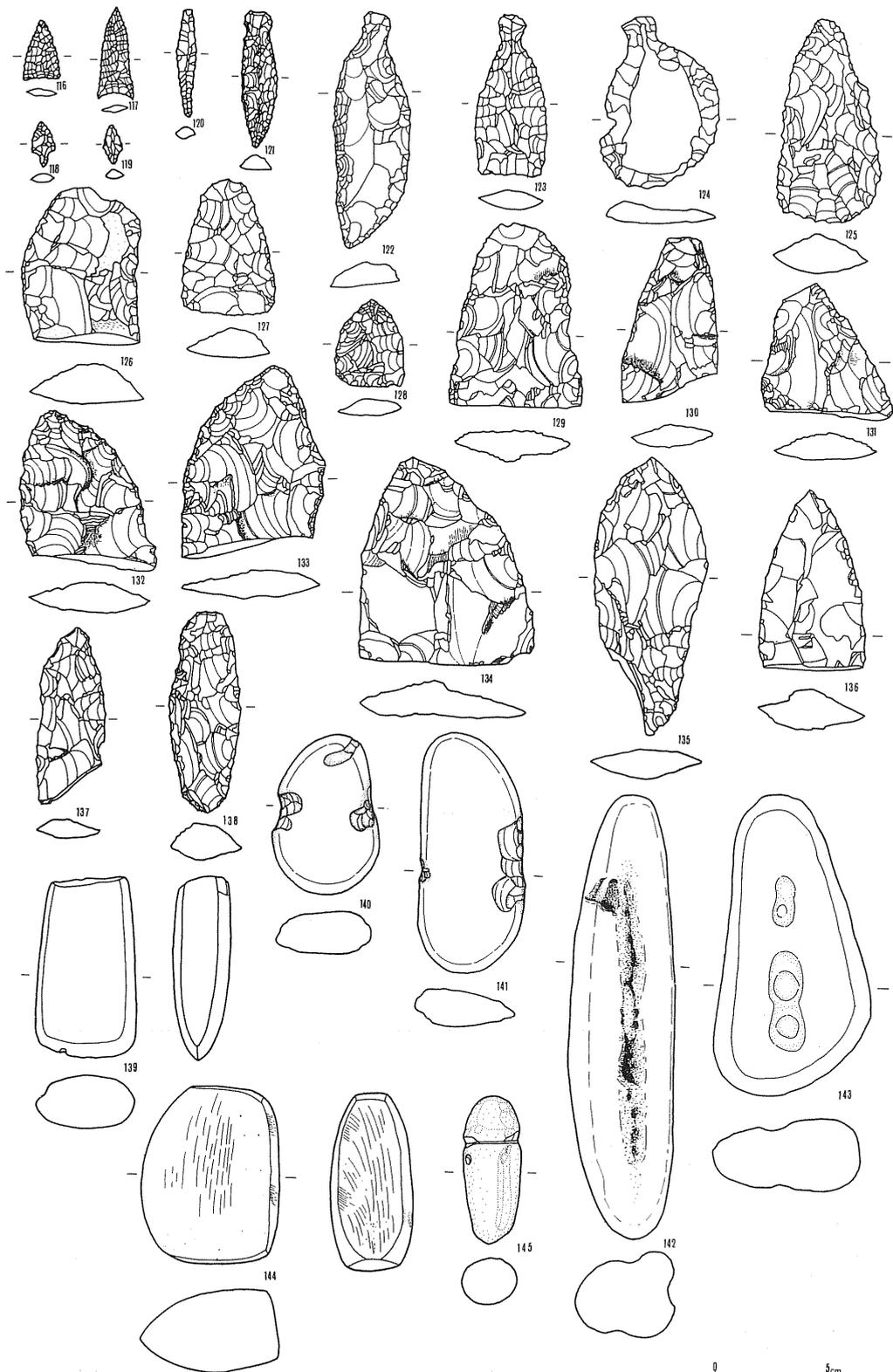




第90图 II—A区出土石器(2)



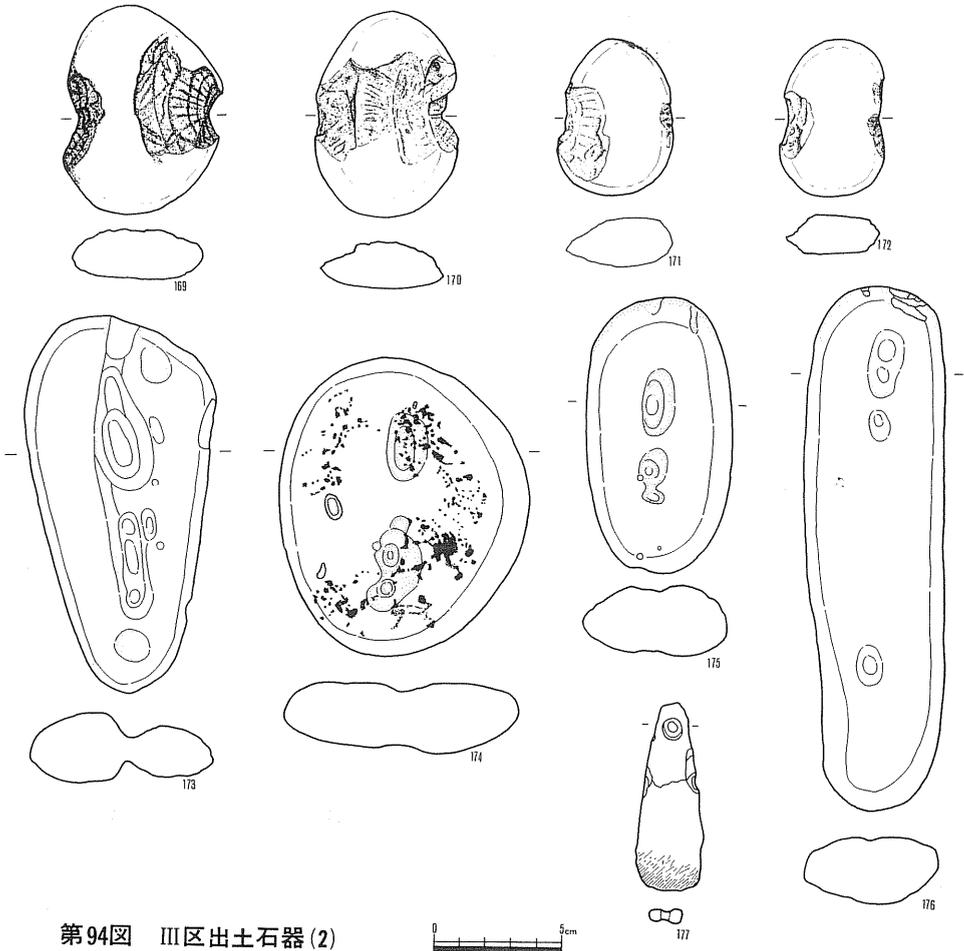
第91图 I—B区, II—A区出土石器(3)



第92图 II—B区出土石器



第93图 III区出土石器(1)

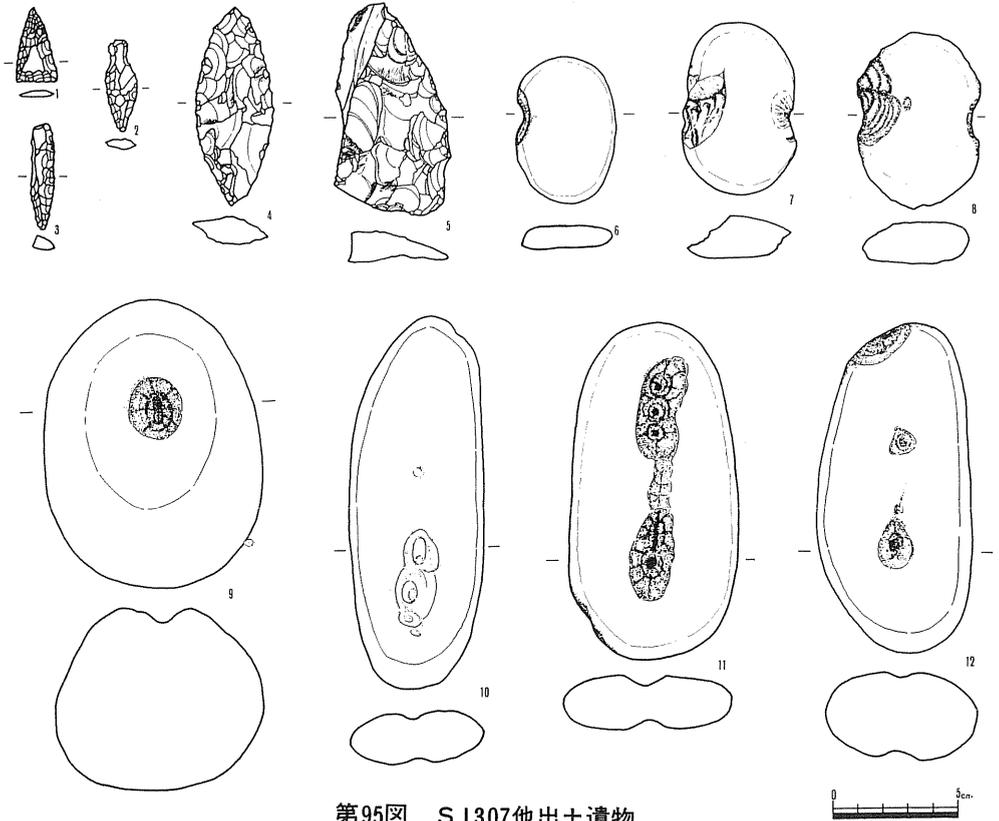


第94図 III区出土石器(2)



調査区	器種												計
	石鏃	石錐	石匙	石 筥	搔器	石槍	磨製石斧	打製石斧	凹石	石錘	石剣	その他	
I-A	35	6	18	77	20	7	4	9	2		1	10	189
			3	1					3	1		6	14
I-B	2			6	3	2		1		1		2	17
			1	1	1							5	8
II-A	28	7	25	36	22	15	10	16	25	5	5	23	217
	1	1	3		3	1	1	4	3	1		8	26
II-B	9	1	10	27	6	10	1		4	3			71
				1		2			1	1		4	9
III	5	1	3	27	1	7	8	1	28	1		18	100
	6		5	12	2		1	1	10	3	6	16	62
小計	79	15	56	173	52	41	23	27	59	10	6	53	594
	7	1	12	15	6	3	2	5	17	6	6	39	119
計	86	16	68	188	58	44	25	32	76	16	12	92	713

表-1 調査区別石器出土数 下段は遺構内出土



第95図 S 1307他出土遺物

(2) 石器及び石製品

石器及び石製品は各調査区から出土しているが、表1に示すとおり器種・数量にかなりのバラツキがある。石鏃では基部が抉れているものと凸出しているものに大きく分けられるが、前期に属するていねいな作りの前者が圧倒的に多い。石匙・石篋・搔器は部厚いが、きれいな縦長の剥片を使用したものが多い。石槍はていねいな作りで、幅広で先端の尖るものと柳葉形のものがあり、前者が圧倒的に多く、前期のものと思われる。打製石斧は大部分撥形で上部両側辺から軽く抉りが入っているものが多い、晩期に属するものと思われる。その他とした石器は剥片ながらも部分的に剥離が加えられていたり、一般的な名称の範囲では把え得ない形状のものである。

第92図 145 は岩偶。同 144 図はうすい緑色を呈した石冠。

遺構内出土石器の中で、土壇墓及び埋葬のそれは副葬遺物のあり方とは異なった出土状況であった。

V. ま と め

今回の梨ノ木塚遺跡の調査では、遺跡の推定面積約35,000㎡（うち調査対象面積約15,500㎡、残りは畑地として残った。）のうち約8,200㎡を発掘調査した。その結果、遺構・遺物ともに多寡の差こそあれほぼ全面に分布することがわかった。この中で遺構としては中期の竪穴住居跡が前葉のものは遺跡東端部に、後葉のものは西端部にあり、晩期の墓域が東端～中央・西端部までそれぞれ集中する地域を持ちながら存在したことがわかった。発掘調査で得られた資料は膨大で満足できる整理作業ではなかったが、以下土塚墓・埋甕について若干まとめてみたい。

1 縄文時代晩期の土塚墓について

今回発見された晩期の土塚墓は約50基にのぼる。このうちⅢ区からのものでは、SK 324 がほぼ確実にそれかと思われる以外は、遺物のあり方等から晩期の土塚墓とはなし得ないものが大部分である。このためここではⅠ-B・Ⅱ-A・Ⅱ-B区のほぼ確実に土塚墓と思われるものについて触れることとする。各区の確実な土塚墓は表2に示したとおりである。それらの土塚墓をその平面形で分類すると次のようになる。

〈Aタイプ……小判形ないし隅丸長方形〉 向い合う2つの長辺が平行し、短辺は平行するかゆるく半円を描くように膨らむもの：SK 79・101・18・220・230・248 など。

〈Bタイプ……円形〉 ほぼ円形を呈するもの：SK 201・112・120 など。

さらにA・B両タイプの形態から分けると、次の10種類のタイプになる。

A-1タイプ 壁が直線的で深い……79・101 など。

2タイプ 壁がやや傾斜を持ち浅い……218・222 など。

3タイプ 埋土上部中央付近に約20cmの自然石を1～3個持つ……18・221・254 など。

3'タイプ 浅くやや小型で底面に石のあるもの……205・205'・232 など。

4タイプ 埋土上部中央付近に扁平で細長い自然石をたてる……220・230・290 など。

5タイプ 坩底面短辺側に溝状の落ち込みがあり、数個の自然石とその溝で長方形を形づくる……18・230・234 など。

6タイプ 坩底面に自然石を1～3段積み重ねて組石墓風にしたもの……228。

B-1タイプ 小型で埋土中ないし坩底面に自然石がないもの……201・250・118 など。

2タイプ 小型で埋土中ないし坩底面に数個の自然石を持つ……202・204・255 など。

3タイプ やや大きめで埋土中ないし坩底面に自然石がないもの……111・119 など。

4タイプ やや大きめで埋土中ないし坩底面に自然石を持つ……112・117。

この中でA-3・4では遺構発見時点（黒色土中）で土塚墓中央部分にゆるやかなC字状を呈して地山土があるという特徴があり、B-3・4では他のタイプが底面平らなのに対し断面がゆるやか

な鍋底状を呈する。これらのタイプの土坑墓埋土中から出土した土器とこれらの周辺にある埋甕に使用された土器を合わせタイプ別の土坑墓の時期を考えると以下のようになる。

A-1：晩期前葉 A-3・4・5・6：晩期前～中葉 B-3・4：晩期中～後葉 またII-A区には上記タイプのうちA-2～6、B-1・2があるが数か所の小範囲内で別々のタイプが相隣り合ってグループ化していることが多い。A-2～6のタイプの長軸方位は西-東ラインを基本にし、N45°W～N95°W前後に入るものが多い。

2. 同埋甕について

深鉢形土器を埋設したいわゆる埋甕はI-B区13・II-A区34・II-B区1・III区6基の計54基発見された。これらの中には後世の耕作等により口縁部～体部上半を欠くものもわずかあるが、大部分はおおよそ口縁部まで残存している。埋甕本体に使用された深鉢形土器は最大のもので器高53cm・口径40cm、最小のものは器高26cm・口径23cmであるが、底径はいずれも10cm前後と小さい。土器の外面（時には内面にも）には口縁から体部下半にかけては例外なく煤状炭化物が付着し、その下は底部から3～5cm上まで火熱により器面色調が変化しもろくなっている。さらにその下から底部にかけては横方向のケズリが施され、数例であるが明らかに縄文施文後にケズリ調整が加えられたと考えられるものもあった。これら深鉢形土器中には口頸部文様のあるものもありI-B区では晩期前葉、II-A区では同前～後葉のものが出土している。

埋甕はSX95を除き全て直立していたが、他の土器で蓋をするもの（SX09・52）、本体の中に小型鉢形土器を直立させたもの（SX11）があり、2個の埋甕がごく接近し並んだようにしてある場合（SX13・25、54・55など）もあった。

また、II-A区では前述した土坑墓の小範囲グループ中に埋甕も数個ずつ加わるようである。

埋甕中埋土について4例だけであるが、埋土中に含まれていると思われるP（リン）の定量を計測していただいた。表3がそれであるが、この中で試料A・Bは、SX11の場合埋甕本体中にあった小型鉢形土器中の土、SX52は蓋の下の土、SX43は底面に近いところの土、SX09は埋土上部の土である。今回は試料の抽出に多少問題があり、しかも分析していただいた数も少ない。このため表3の結果をそのまま受け入れることはできないが、それによれば、埋甕底面に近い部分の埋土中に含まれるP分は、その遺構外の土中のそれよりも高いことがわかる。

3. おわりに

梨ノ木塚遺跡は縄文時代前期初頭から前・中期を経て、後期に一時途断えながらも晩期終末まで人間の生活の舞台の1つとなっていた。しかるに晩期の遺構で日常生活に関連あると考えられるものは、I-A・II-A・II-B区で発見されたフラスコ状ピットのみである。墓域と日常生活の場が分離されることは東北から北海道における晩期遺跡では通例となりつつあるが（注）、本遺跡でも

表2 土坑墓計測値・タイプ(1)

(単位m)

遺構名	法量	壇口長軸	壇口短軸	底面長軸	底面短軸	深 さ	長軸方向	タ イ プ
I-B区								
SK 79		1.75	0.8	1.65	0.75	0.55	N90°W	A-1
94		1.85	1.6	1.2	1.1	0.45	N85°W	"
99		1.28	0.7	1.1	0.55	0.4	N97°W	"
101		1.61	0.88	1.52	0.8	0.47	N110°W	"
102		1.6	0.8	1.35	0.7	0.5	N78°W	"
II-A区								
SK 18		1.7	1.45	1.4	1.05	0.6	N94°W	A-3.5
200		0.9	0.8			0.28	N25°W	A-2(?)
201		0.84		0.74		0.34		B-1
202		0.94		0.79		0.31		B-2
203		0.8		0.6		0.26		"
204		1.25		1.15		0.12		"
205		1.6	1.1	0.5	0.45	0.39	N29°W	A-3'
205'		1.15	1.0	0.8	0.65	0.25	N115°W	"
215		0.9		0.8		0.3		B-2
218		1.0	0.6	0.8	0.45	0.28	N98°W	A-2
220		1.7	1.35	1.6	1.05	0.39	N85°W	A-4
221		1.57	0.72	0.88	0.54	0.36	N65°W	A-3
222		1.5	0.95	1.25	0.8	0.26	N67°W	A-2
224		1.2	0.9	0.85	0.45	0.46	N78°W	A-4
228		1.39	1.19	1.14	0.98	0.55	N109°W	A-6
229		1.4	1.2	1.1	0.87	0.49	N112°W	A-5
230		1.74	1.46	1.63	1.08	0.69	N49°W	A-4.5
232		0.95	0.72	0.6	0.6	0.25		A-3'
234		1.43	0.9	1.18	0.59	0.24	N90°W	A-5
235		1.65	1.1	1.55	1.0	0.42	N95°W	A-3
237		1.70	1.12	1.3	0.8	0.31	N96°W	"
240		1.45	0.8	1.15	0.6	0.32	N11°W	A-4
248		1.75	1.2	1.5	0.75	0.46	N71°W	"
250		1.0		0.55		0.36		B-1
251		1.2	0.95	1.15	0.6	0.41	N40°W	A-4
252		1.6	1.1	1.35	0.8	0.48	N122°W	A-2
254		1.2	0.75	1.0	0.65	0.17	N45°W	A-3
255		1.0		0.85		0.2		B-2
280		1.3		1.2		0.19		B-1
290		1.95	1.05	1.85	0.9	0.5	N77°W	A-4

表2 土塚墓計測値・タイプ(2)

(単位m)

遺構名	法量	坂口長軸	坂口短軸	底面長軸	底面短軸	深 さ	長軸方向	タイプ
II-B区								
SK 111		1.65	1.35	0.95	0.9	0.38		B-3
112		1.65	1.4	1.2	1.1	0.37		B-4
113		1.26		1.11		0.12		B-3
115		0.85		0.6		0.17		"
117		1.15		0.85		0.29		B-4
118		1.05		0.7		0.15		B-1
119		0.85		0.6		0.24		B-3
120		1.05		0.6		0.15		"

表3 梨ノ木塚遺跡土壌の分析結果

(Pの定量 mg/100g)

No.	試料名	試料の状況	A	B	平均	水分(%)
1	S X 09	土器外の土	7.63	7.80	7.72	5.15
2	"	土器内埋土	7.02	7.32	7.17	7.20
3	S X 11	土器外の土	7.25	6.96	7.11	4.05
4	"	土器内埋土	10.16	10.52	10.34	6.40
5	S X 43	土器外の土	6.13	6.31	6.22	5.55
6	"	土器内埋土	8.06	7.31	7.89	4.65
7	S X 52	土器外の土	8.18	8.65	8.42	6.10
8	"	土器内埋土	9.52	9.58	9.55	5.30

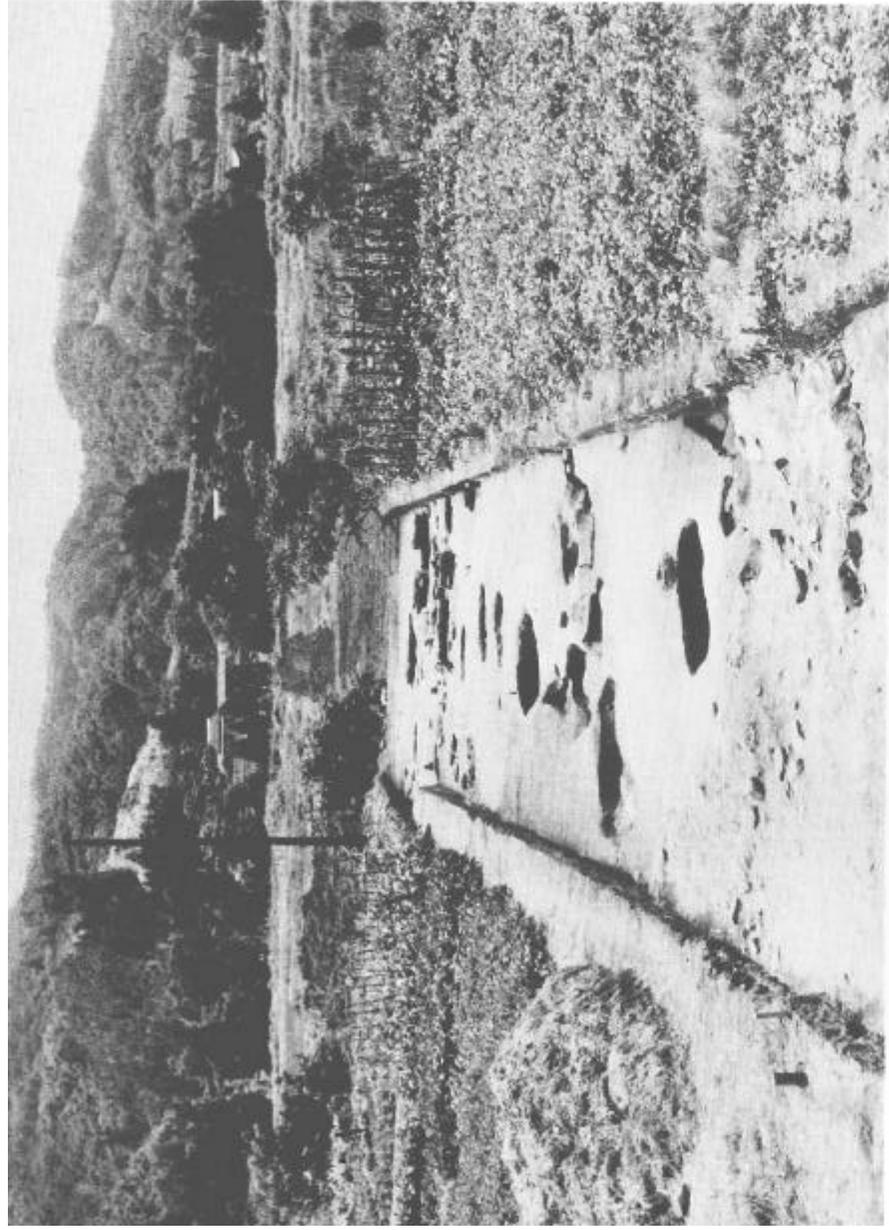
分析法：過塩酸分解による全Pの定量（抽出）——バナドモリブデン酸法，比色定量による。

その蓋然性は強い。今回の調査では中心部と思われる中央部畑地は未調査であるが、墓域からやや離れた未調査部分に居住空間が存在した可能性は高い。いずれにしろ、梨ノ木塚遺跡で今後未調査部分の調査がなされた場合、より具体的な形での梨ノ木塚縄文人の実相が明らかになるものと思われる。

注 縄文時代遺跡で墓域が居住空間から半ば独立して存在するという例は、北海道札苅遺跡，青森県三内丸山(II)遺跡，秋田県湯出野遺跡等で知られているが、これら遺跡での土塚墓のあり方についても梨ノ木塚遺跡のそれとの類似が指摘できる。しかしこれらの遺跡においても墓域における埋葬数と土塚墓数間には、本遺跡の場合と著しい差異がある。また土塚墓底面に周溝を持つ例も増加しているが、本遺跡の場合は溝と自然石を併用すること，立石との組み合わせが目されることであり、これらのことが梨ノ木塚遺跡における特徴ある葬制の一端を示すものであるように思われる。



図版1 遺跡全景（北▶南）



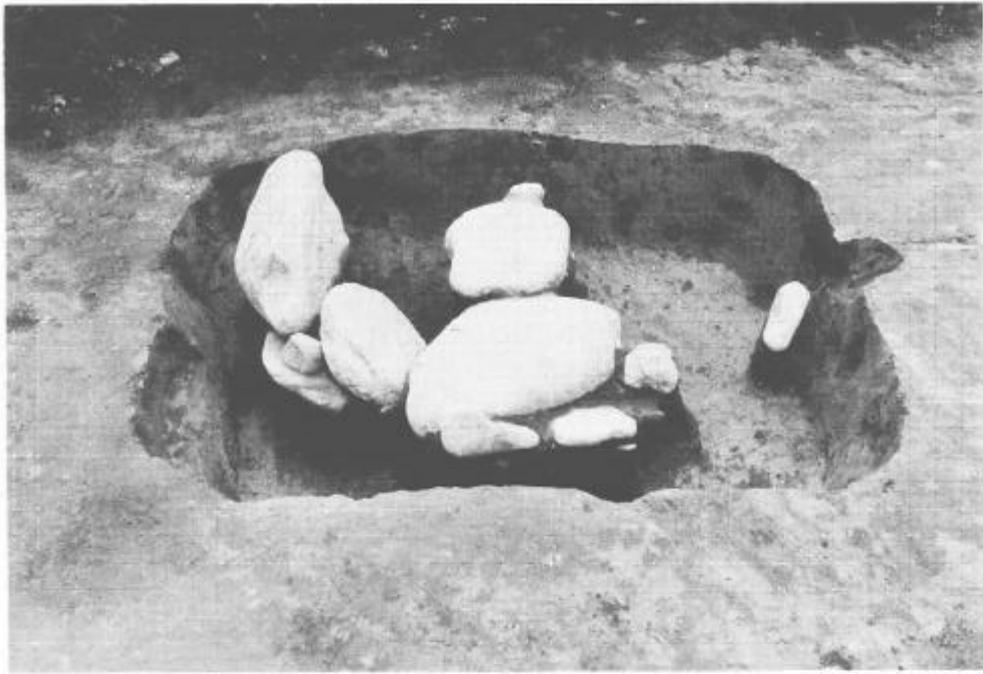
图版 2 上 I-B区全景(北▶南)
下 S X 50. 51埋囊



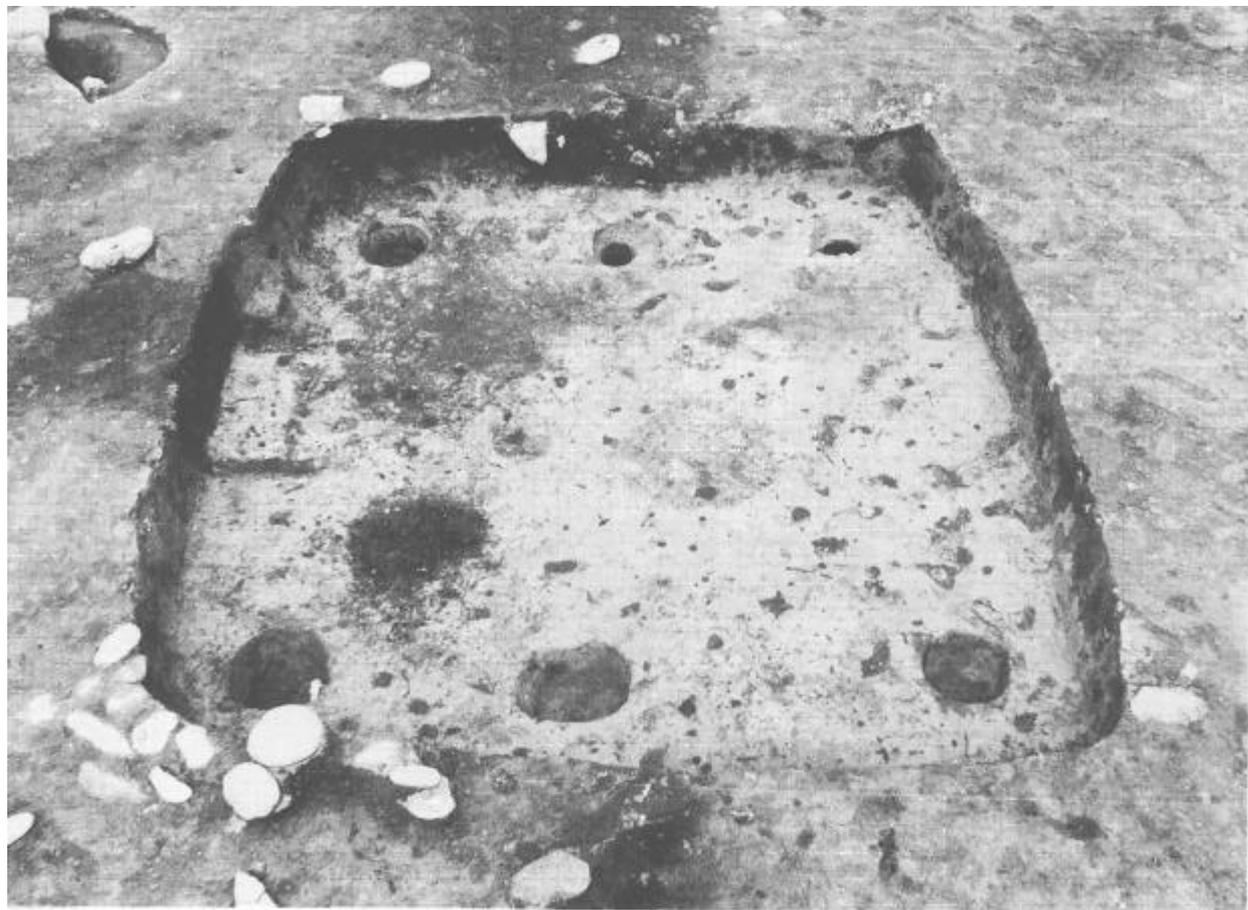
図版3 上 SX52埋甕
下 左からSX55, 54, 56埋甕



図版4 上 SX95埋甕
下 SK88土埴



図版5 上 SK96土壇
下 左からSK94, 101, 102, 99土壇墓(西▶東)



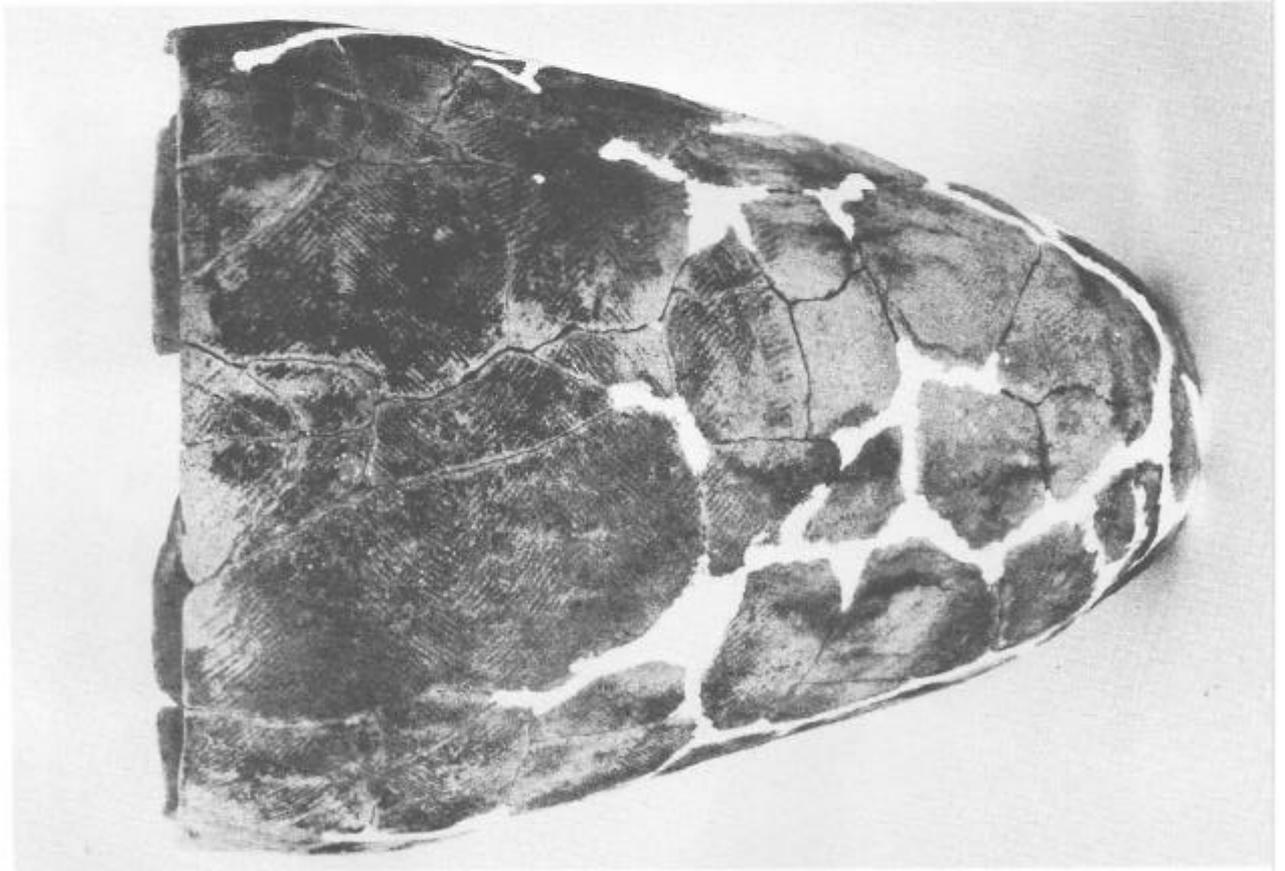
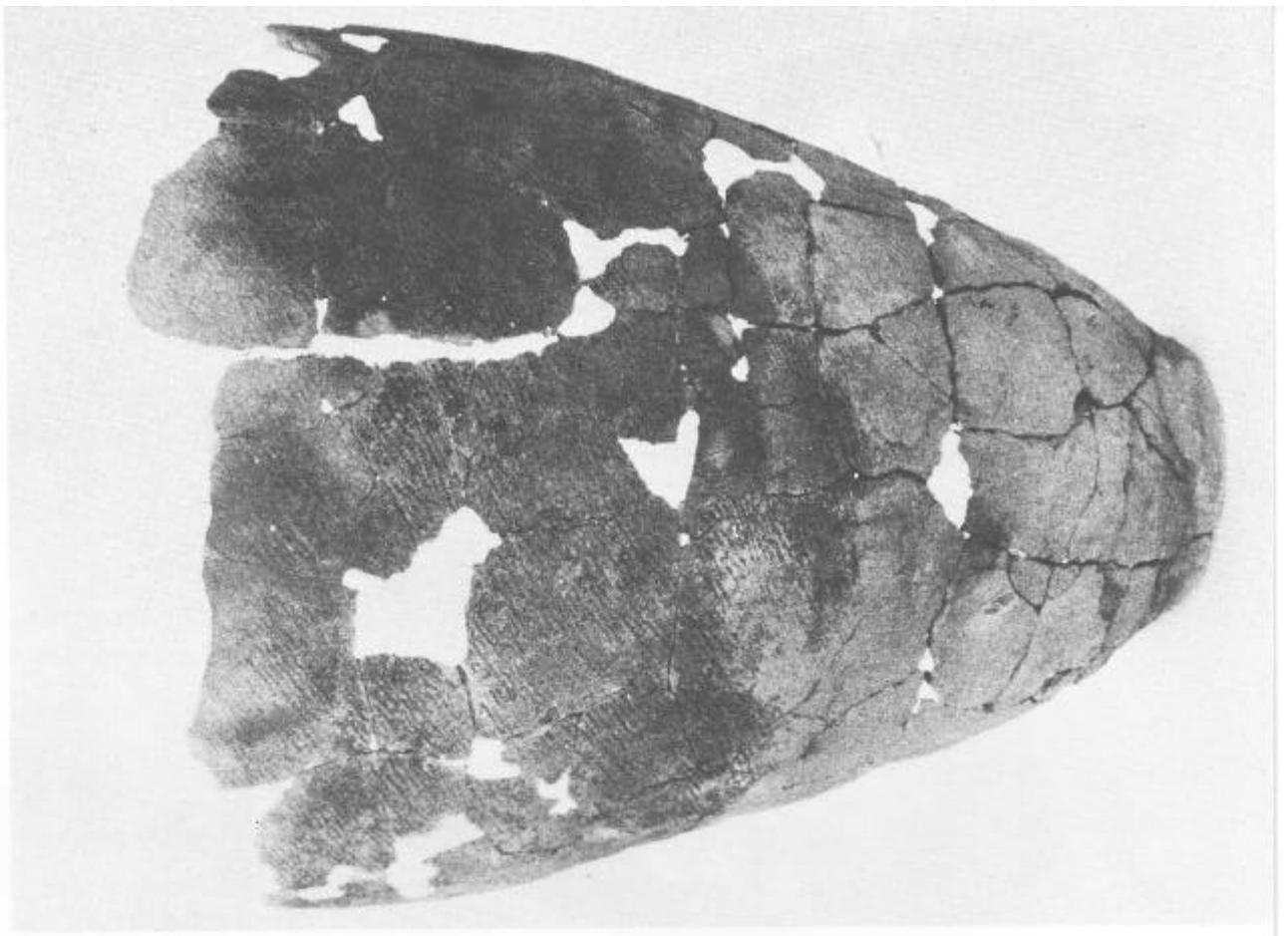
圖版6 上 S I 92豎穴住居跡 (東▶西)
下 S X 50土器



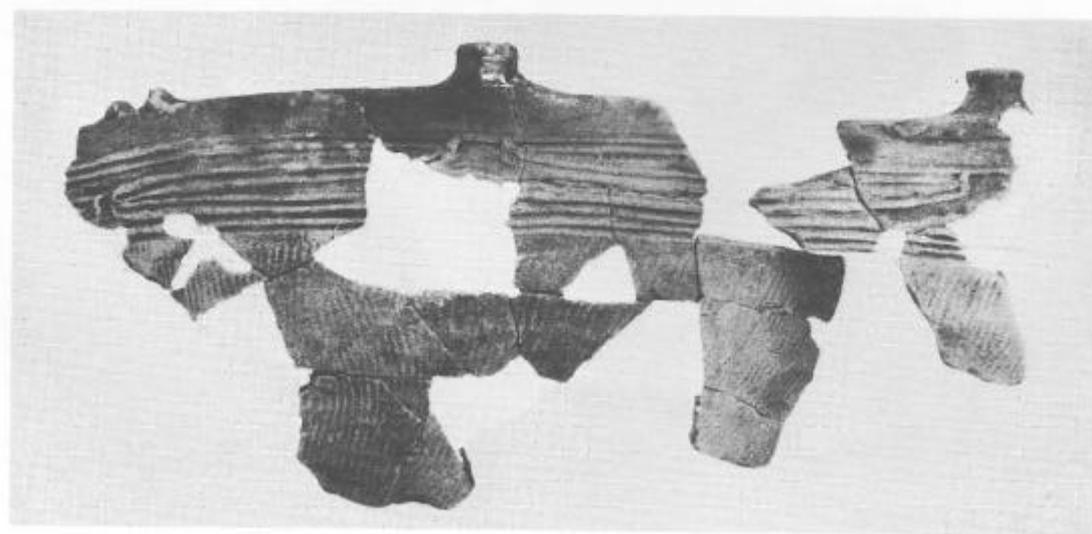
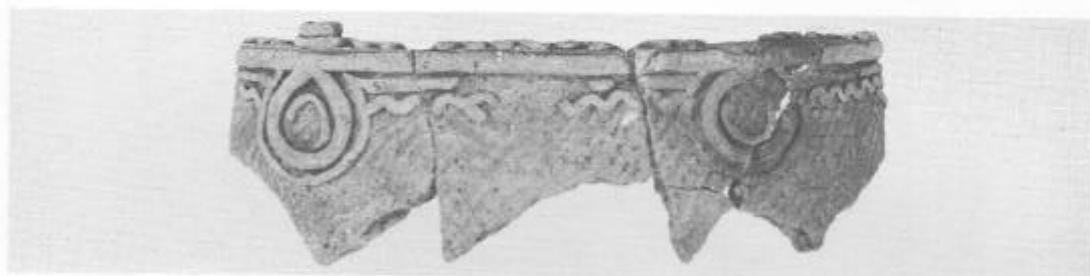
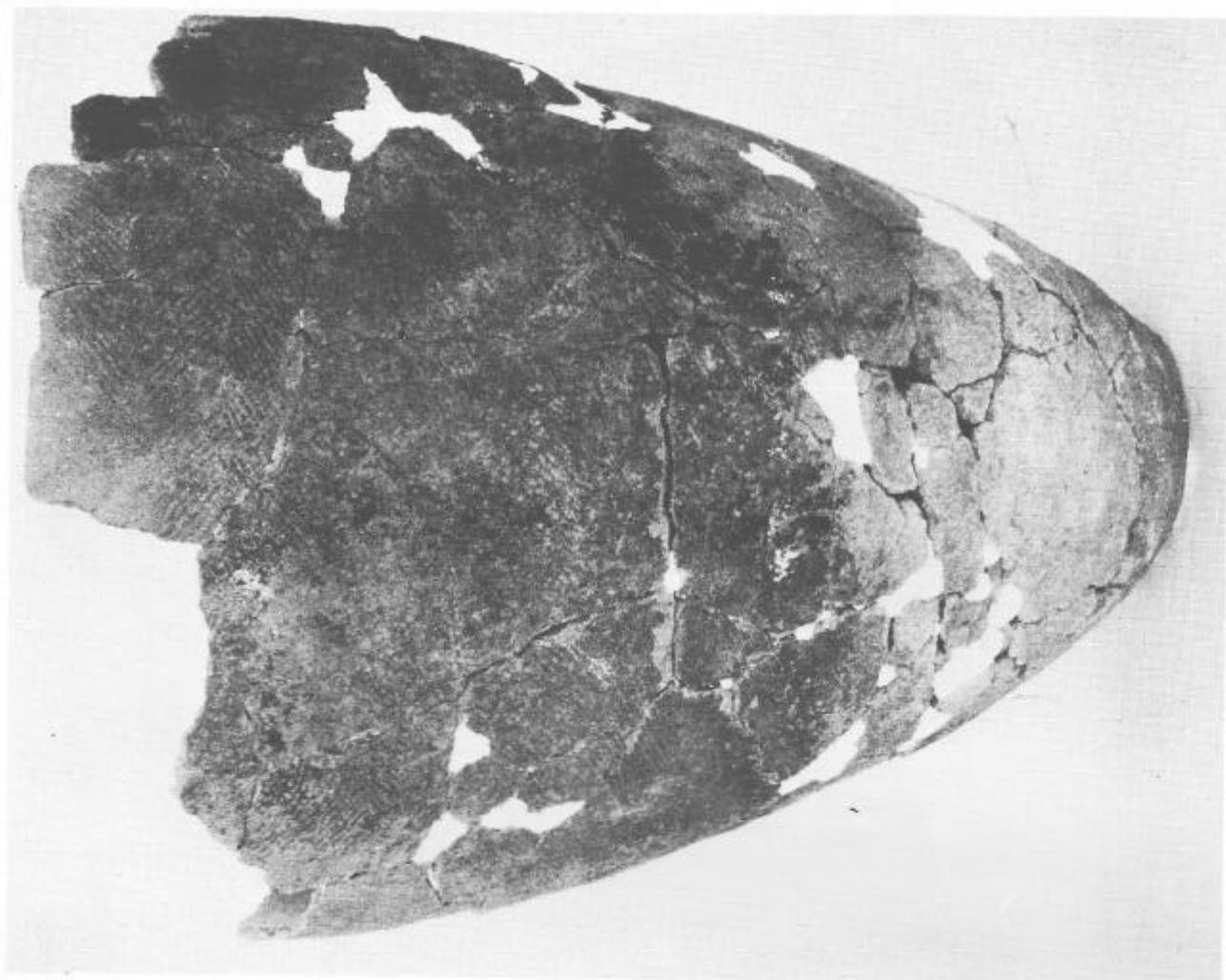
图版7 S X51土器



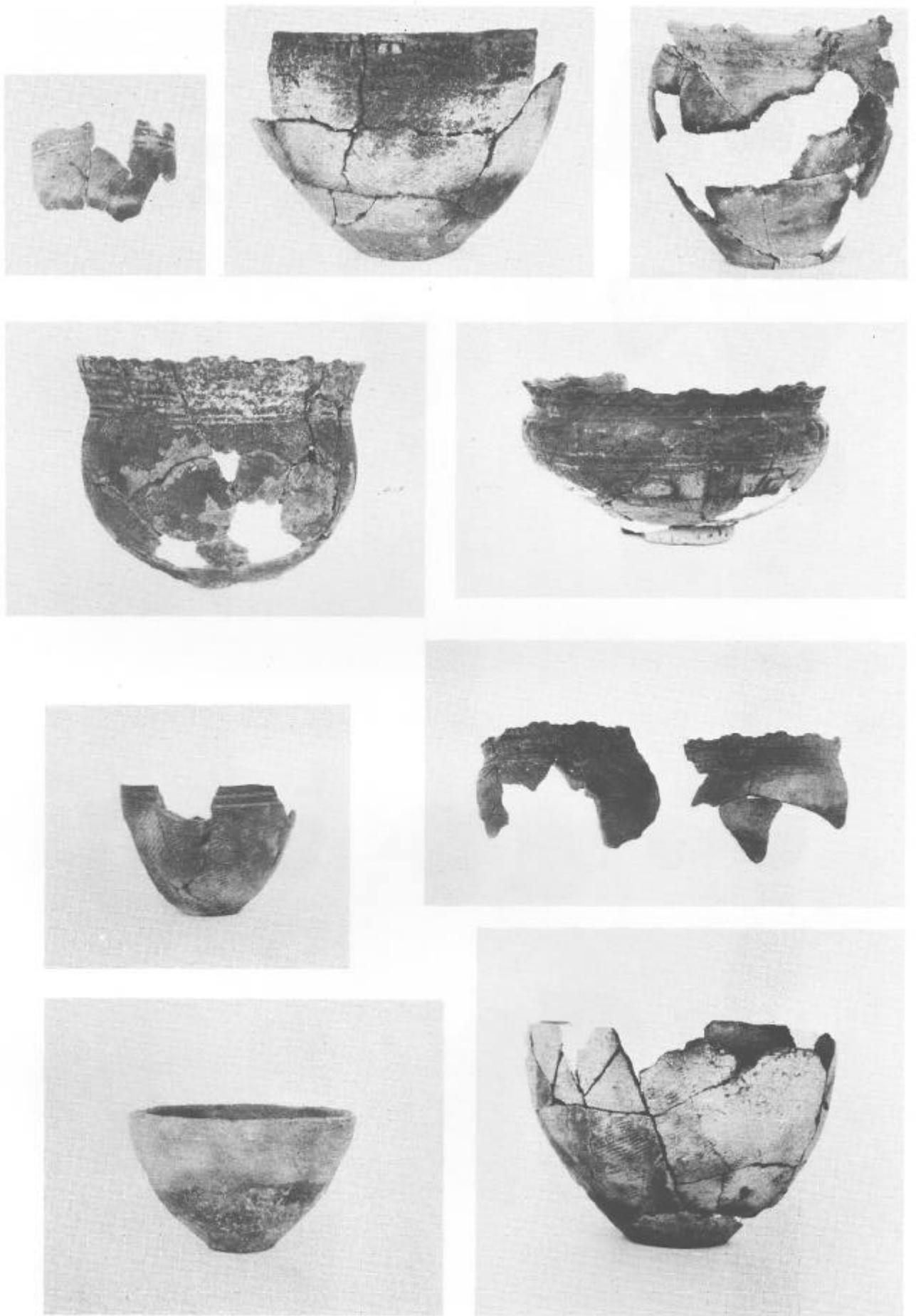
圖版8 上 SX52土器
下 同 蓋



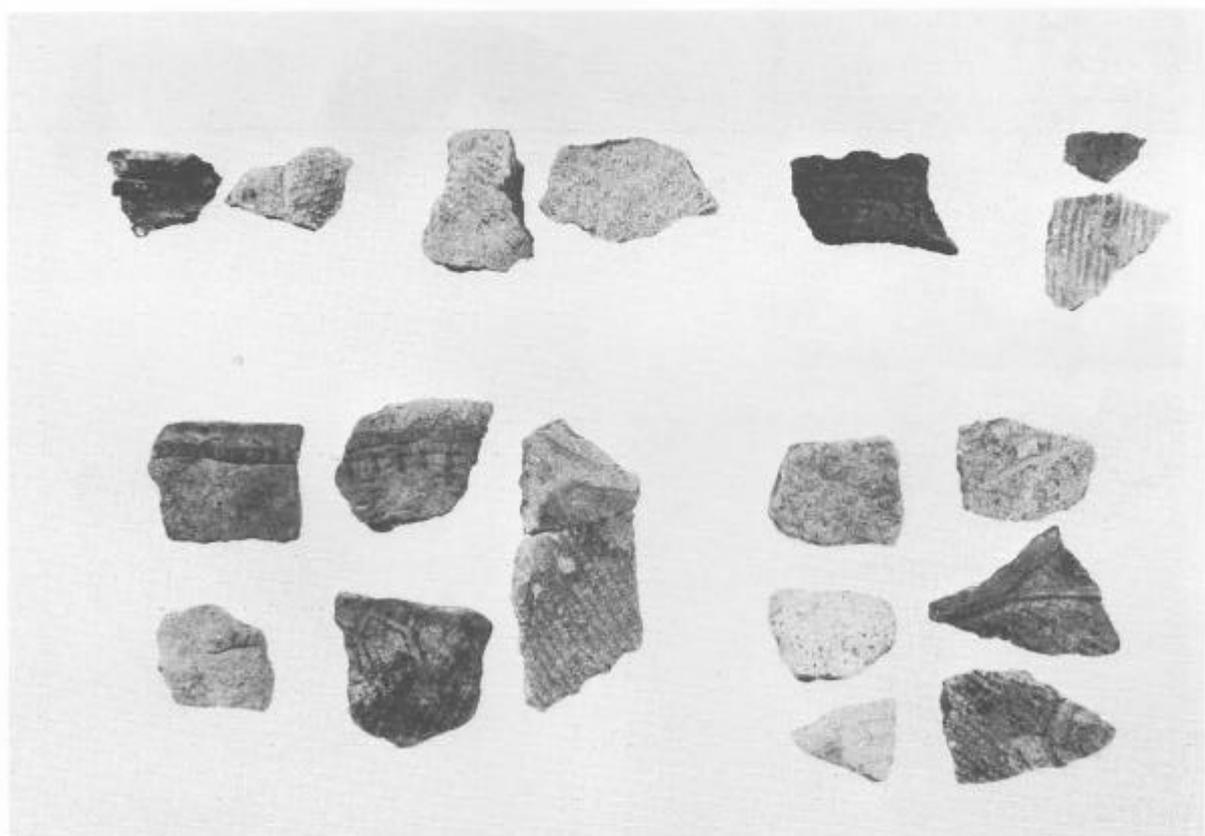
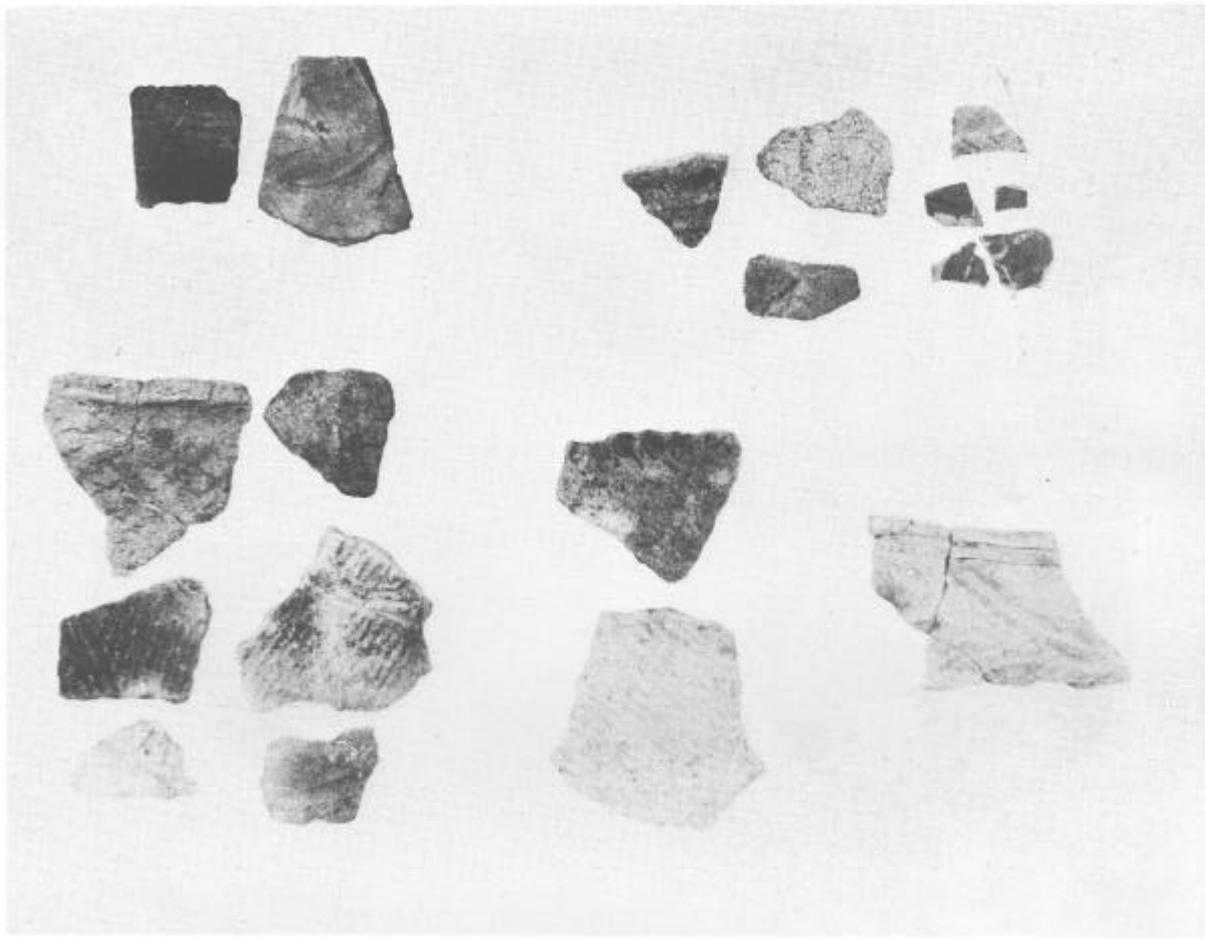
圖版9 上 SX 54土器
下 SX 95土器



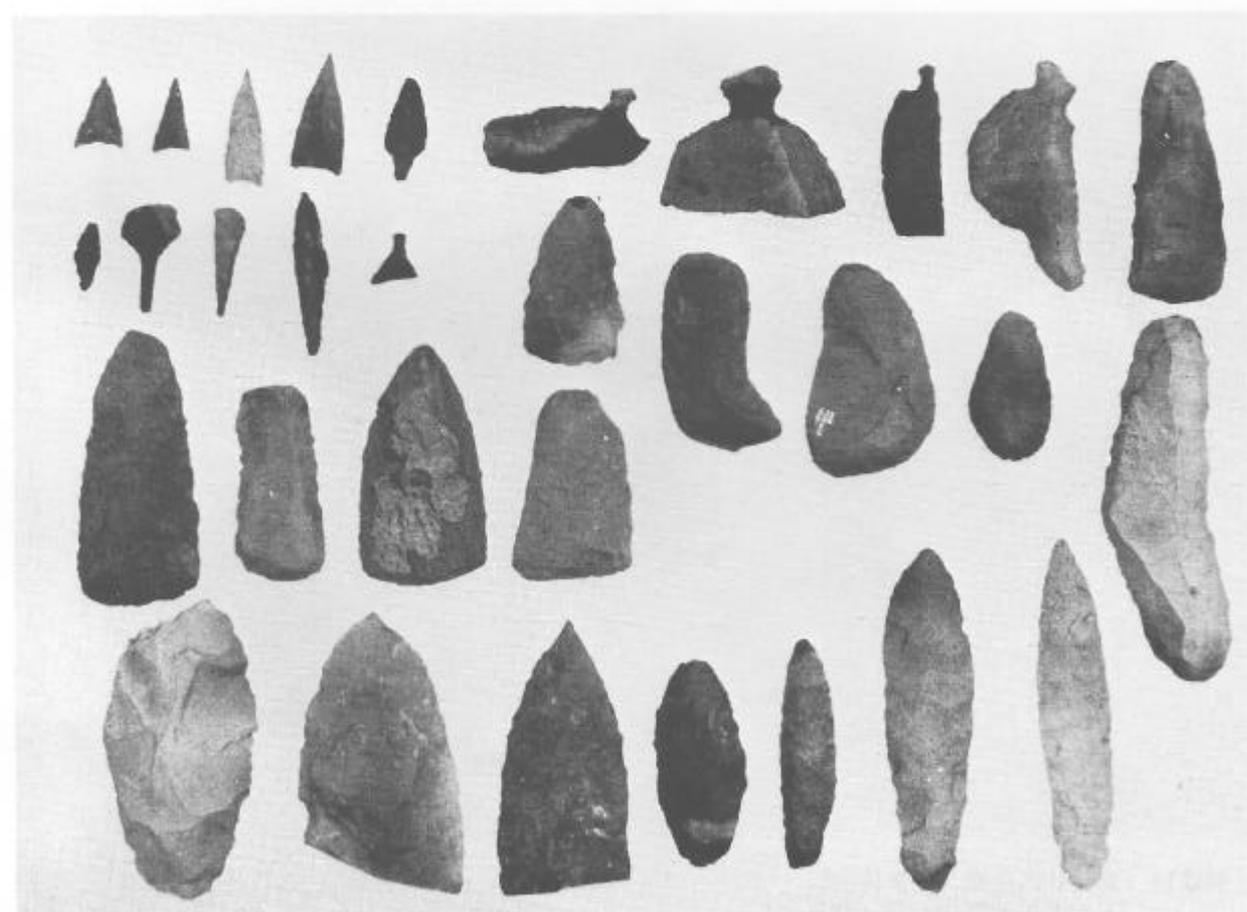
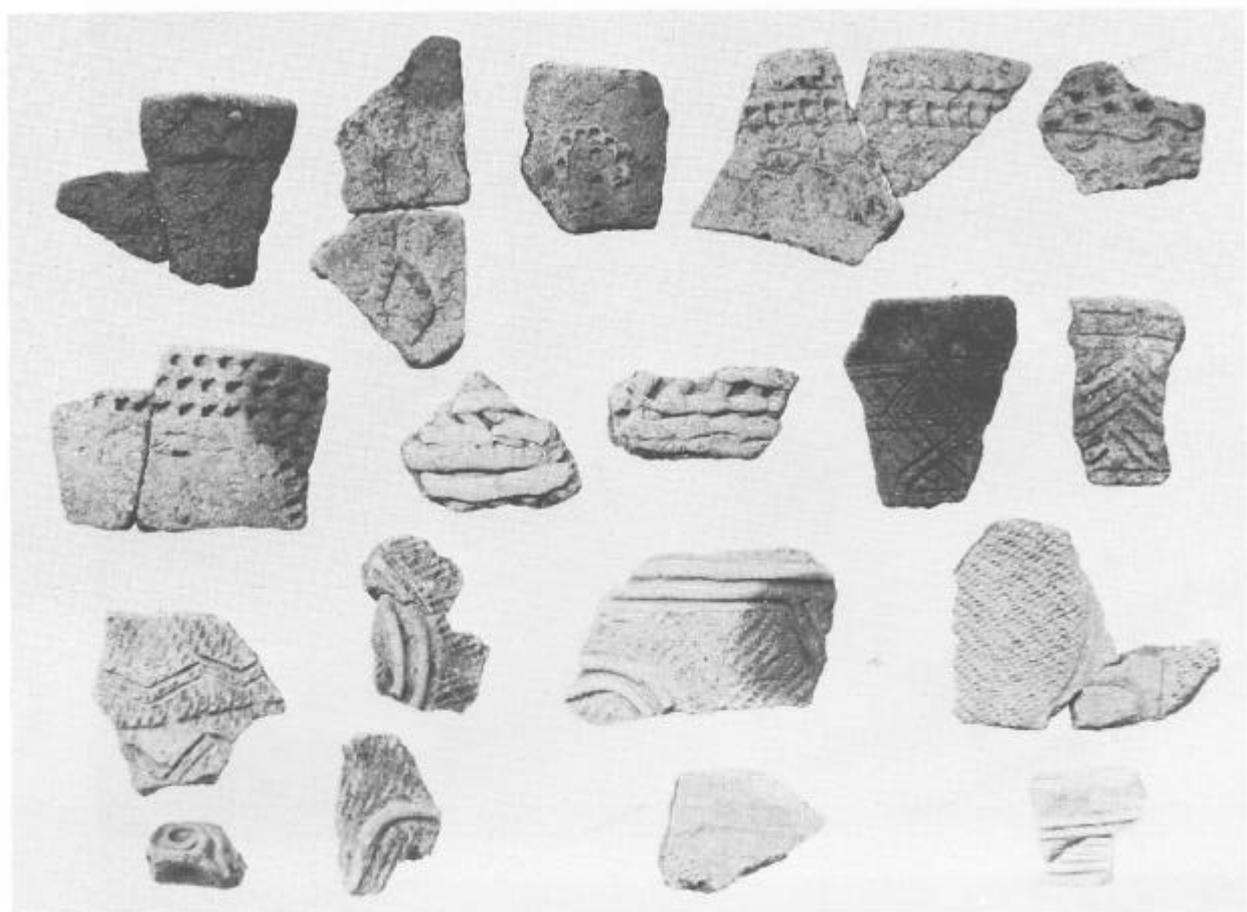
图版10 上 SX55土器
中·下 I—B区出土土器



图版11 S K 88出土土器



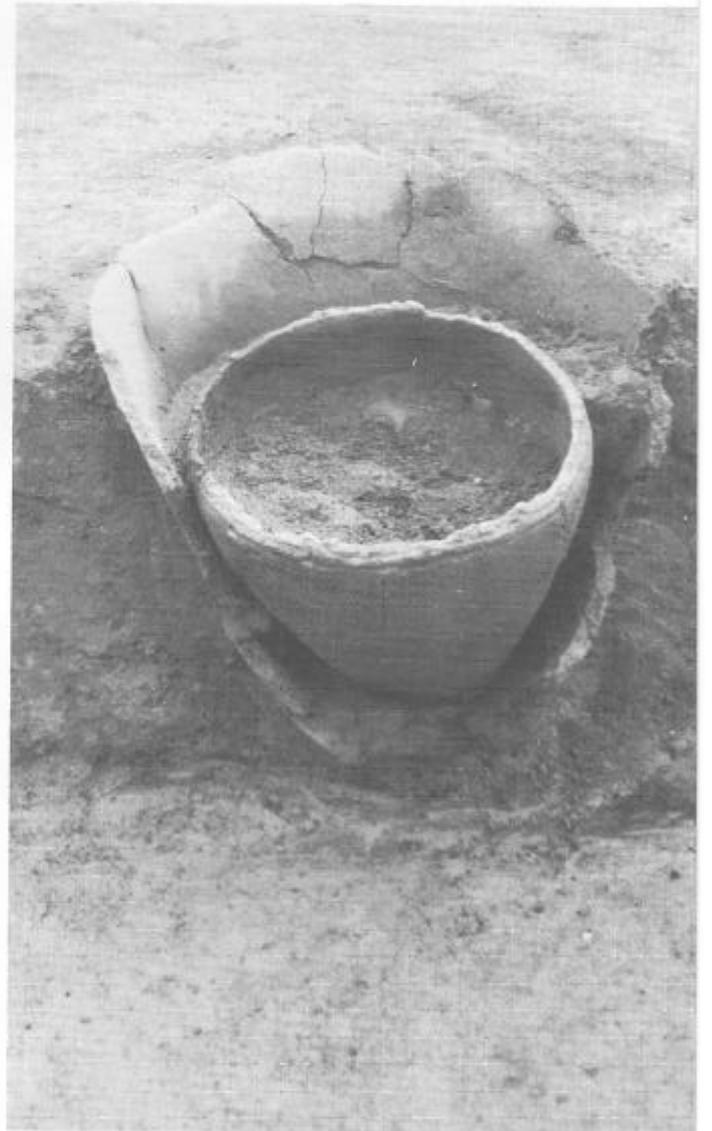
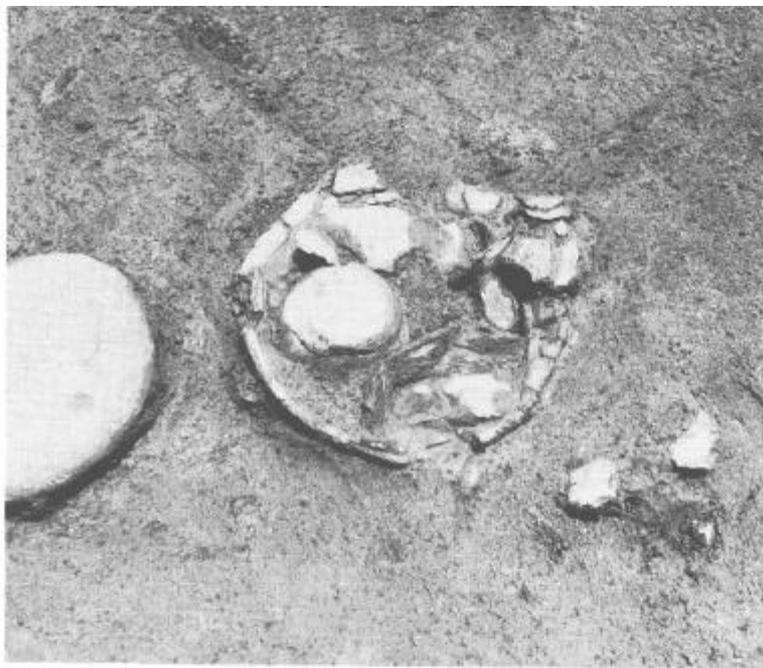
图版12 I—B区遗構内出土土器



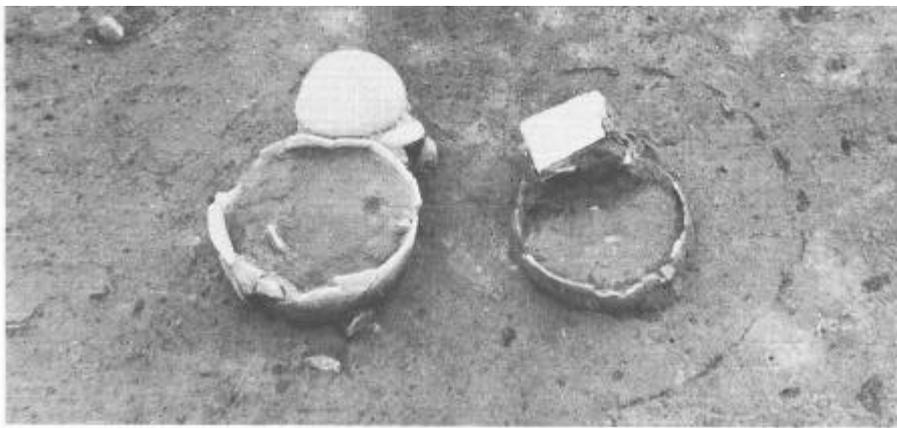
图版13 上 I—B区出土土器
下 同 出土石器



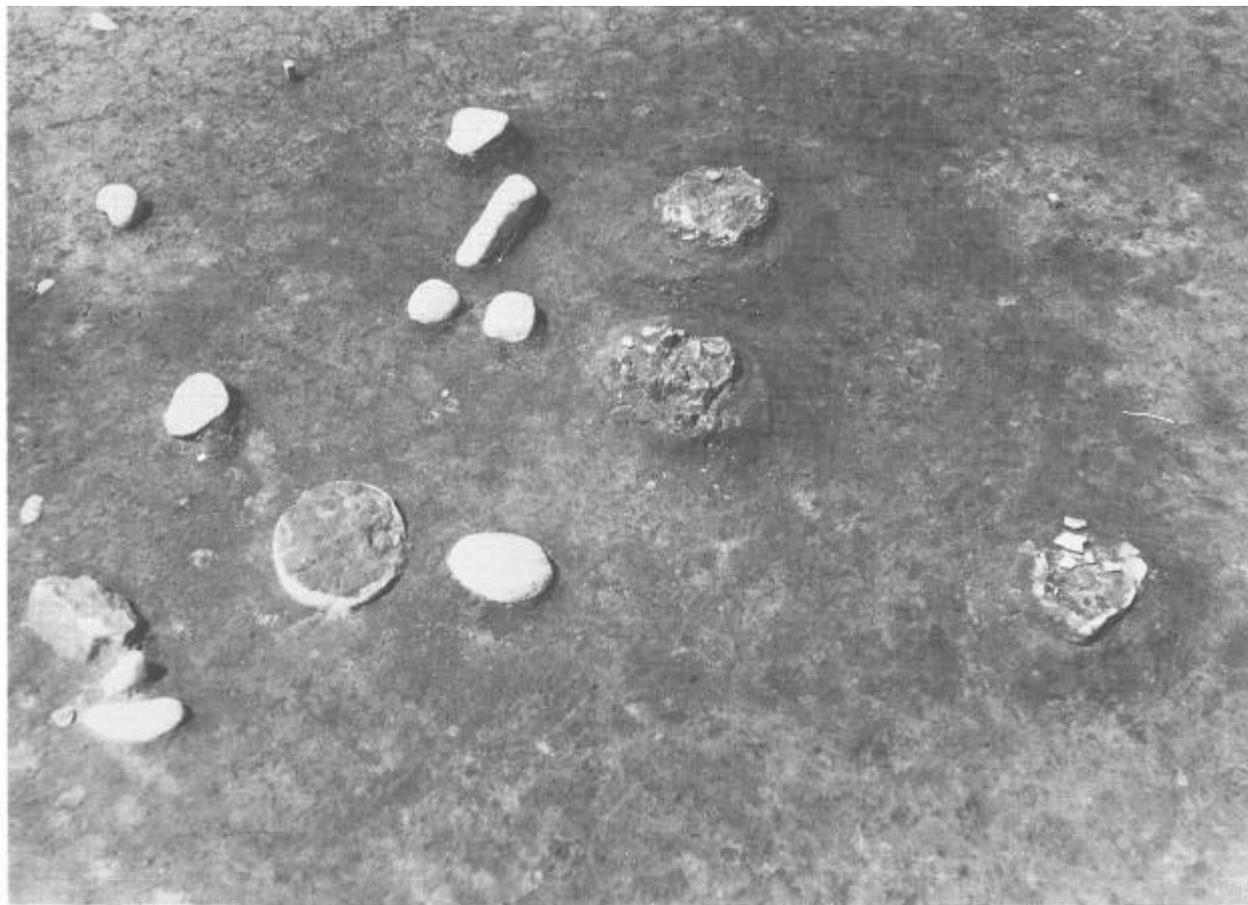
图版14 上 II区全景(北▶南)
下 土坑墓群中心部(南▶北)



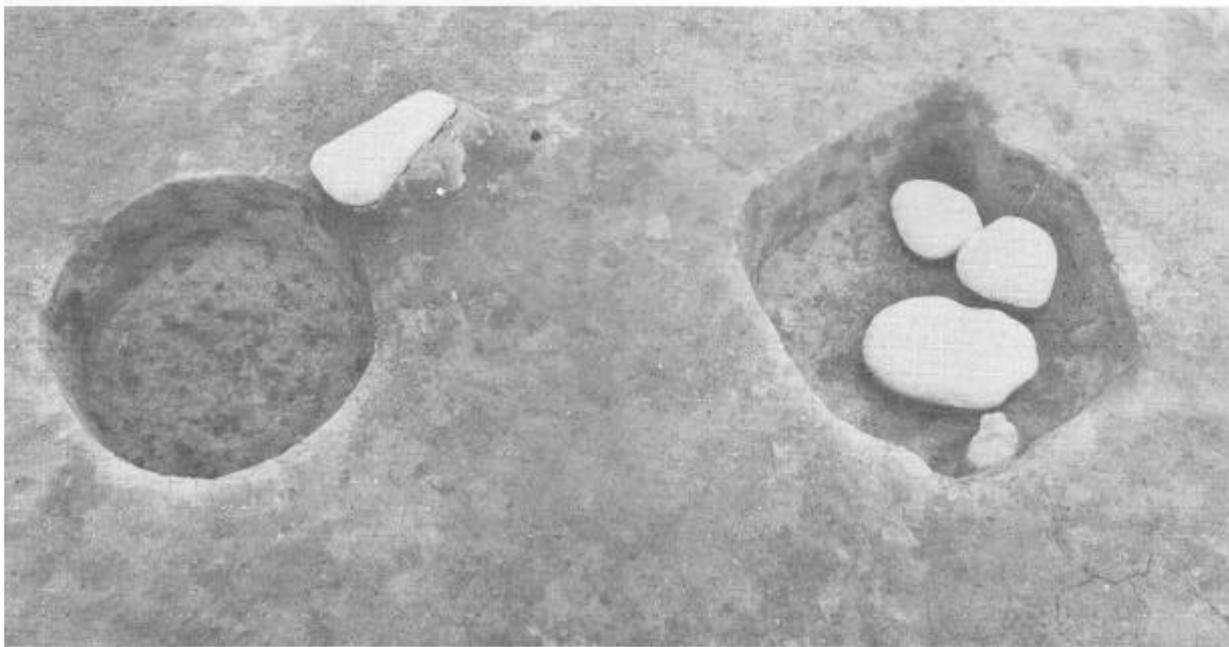
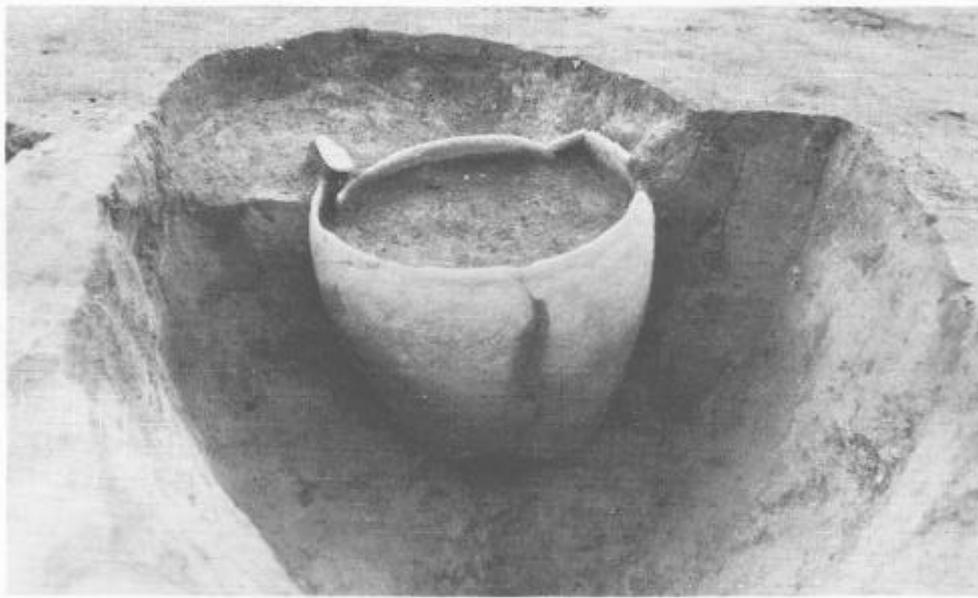
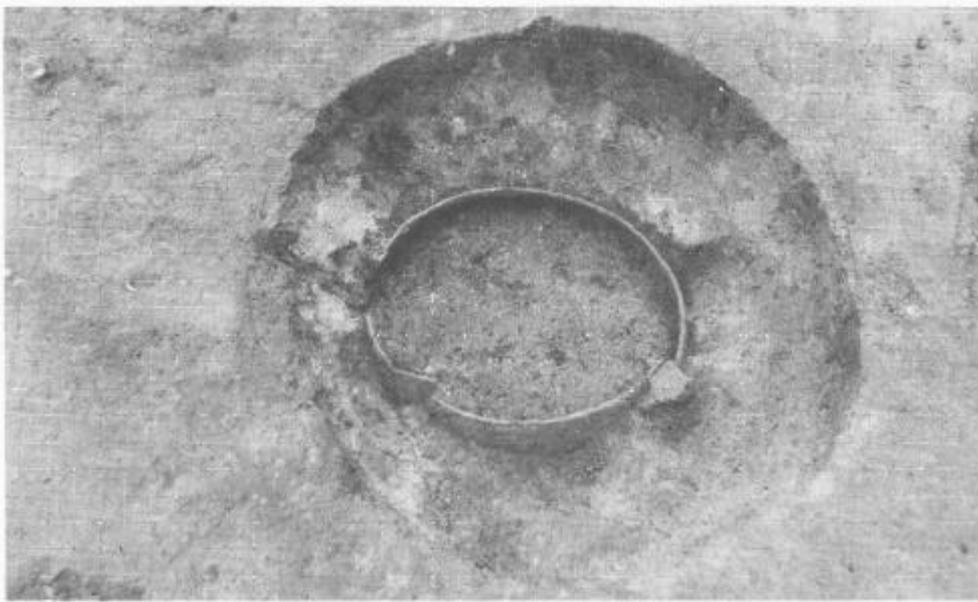
図版15 上・下左 SX09埋甕
下右 SX11埋甕



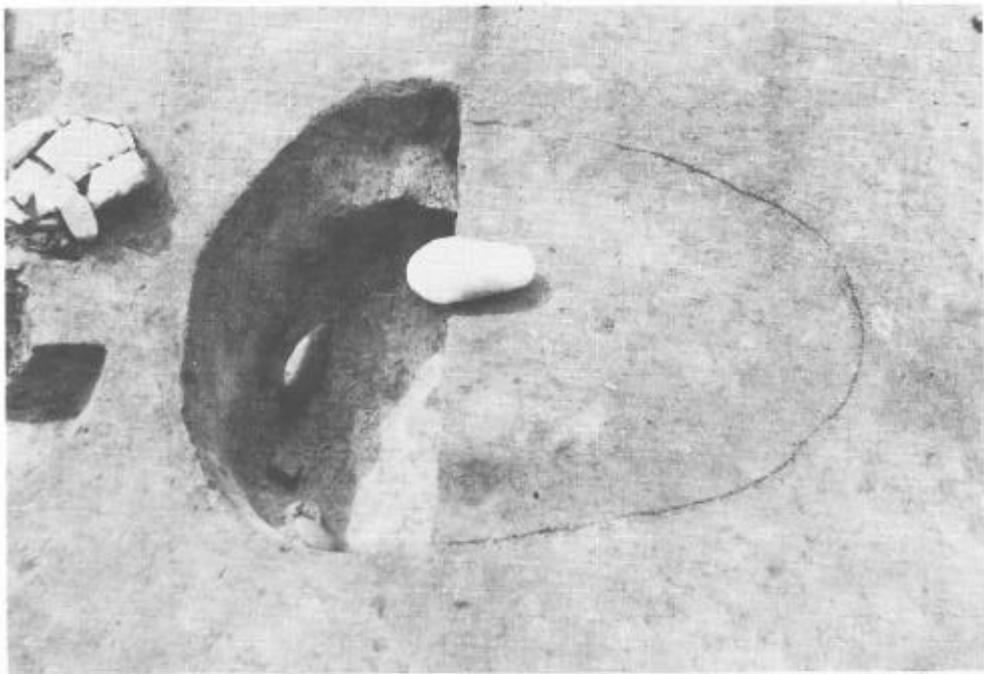
圖版16 上・中 SX13. 25埋甕
下 SX41埋甕



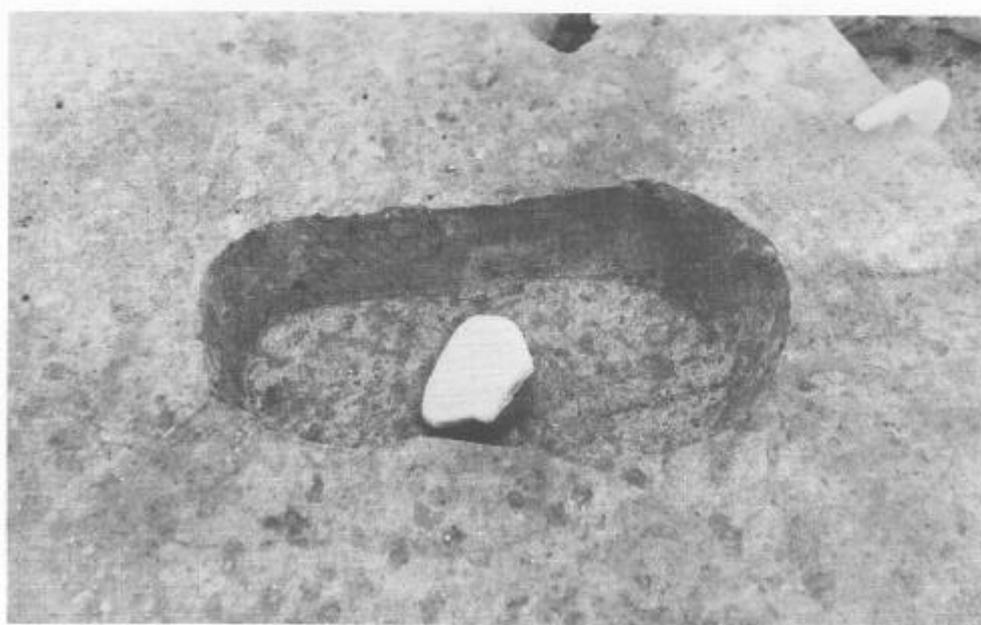
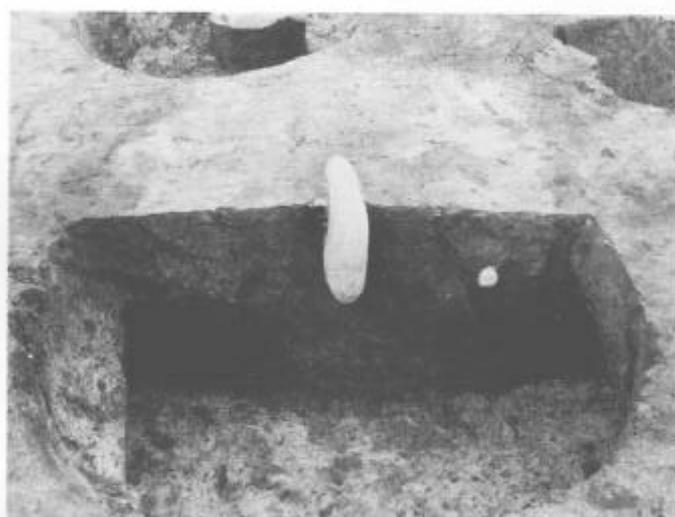
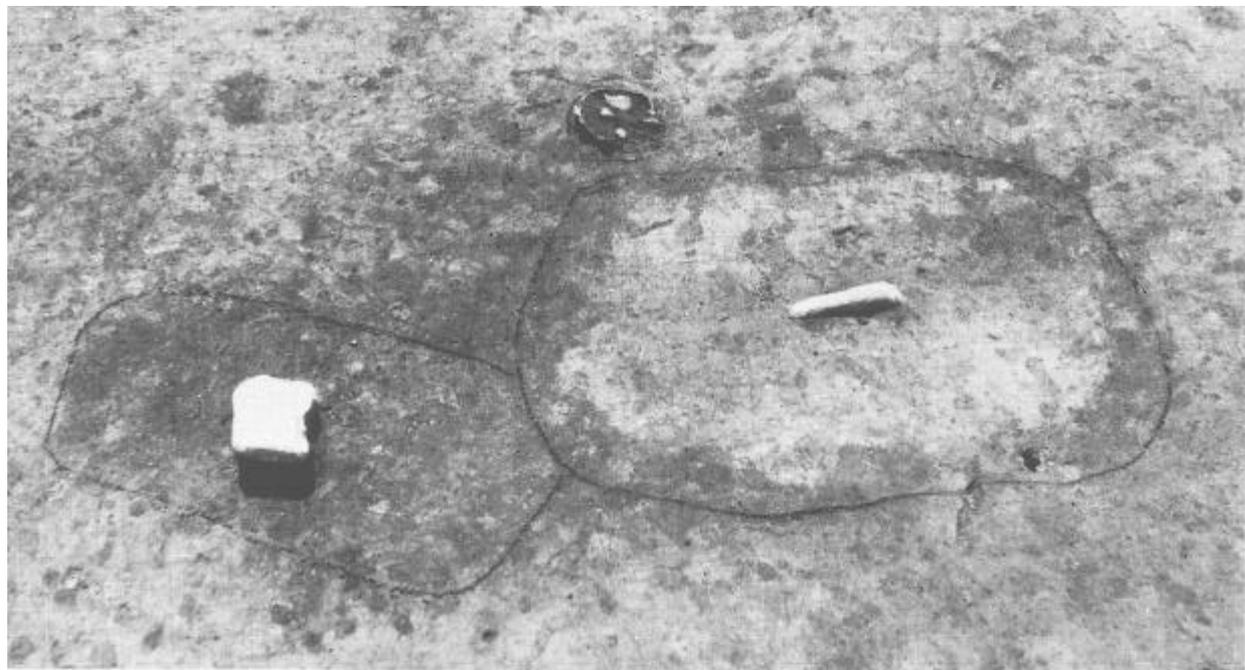
图版17 上 SX38. 39. 40. 43埋甗
下 SX43埋甗



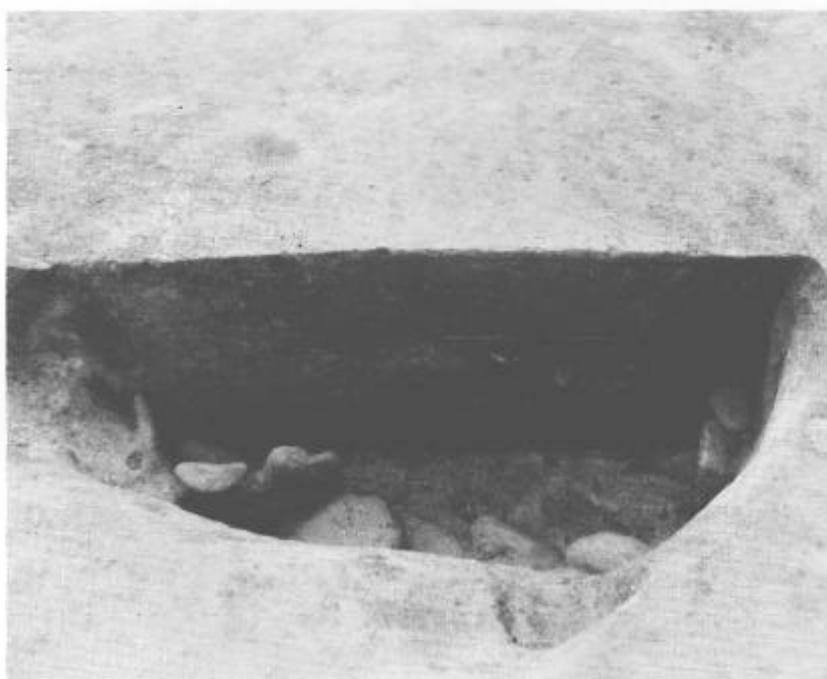
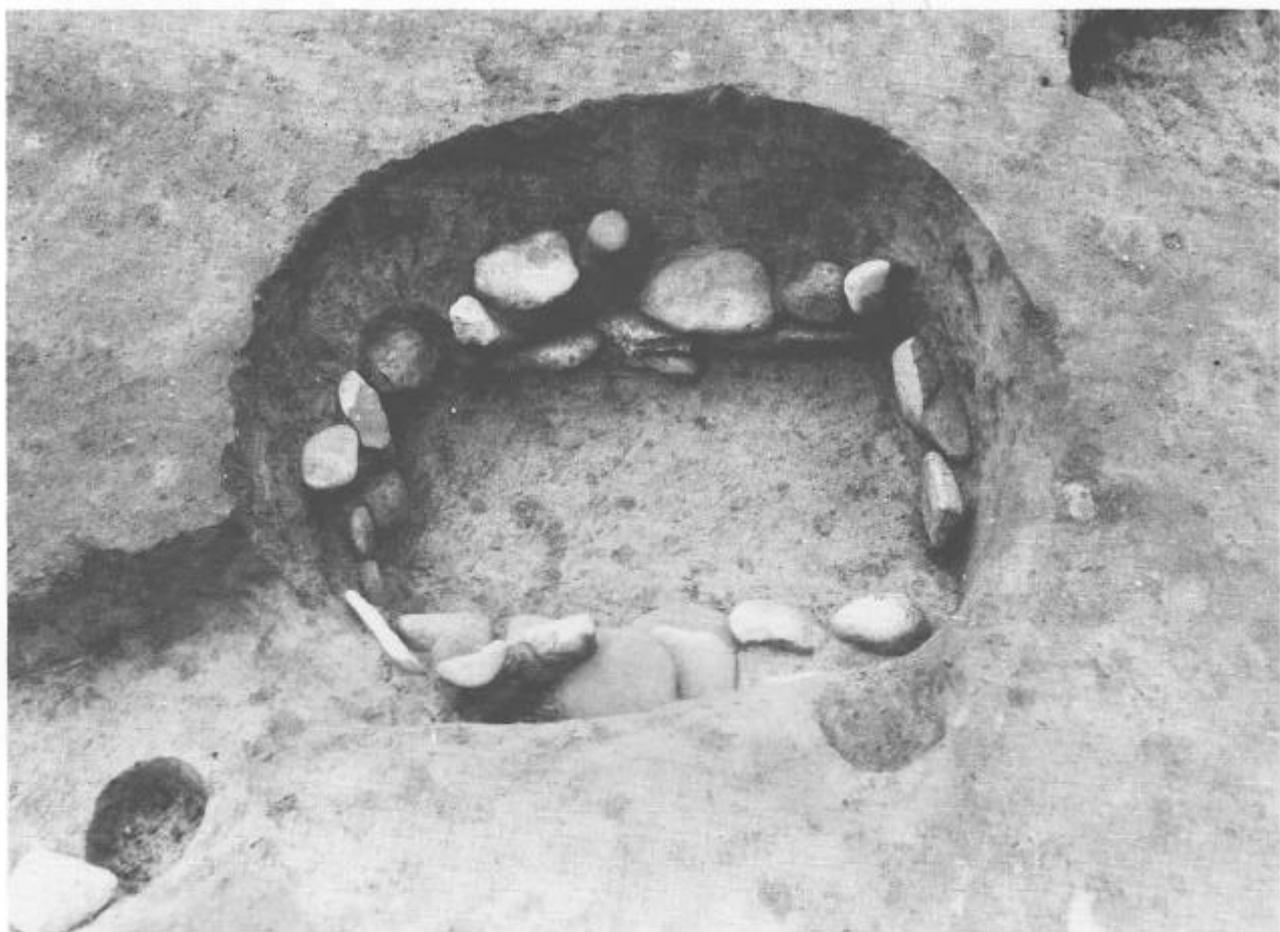
圖版18 上・中 SX226埋葬
下 SK201. 202土坑墓



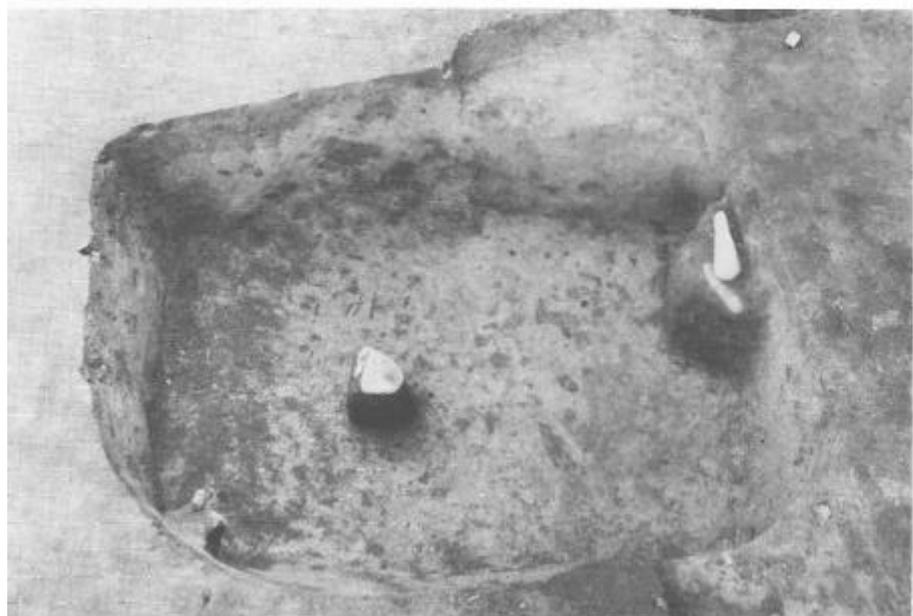
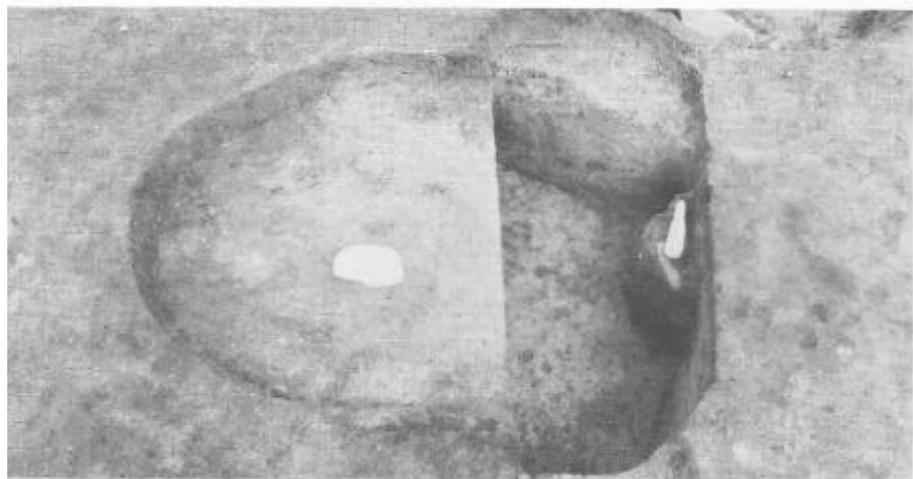
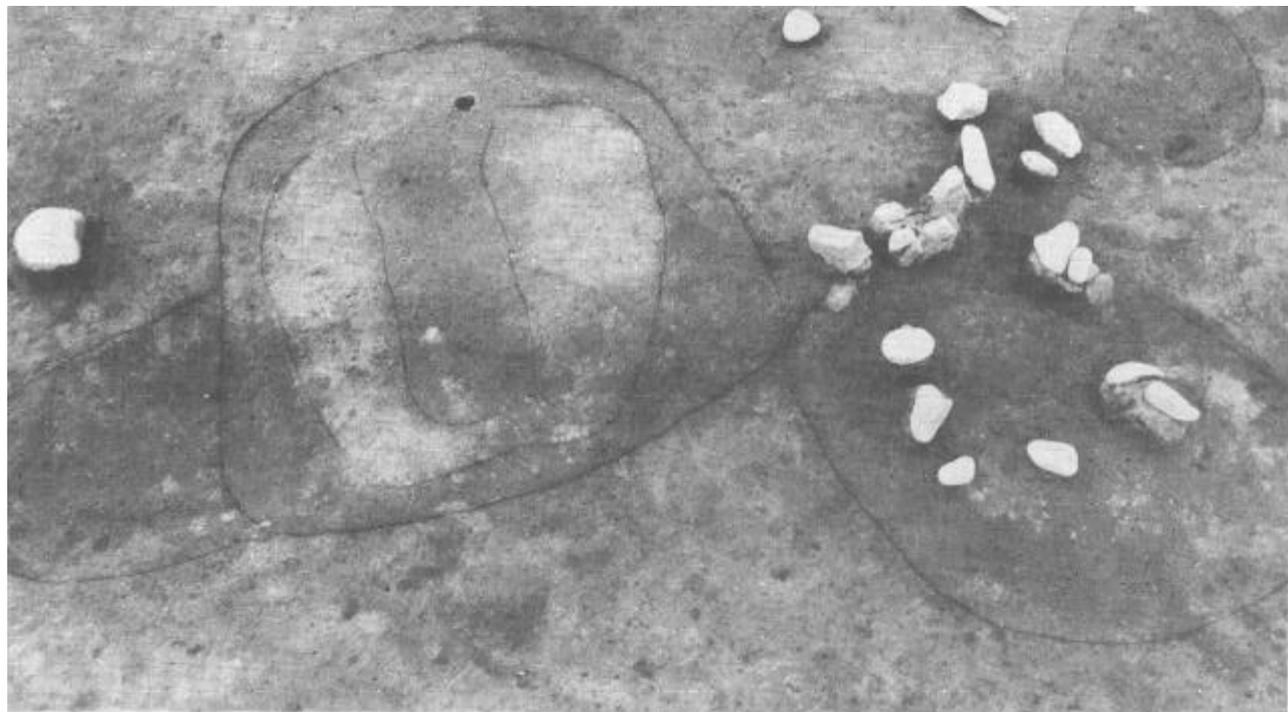
図版19 SK18土坑墓（北▶南）



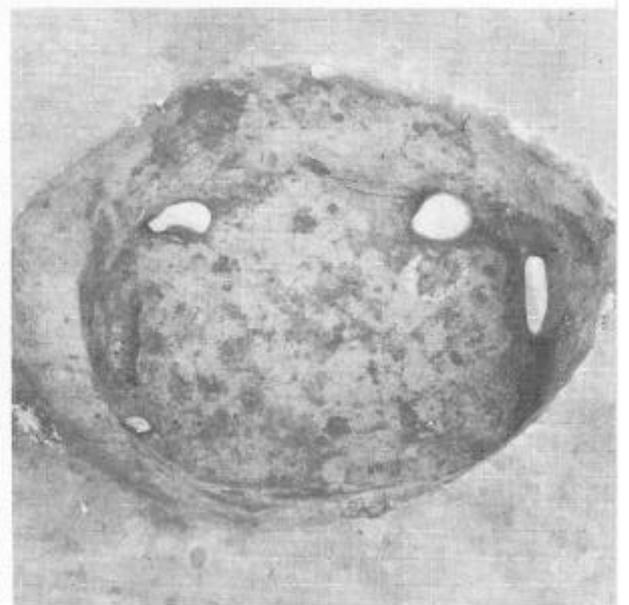
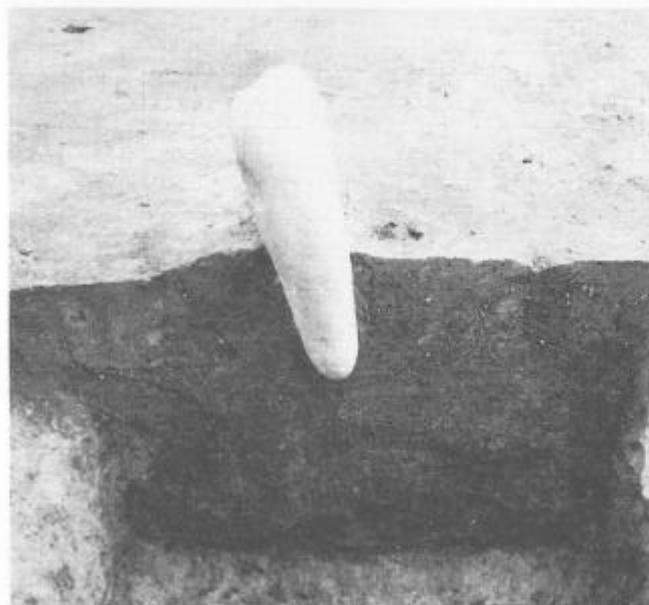
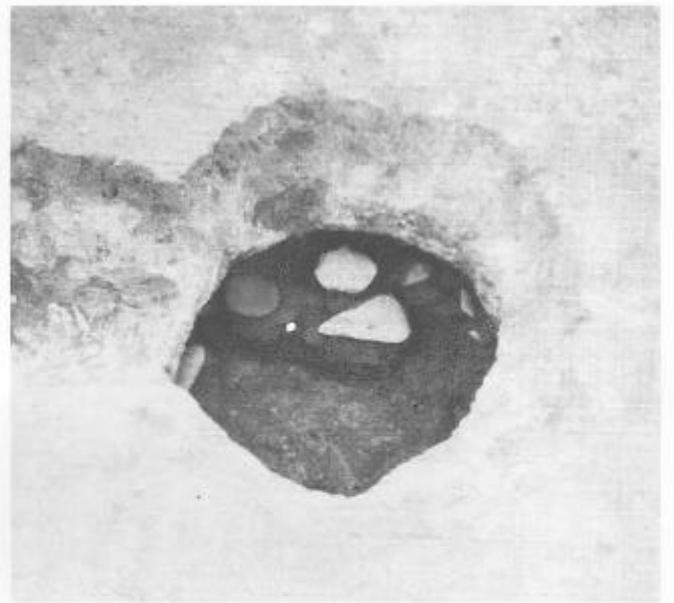
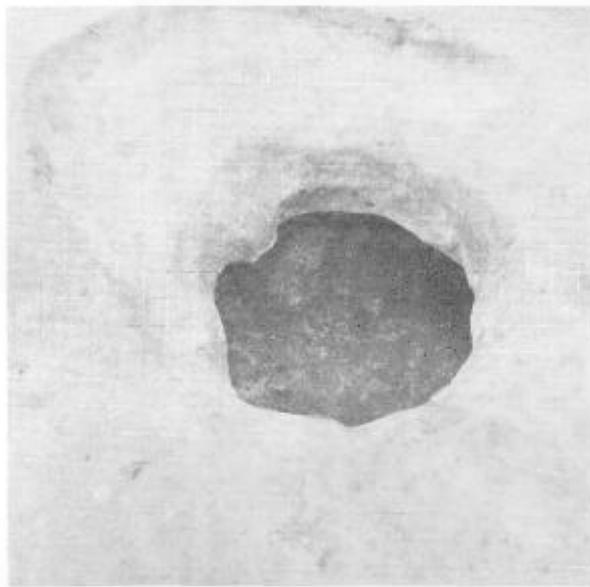
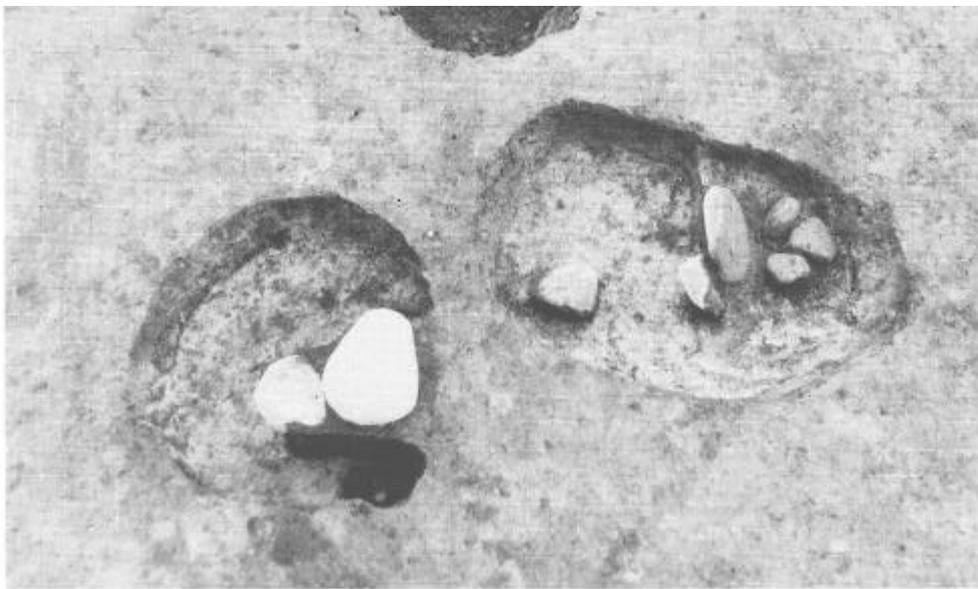
図版20 上 左 SK221 右 SK220 (北▶南)
 中 SK220 左 (北▶南) 右 (西▶東)
 下 SK221 (北▶南)



図版21 S K 228土壇墓
上・下の左（北▶南） 下の右（東▶西）

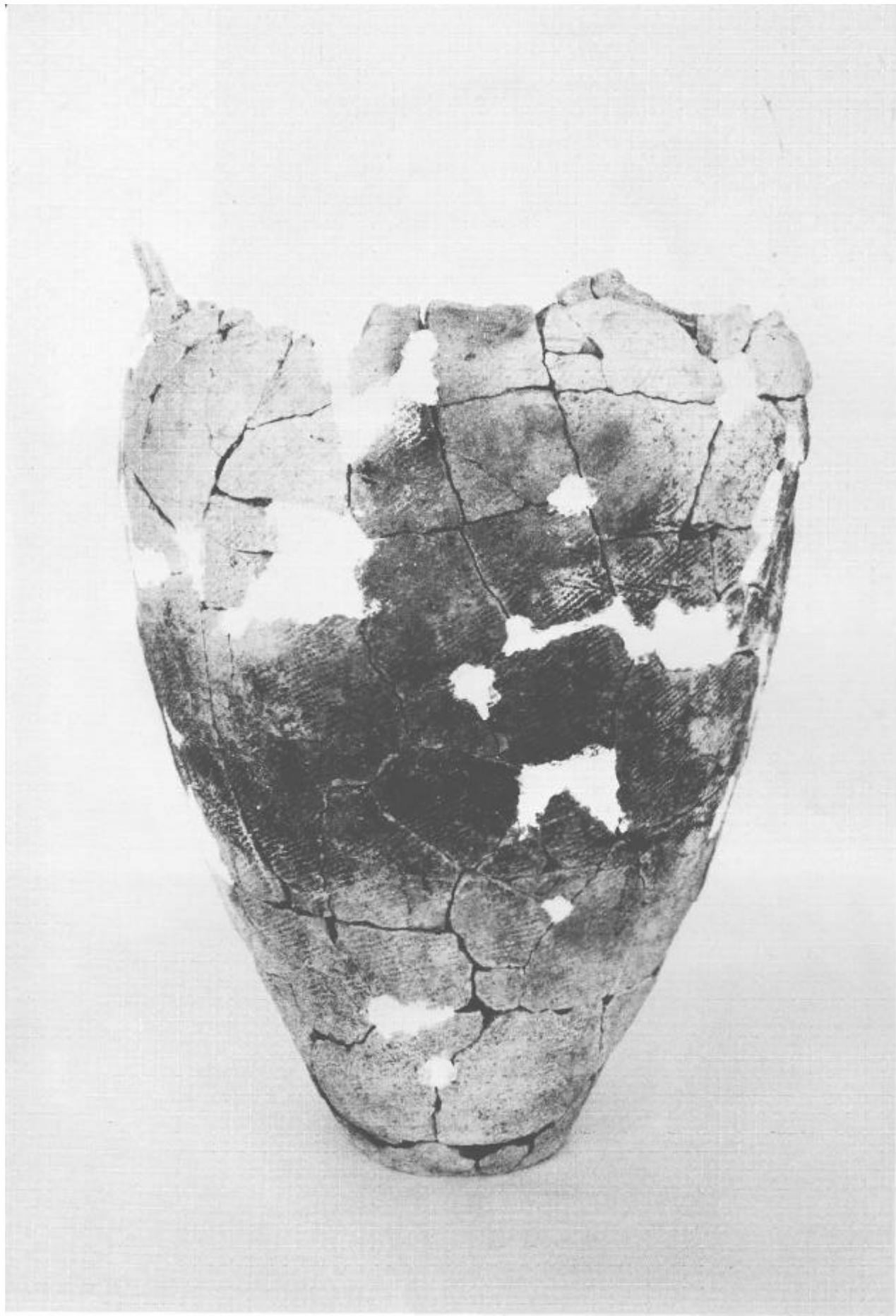


図版22 S K 230土坑墓
上(東▶西) 中・下(南▶北)



図版23 上 S K 253. 254土塚墓 (南▶北)
 中左 S K 217フラスコ状ピット (東▶西)

中右 S K 219フラスコ状ピット (東▶西)
 下左 S K 251土塚墓立石 (西▶東)
 下右 S K 229土塚墓 (南▶北)



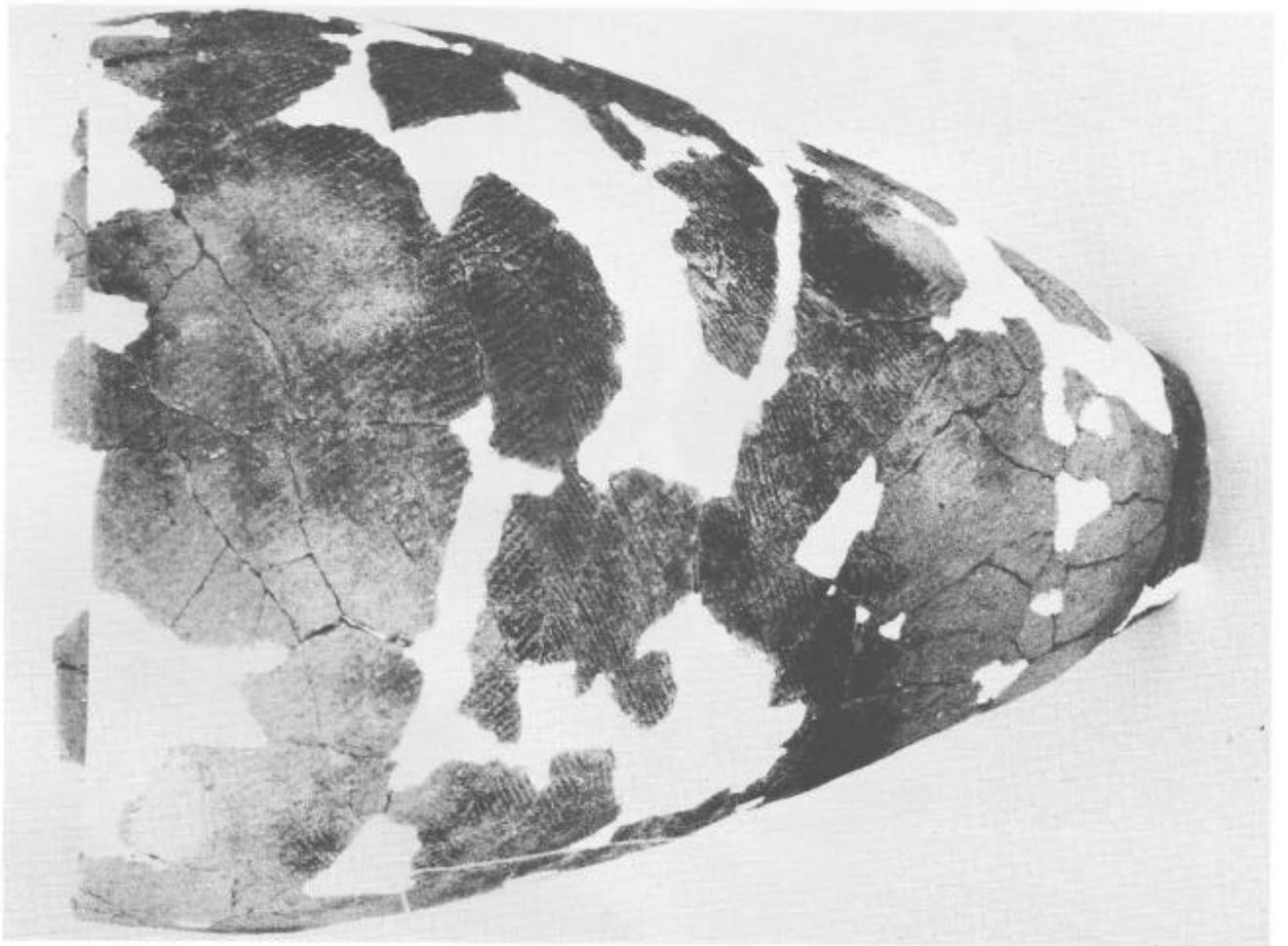
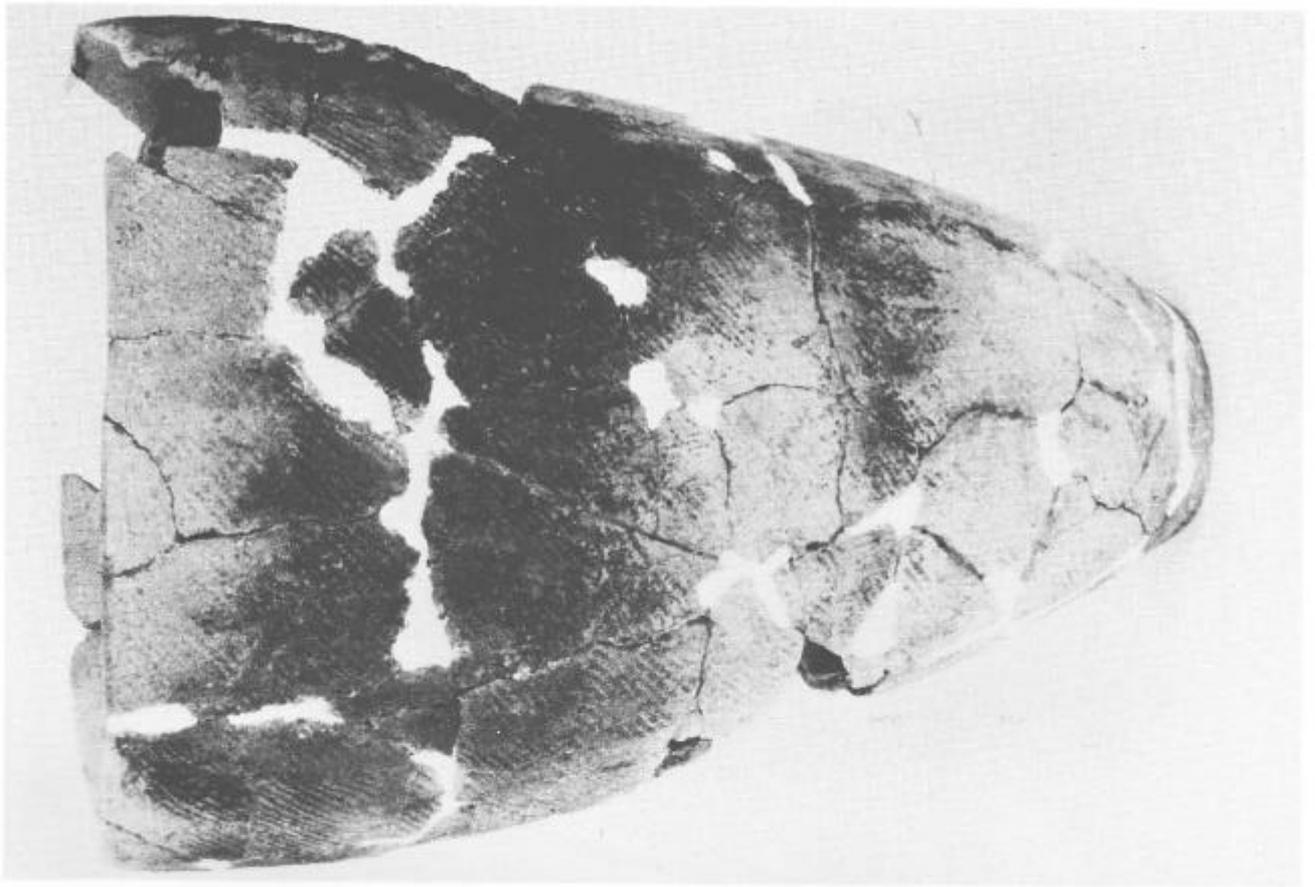
图版24 SX07土器



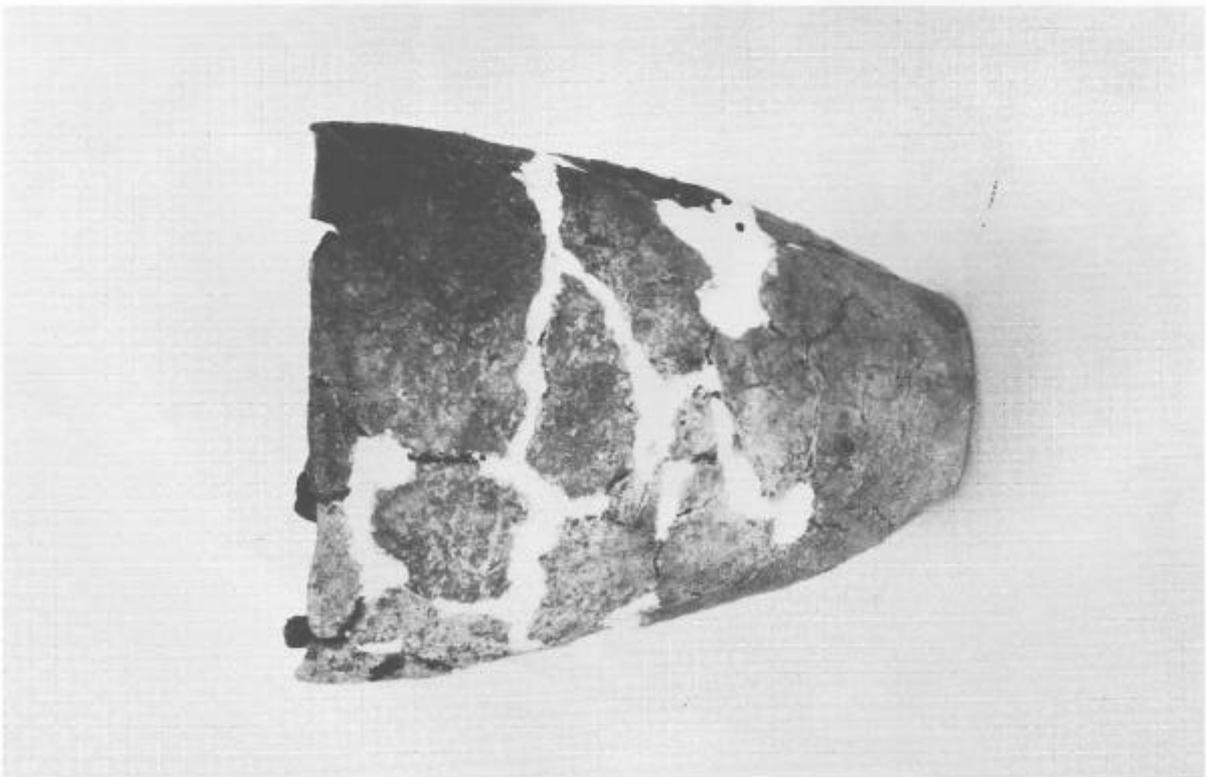
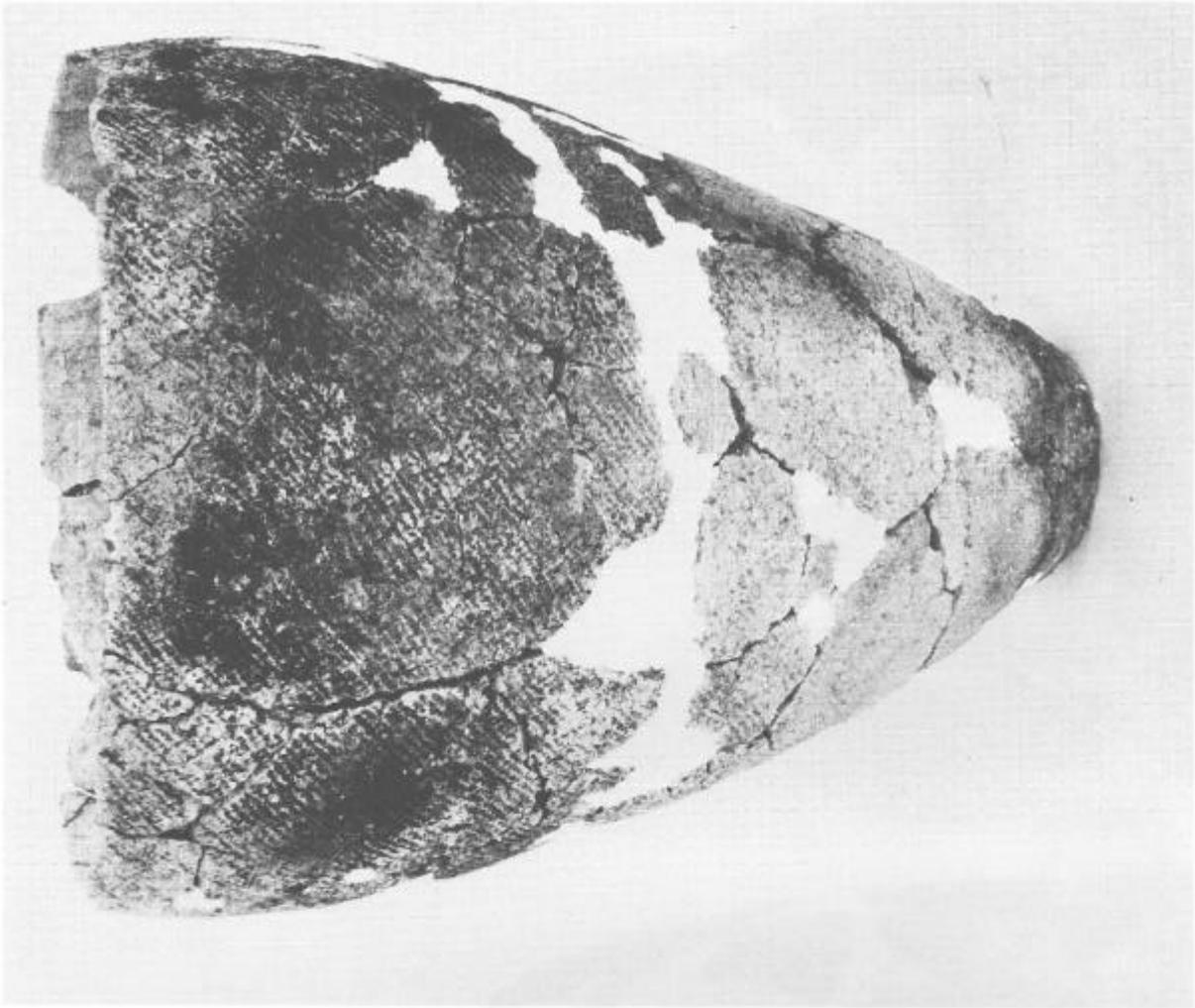
图版25 S X09土器



图版26 S X 11土器



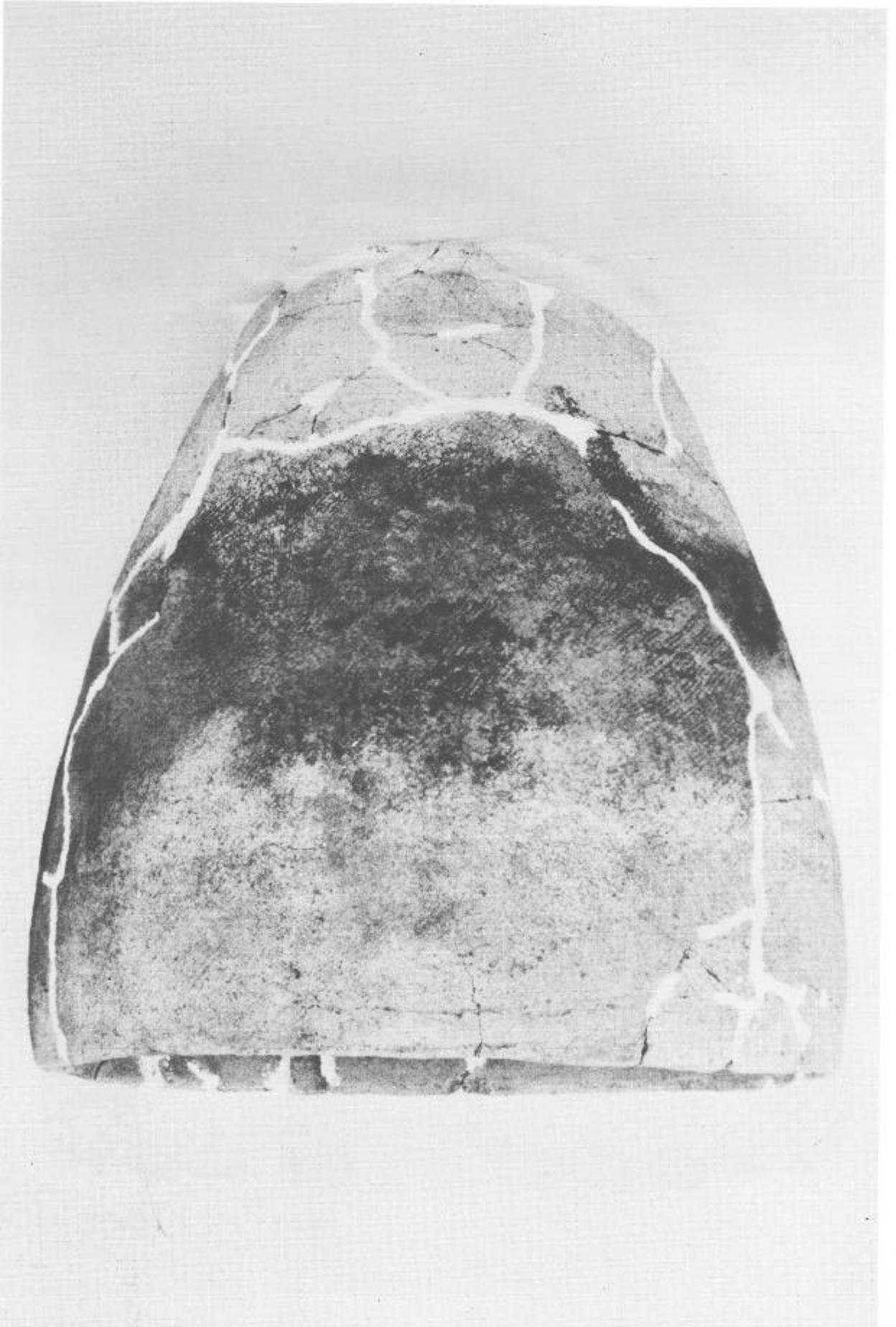
图版27 上 SX13土器
下 SX25土器



图版28 上 SX41土器
下 SX49土器

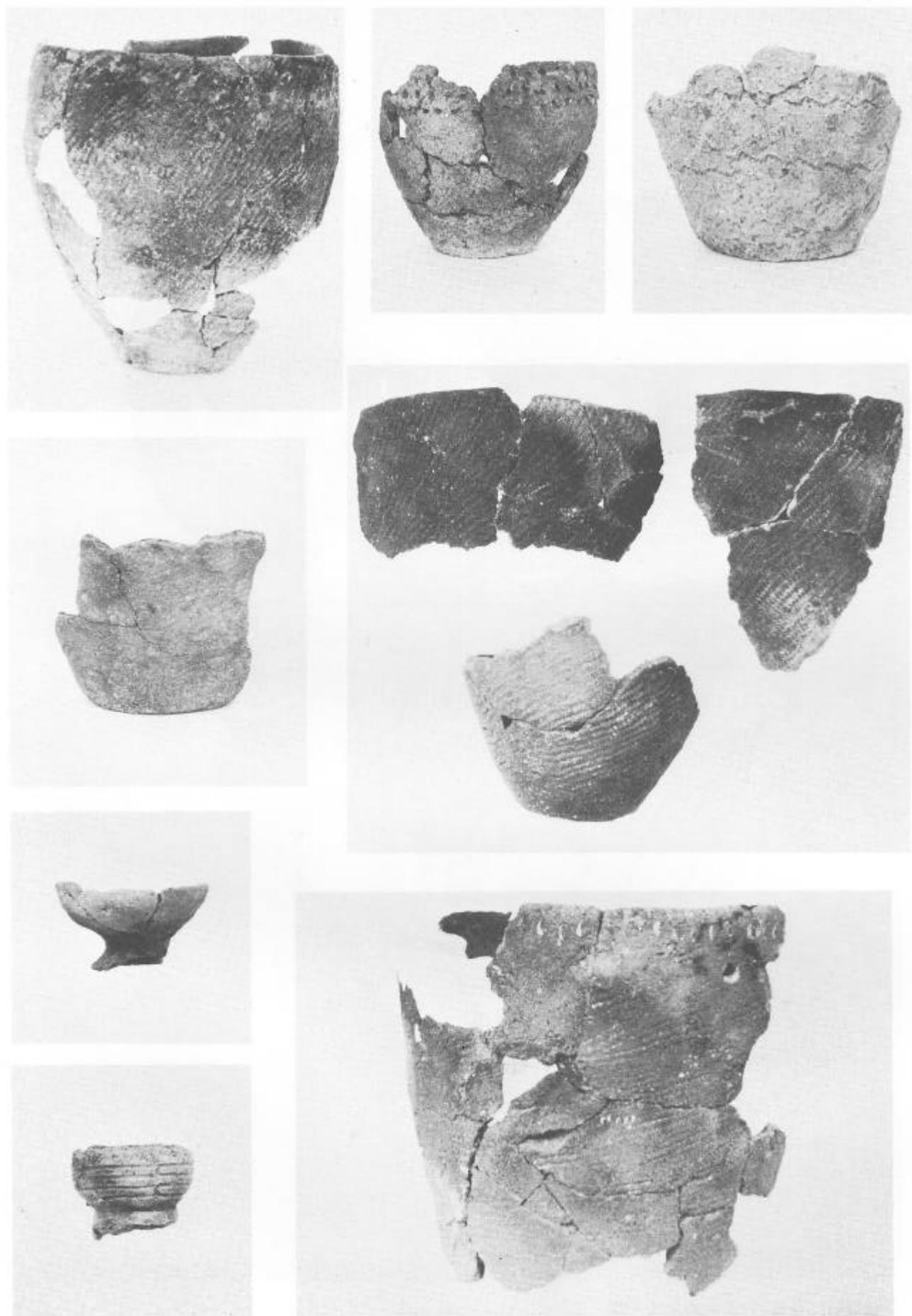


图版29 S X43土器

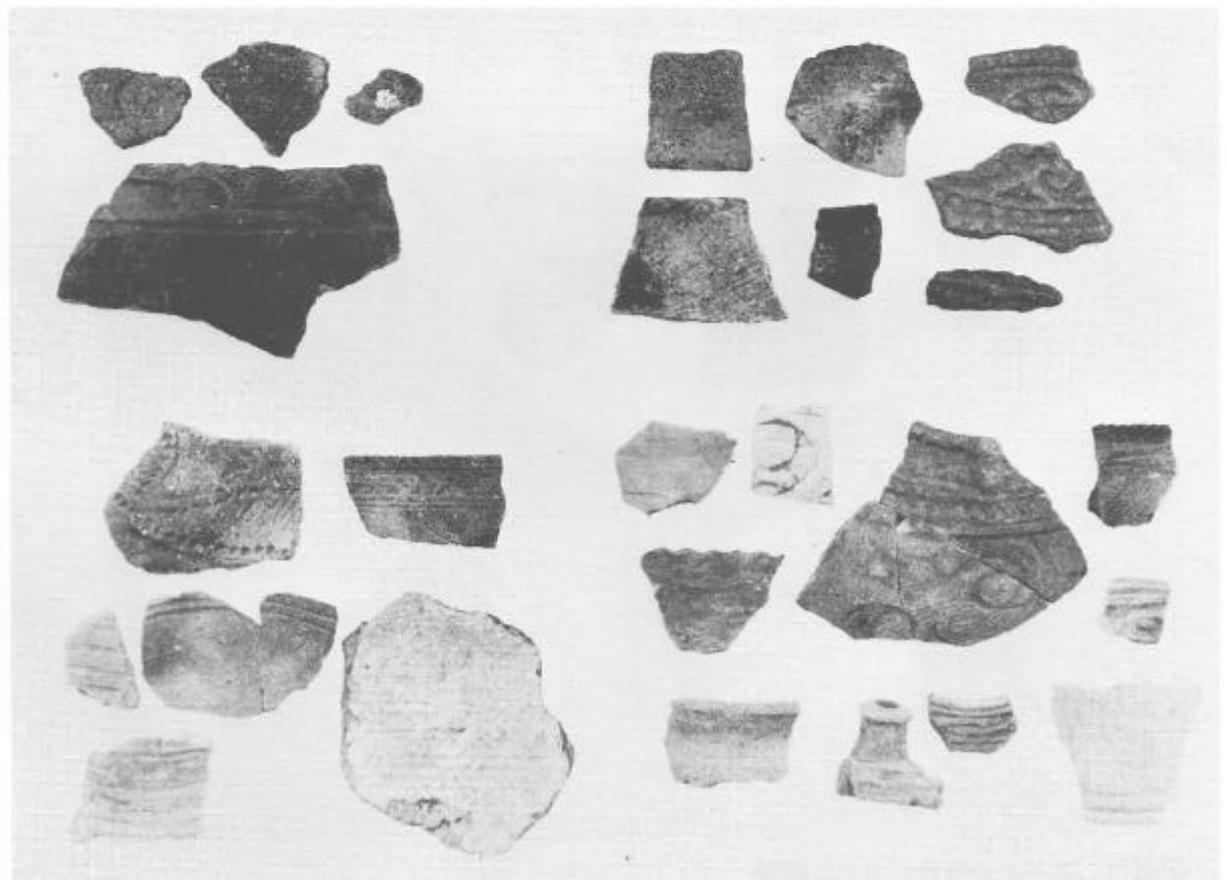
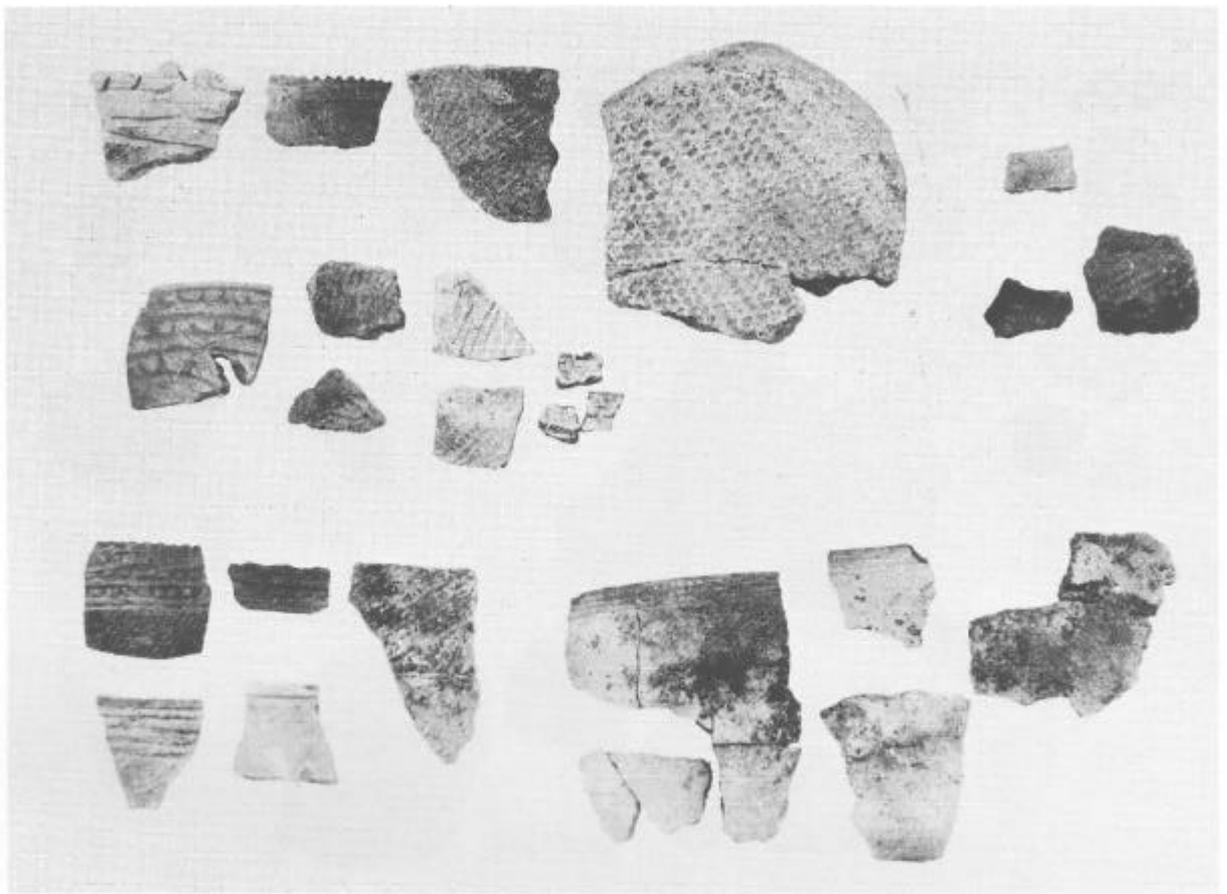




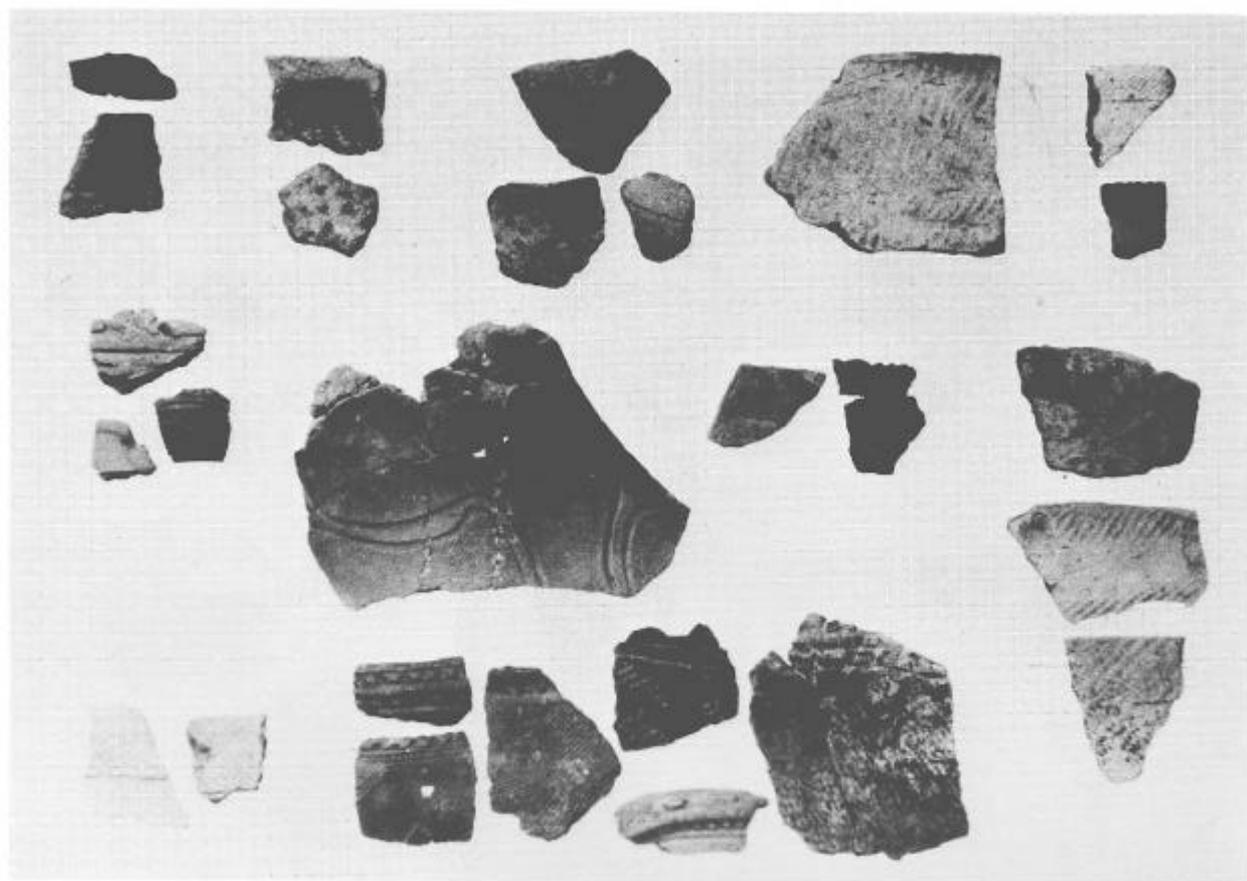
图版31 S K 217 土坛内出土土器



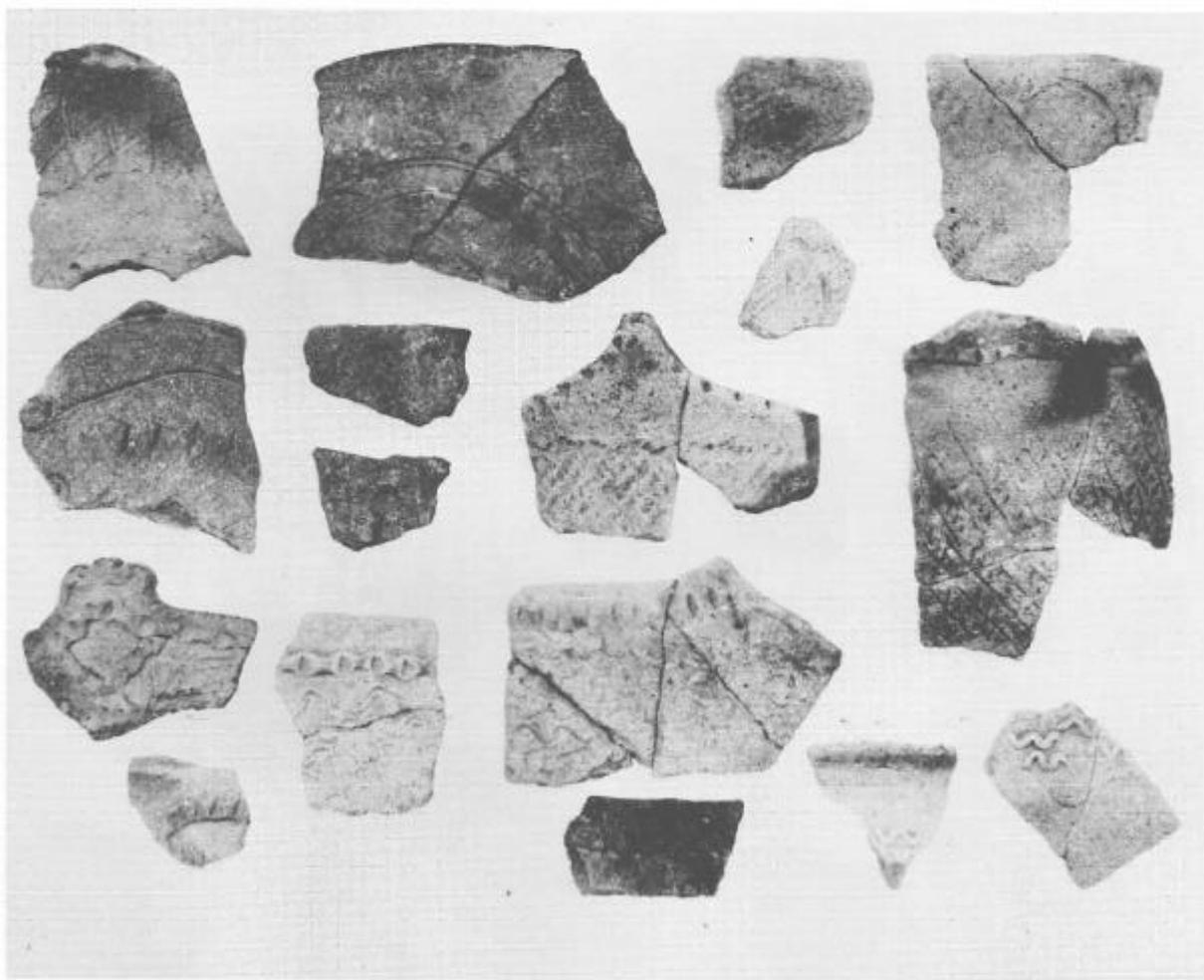
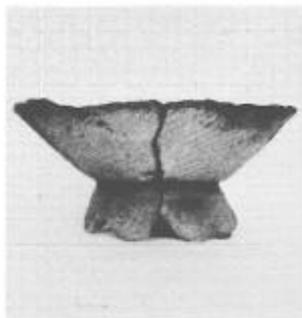
图版32 II—A区遺構内出土土器(1)



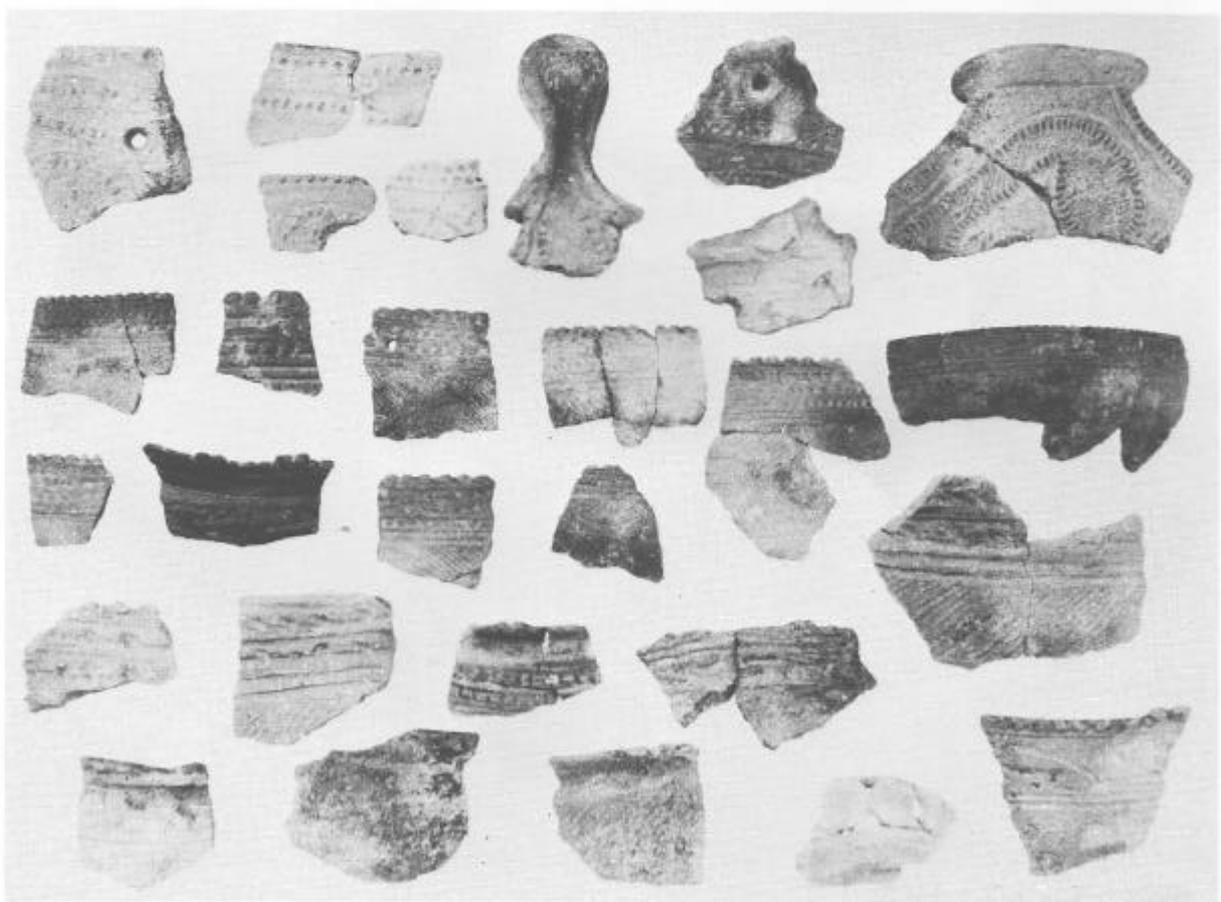
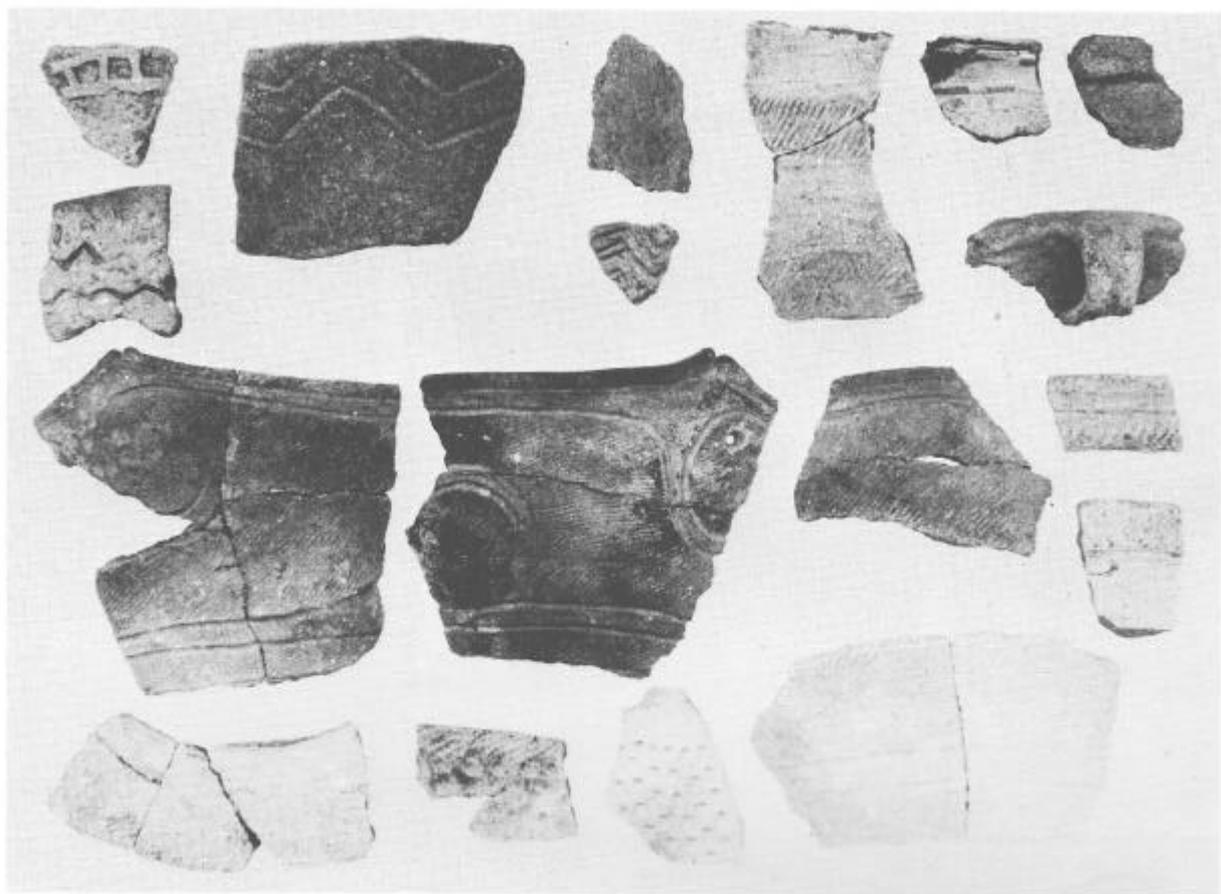
图版33 II—A区遗構内出土土器(2)



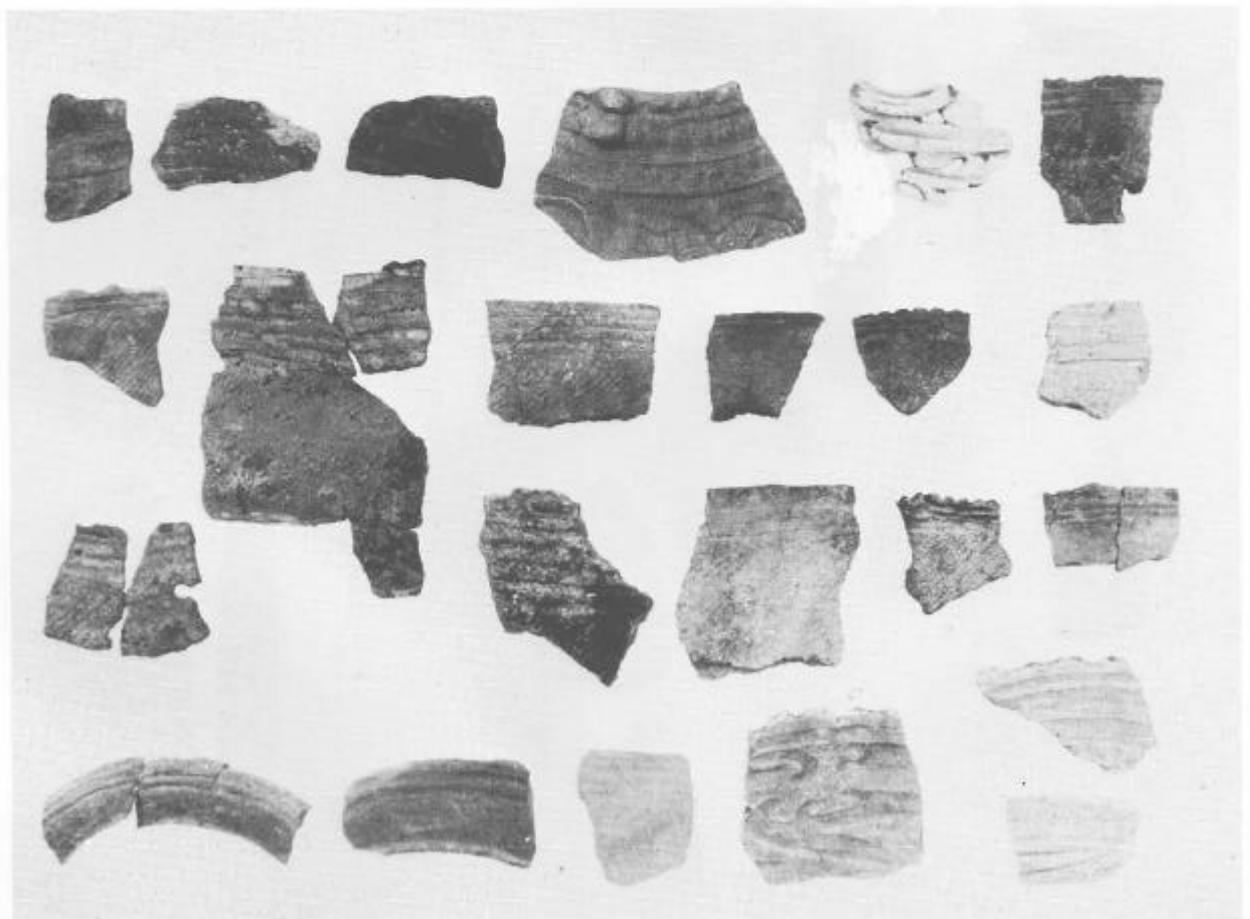
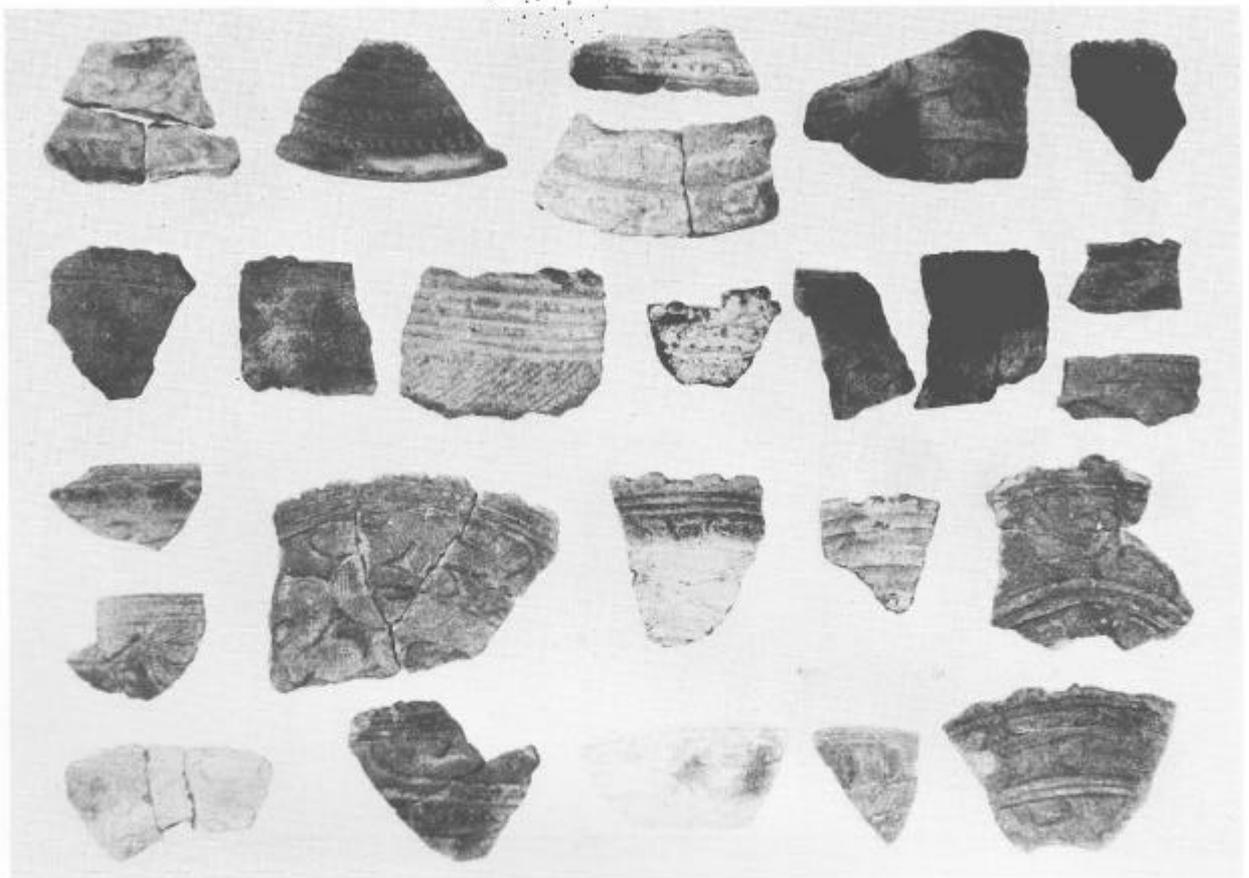
图版34 II—A区遗構内出土土器(3)



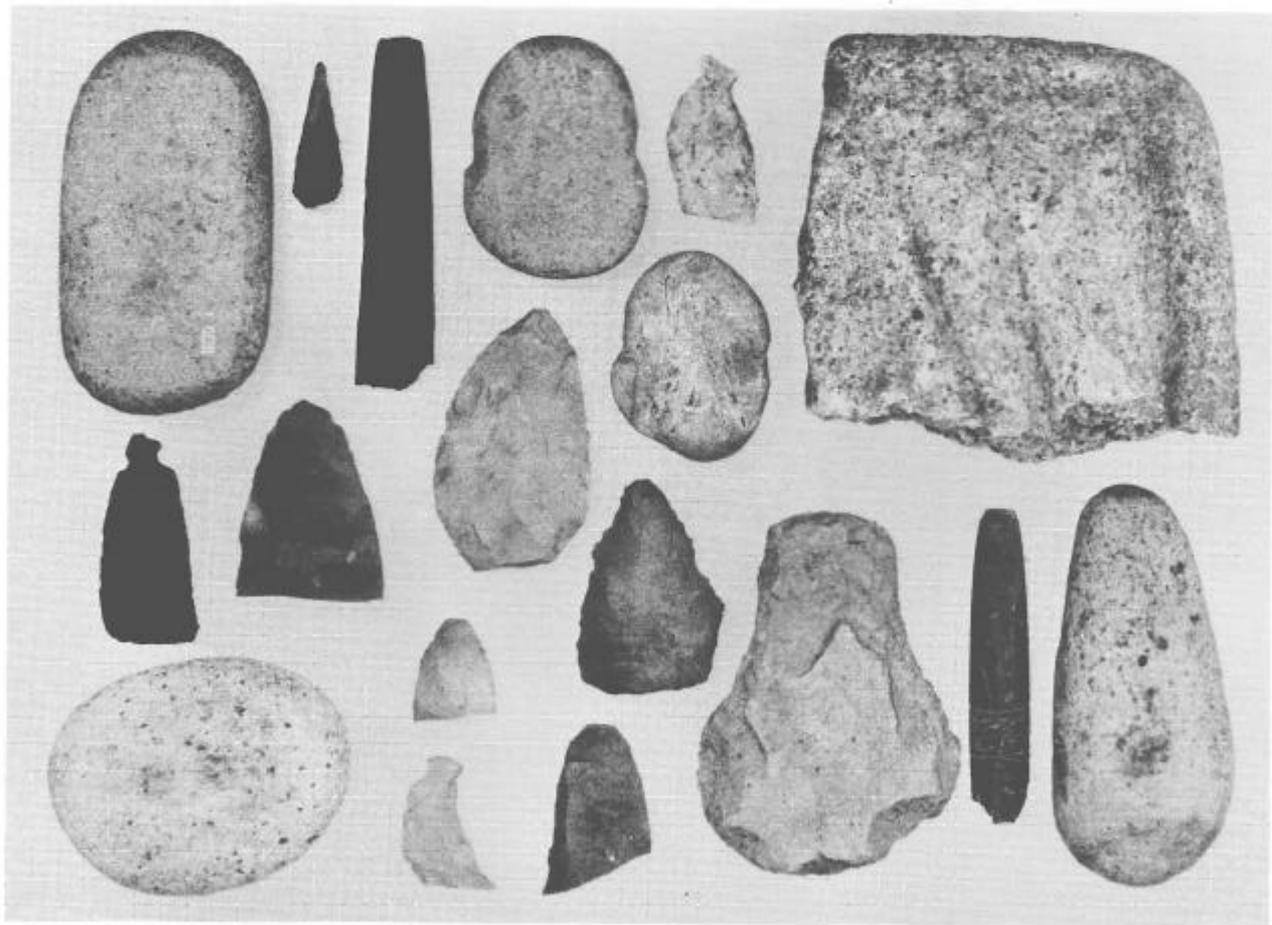
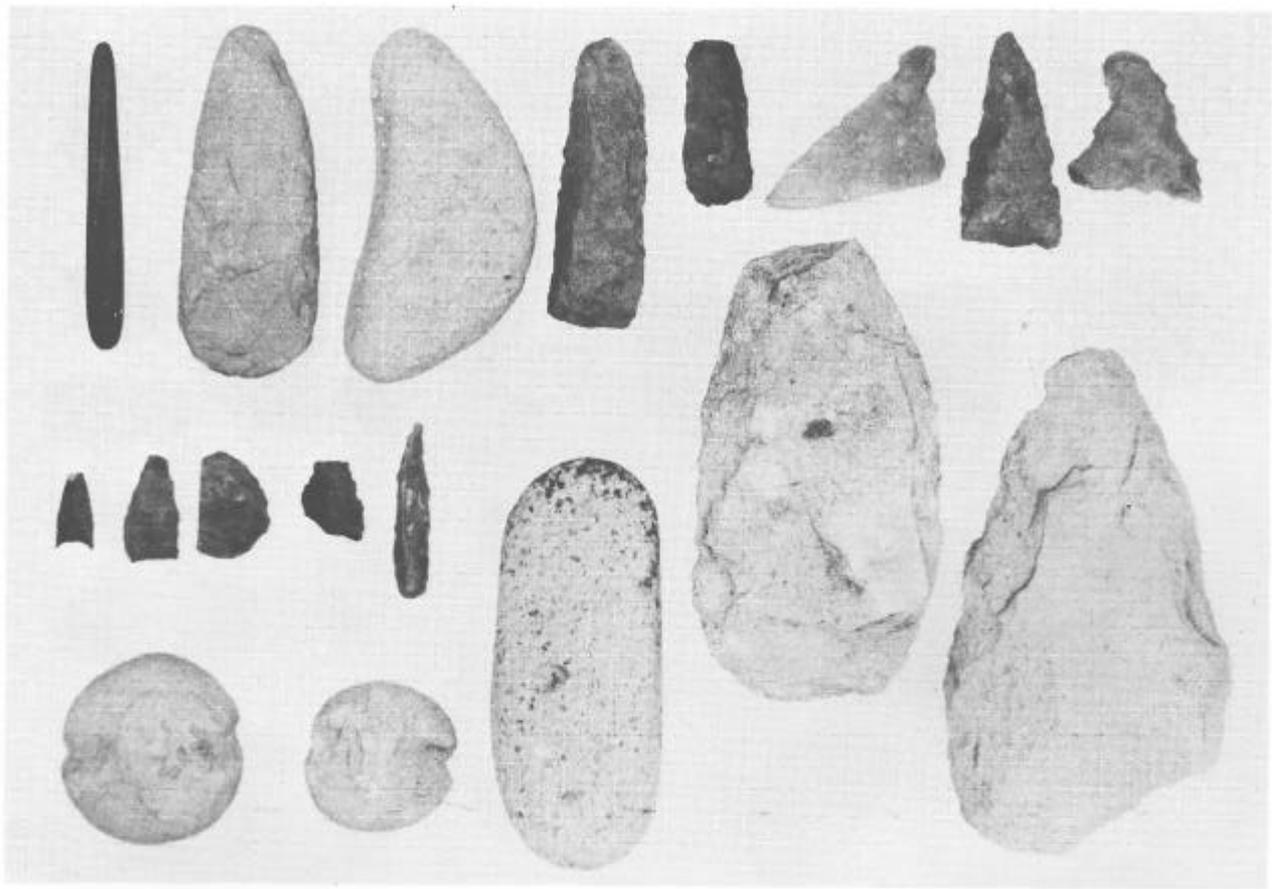
图版35 II—A区出土土器(1)



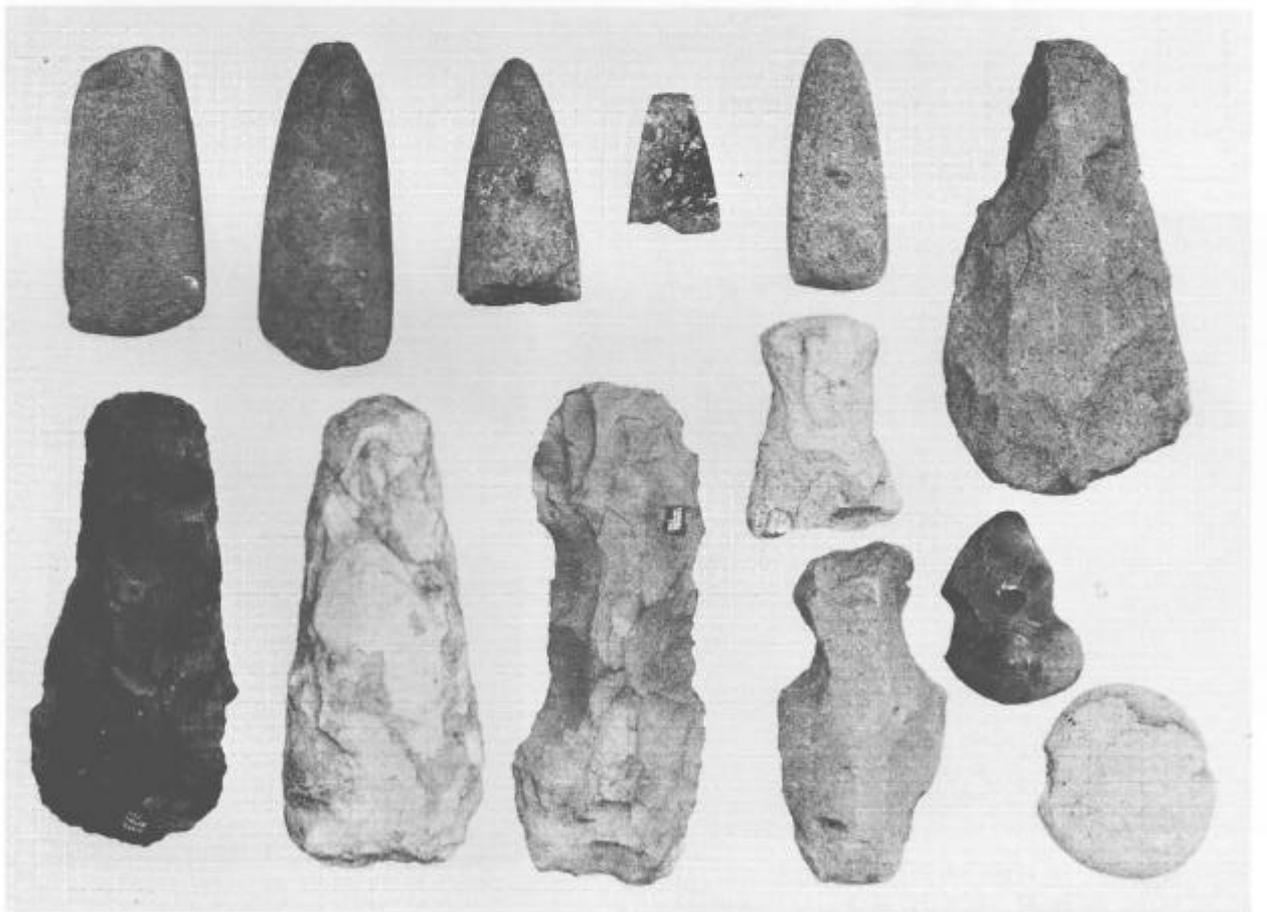
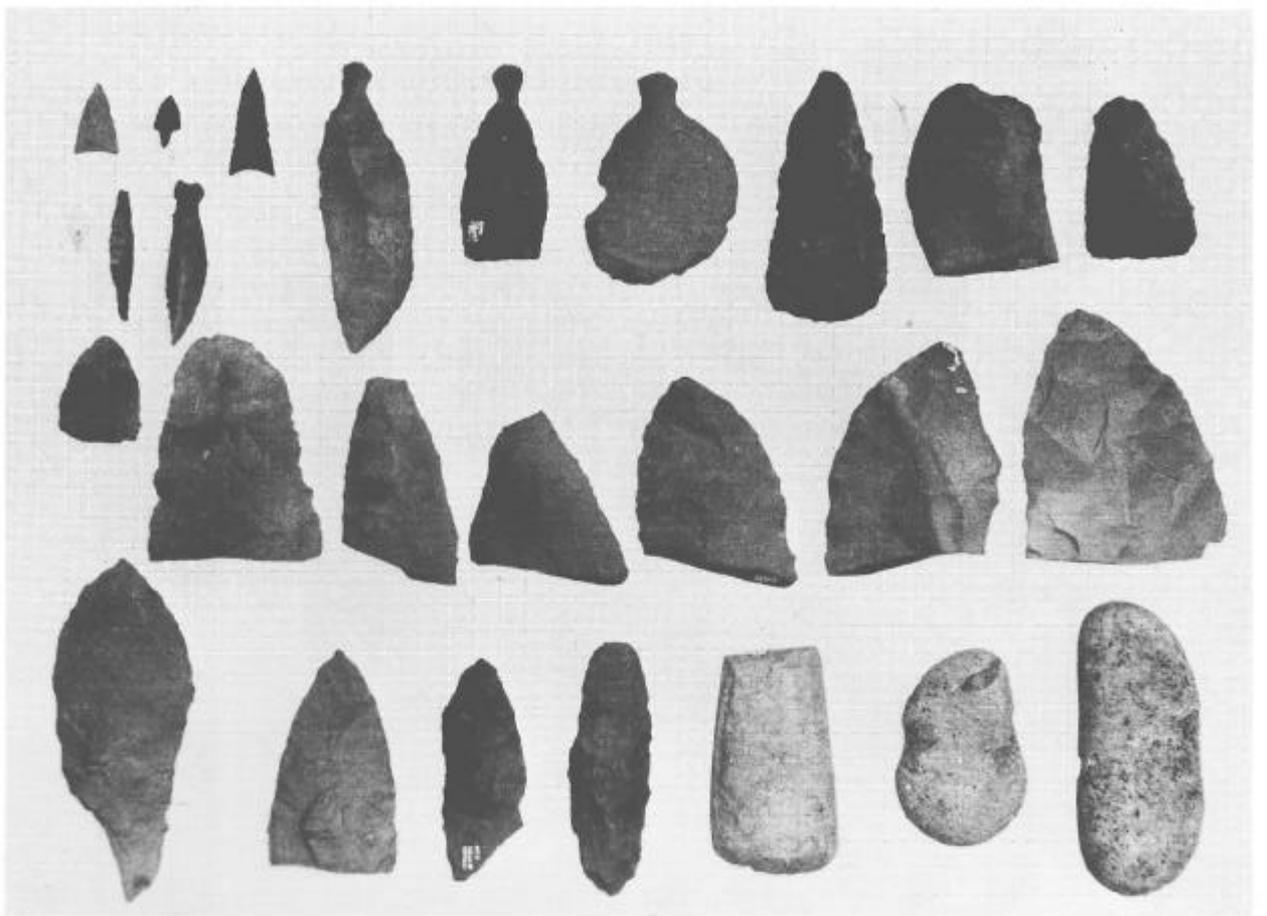
图版36 Ⅱ-A区出土土器(2)



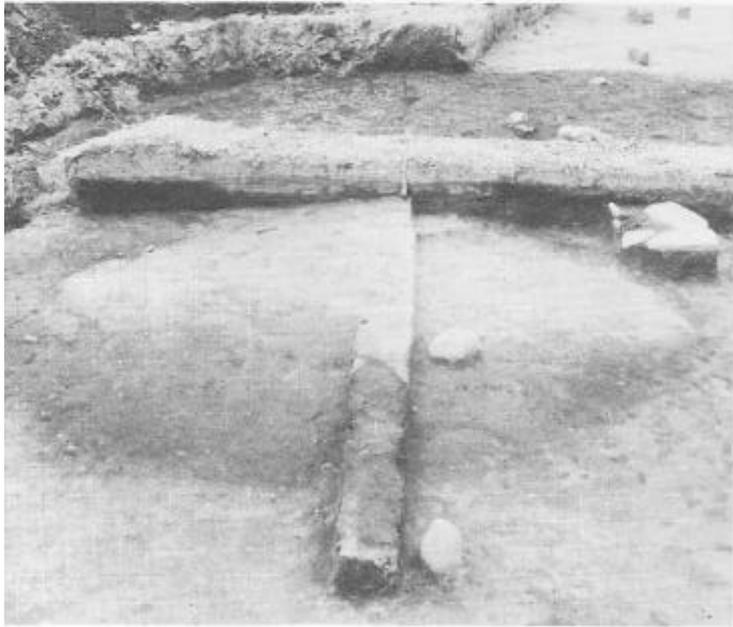
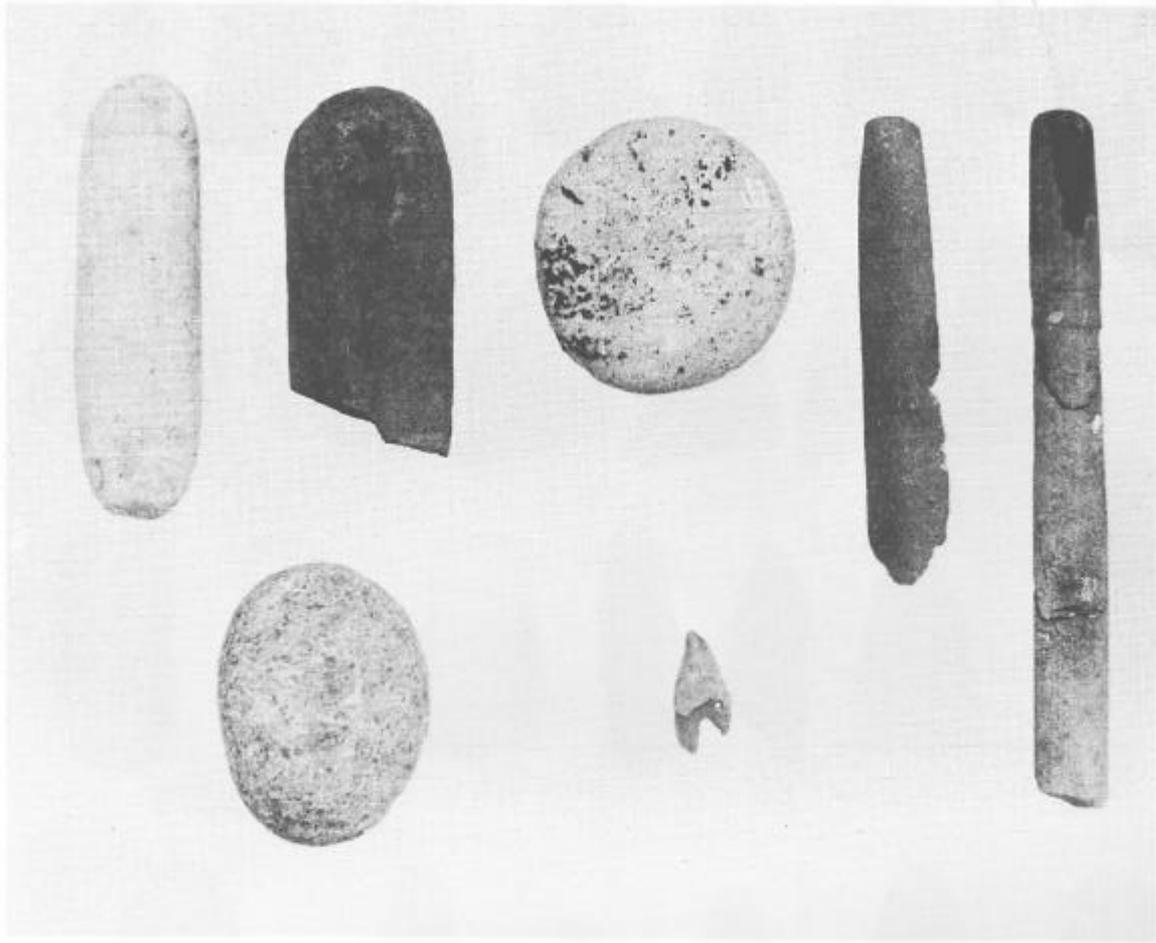
图版37 Ⅱ—A区出土土器(3)



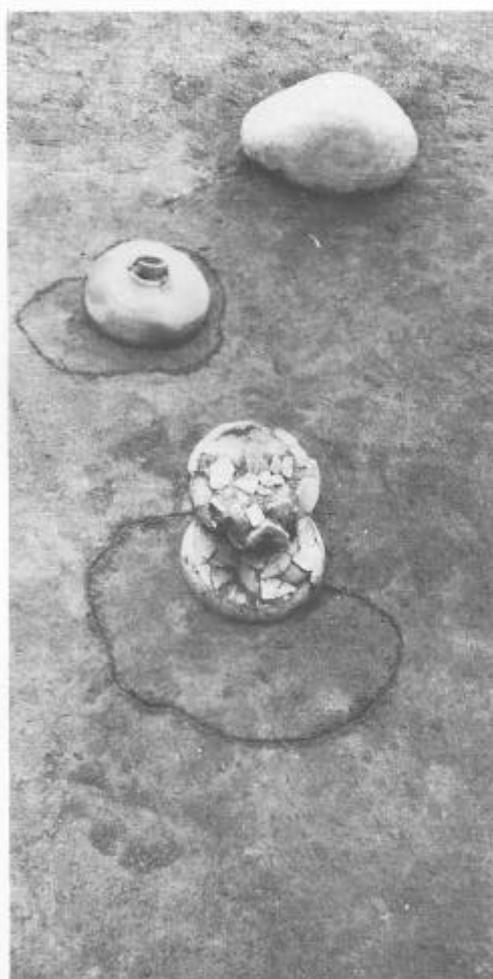
图版38 II-A区遗构内出土石器



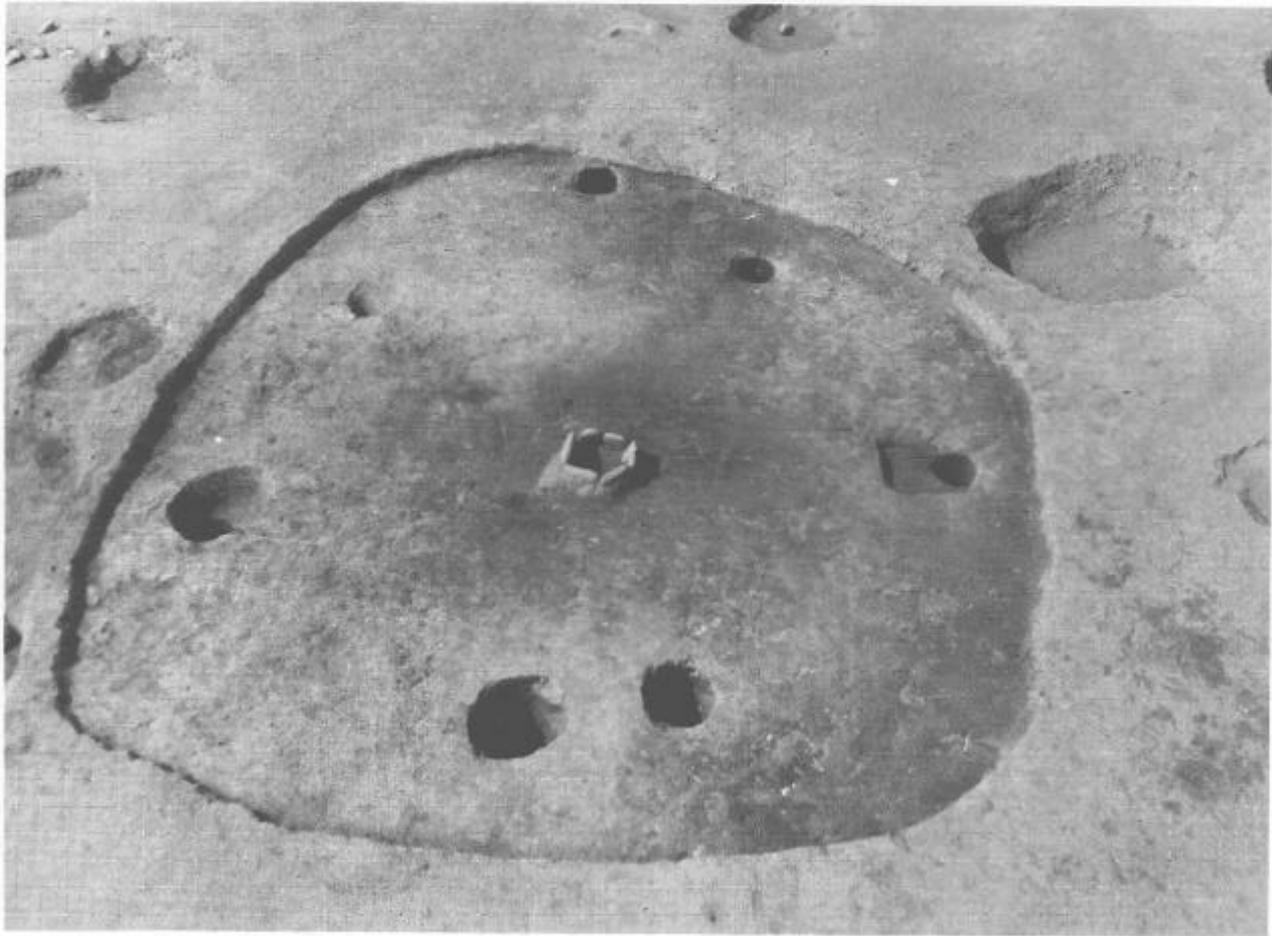
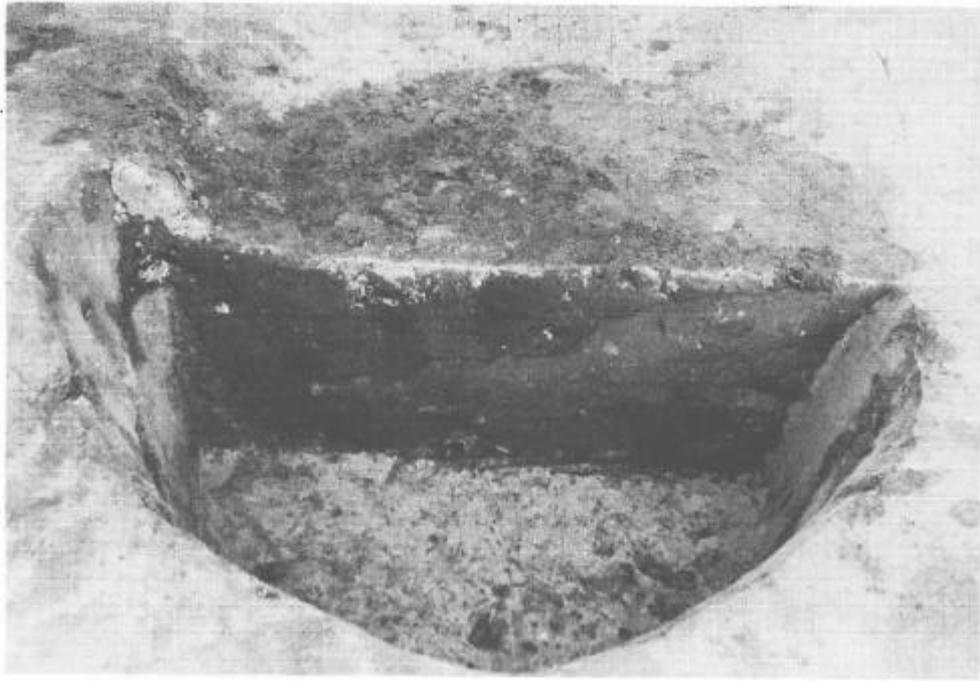
图版39 Ⅱ—A区出土石器(1)



图版40 上 Π-A区出土石器(2)
 下左 SX151風倒木痕(南▶北)
 下右 SX150埋甕(西▶東)



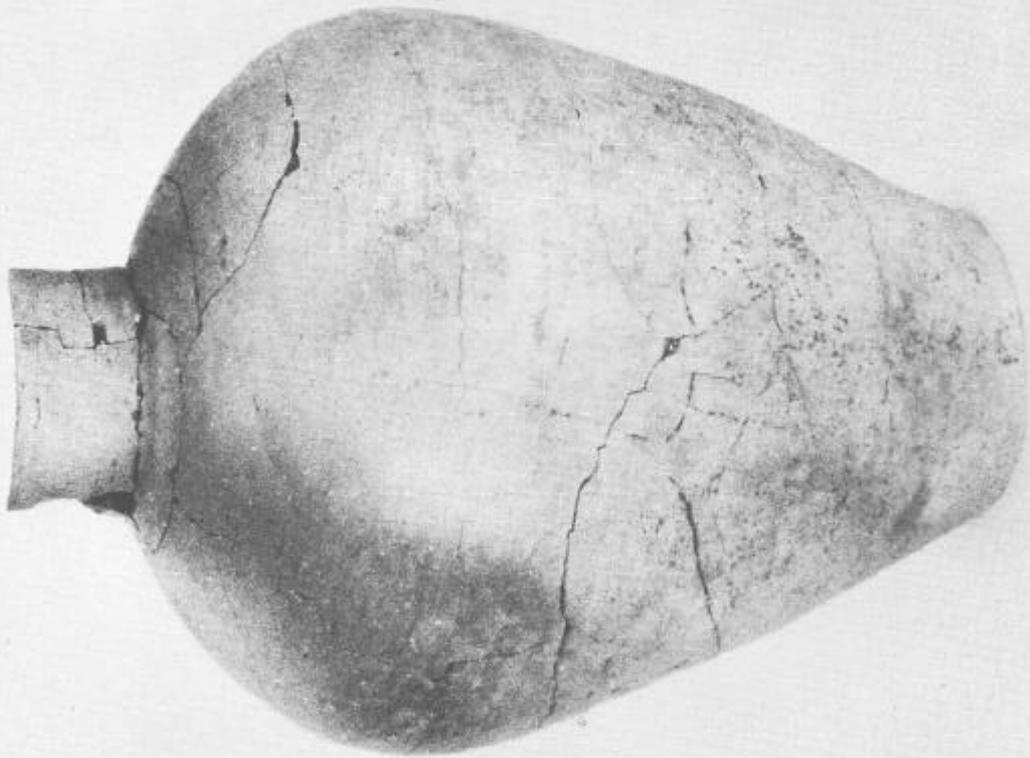
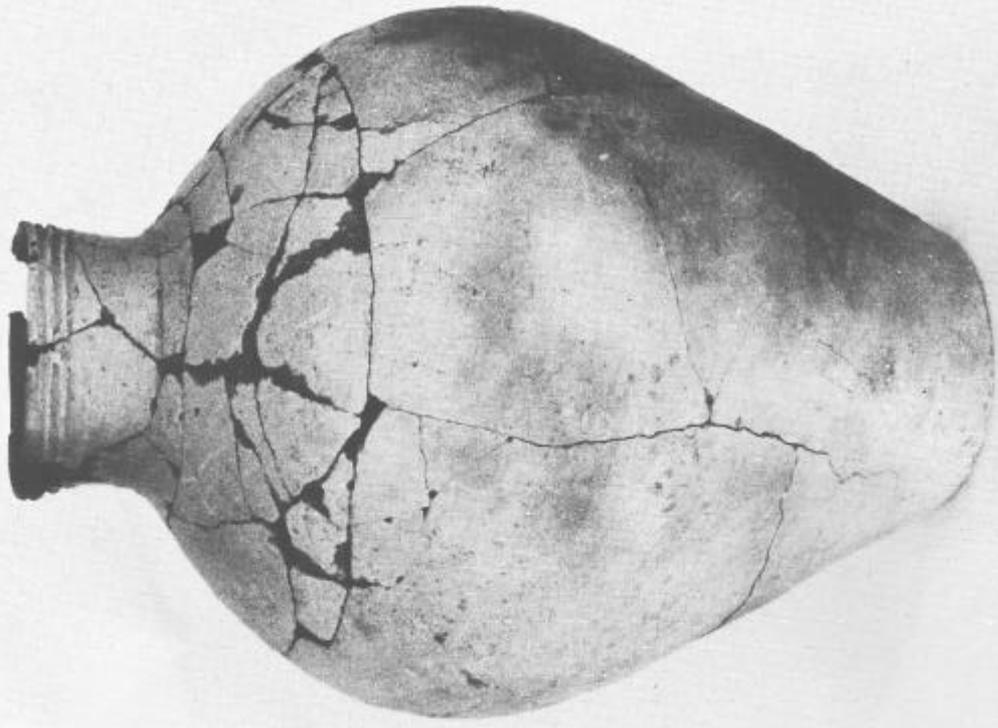
図版41 上・下左 S X 160. 161埋設壺
 下右 S K 112土塚墓
 上(西▶東) 下の左(北▶南)



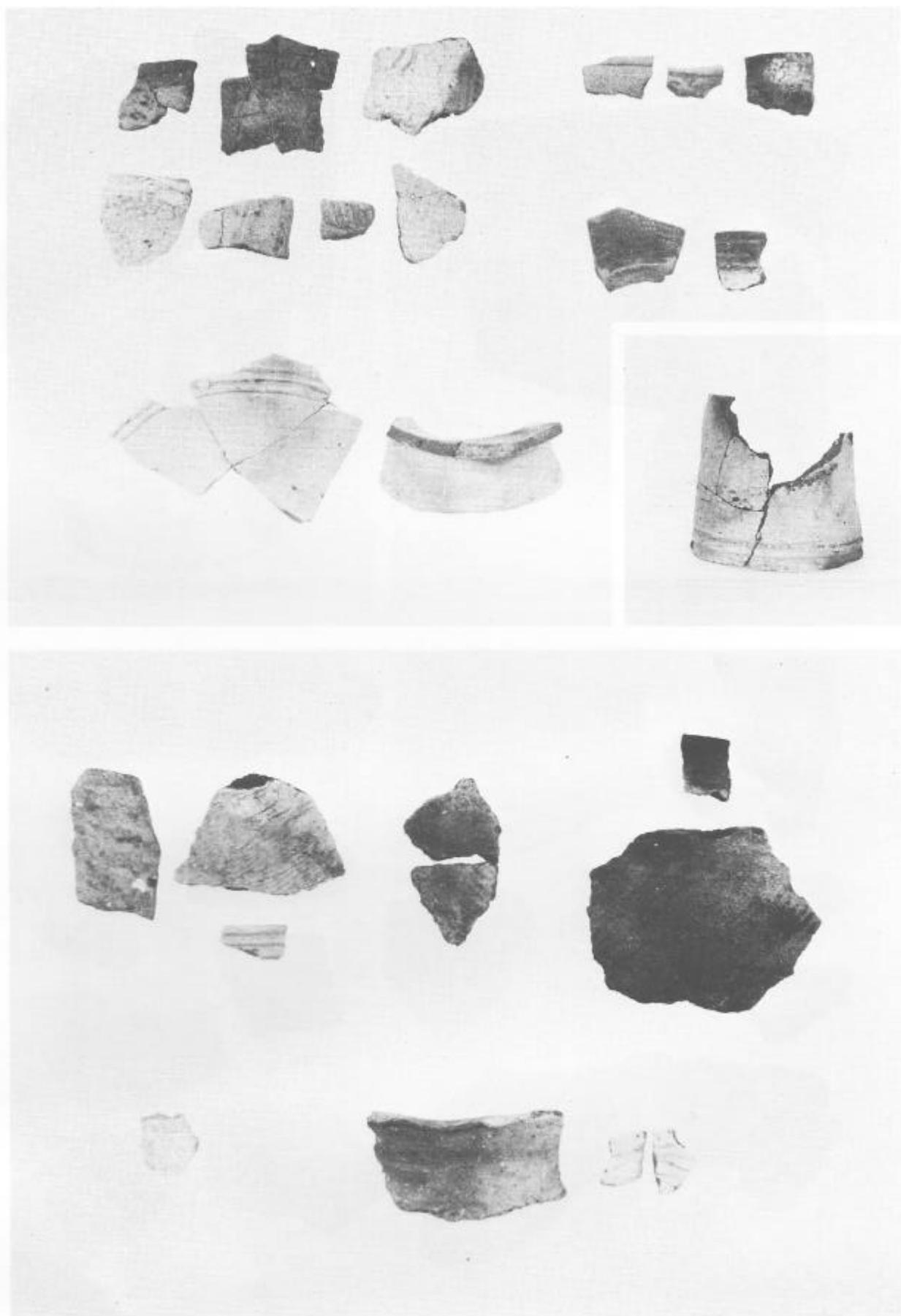
図版42 上 SK126土坑墓(西▶東)
下 SI110竖穴住居跡(南▶北)



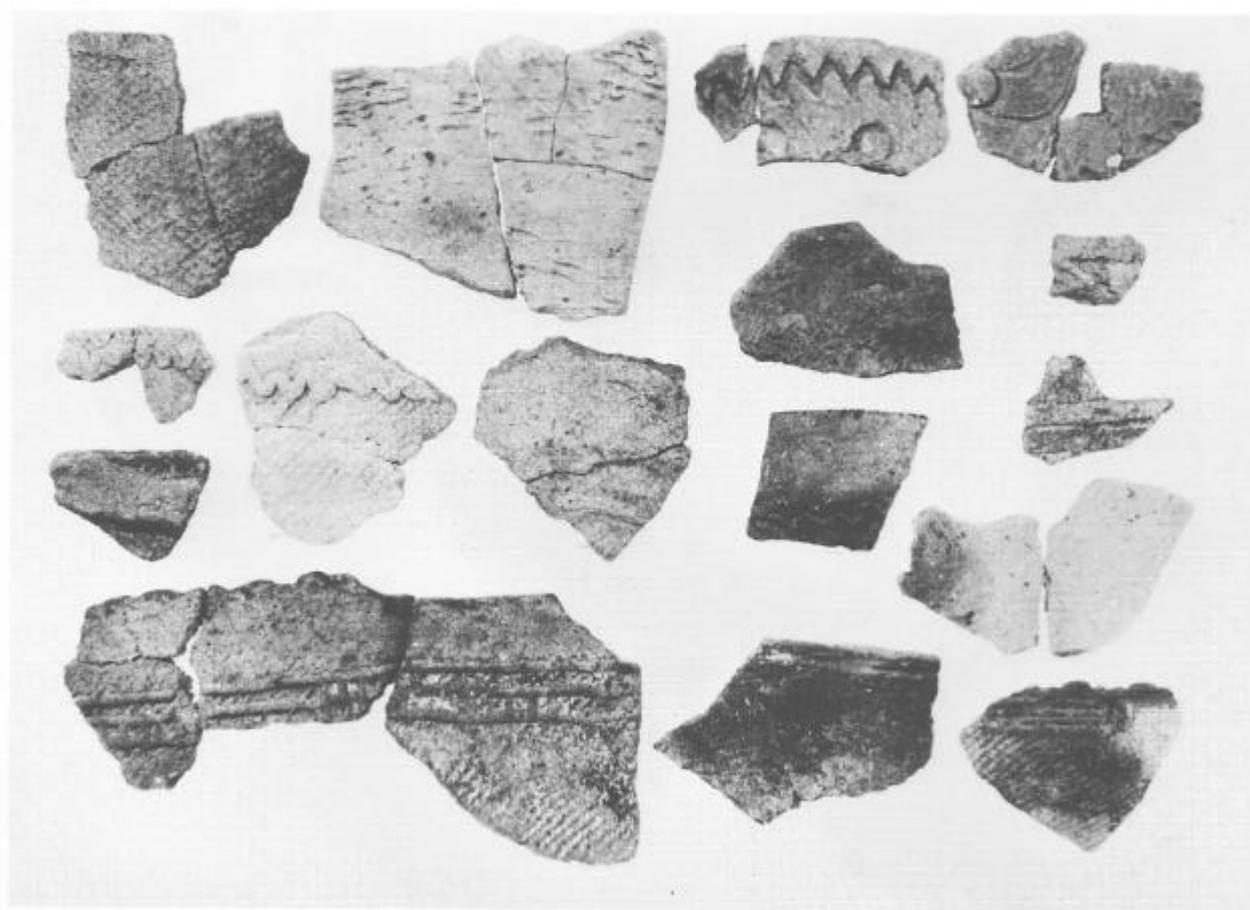
圖版43 上 S X 150土器
下 S X 160蓋



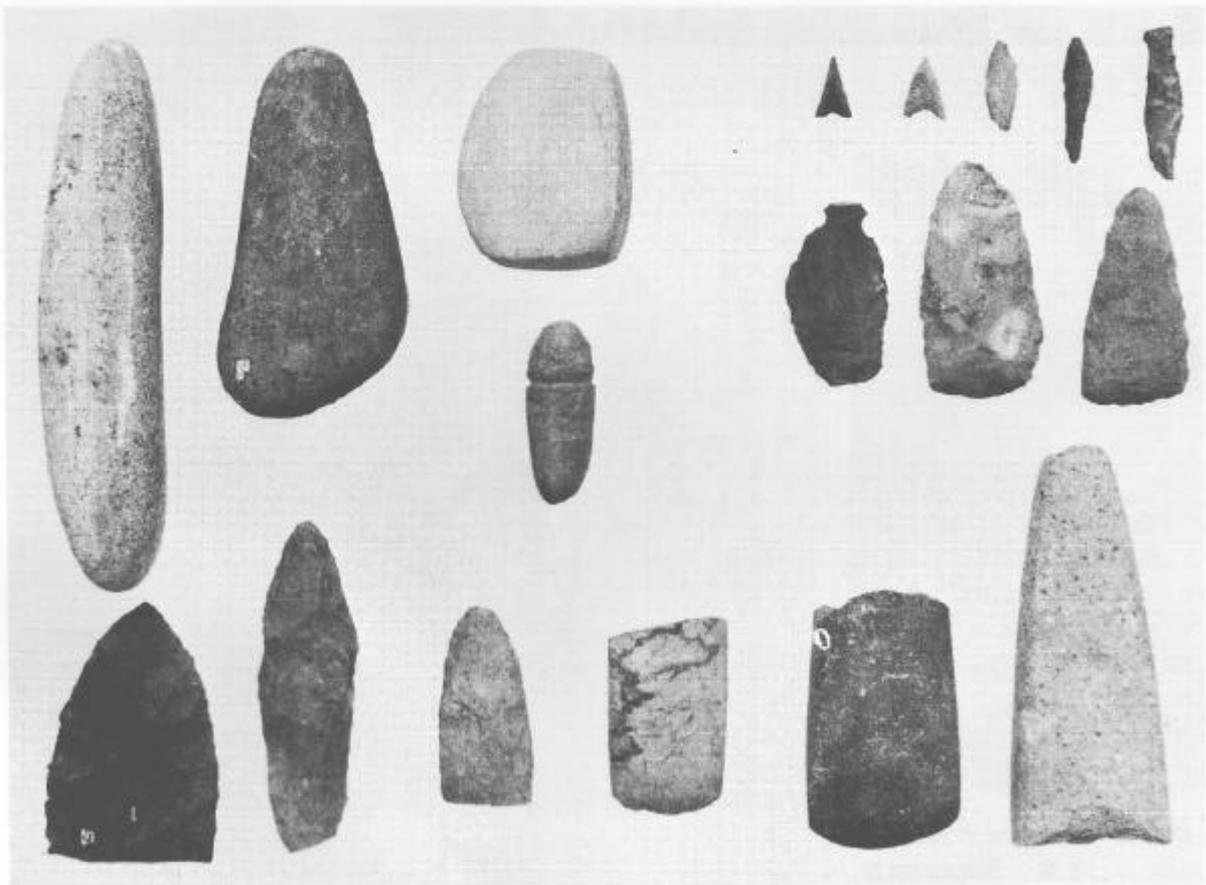
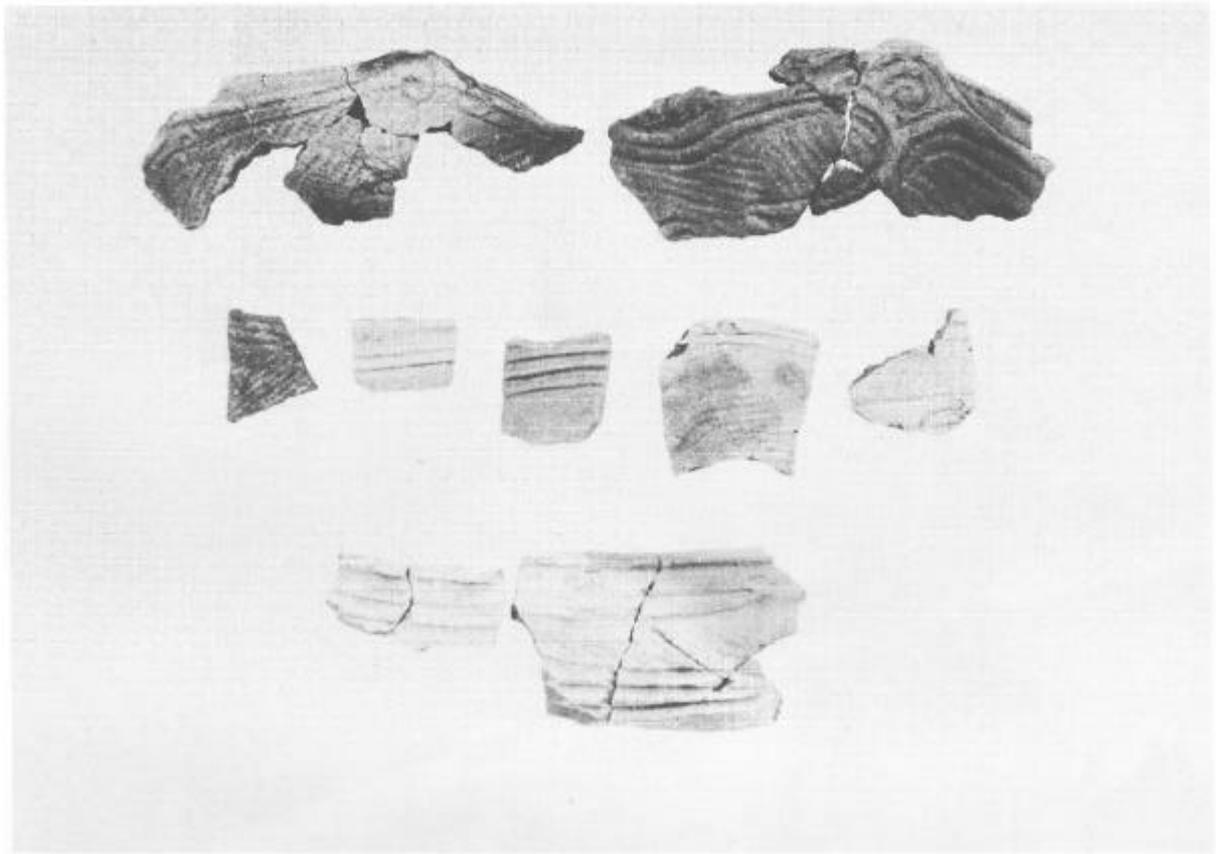
图版44 上 SX160壺
下 SX161壺



图版45 II—B区遗構内出土土器



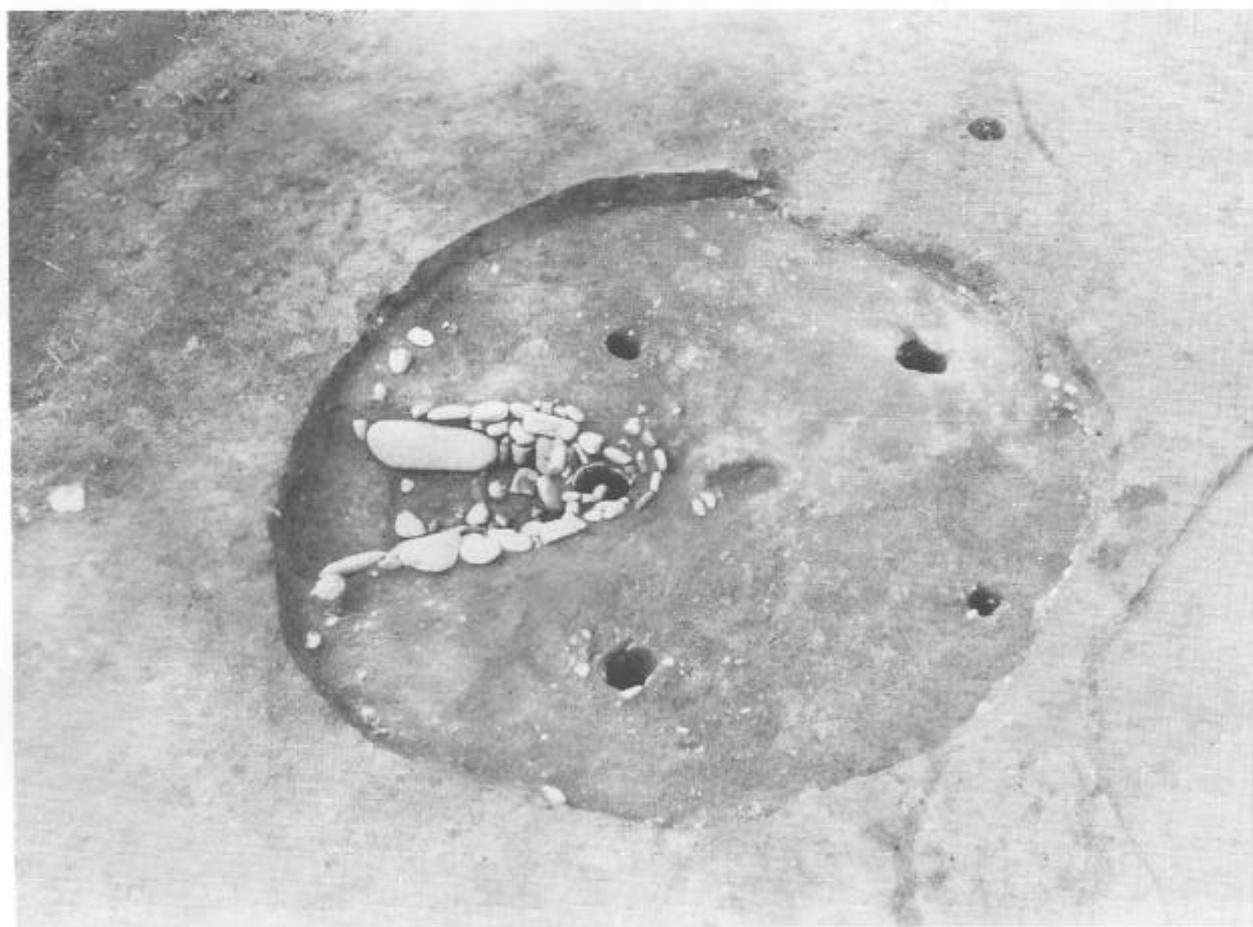
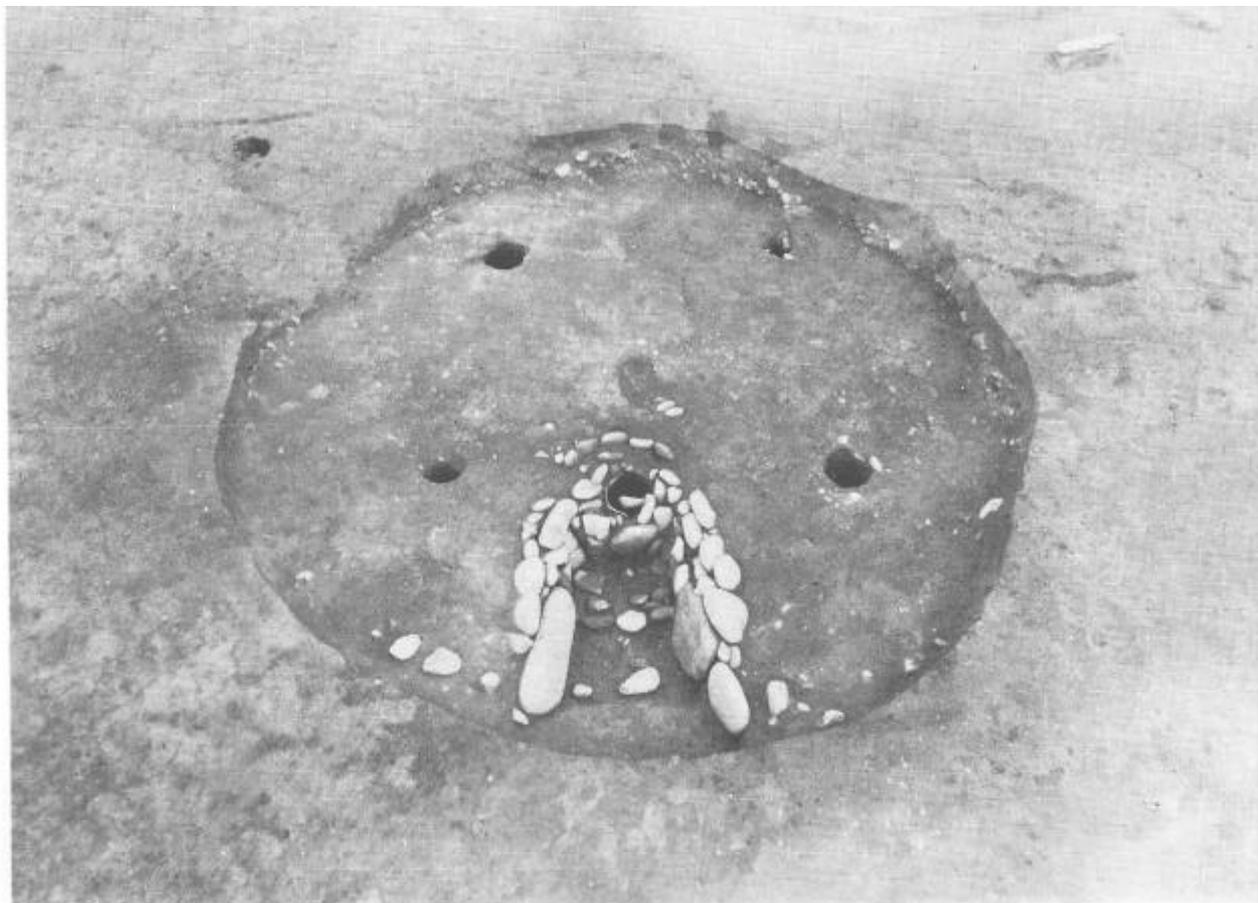
图版46 II—B区出土土器(1)



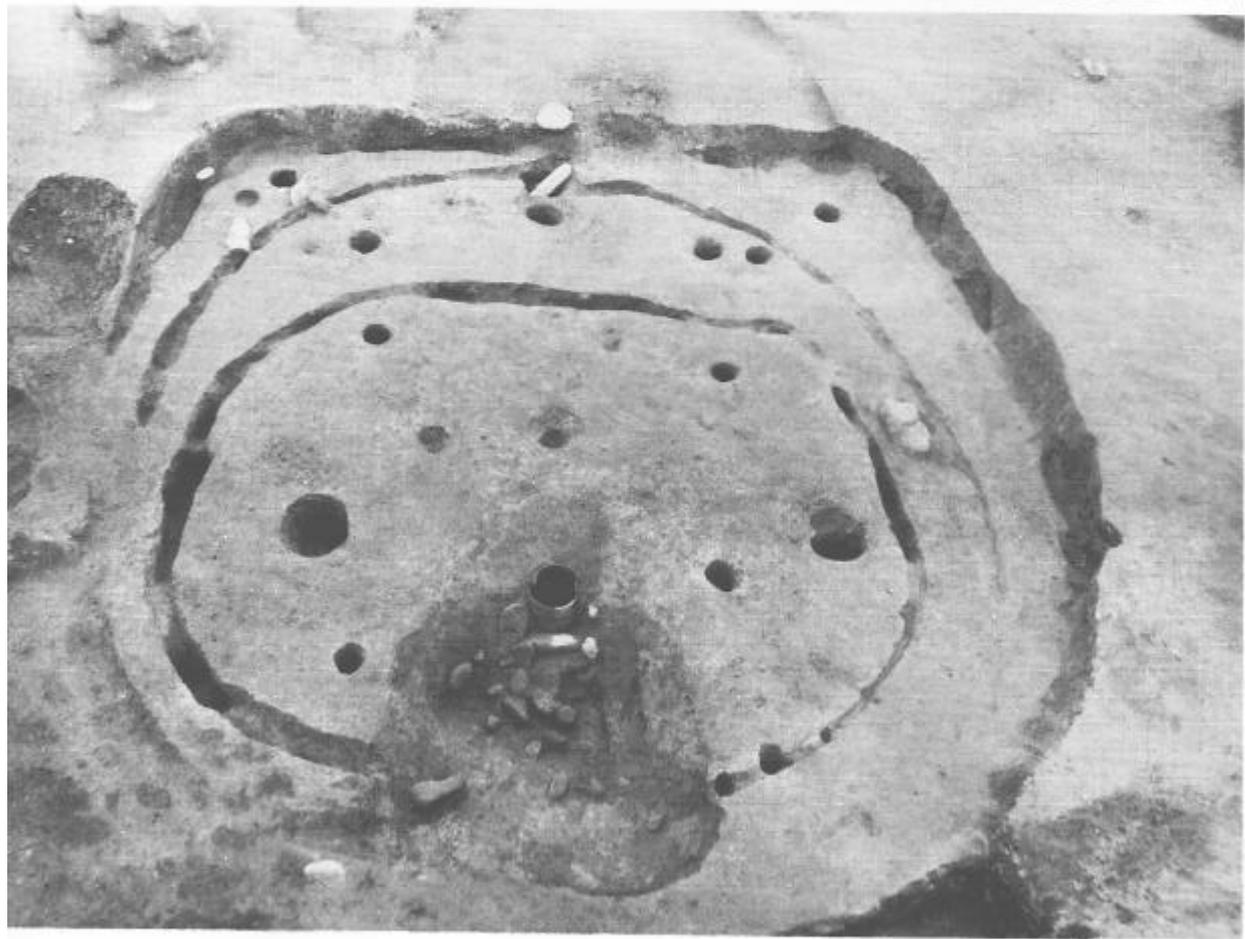
图版47 上 II—B区出土土器(2)
下 II—B区出土石器



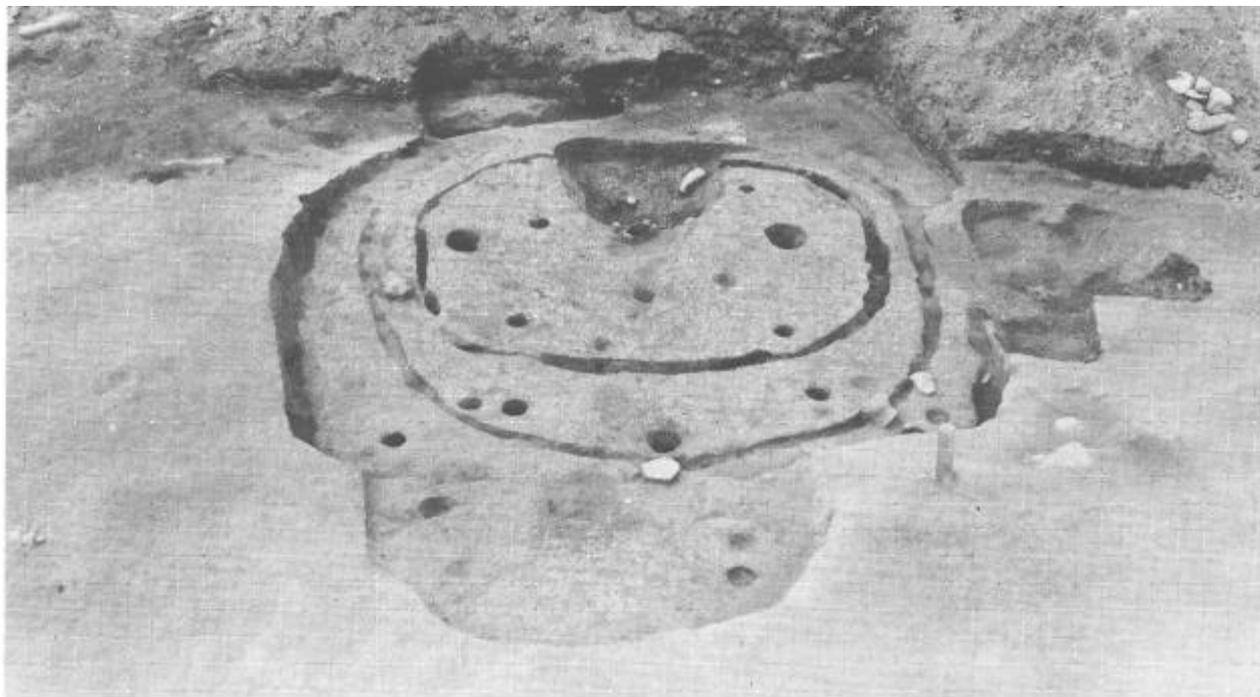
图版48 上 III区全景(北▶南)
下左 SX403埋葬
下右 SK364土坑



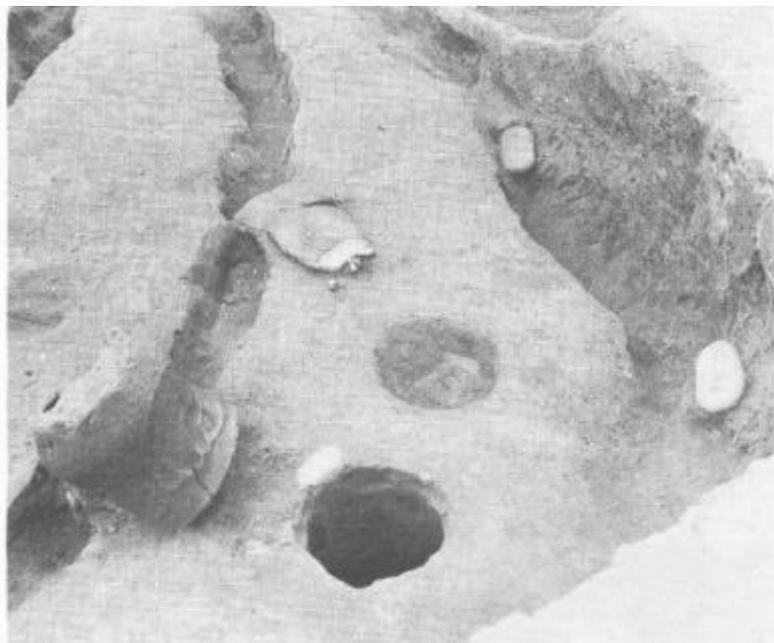
圖版49 S I 303 豎穴住居跡
上(南▶北) 下(東▶西)



图版50 S I 307. 308. 309. 309' 竖穴住居跡 (西▶東)



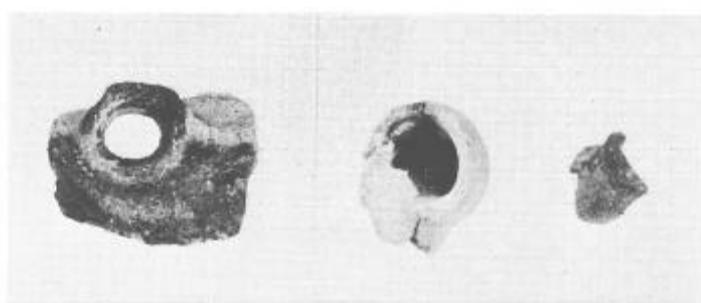
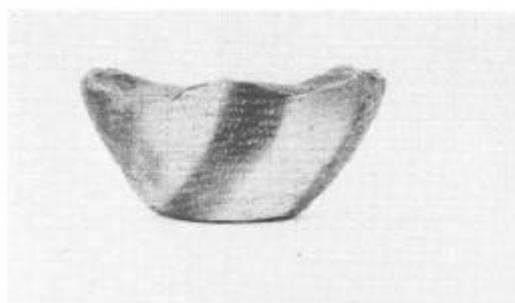
図版51 上 S I 307 竖穴住居跡 (東▶西)
中・下 同 炉 (西▶東)



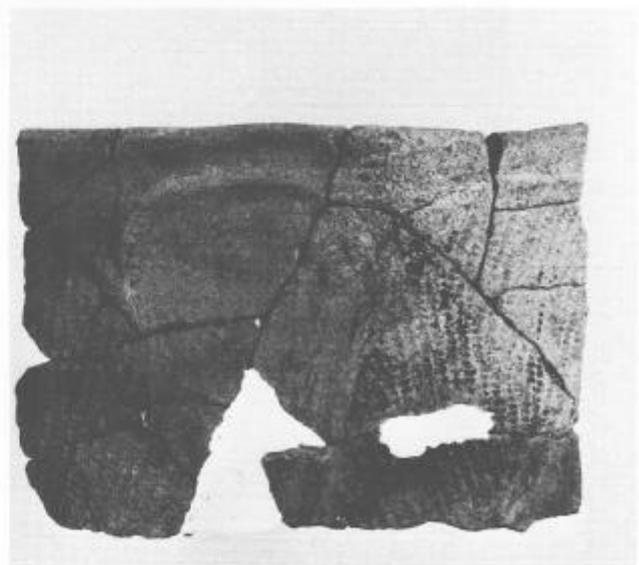
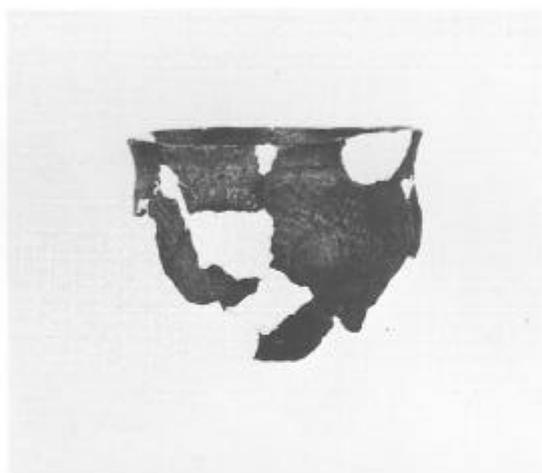
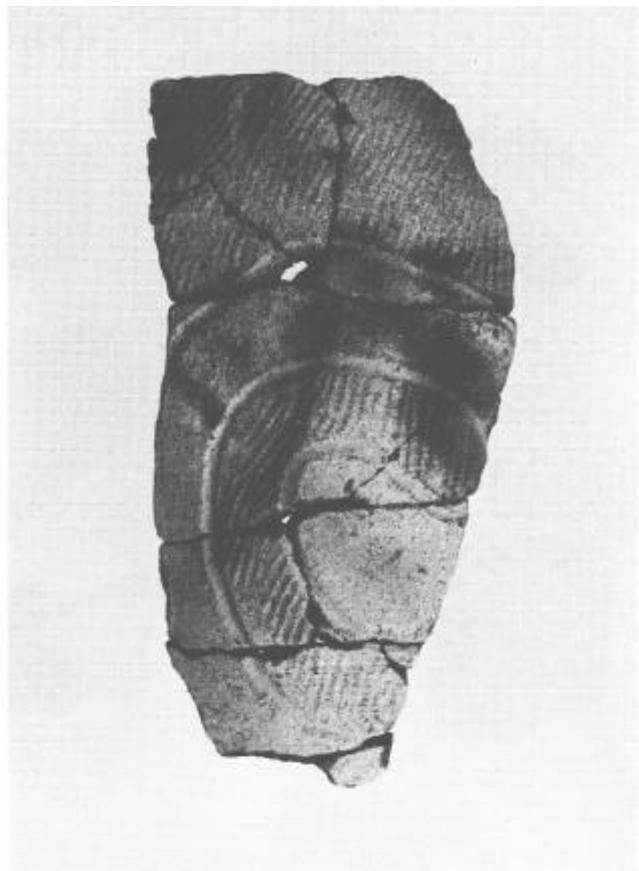
図版52 上左 S I 307立石状況
 上右 同 遺物出土状況
 中 S D 301溝状遺構(東▶西)
 下 S D 306溝状遺構(北▶南)



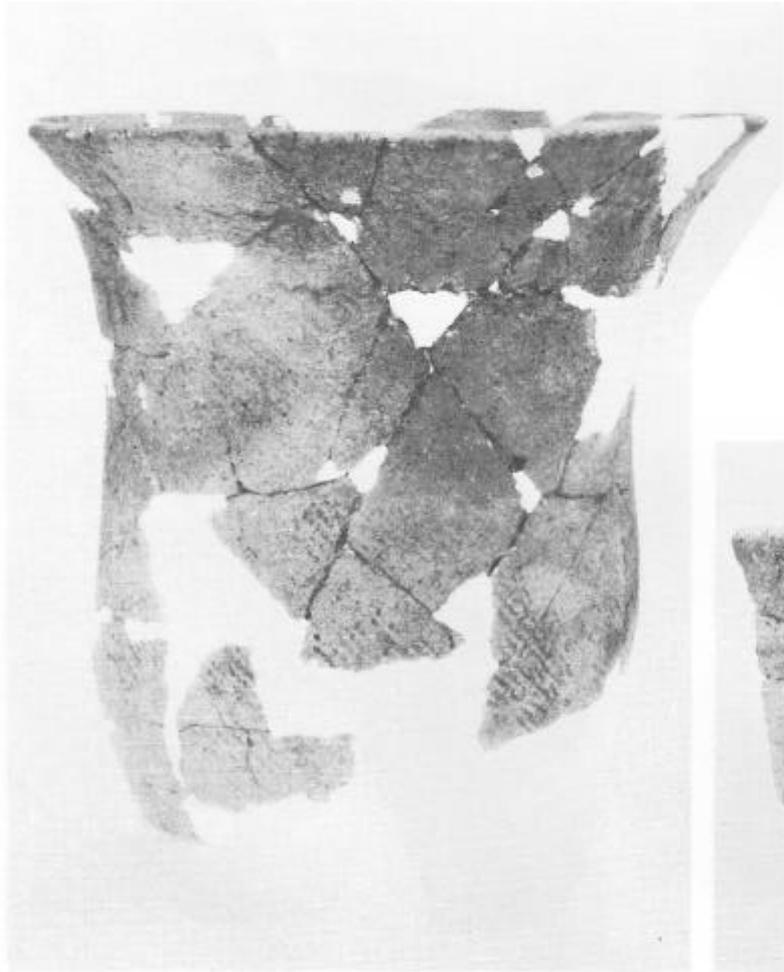
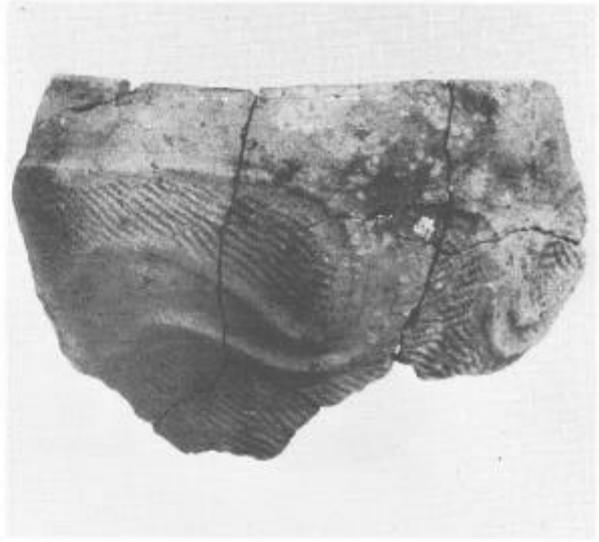
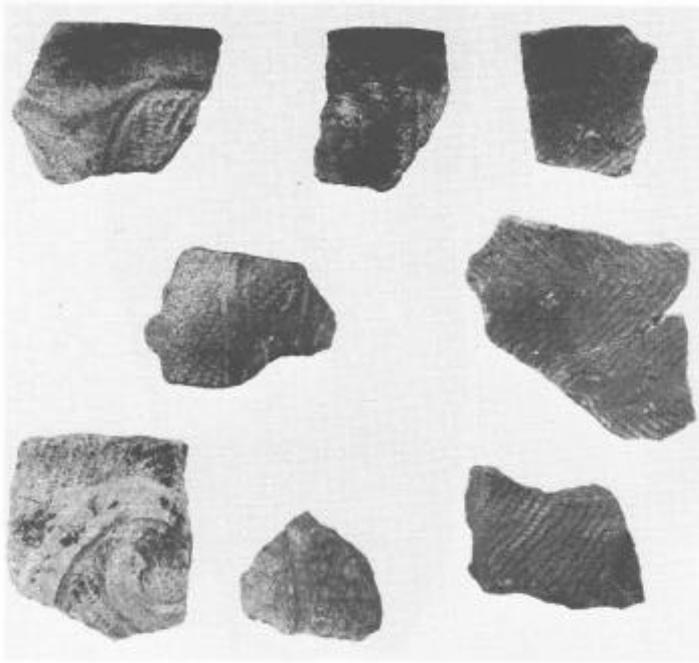
图版53 上 S X 403埋甕
下 S I 303炉土器



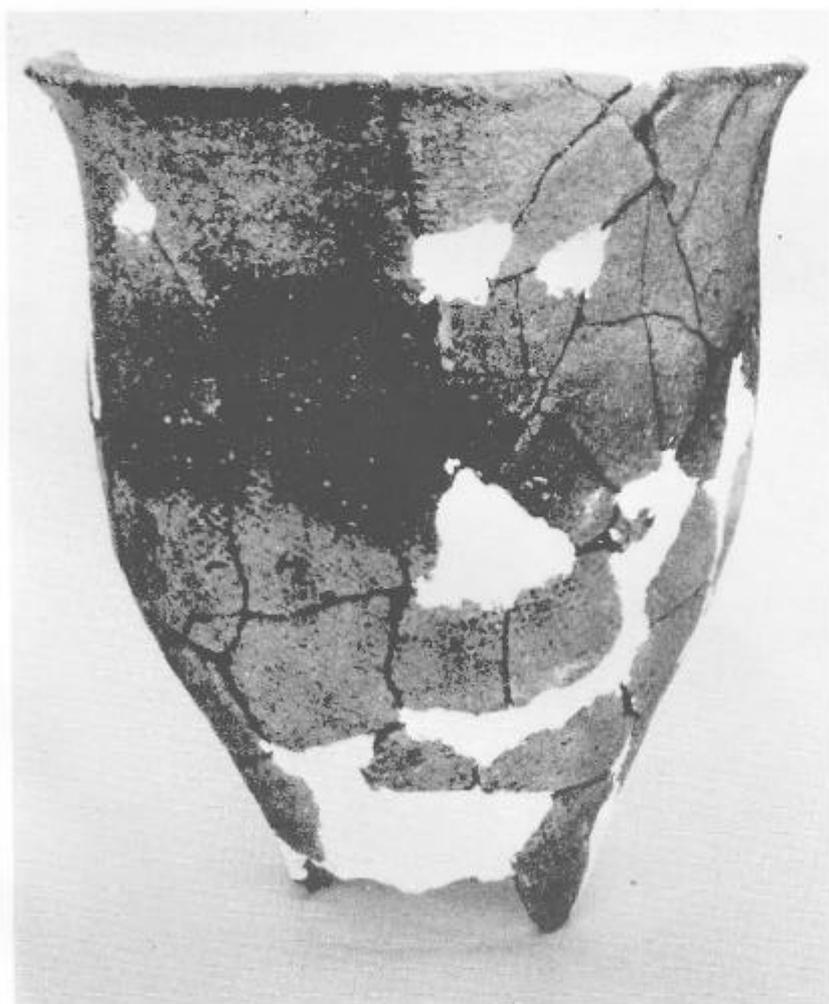
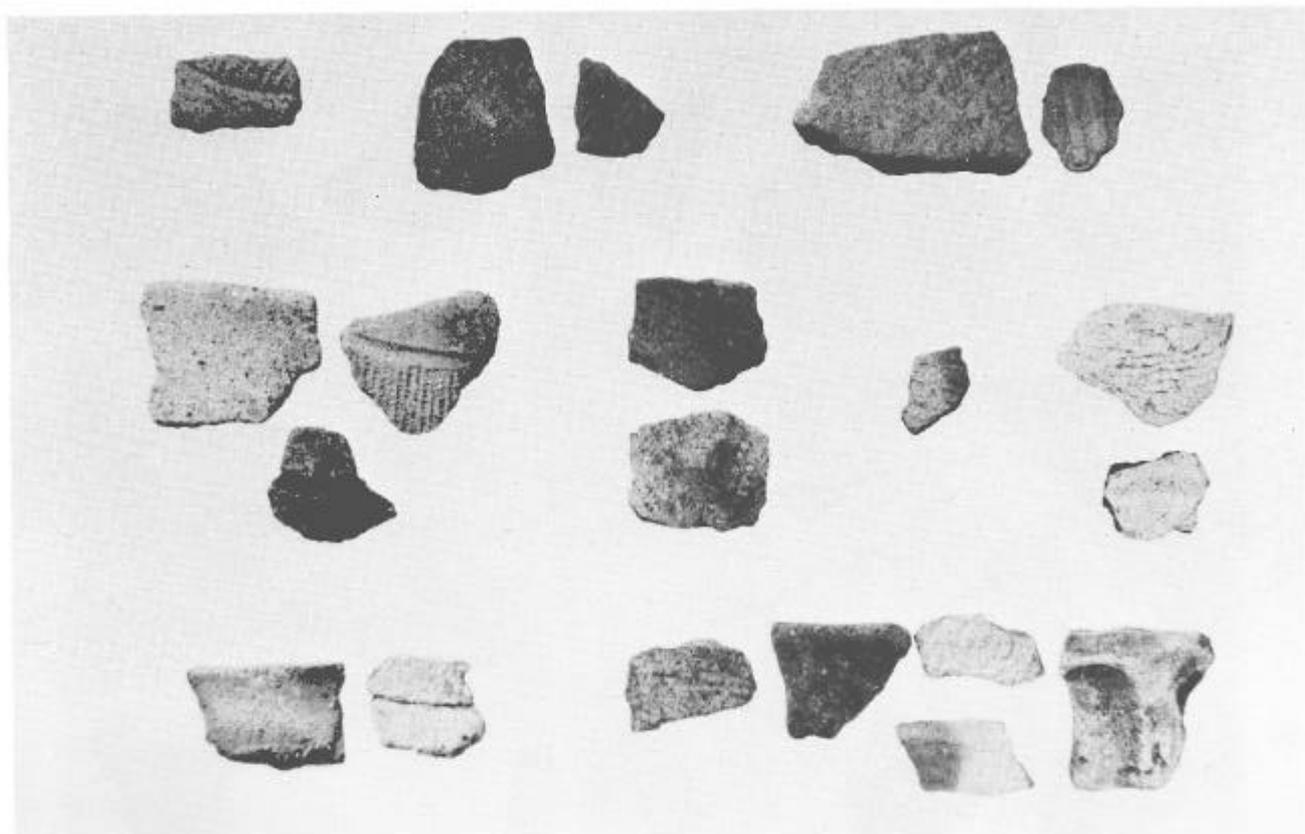
图版54 上 S I 303出土土器
下 S I 307炉



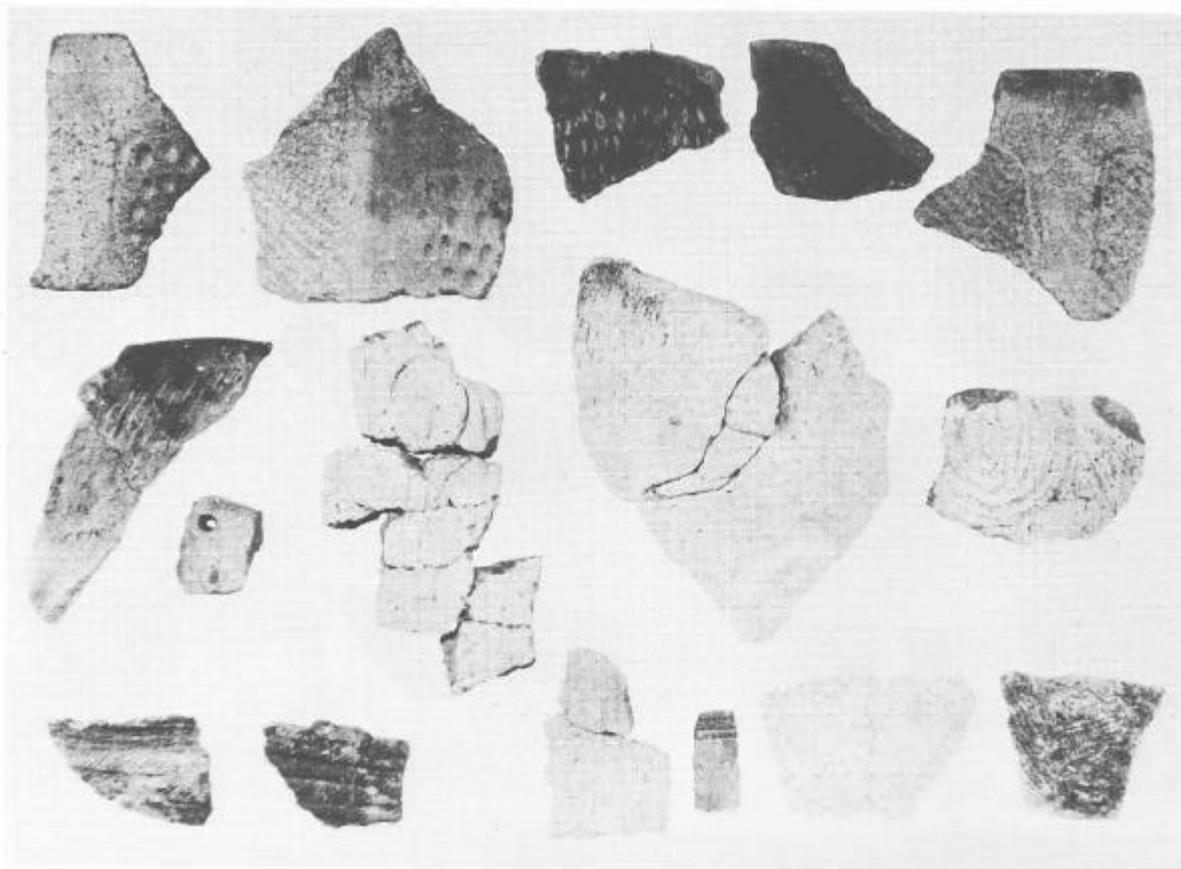
图版55 S I 307出土土器



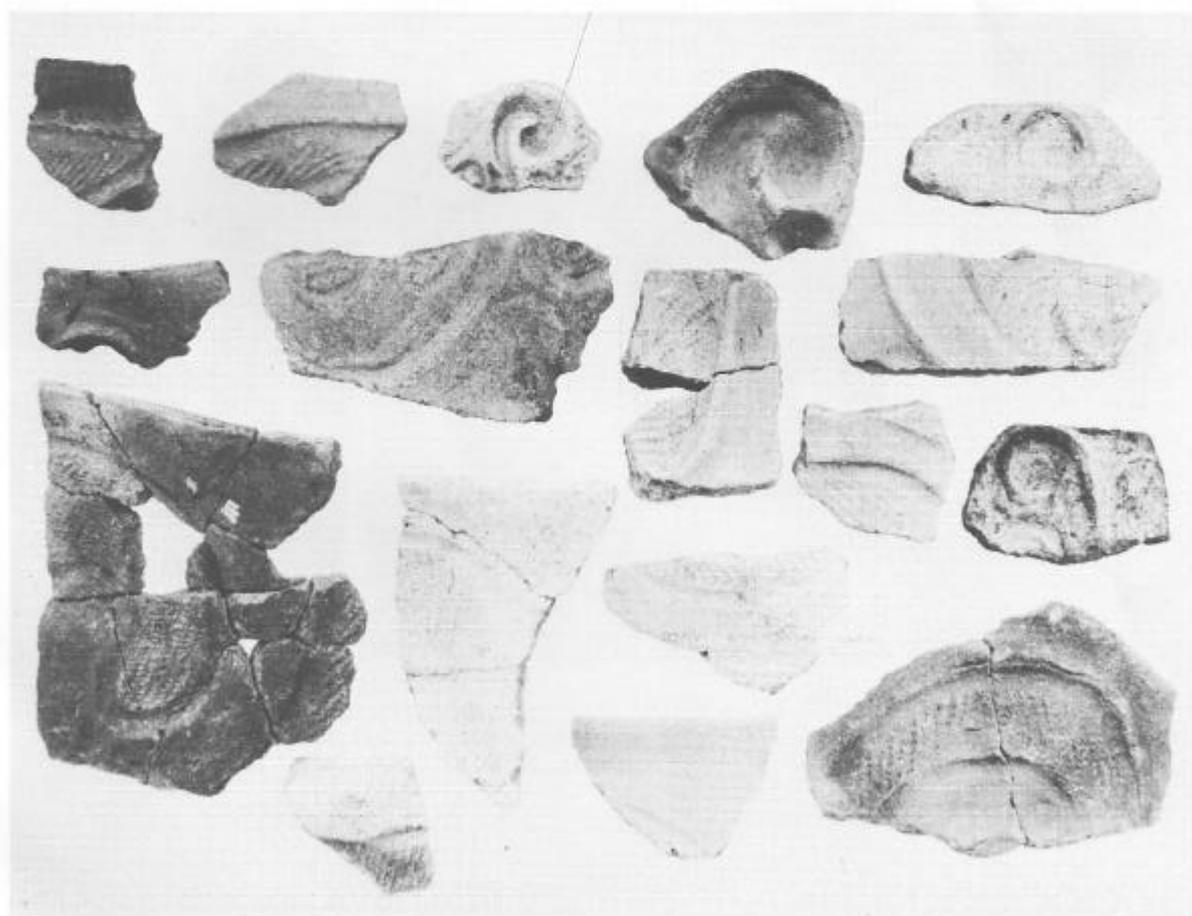
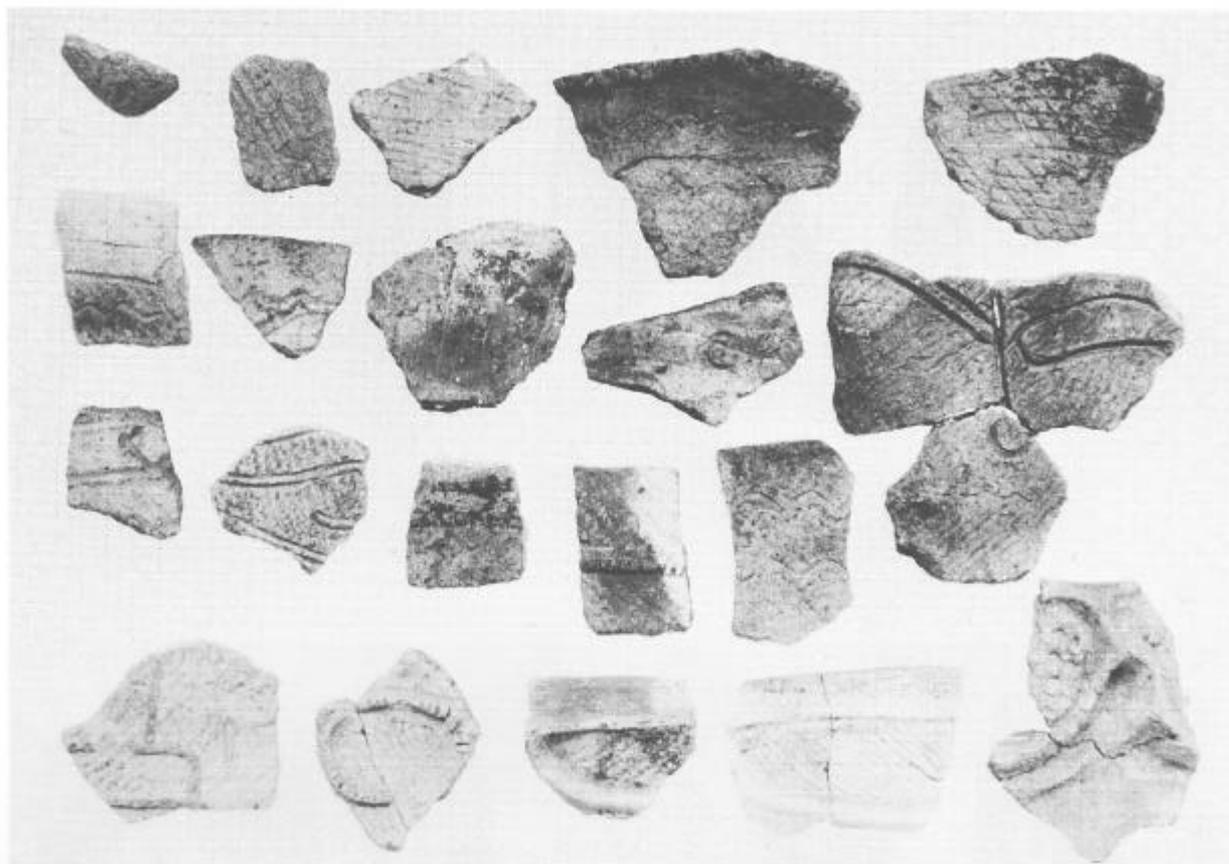
图版56 上 S I 307出土土器
下 III区遺構内出土土器(1)



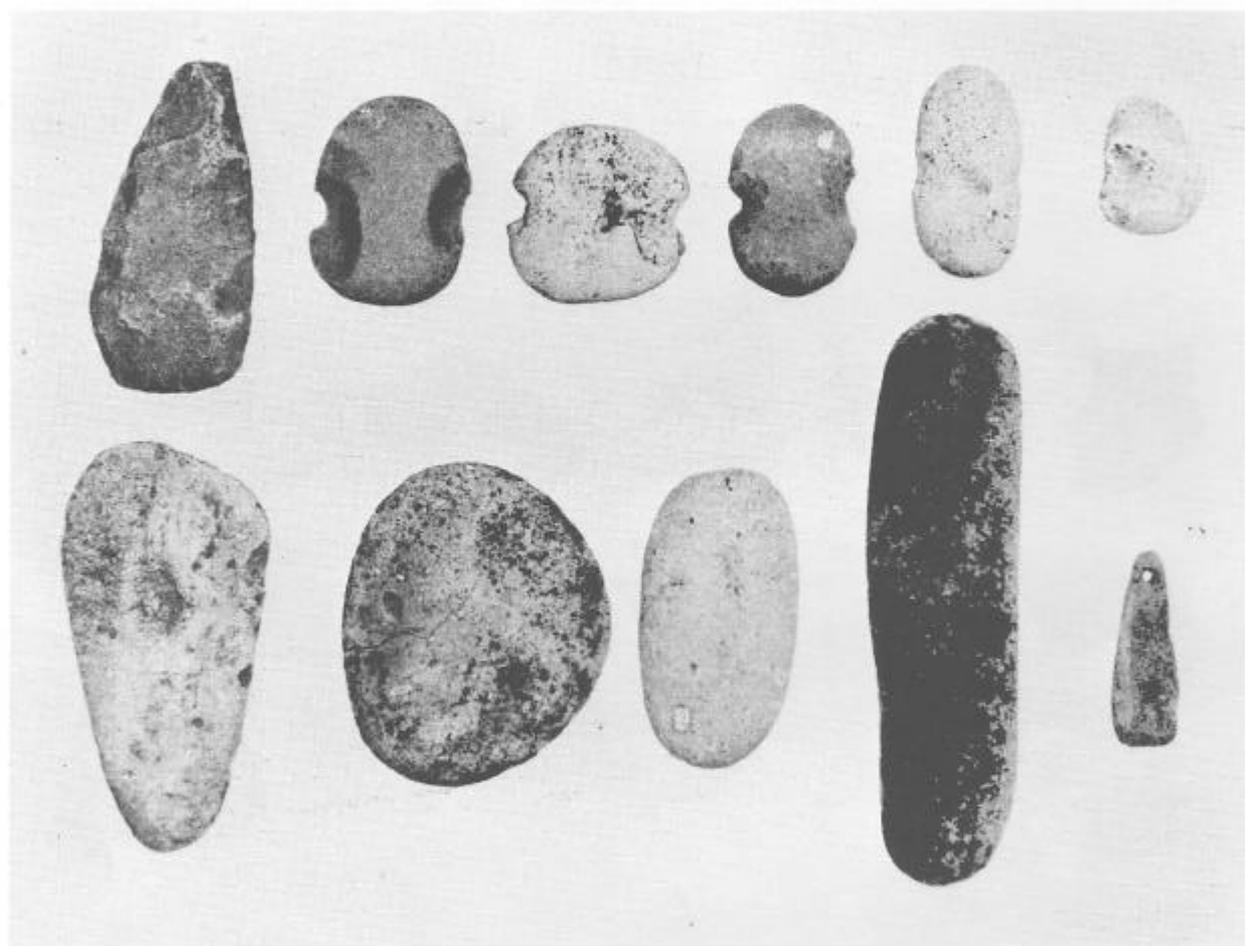
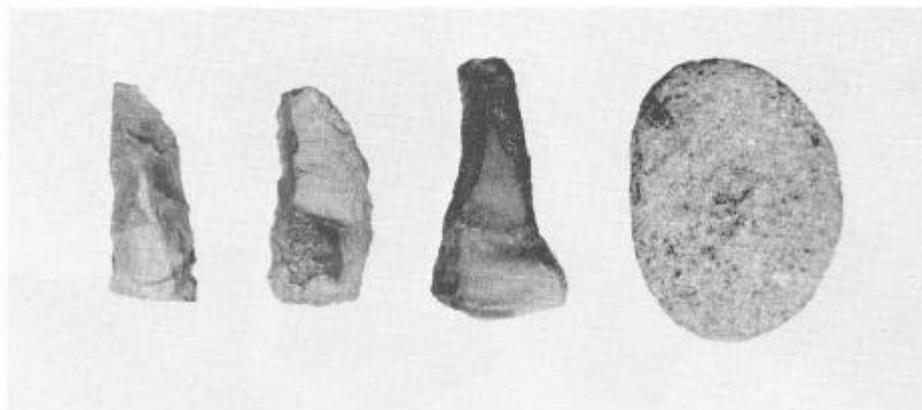
图版57 上 III区遗構内出土土器(2)
下 III区出土土器(1)



图版58 上 III区出土土器(2)
 下 S I 307他出土石器



图版59 III区出土土器(3)



图版60 上 S I 307出土石器
下 III区出土石器